

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（7）

東九州自動車道建設（志布志 I C ～鹿屋串良 J C T）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

まち だ ぼり い せき
町田堀遺跡

（鹿屋市串良町）

第2分冊

町田堀遺跡

第二分冊

二〇一六年三月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



2016年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

総 目 次

第1分冊

巻頭図版

序文

報告書抄録

例言

凡例

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 県内遺跡事前調査	1
第3節 本調査の経過	2
第4節 平成26年度の整理作業・報告書作成業務	2
第5節 平成27年度の整理作業・報告書作成業務	3
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）	5
第3節 東九州自動車道関連遺跡	6
第3章 発掘調査の方法と成果	12
第1節 発掘調査の方法	12
第2節 層序について	12
第3節 調査の成果	17
1 縄文時代後期・晩期の調査	17
2 弥生時代の調査	158

第2分冊

3 古墳時代の調査	1
4 古代の調査	211

第3分冊

第4章 自然科学分析	1
第5章 総括	83
写真図版（遺構）	85
写真図版（遺物）	115

第2分冊目次

第3章 発掘調査の方法と成果

第3節 調査の成果

3 古墳時代の調査	1
(1) 調査の概要	1
(2) 遺構	1
ア 円形周溝墓・地下式横穴墓	1
イ 弧状遺構・地下式横穴墓	25
ウ 溝状遺構・地下式横穴墓	49
エ 地下式横穴墓	60
オ 土坑墓	169
(3) 祭祀空間及び出土遺物	171
(4) 遺構外出土遺物	186
ア 鉄器	186
イ 土器	186
(5) 遺物観察表	192
(6) 小結	195
4 古代の調査	211
(1) 調査の概要	211
(2) 遺構	211
ア 焼土跡	211
イ 古道	211
(3) 遺物	211
ア 土器	211
(4) 遺物観察表	217
(5) 小結	218

挿図目次

第127図 古墳時代遺構配置図	2
第128図 1号円形周溝墓	6
第129図 1号地下式横穴墓(1)	7
第130図 1号地下式横穴墓(2)	8
第131図 2号円形周溝墓	9
第132図 2号地下式横穴墓(1)	10
第133図 2号地下式横穴墓(2)	11
第134図 鉄鏃各部の名称	11
第135図 2号地下式横穴墓副葬品(1)	13
第136図 2号地下式横穴墓副葬品(2)	14
第137図 2号地下式横穴墓副葬品(3)	15
第138図 3号地下式横穴墓	16
第139図 3号円形周溝墓(1)	17
第140図 3号円形周溝墓(2)・出土土器	18
第141図 4号地下式横穴墓(1)	19
第142図 4号地下式横穴墓(2)	20
第143図 5号地下式横穴墓(1)	21
第144図 5号地下式横穴墓(2)	22
第145図 6号地下式横穴墓(1)	23
第146図 6号地下式横穴墓(2)	24
第147図 4号円形周溝墓	25
第148図 7号地下式横穴墓	26
第149図 1号・2号弧状遺構	27
第150図 8号地下式横穴墓(1)	28
第151図 8号地下式横穴墓(2)	29
第152図 8号地下式横穴墓(3)・出土土器	30
第153図 9号地下式横穴墓(1)	31
第154図 9号地下式横穴墓(2)・副葬品	32
第155図 10号地下式横穴墓(1)	33
第156図 10号地下式横穴墓(2)	34
第157図 11号地下式横穴墓(1)	35
第158図 11号地下式横穴墓(2)	36
第159図 12号地下式横穴墓(1)	37
第160図 12号地下式横穴墓(2)	38
第161図 12号地下式横穴墓副葬品	39
第162図 13号地下式横穴墓(1)	40
第163図 13号地下式横穴墓(2)	41
第164図 3号・4号弧状遺構	42
第165図 14号地下式横穴墓(1)	43
第166図 14号地下式横穴墓(2)・副葬品	44
第167図 15号地下式横穴墓(1)	45
第168図 15号地下式横穴墓(2)	46
第169図 15号地下式横穴墓(3)・副葬品	47
第170図 16号地下式横穴墓(1)	48
第171図 16号地下式横穴墓(2)	49
第172図 1号溝状遺構	50
第173図 1号溝状遺構内遺物出土状況(1)	51

第174图	1号溝状遺構内遺物出土状況(2)	52	第223图	47号地下式横穴墓副葬品(3)	102
第175图	1号溝状遺構出土土器	53	第224图	48号地下式横穴墓	103
第176图	1号溝状遺構出土石器	54	第225图	49号地下式横穴墓	104
第177图	17号地下式横穴墓(1)	55	第226图	50号地下式横穴墓(1)	105
第178图	17号地下式横穴墓(2)	56	第227图	50号地下式横穴墓(2)	106
第179图	2号-A・B溝状遺構	57	第228图	51号地下式横穴墓(1)	107
第180图	18号地下式横穴墓(1)	58	第229图	51号地下式横穴墓(2)	108
第181图	18号地下式横穴墓(2)・副葬品	59	第230图	51号地下式横穴墓副葬品	109
第182图	19号地下式横穴墓	60	第231图	52号地下式横穴墓	110
第183图	20号地下式横穴墓(1)	61	第232图	53号地下式横穴墓	111
第184图	20号地下式横穴墓(2)	62	第233图	54号地下式横穴墓(1)	112
第185图	21号地下式横穴墓	63	第234图	54号地下式横穴墓(2)	113
第186图	22号地下式横穴墓	64	第235图	55号地下式横穴墓	114
第187图	23号地下式横穴墓	65	第236图	56号地下式横穴墓(1)	115
第188图	24号地下式横穴墓(1)	66	第237图	56号地下式横穴墓(2)	116
第189图	24号地下式横穴墓(2)・副葬品	67	第238图	57号地下式横穴墓(1)	117
第190图	25号地下式横穴墓	68	第239图	57号地下式横穴墓(2)・副葬品	118
第191图	26号地下式横穴墓(1)	69	第240图	58号地下式横穴墓(1)	119
第192图	26号地下式横穴墓(2)・副葬品(1)	70	第241图	58号地下式横穴墓(2)・副葬品	120
第193图	26号地下式横穴墓副葬品(2)	71	第242图	59号地下式横穴墓	121
第194图	27号地下式横穴墓(1)	72	第243图	60号地下式横穴墓(1)	122
第195图	27号地下式横穴墓(2)	73	第244图	60号地下式横穴墓(2)	123
第196图	28号地下式横穴墓	74	第245图	60号地下式横穴墓(3)	124
第197图	29号地下式横穴墓(1)	75	第246图	61号地下式横穴墓	125
第198图	29号地下式横穴墓(2)	76	第247图	62号地下式横穴墓	126
第199图	30号地下式横穴墓(1)	77	第248图	62号地下式横穴墓副葬品	127
第200图	30号地下式横穴墓(2)・副葬品	78	第249图	63号地下式横穴墓	128
第201图	31号地下式横穴墓	79	第250图	64号地下式横穴墓	129
第202图	32号地下式横穴墓	80	第251图	65号地下式横穴墓	130
第203图	33号地下式横穴墓	81	第252图	66号地下式横穴墓	131
第204图	34号地下式横穴墓	82	第253图	67号地下式横穴墓(1)	132
第205图	35号地下式横穴墓	83	第254图	67号地下式横穴墓(2)・副葬品	133
第206图	36号地下式横穴墓	84	第255图	68号地下式横穴墓(1)	134
第207图	37号地下式横穴墓	85	第256图	68号地下式横穴墓(2)	135
第208图	38号地下式横穴墓	86	第257图	69号地下式横穴墓	136
第209图	39号地下式横穴墓	88	第258图	70号地下式横穴墓(1)	137
第210图	40号地下式横穴墓	89	第259图	70号地下式横穴墓(2)・副葬品(1)	138
第211图	41号地下式横穴墓	90	第260图	70号地下式横穴墓副葬品(2)	139
第212图	42号地下式横穴墓	91	第261图	70号地下式横穴墓副葬品(3)	140
第213图	43号地下式横穴墓(1)	92	第262图	70号地下式横穴墓副葬品(4)	141
第214图	43号地下式横穴墓(2)	93	第263图	71号地下式横穴墓(1)	143
第215图	44号・45号地下式横穴墓(1)	94	第264图	71号地下式横穴墓(2)	144
第216图	44号・45号地下式横穴墓(2)・副葬品	95	第265图	71号地下式横穴墓副葬品	145
第217图	46号地下式横穴墓(1)	96	第266图	72号地下式横穴墓	146
第218图	46号地下式横穴墓(2)	97	第267图	73号・74号地下式横穴墓(1)	147
第219图	47号地下式横穴墓(1)	98	第268图	73号地下式横穴墓(2)	148
第220图	47号地下式横穴墓(2)	99	第269图	74号地下式横穴墓(2)	149
第221图	47号地下式横穴墓副葬品(1)	100	第270图	75号地下式横穴墓(1)	150
第222图	47号地下式横穴墓副葬品(2)	101	第271图	75号地下式横穴墓(2)	151

第272図	76号地下式横穴墓（1）	152
第273図	76号地下式横穴墓（2）・副葬品	153
第274図	77号地下式横穴墓	154
第275図	78号地下式横穴墓	155
第276図	79号地下式横穴墓（1）	156
第277図	79号地下式横穴墓（2）・副葬品	157
第278図	80号地下式横穴墓	158
第279図	81号地下式横穴墓	159
第280図	82号地下式横穴墓・副葬品	160
第281図	83号地下式横穴墓	161
第282図	84号地下式横穴墓	162
第283図	85号地下式横穴墓	163
第284図	85号地下式横穴墓 羨道上部拓影（原寸）	164
第285図	86号地下式横穴墓	165
第286図	87号地下式横穴墓	166
第287図	88号地下式横穴墓（1）	167
第288図	88号地下式横穴墓（2）	168
第289図	1号土坑墓	169
第290図	2号土坑墓	170
第291図	H-21区86号地下式横穴墓竪坑上部	171
第292図	G-22区折り曲げられた剣	172
第293図	H・I-24区の祭祀空間（1）	174
第294図	H・I-24区の祭祀空間（2）	175
第295図	H・I-24区の祭祀空間（3）	176
第296図	F-21区の祭祀空間	177
第297図	G-21区の祭祀空間	178
第298図	H-23区の祭祀空間	179
第299図	土器破碎祭祀空間①（1）	180
第300図	土器破碎祭祀空間①（2）	181
第301図	土器破碎祭祀空間①（3）	182
第302図	土器破碎祭祀空間②	183
第303図	土器破碎祭祀空間③（1）	184
第304図	土器破碎祭祀空間③（2）	185
第305図	古墳時代遺物出土状況（1）	187
第306図	古墳時代遺物出土状況（2）	188
第307図	古墳時代の鉄器	189
第308図	古墳時代の土器（1）	190
第309図	古墳時代の土器（2）	191
第310図	南摺ヶ浜遺跡3号・4号円形周溝墓	195
第311図	築池1号・5号地下式横穴墓	196
第312図	町田堀遺跡における埴・高坏・二重口縁壺の 編年試案	198
第313図	副葬鉄器器種別内訳	199

第314図	墓ごとの出土数	199
第315図	町田堀遺跡地下式横穴墓出土鉄器一覧	200
第316図	古墳時代中期における細根系鉄鏃の編年 （鈴木2003より）	201
第317図	南九州出土異形鉄器と共伴遺物 （新屋敷2015より）	202
第318図	異形鉄器（1199）と復元図	203
第319図	大隅半島の主な古墳分布図	204
第320図	1号・2号焼土跡	211
第321図	古代遺構配置図	212
第322図	1号古道	213
第323図	1・2号古道（1）	214
第324図	1・2号古道（2）	215
第325図	古代の土器	216
第326図	町田堀遺跡の位置	218

表目次

第37表	地下式横穴墓計測値一覧表（1）	3
第38表	地下式横穴墓計測値一覧表（2）	4
第39表	地下式横穴墓計測値一覧表（3）	5
第40表	古墳時代鉄器観察表（1）	192
第41表	古墳時代鉄器観察表（2）	193
第42表	古墳時代土器観察表（1）	193
第43表	古墳時代土器観察表（2）	194
第44表	古墳時代石器観察表	194
第45表	大隅半島の主な古墳地名表	205
第46表	地下式横穴墓一覧表 （鹿児島県内高塚古墳と共存しない）	206
第47表	地下式横穴墓 （鹿児島県内高塚古墳と共存する）（1）	206
第48表	地下式横穴墓 （鹿児島県内高塚古墳と共存する）（2）	207
第49表	地下式横穴墓一覧表 （宮崎県内高塚古墳と共存しない）（1）	207
第50表	地下式横穴墓一覧表 （宮崎県内高塚古墳と共存しない）（2）	208
第51表	地下式横穴墓 （宮崎県内高塚古墳と共存する）（1）	208
第52表	地下式横穴墓 （宮崎県内高塚古墳と共存する）（2）	209
第53表	古代土器観察表	217

3 古墳時代の調査

(1) 調査の概要

古墳時代の調査では、地下式横穴墓88基と土坑墓2基が検出された。地下式横穴墓は、調査区2を主体に調査区1と調査区3の一部(調査区2側)に分布する。地下式横穴墓の中には、円形周溝を伴うものや、弧状遺構を伴うものがある。また、それらの溝を切った状態で竪坑を掘って造られた地下式横穴墓も存在する。円形周溝を伴う地下式横穴墓は県内では初めての例である。溝状遺構も2条検出された。1号溝状遺構は一辺12mの略方形を呈するが、西側は現道近くで調査ができず、全貌は検出されなかった。溝内では、土器の集中や完形に近い土器もみられる。17号地下式横穴墓は溝を切って竪坑が掘られ、掘り上げた土が溝内に堆積している状況が認められた。2号溝状遺構はA・Bに分けられ、さらに、18号地下式横穴墓が造られている。これらの前後関係は2号-A溝状遺構が最初で、18号地下式横穴墓が2号-Aを切って造られ、さらに2号-B溝状遺構が18号地下式横穴墓を切っている。

人骨が残っていた地下式横穴墓は、1号墓(壮年女性)・8号墓(熟年男性)・27号墓・29号墓・43号墓(老年女性)・47号墓・50号墓(熟年女性)・60号墓(壮年男性・残存良好)・69号墓・73号墓(熟年女性)・74号墓(未成人)・76号墓の12基12体である。しかしながら残存状態の良好なものは少ない。

地下式横穴墓は群集している割に切り合うことがほとんど無いのが通例であるが、本遺跡では2例の切り合いが確認された。45号は44号の玄室の直上から竪坑を掘って造られている。また、74号は竪坑を73号の南東側に設けているが、玄室は73号の玄室にまで掘り込んで造られている。73号は成人女性の人骨と認められており、母子の関係にあると想像させられるものである。このような切り合いは墓の存在を十分周知していなければできないと思われる、現在地表では何の痕跡もないが、当時は何らかの標示があるか、埋葬時の約束事があったものと考えられる。

副葬品はほとんどが鉄器で鉄鏃・剣・刀子・鉈・異形鉄器等がある。76号墓では、腕に装着した状態でイモ貝製の貝釦が確認された。その他43号及び46号の竪坑の近くに埴と高坏を供献したかのように置いてあるもの。地下式横穴墓の造られていない空間に埴・高坏・鉄鏃・剣等が置かれた祭祀空間。H-26区においては壺形土器(1259・1266)を割って置いた土器破碎祭祀の状況も見られた。また、8号地下式横穴墓の竪坑の近く(玄室直上)には丹と思われる赤色顔料の塊と埴が置いてあり何らかの祭祀を行ったものと思われる。

88基の地下式横穴墓については、次のように分類し、記述することとした。

大分類

- 1類：玄室が中規模(1.5m前後)なもの
- 2類：玄室が大規模(1.7m以上)なもの
- 3類：玄室が1m以下で小規模と思われるもの
- 4類：玄室が小規模で、竪坑が長方形である。
また、羨道部が竪坑の短辺に付くもの。

小分類

- ①：羨門が竪坑とほぼ同じ幅のもの
- ②：羨門が竪坑より幅が狭いもの

細分類

- a：玄室床面が竪坑床面と平坦なもの
- b：玄室床面が竪坑床面から傾斜するもの
- c：玄室が竪坑の一部から段落ちするもの

また、それぞれの地下式横穴墓は大分類・小分類・細分類の組み合わせで表すこととした。

また、鉄器の付着物や木質等に付いては、各地下式横穴墓の記述では簡略にして、科学分析の項に於いて詳述することとした。

(2) 遺構(第128図～第290図)

ア 円形周溝墓・地下式横穴墓

① 1号円形周溝墓・1号地下式横穴墓(第128図～第130図)

I-23区に於いて検出される。径6.6m、溝幅約0.8m、深さ0.2～0.4mの円形周溝で、北東側に幅0.7mの土橋が設けられる。ほぼ中央に1号地下式横穴墓が存在する。また、3号弧状遺構及び14号地下式横穴墓に切られている。

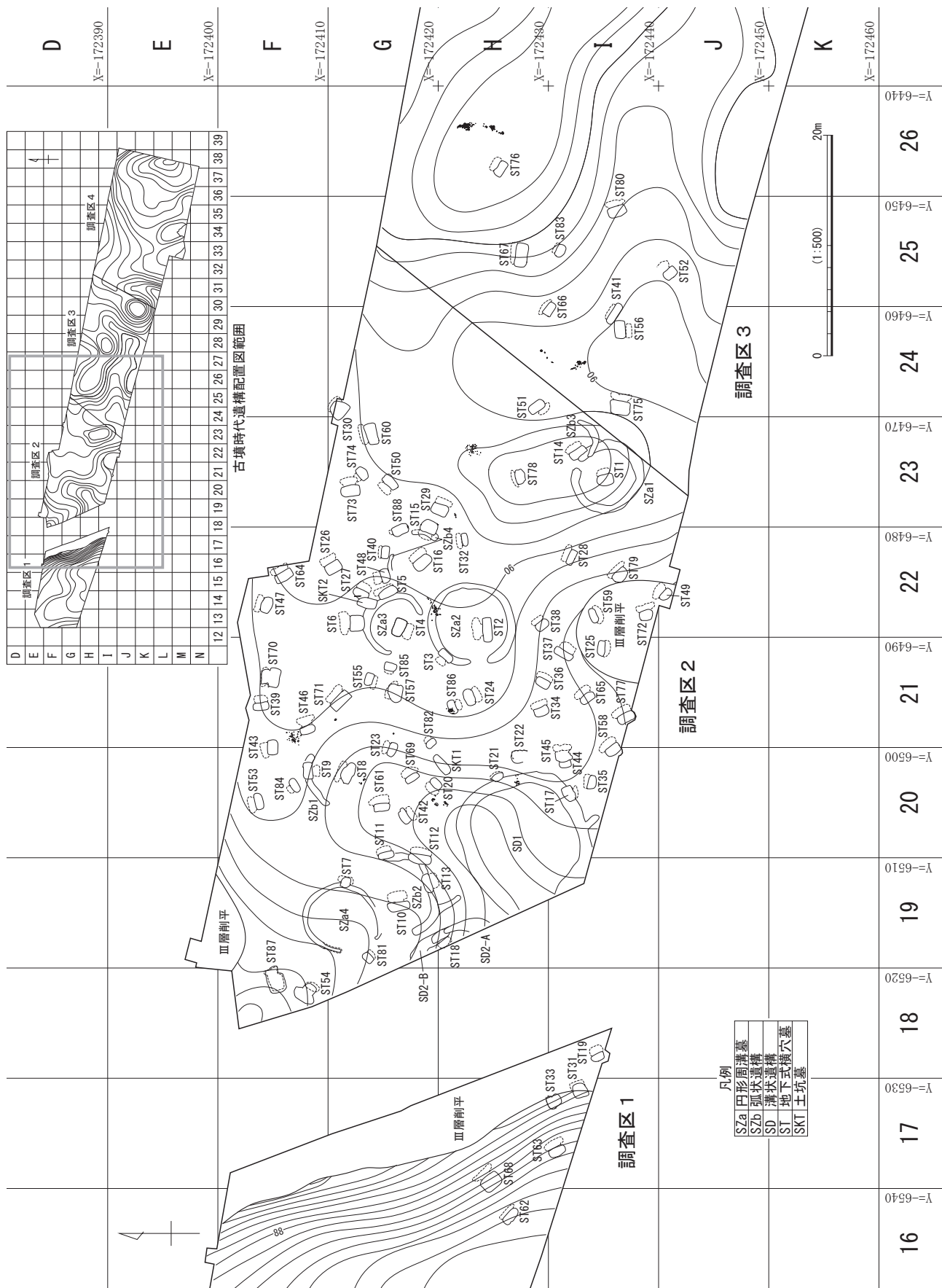
1号地下式横穴墓は、1-②-b類である。竪坑の羨門側には挟りが認められると共に羨門上位から玄室にかけて空洞になっている。羨門の閉塞が丸太材を横にして積み上げたものと考えられる。竪坑の壁面には明瞭な工具痕が認められる。

玄室が空洞で残されていたためか人骨も頭蓋部分が遺存している。頭蓋は玄室の右奥(南側)に置かれている。

② 2号円形周溝墓・2号・3号地下式横穴墓(第131図～第138図)

G-21・22区及びH-21・22区にかけて検出される。東西7.5m、南北8mのほぼ円形で、溝幅0.7m、深さ0.2mの円形周溝で、西側に土橋が設けられる。南より2号地下式横穴墓が存在し、北西側に周溝を切った状態で3号地下式横穴墓が存在する。

2号地下式横穴墓は、2-②-a類である。竪坑は2.2m×0.85mと細長い。玄室の奥壁に沿って鉄器が副葬されている。鉄器は鉄剣1点、刀子1点、両頭金具1点、鐙子状鉄器1点、鉄鏃19点(圭頭鏃1点、柳葉鏃14点、短頸鏃1点、茎部のみ3点)である。1122は鉄剣



第127図 古墳時代遺構配置図

第37表 地下式横穴墓計測値一覧表(1)

新 遺構 番号	区	竪坑			羨道			玄室				竪坑 から 玄室 方向 ⑪	副葬品 等	旧 遺構 番号	備考
		縦 (cm) ①	横 (cm) ②	深さ (cm) ③	幅 (cm) ④	高さ (cm) ⑤	奥行 (cm) ⑥	平面 形状 ⑦	幅 (cm) ⑧	奥行 (cm) ⑨	高さ (cm) ⑩				
1	I-23	103	151	126	97	38	17	楕円形	131	63	39	東		34	天井有り 切り合い無し
2	H-21・ 22z	85	223	100	144	(48)	27	楕円形	201	83	(44)	北	鉄剣(1122) 刀子(1123) 両頭金具(1124) 鐙子(1125) 鉄鏃(1126~1144)	28	天井無し 切り合い無し
3	G・H-21	66	146	112	78	50	6	不整楕 円形	100	77	49	北	-	93	天井有り 2号円形周溝墓を切る
4	G-21・22	103	165	122	111	(42)	19	楕円形	148	76	(42)	南	-	25	天井有り 切り合い無し
5	G-22	(90)	178	84	-	-	7	楕円形	192	57	(49)	東	-	97	天井無し 3号円形周溝墓を切る 2号竪穴住居跡を切る
6	G-22	129	144	90	-	-	-	-	-	-	-	-	-	90	天井有り 3号溝状遺構を切る
6 (追葬分)	G-22	53	144	82	133	(40)	18	楕円形	219	78	(47)	北	-	90 (追葬分)	天井有り 3号溝状遺構を切る
7	G-19	(35)	81	70	-	-	-	楕円形	142	(57)	(31)	東	-	95	天井無し 4号円形周溝墓を切る
8	G-20	(86)	197	136	129	(38)	-	不整隅丸 長方形	206	62	(44)	北	人骨 ベンガラ	2	天井有り 切り合い無し
9	F-20	79	(152)	138	77	49	5	隅丸 長方形	109	55	30	南	刀子(1147)	77	天井有り 1号弧状遺構を切る ピット222を切る
10	G-19	86	202	93	123	44	23	隅丸 長方形	175	93	41	東	-	5	天井有り 切り合い無し
11	G-19・20	63	145	95	137	(25)	6	楕円形	139	73	(31)	東	-	79	天井有り 2号弧状遺構を切る
12	G-19・20	(87)	213	83	185	(49)	12	楕円形	198	75	(41)	東	鉄剣(1148) 鉄鏃(1149) 異形鉄器(1150)	80	天井無し 2号弧状遺構を切る
13	G・H-19	70	176	74	125	27	6	楕円形	158	70	42	南	-	81	天井有り 2号弧状遺構を切る
14	I-23	82	162	95	129	-	-	不整楕 円形	178	64	(33)	東	鉄剣(1151)	85	天井無し 1号円形周溝墓を切る
15	G・H- 22・23	116	150	136	116	45	-	楕円形	138	86	44	西	鉄剣(1152) 鉄鏃(1153)	1	天井有り 4号弧状遺構を切る
16	G-22	105	178	101	119	32	-	楕円形	173	90	30	東	-	68	天井有り 2号竪穴住居跡を切る
17	I-20	100	144	130	103	30	28	楕円形	121	52	48	南	-	12	天井有り 1号溝状遺構を切る
18	G・H-19	79	(174)	46	128	26	23	不整楕 円形	129	58	26	西	異形鉄器(1162)	89	天井有り 2号-B溝状遺構を切る 2号-A溝状遺構に切ら れる
19	I-18	67	123	17	99	-	6	楕円形	126	72	(15)	東	-	59	天井無し 切り合い無し
20	G・H-20	73	118	107	97	(50)	-	楕円形	145	82	(30)	西	-	8	天井有り 切り合い無し
21	H-20	66	115	32	101	20	-	楕円形	123	58	20	東	-	96	天井有り 1号溝状遺構を切る
22	H-20	(70)	(119)	42	(131)	-	-	長方形	(140)	(52)	(28)	東	-	10	天井無し 切り合い無し
23	G-20・21	72	130	84	100	(29)	13	楕円形	129	52	(28)	北	-	71	天井無し 切り合い無し
24	H-21	93	156	113	128	28	-	楕円形	149	77	31	南	刀子(1163)	17	天井有り 5号竪穴住居跡を切る
25	I-21	(65)	136	37	125	-	-	楕円形	161	66	(27)	南	-	24	天井無し 切り合い無し
26	F・G-22	(98)	(150)	118	126	(47)	19	隅丸 長方形	164	68	(43)	東	鉄剣(1164) 鉄鏃(1165) 異形鉄器(1166・ 1167)	67	天井無し 切り合い無し
27	G-22	89	149	139	126	(42)	-	楕円形	135	89	(44)	東	-	72	天井有り

第38表 地下式横穴墓計測値一覧表(2)

新 遺構 番号	区	竪坑			羨道			玄室				竪坑 から 玄室 方向 (11)	副葬品 等	旧 遺構 番号	備考
		縦 (cm) ①	横 (cm) ②	深さ (cm) ③	幅 (cm) ④	高さ (cm) ⑤	奥行 (cm) ⑥	平面 形状 ⑦	幅 (cm) ⑧	奥行 (cm) ⑨	高さ (cm) ⑩				
28	I-22	63	142	96	119	23	-	楕円形	168	69	35	北	-	30	天井有り 切り合い無し
29	G・H-23	103	153	121	116	52	-	隅丸 長方形	157	71	37	東	-	64	天井有り 切り合い無し
30	G-23・ 24	(86)	167	126	131	(39)	17	楕円形	155	82	(28)	北	ヤリ(1168)	36	天井無し 切り合い無し
31	I-17	(80)	133	54	117	-	30	隅丸 長方形	131	68	(56)	東	-	56	天井無し 切り合い無し
32	H-22	55	118	64	97	20	7	楕円形	143	49	27	北	鉄鏃(1169~1171)	88	天井無し 切り合い無し
33	H・I-17	(72)	104	37	96	-	14	楕円形	136	70	(28)	北	-	57	天井無し 切り合い無し
34	H・I-21	80	135	62	125	25	9	楕円形	166	83	50	東	-	18	天井有り 切り合い無し
35	I-20	(75)	(120)	39	(124)	-	17	不整楕 円形	129	53	(28)	南	-	13	天井無し 切り合い無し
36	H・I-21	80	134	84	109	30	4	楕円形	170	36	43	東	-	19	天井有り 切り合い無し
37	I-21	54	151	65	130	18	8	不整隅丸 長方形	139	75	(47)	東	-	20	天井有り 切り合い無し
38	H・I-22	78	128	87	100	17	14	楕円形	124	50	43	東	-	29	天井有り 切り合い無し
39	F-21	68	145	95	123	24	7	楕円形	124	75	37	東	-	87	天井有り 切り合い無し
40	G-22	72	114	77	100	10	9	楕円形	115	49	27	北	-	58	天井有り 切り合い無し
41	I-24・25	(68)	(195)	50	169	33	6	不整隅丸 長方形	171	36	(30)	北	-	46	天井無し 15号土坑から変更 切り合い無し
42	G-20	75	132	106	102	43	9	楕円形	142	50	(47)	南	-	7	天井無し 切り合い無し
43	F-20・21	95	137	150	108	32	16	楕円形	147	74	41	北	人骨	41	天井有り 切り合い無し
44	I-20・21	(75)	108	60	(76)	-	-	楕円形	(106)	(63)	(63)	東	鉄鏃(1172)	14	天井無し 45号地下式横穴墓に切ら れる
45	I-20・21	93	154	62	(94)	-	-	楕円形	175	59	(47)	東	鉄鏃(1173)	35	天井無し 44号地下式横穴墓を切る
46	F-21	76	140	131	(112)	25	34	楕円形	171	60	34	東	ベンガラ	63	天井有り 切り合い無し
47	F-22	101	148	107	119	40	10	隅丸 長方形	168	61	45	北	木片(1192・1193) 鉄鏃(1174~1191)	66	天井有り 切り合い無し
48	G-22	81	129	126	95	(31)	8	長方形	113	60	(48)	北	-	26	天井有り 2号竪穴住居跡を切る
49	I・J-22	(73)	125	82	88	-	-	楕円形	164	84	(38)	北	-	94	天井無し 切り合い無し
50	G-23	80	138	137	104	52	9	楕円形	155	61	(54)	北	人骨	33	天井有り 3号竪穴住居跡を切る
51	H・I-24	87	159	99	78	(30)	-	楕円形	138	50	24	西	鉄剣(1194・1195) 鉄鏃(1196・1197)	49	天井有り 切り合い無し
52	I・J-25	88	(128)	62	(82)	(28)	22	楕円形	108	75	(23)	東	-	55	天井無し 切り合い無し
53	F-20	75	150	119	115	(35)	2	不整 楕円形	153	79	(43)	北	-	86	天井有り 切り合い無し
54	F-18	(103)	(205)	80	85	(34)	32	楕円形	140	71	(42)	東	-	83	天井無し 切り合い無し
55	G-21	73	114	98	83	35	6	隅丸 長方形	123	50	31	南	-	69	天井有り 切り合い無し
56	I-24	99	163	78	112	47	18	隅丸 長方形	144	53	48	南	-	43	天井有り 切り合い無し
57	G-21	(95)	164	89	128	-	-	楕円形	186	84	(29)	北	短剣(1198)	16	天井無し 切り合い無し
58	I-20・21	88	142	50	130	-	-	楕円形	187	79	(32)	北	異形鉄器 (1199・1200)	15	天井無し 切り合い無し
59	I-22	64	137	70	107	22	-	楕円形	180	61	(40)	南	-	31	天井有り 切り合い無し

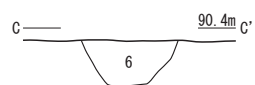
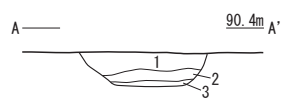
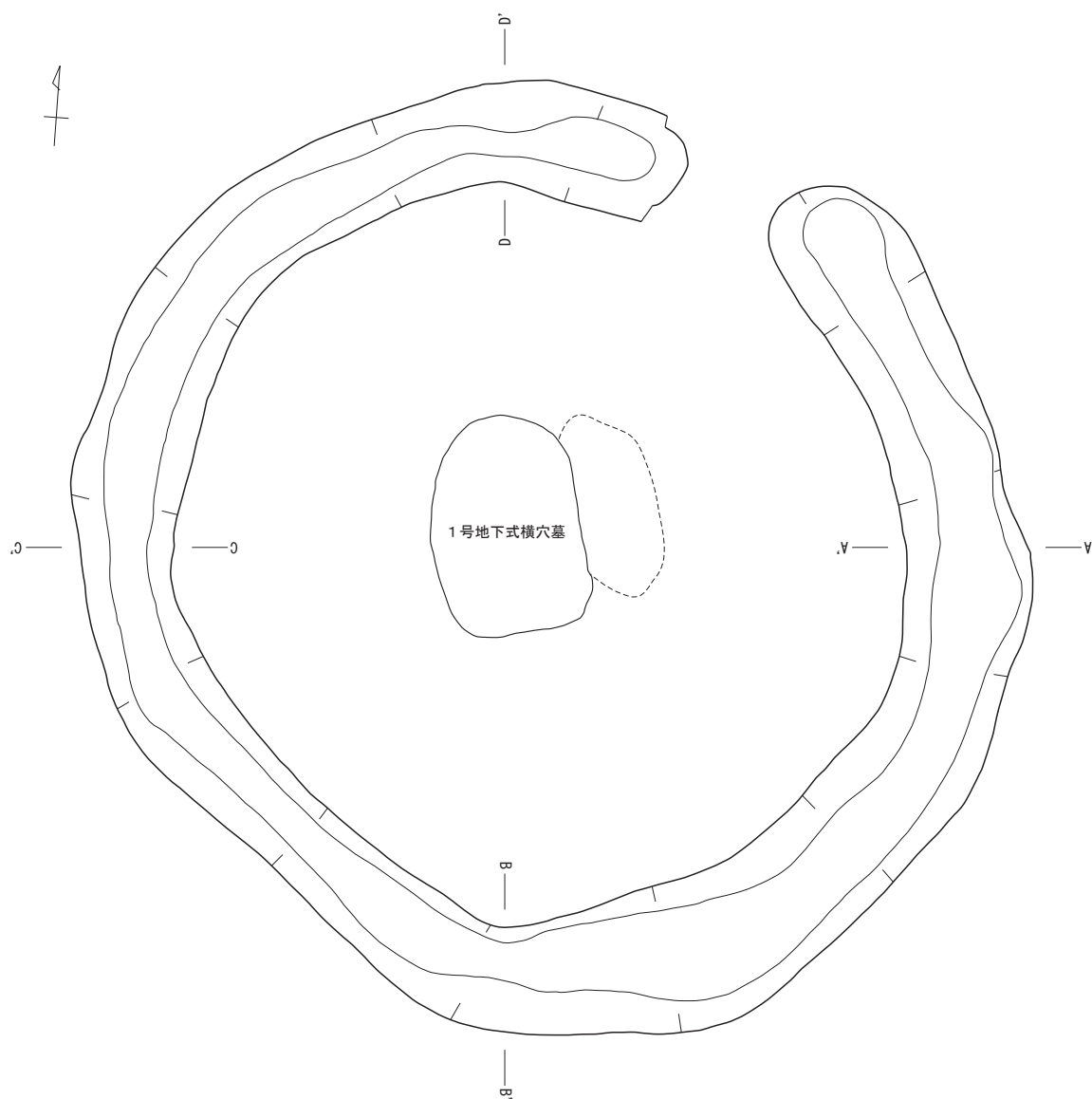
第39表 地下式横穴墓計測値一覧表（3）

新 遺構 番号	区	竪坑			羨道			玄室				竪坑 から 玄室 方向 ⑪	副葬品 等	旧 遺構 番号	備考
		縦 (cm) ①	横 (cm) ②	深さ (cm) ③	幅 (cm) ④	高さ (cm) ⑤	奥行 (cm) ⑥	平面 形状 ⑦	幅 (cm) ⑧	奥行 (cm) ⑨	高さ (cm) ⑩				
60	G-23	107	196	149	160	34	12	隅丸 長方形	188	64	33	北	人骨	37	天井有り
61	G-20	(71)	143	81	133	(27)	-	不整 楕円形	204	90	(48)	東	-	76	天井無し 切り合い無し
62	H-16	82	(168)	86	139	-	31	楕円形	193	30	43	北	鉈(1201)	47	天井有り 切り合い無し
63	H・I-17	85	157	106	148	25	30	楕円形	196	62	39	東	-	42	天井有り 切り合い無し
64	F-22	86	169	119	133	29	5	楕円形	179	62	34	東	-	84	天井有り 切り合い無し
65	I-21	(79)	143	49	109	(24)	24	楕円形	170	64	(26)	北	-	22	天井無し 切り合い無し
66	H・I- 24・25	76	(150)	94	125	18	2	楕円形	180	45	34	北	-	51	天井有り 切り合い無し
67	H-25	113	217	73	176	(29)	12	楕円形	204	68	(38)	北	鉄剣(1202) 短剣(1203) 赤色顔料	50	天井無し 切り合い無し
68	H-16・17	138	183	62	108	-	20	楕円形	222	58	(27)	北	-	45	天井有り 切り合い無し
69	G-20	(63)	135	87	106	24	7	楕円形	172	80	(44)	東	-	74	天井無し 切り合い無し
70	F-21	(95)	175	103	115	-	17	楕円形	180	63	(58)	北	短剣(1204) 鉄鏃(1205~1240)	78	天井無し 切り合い無し
71	F・G-21	(94)	200	128	141	61	11	楕円形	204	72	(55)	東	鉄剣(1241)	40	天井有り 6号竪穴住居跡を切る
72	I-22	96	121	79	93	30	-	隅丸 長方形	174	75	28	東	-	60	天井有り 切り合い無し
73	G-23	104	176	147	112	35	22	楕円形	161	62	45	東	人骨 ベンガラ	38	天井有り 74号地下式横穴墓に切ら れる
74	G-23	88	125	132	89	40	-	不整形	79	(75)	44	北	-	38-B	天井有り 3号竪穴住居跡を切る 73号地下式横穴墓を切る ピット264を切る
75	I-24	125	175	90	129	(42)	-	不整 楕円形	193	80	(44)	東	-	61	天井有り 切り合い無し
76	H-26	90	185	102	130	(42)	5	楕円形	176	81	(21)	北	人骨 赤色顔料 貝輪 鉄剣(1242)	52	天井無し 切り合い無し
77	I-21	(86)	164	61	125	-	13	隅丸 長方形	192	78	18	東	-	23	天井無し 切り合い無し
78	H-23	(87)	134	127	97	25	29	楕円形	176	29	24	北	-	48	天井有り 切り合い無し
79	I-22	103	148	82	129	30	6	不整 楕円形	198	76	33	北	ヤリ(1243)	32	天井有り 切り合い無し
80	I-25	97	166	77	144	-	-	楕円形	196	52	(50)	東	-	44	天井無し 切り合い無し
81	G-19	72	107	54	88	12	-	楕円形	94	43	15	東	-	4	天井有り 切り合い無し
82	G-20・21	64	101	84	82	33	14	楕円形	94	48	35	北	ベンガラ 刀子(1244)	75	天井有り 切り合い無し
83	I-25	83	120	109	87	28	4	楕円形	111	52	43	北	-	53	天井有り 切り合い無し
84	F-20	70	(135)	103	71	22	14	楕円形	78	40	21	北	-	73	天井有り 切り合い無し
85	G-21	74	112	92	73	26	-	楕円形	83	38	32	西	-	70	天井有り 切り合い無し
86	H-21	71	129	84	71	32	5	不整 楕円形	102	67	29	南	ベンガラ	65	天井有り 5号竪穴住居跡を切る
87	F-18・19	(181)	160	52	-	-	-	楕円形	132	(44)	(33)	東	ベンガラ	91	天井無し 切り合い無し
88	G-22・23	152	88	125	47	36	-	隅丸方形	54	45	37	北	-	27	天井有り 切り合い無し

※（ ）は推定値

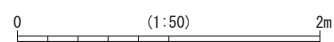
※ 羨門(④)＝『羨門が明瞭な場合は羨門』、あるいは、『羨門が不明瞭な場合は、竪坑の玄室側下端の両端間』を計測。

※ 羨道(⑥)＝『竪坑の玄室側床面端、あるいは、羨門下端』から『玄室の竪坑側下端、あるいは、玄室の竪坑側上端』まで、を計測。

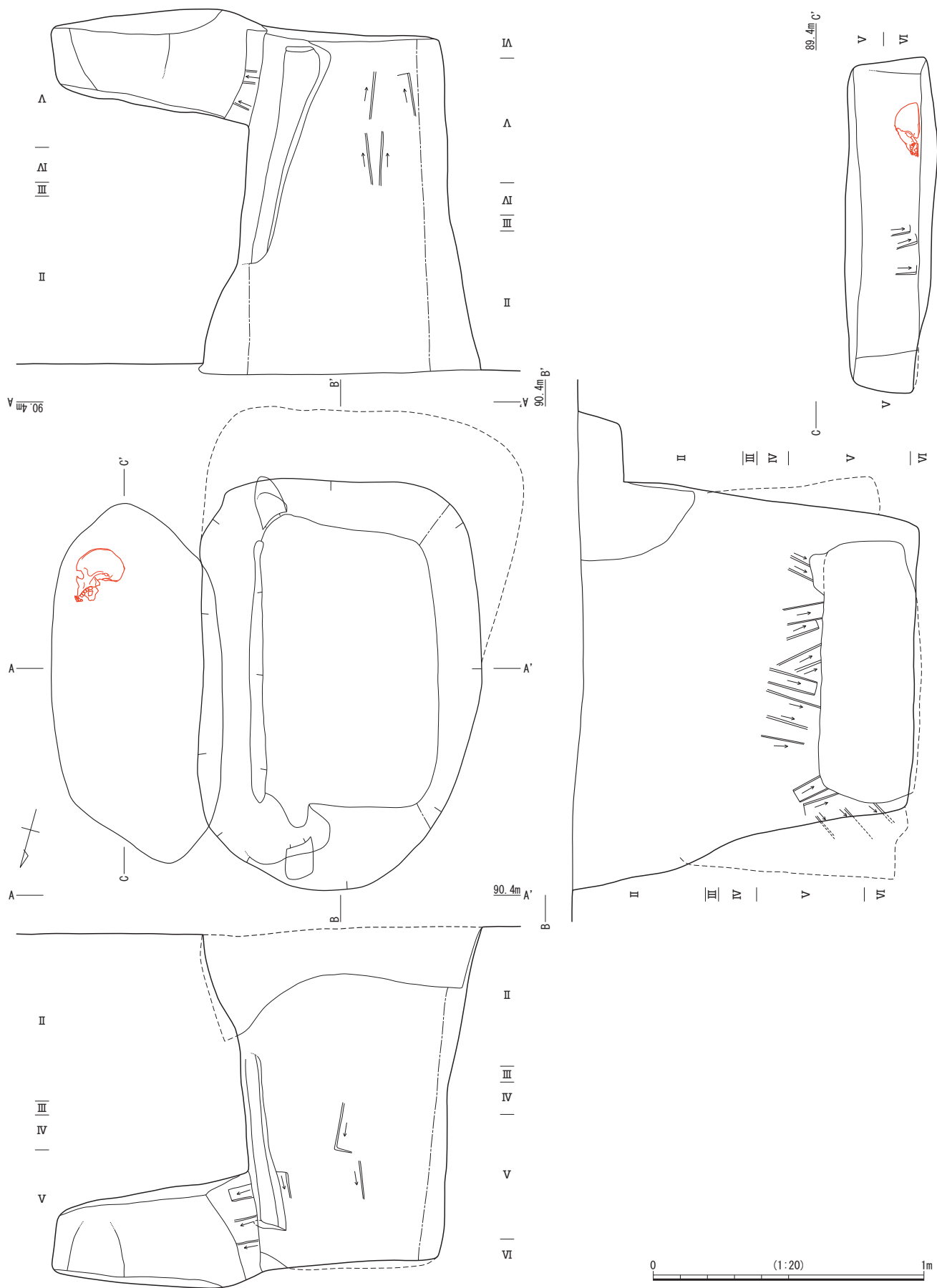


- 1 : 黒色土
- 2 : 黒褐色土アカホヤ混在
- 3 : 黒色土
- 4 : 黒色土
- 5 : 黒褐色土アカホヤ微粒混在

- 6 : 黒色土
- 7 : 黒色土
- 8 : 黄褐色土アカホヤ混在



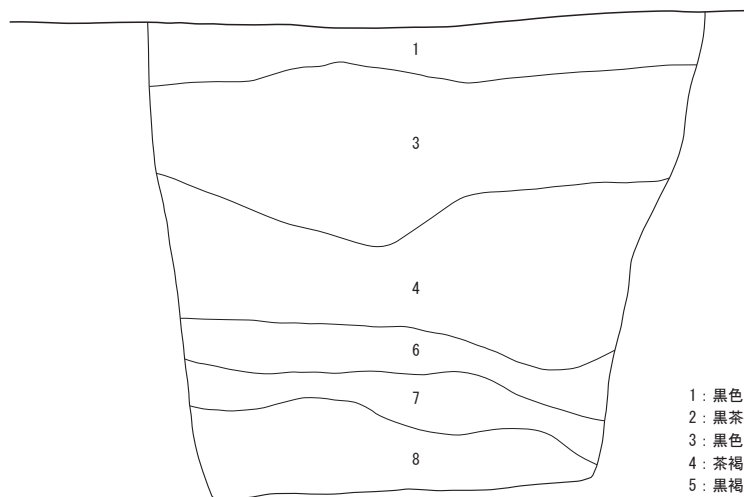
第128図 1号円形周溝墓



第129图 1号地下式横穴墓(1)

B'—

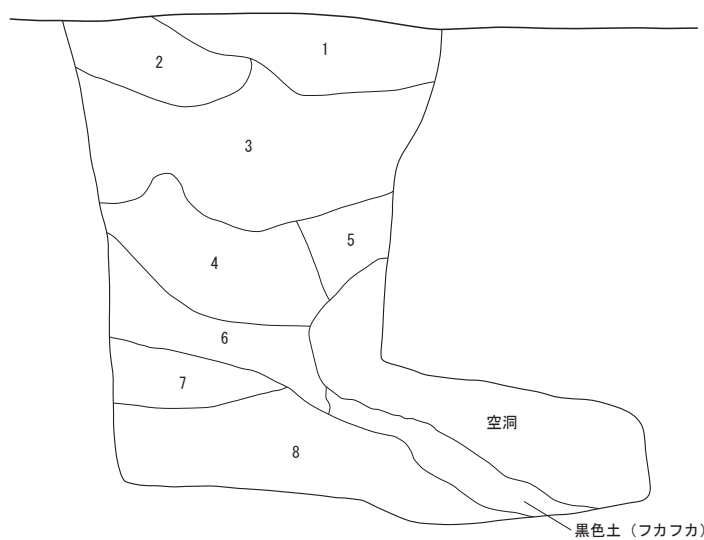
90.5m B



- 1 : 黒色土
- 2 : 黒茶褐色土アカホヤ混在10%
- 3 : 黒色土アカホヤ混在5%
- 4 : 茶褐色土アカホヤ混在70%
- 5 : 黒褐色土アカホヤ混在5%
- 6 : 黒褐色土アカホヤ混在5%
- 7 : 黄褐色土アカホヤ混在70% (柔らかい)
- 8 : 黄褐色土アカホヤ混在90% (硬く締まる)

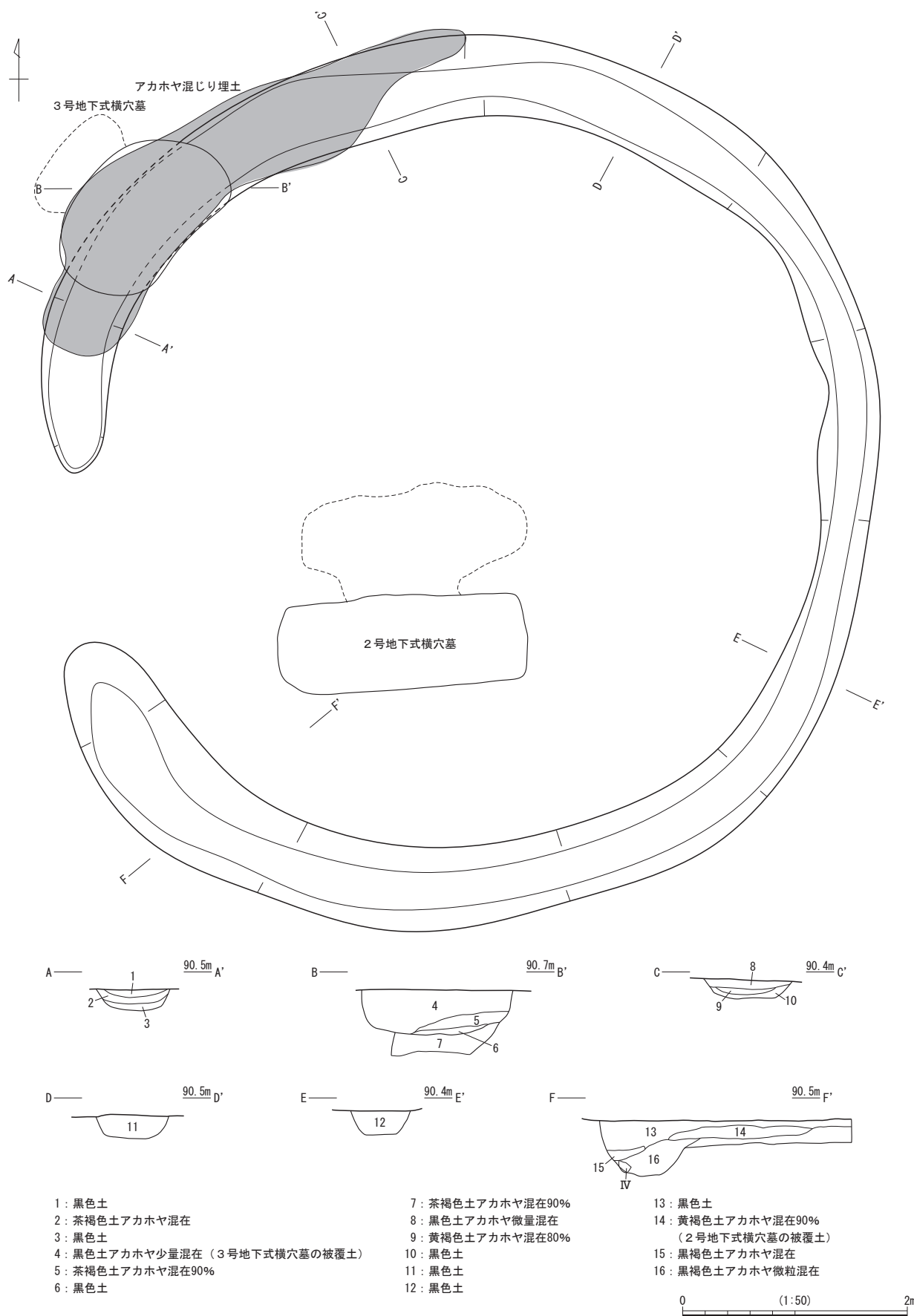
A'—

90.5m A

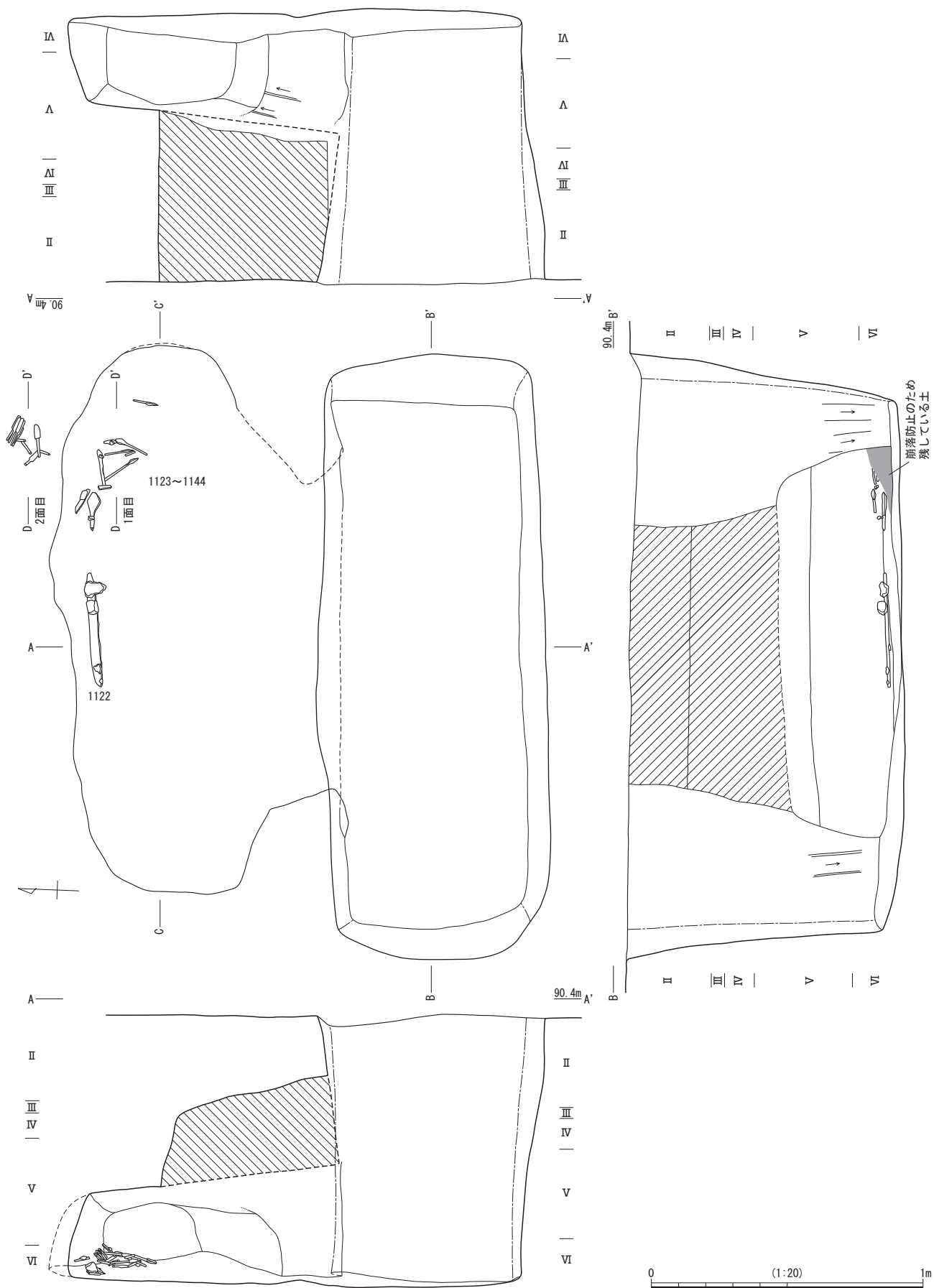


0 (1:20) 1m

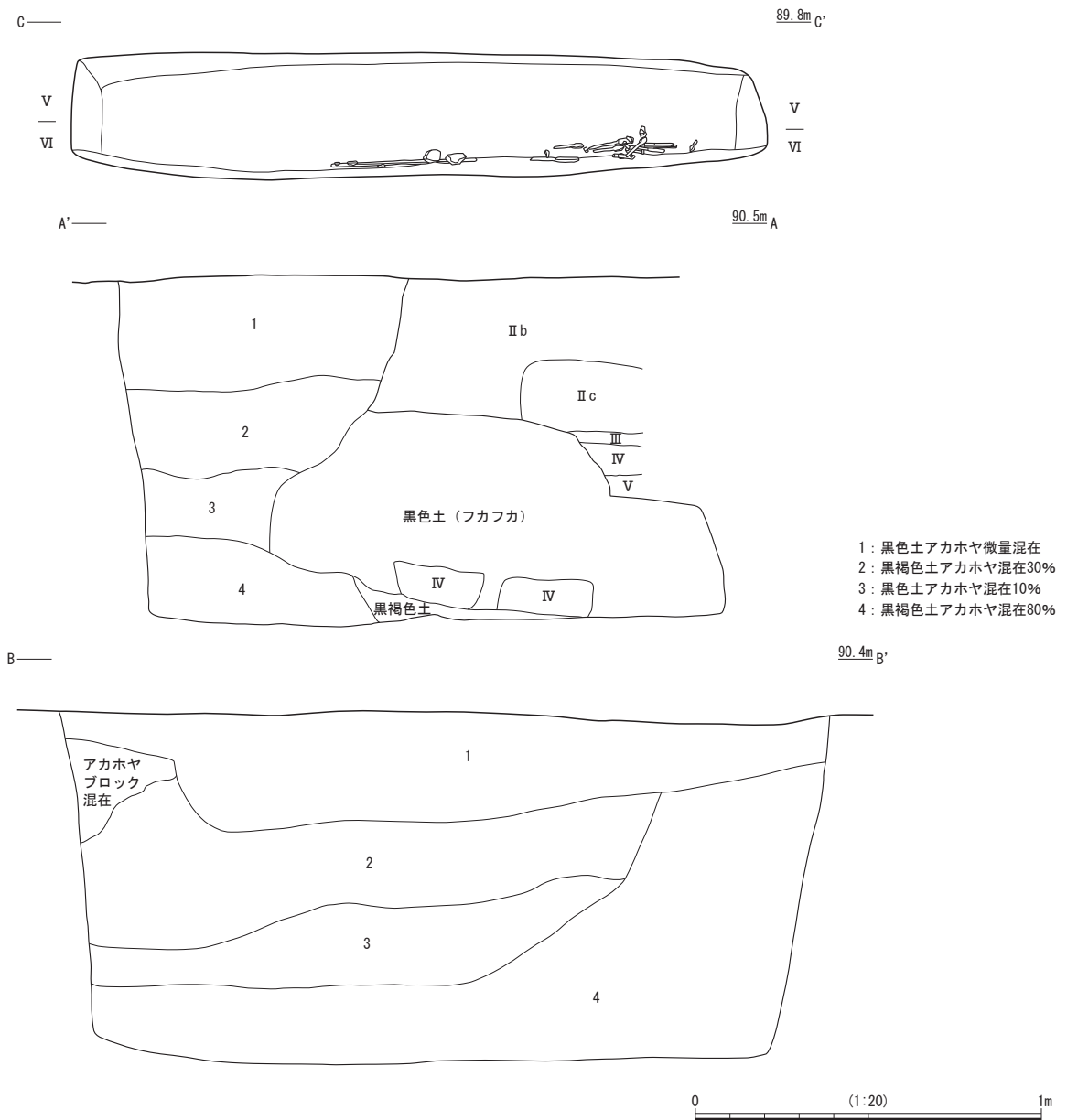
第130図 1号地下式横穴墓(2)



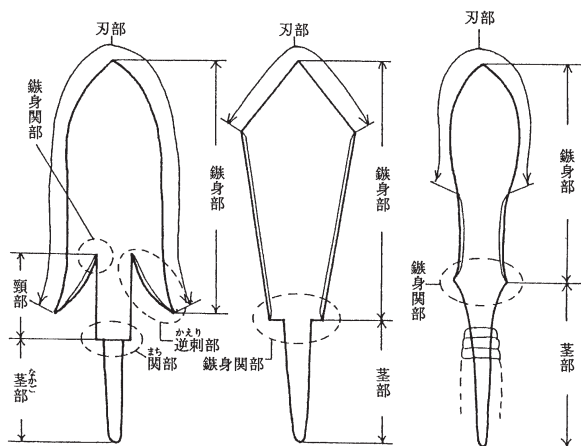
第131図 2号円形周溝墓



第132図 2号地下式横穴墓(1)



第133図 2号地下式横穴墓(2)



第134図 鉄鐔各部の名称

鉄鐔については左図を参考に記述する。

杉山秀宏 2013 「古墳時代の鉄鐔」考古資料大観 7
弥生古墳時代 鉄金銅製品 小学館 より引用

である。全長42.4cm、刃部長34.4cm、茎部長8.4cmを測る。刃部の断面形は凸レンズ状を呈するが、鑄は明瞭ではない。厚さは0.3～0.5cmである。刃部の幅は関部で3.0cm、中位で2.7cm、先端部近くで2.0cmと関部から先端部へと細くなっている。刃部最大幅は関部の3cmである。刃部には木製の鞘が遺存しており、一部樹皮巻きの痕跡が認められる。鞘木の裏面に平滑な面があることから、2枚合わせと考えられる。関部は直角関を呈する。茎部の幅は1.9～1.0cmで厚さ0.5～0.35cmである。目釘穴は1孔で関部から下方へ4.5cmの位置に径0.4cmの孔が穿たれる。茎部に一部柄木が遺存するが形態は不明である。遺存状態から、柄縁があったと考えられる。科学分析の結果、刃部の一部に布が観察された。また、鞘木から採取された木片はヒノキ垂科の可能性が高いと考えられている。

1123は刀子である。全長11.4cm、茎部の長さ3.0cm、厚さ0.5cmを測る。刃部は大きく反っており、革製の鞘と思われる有機質が遺存している。刃部最大幅は1.8cm、背の最大厚は0.5cmを測る。関は明瞭ではないものの、直角関と思われる。鹿角製の柄が残存している。

1124は両頭金具である。一方の頭部は平坦な方形を呈するが、一方は劣化により不明である。軸部の断面形は方形を呈し、軸部に直交するように木質が遺存する。一般的な両頭金具と比較すると大型で厚いものの、形態から両頭金具とした。しかし、単体で出土していることや頭部の形態から、従来いわれている弓に装着したものとは考えにくく用途は不明である。

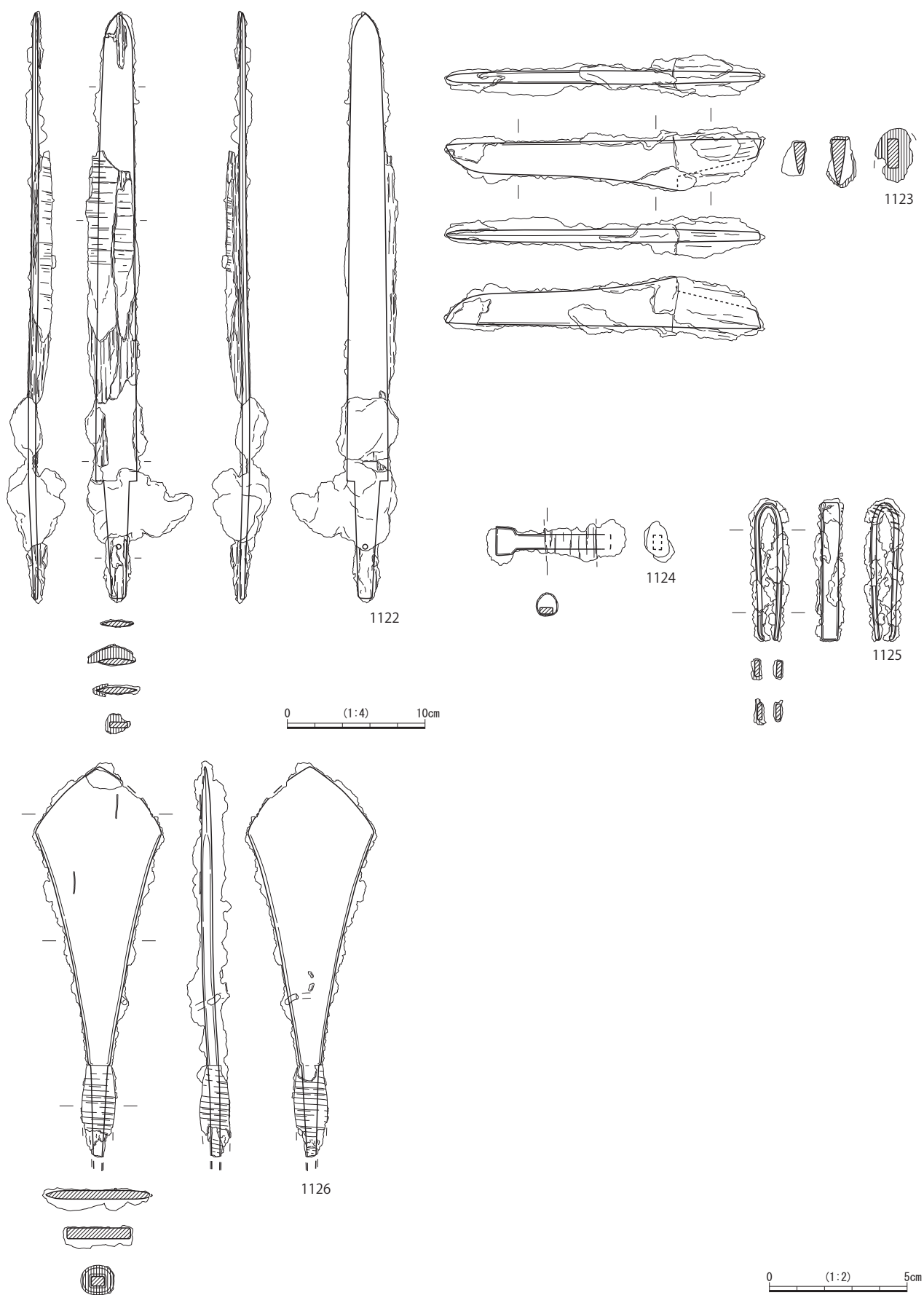
1125は鑷子状鉄器である。全長5cm、脚部幅0.7cmを測る。長さ約10.2cm、厚さ0.2cmの板状の鉄を折り返してピンセット状にしており、端部0.2cmから内側に湾曲し厚さも0.15cmと薄くなっている。一部に毛と皮革が付着しており、科学分析の結果、毛は鹿毛の可能性が高いと考えられている。

1126は圭頭鏃である。茎部の一部を欠損するものの、全長14.2cm、刃部幅4.6cmと大型である。矢柄の一部に布の痕跡が遺存しているが、遺存状態が悪く材質は不明である。

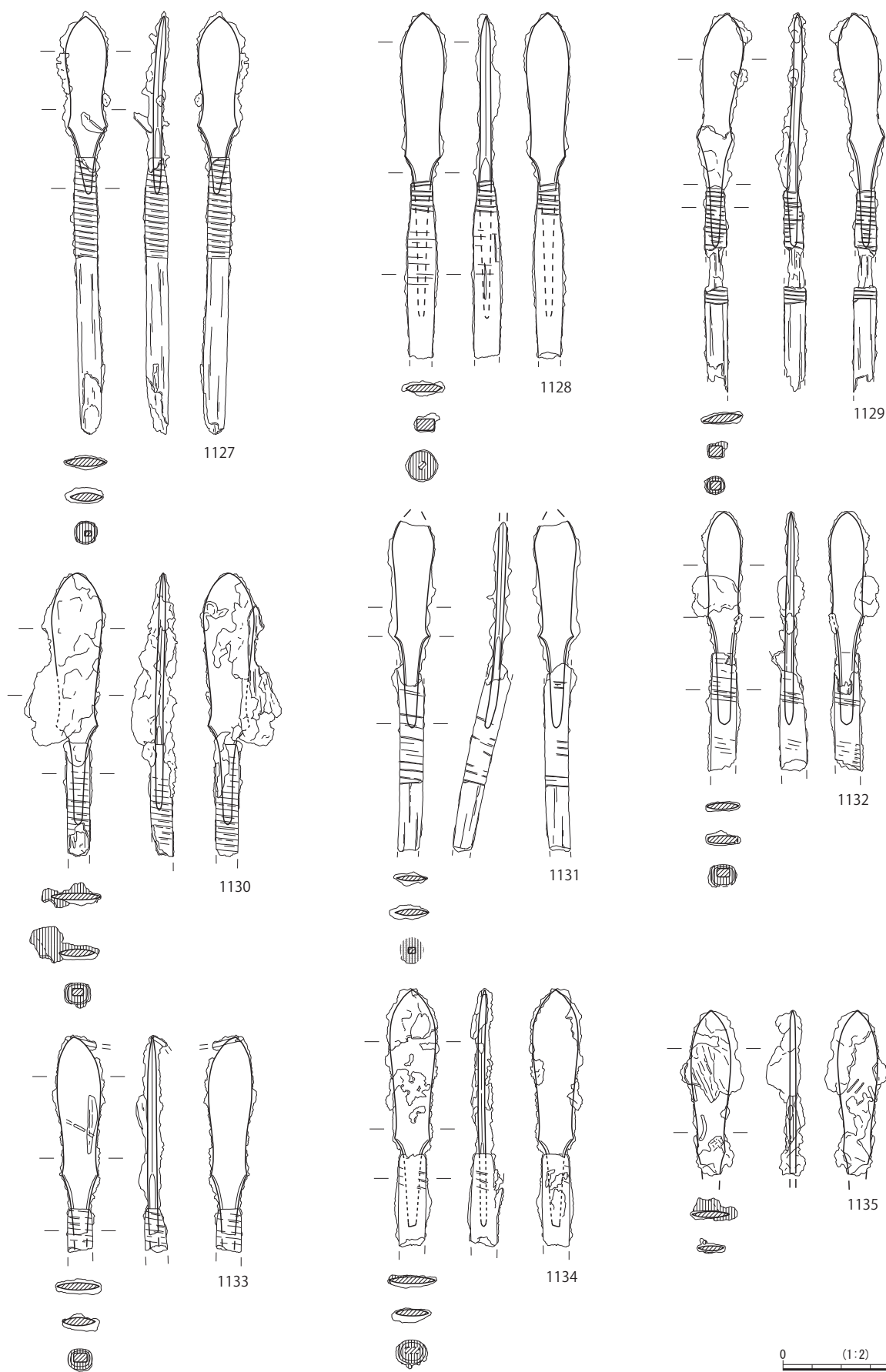
1127～1140は柳葉鏃である。鏃身部長は5.2cm～3.5cmと大きさにややばらつきがある。ほとんどに矢柄が残存している。また、材質は不明なものの、銹化した有機質が付着しているものも多い。1127は鏃全長6.1cm、鏃身部長3.8cm、最大幅1.3cmを測り、鏃全長が残存しているものの中で最も短い。鏃身部はやや銹化が進行しているものの、矢柄の残存状態は良好で、8.4cm残存する。1128は最大幅から山形突起までのくびれが弱く、山形突起も未発達である。全体的に銹化が進行しており、矢柄は6.1cm残存するものの樹皮巻きの単位は不明瞭である。1129はやや残存状態が悪く、鏃身部が銹により変

形している。鏃身部のくびれが比較的強い。矢柄は一部欠損しているものの、6.9cm残存する。1130は最も大型で、鏃全長8.7cm、鏃身部長5.2cm、最大幅1.8cmを測る。鏃身部のほぼ全体に布と木質の痕跡がみられる。鏃身部のくびれから山形突起にかけての一部に木質が厚く付着しており、X線写真を観察したが鏃身形態は一部不明瞭である。木質は大部分が劣化しているものの、一部に平らな面の痕跡が観察されるため、別個体の矢柄痕ではなく鏃を納めた容器の痕跡の可能性はある。矢柄が3.8cm残存するものの、銹により樹皮巻きの単位は一部不明瞭である。1131は先端部が一部欠損している。最大幅から直線的に内側に入っており、くびれ部分の湾曲が弱い。山形突起は発達している。樹皮巻きは確認できるものの、銹により単位は不明瞭である。1132は鏃全長7.3cm、鏃身部長3.5cm、最大幅1.1cmを測り、鏃身部長と最大幅が最も短く小型である。最大幅から山形突起までのくびれが弱く、山形突起も未発達である。ほぼ全体に銹化した有機質の痕跡がある。矢柄は4cm残存するものの、一部欠損や銹による変形がみられる。1133は茎部の一部が欠損している。鏃身部先端と中心あたりに銹化した紐の痕跡がみられる。また中心あたりには鏃に平行するように厚さ約0.3cmの銹化した木質が付着している。1134の茎部はX線写真の観察により末端部分のみ確認できた。ほぼ全体に銹化した有機質の痕跡がみられ、一部木質が付着している。矢柄は3.2cm残存するものの、一部銹による変形がみられ樹皮巻きの単位も不明瞭である。1135は山形突起から下部が欠損している。全体に銹化した有機質が付着する。銹化した布・紐・木質・革の痕跡があり、山形突起付近には紐を編んだようなものが付着している。付着した繊維の科学分析をおこなったが、状態が悪く材質は不明であった。1136は山形突起から下部が欠損している。鏃身部の断面形は片丸造を呈する。劣化により先端部分がやや反っている。表面に銹化した布の痕跡がみられる。1137～1141は銹により癒着しておりそのまま実測した。1137～1140は柳葉鏃である。1137は銹化した有機質が厚く鏃身部形態が不明瞭だが、X線写真の観察から柳葉鏃と推定した。1138は茎部の一部が欠損している。1139は最大幅から山形突起までのくびれが弱く、山形突起が未発達である。矢柄は4.8cm残存するものの、銹により樹皮巻きの単位は不明瞭である。1140は銹化した有機質が付着する。矢柄が3.7cm遺存するものの、銹により樹皮巻きの単位は不明瞭である。

1141は短頸鏃である。鏃身部長2.2cm、頸部長2.3cm、茎部長3.5cmを測る。刃部形態は柳葉形を呈し、断面形は両丸造りである。関は刃部・頸部ともナデ関である。矢柄が4.4cm残存するものの、銹により樹皮巻きの単位は不明瞭である。

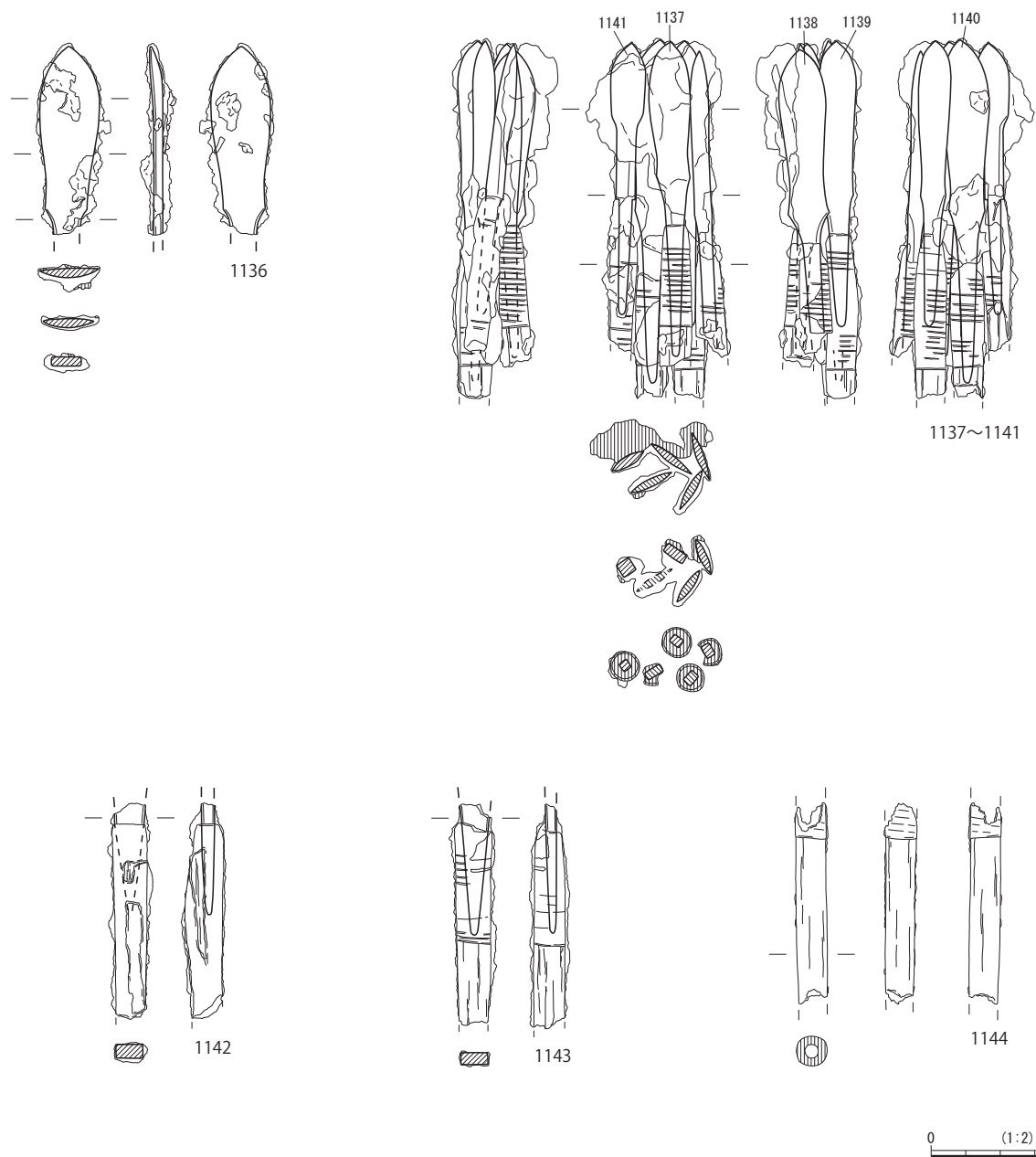


第135图 2号地下式横穴墓副葬品(1)



0 (1:2) 5cm

第136图 2号地下式横穴墓副葬品(2)

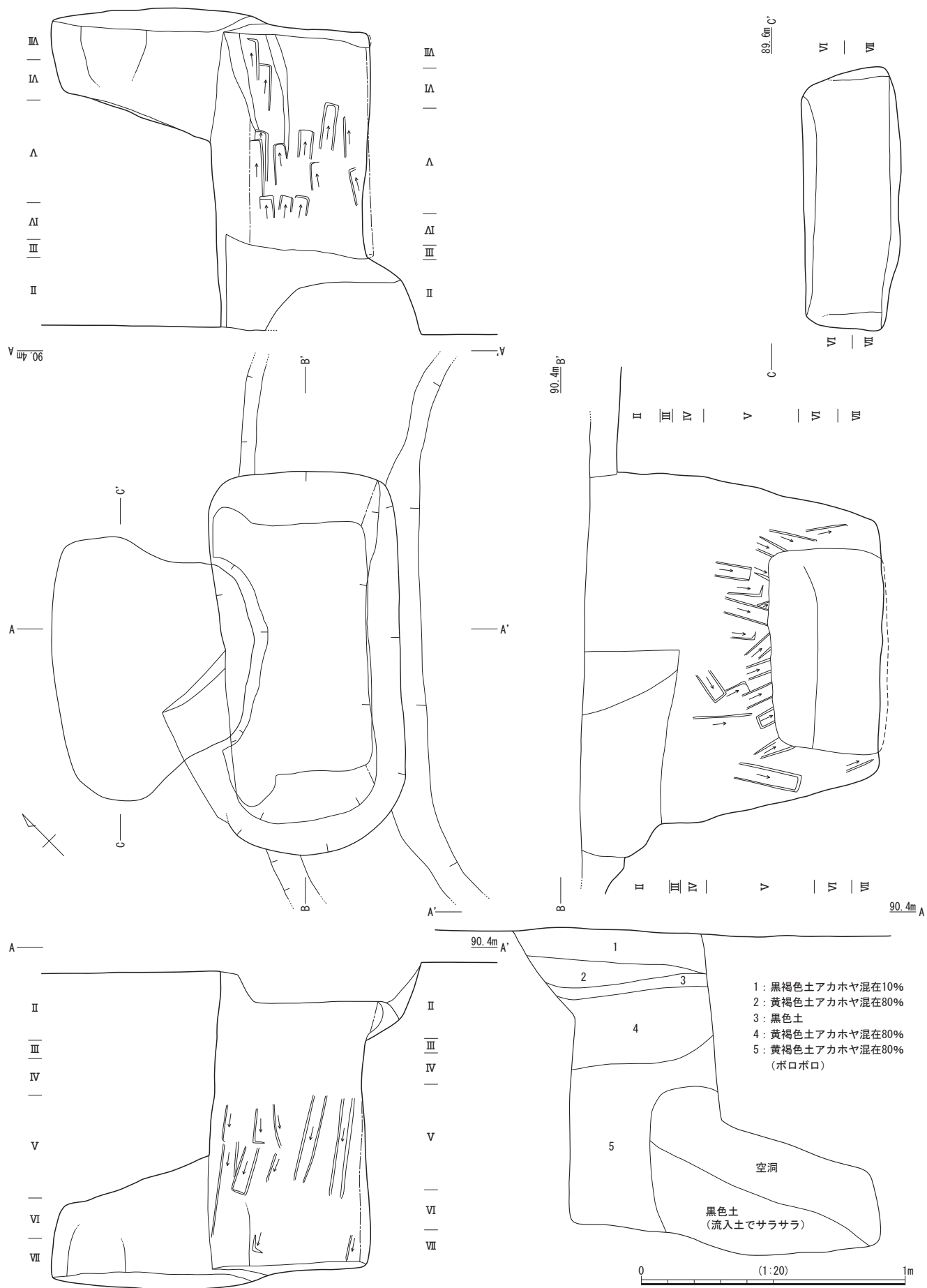


第137図 2号地下式横穴墓副葬品(3)

1142・1143は鉄鏃の茎部である。おそらく1135・1136のものと考えられるが、割面の錆が進行しており接合できない。どちらも樹皮巻は観察できるものの錆により単位は不明瞭である。1142には、別個体の矢柄片が付着する。

1144は矢柄の破片である。樹皮巻が一部残存している。

3号地下式横穴墓は1-②-a類である。竪坑の羨門寄りに抉りが見られ、羨門寄りと玄室に空洞が見られ丸太閉塞と思われる。玄室の幅が1mと竪坑に比して小さくやや不整形である。竪坑の壁面には縦及び斜め方向の工具痕が明瞭に認められる。



第138図 3号地下式横穴墓

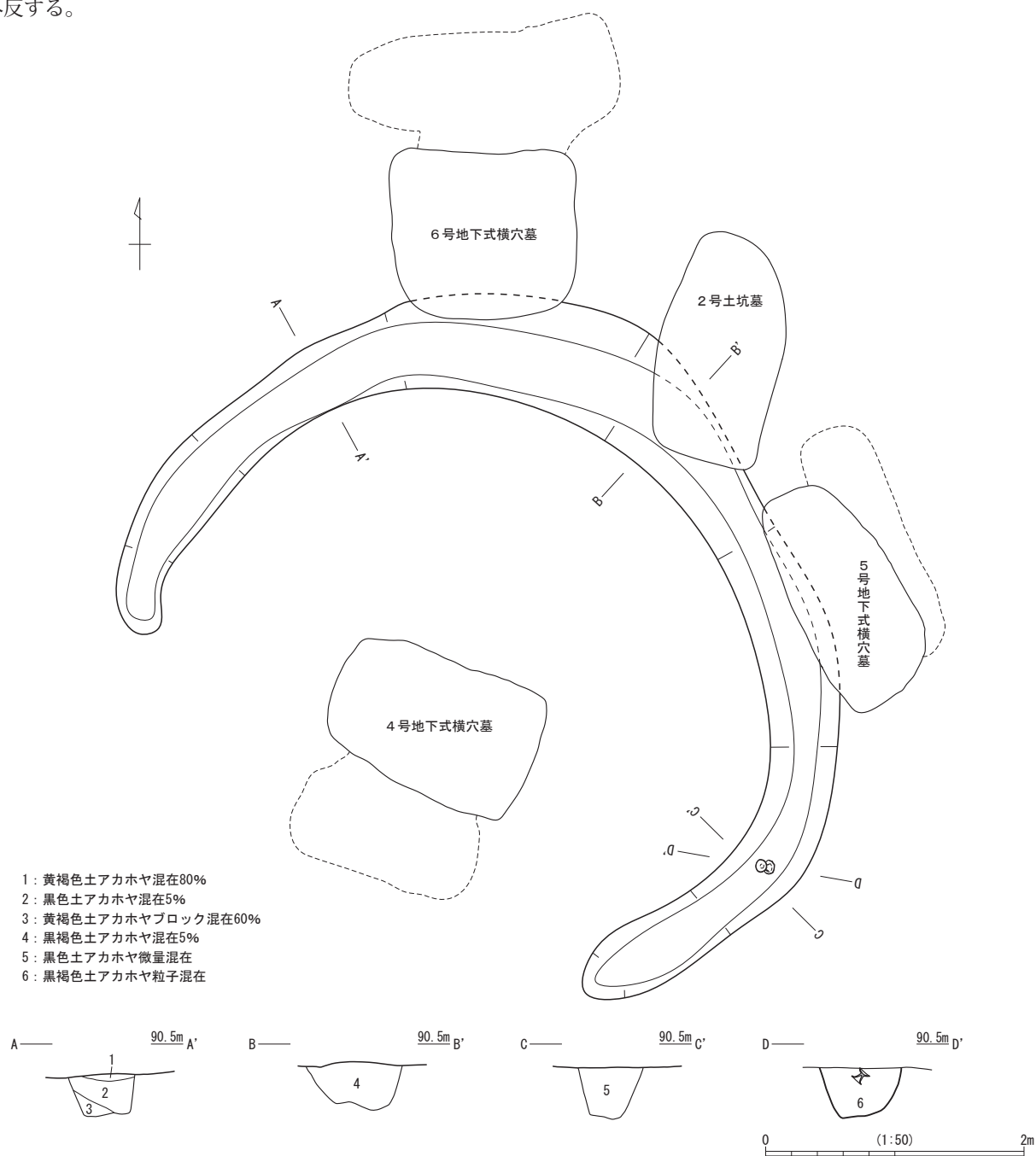
③ 3号円形周溝墓・4号・5号・6号地下式横穴墓（第139図～第146図）

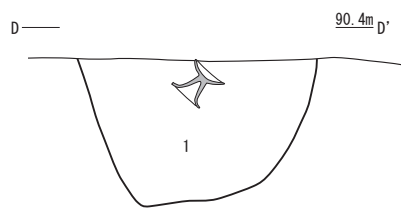
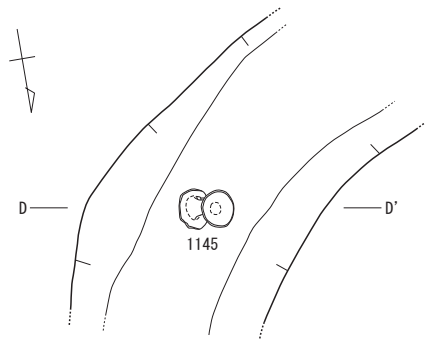
G-21・22区にかけて検出される。径約5.8m、溝幅0.6m、深さ0.3～0.4mの円形周溝で南西側に4mの空間がある。ほぼ中央に4号地下式横穴墓が存在し、東側に5号地下式横穴墓、北側に6号地下式横穴墓、北東側に2号土坑墓が存在するが、いずれも周溝を切った状態である。また、東南側の溝内に完形の土師器の器台が置かれてある。1145は器台である。口縁部径10.9cm、底部径12.8cm、器高10cmを測り、脚部はなだらかに広がり、裾部で大きく開く、受部は深さ3cmでやや丸みを帯びながら外反する。

4号地下式横穴墓は1-②-a類である。竪坑の羨門側には挟りが認められ、埋土は黒色の軟質土でフカフカしている。丸太材による閉塞の痕跡と思われる。

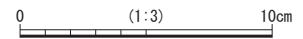
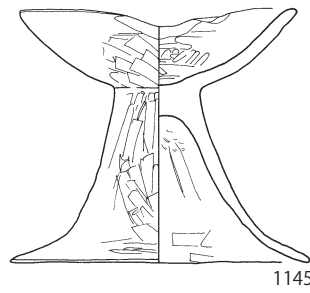
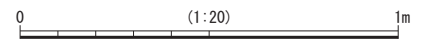
5号地下式横穴墓は、2-①-c類である。竪坑は溝を掘り下げた段階で検出されたため新旧関係は明確ではないが、竪坑が周溝を切っているものと思われる。玄室は竪坑の途中からわずかに凹み奥行きは短い。

6号地下式横穴墓は2-②-a類である。竪坑が1.5×1.3mの略方形である。竪坑埋土の観察では追葬の痕跡が認められる。玄室は片袖気味で2.2×0.7mと細長い。竪坑には追葬の痕跡があるが、人骨は残存していない。

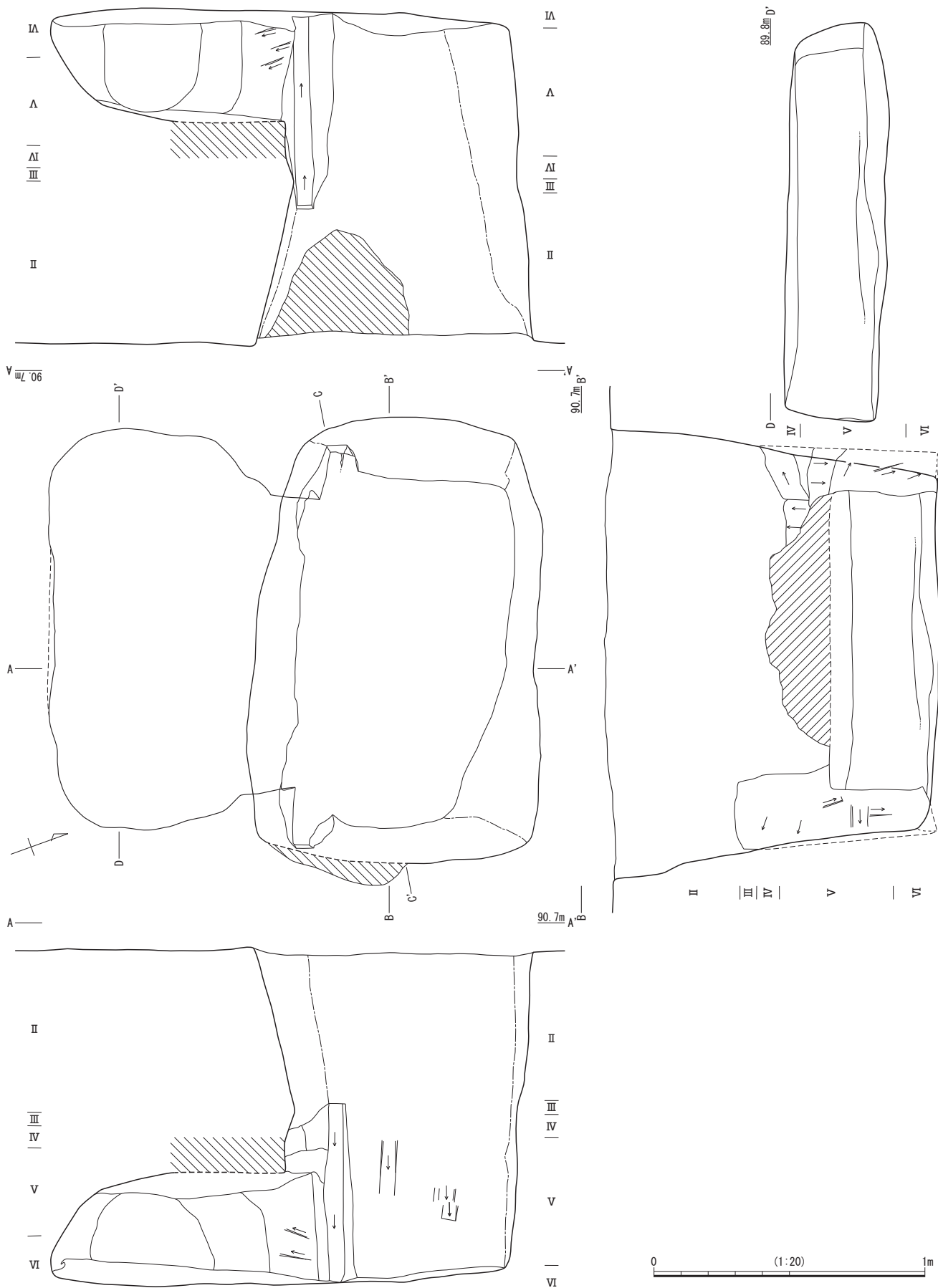




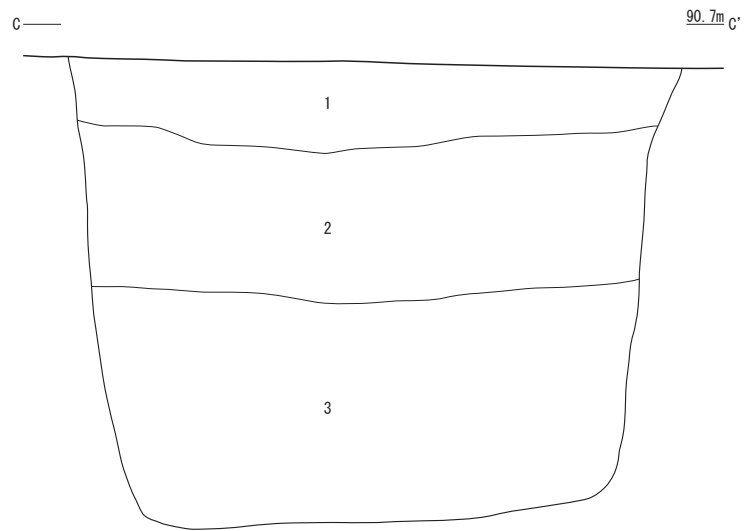
1 : 黒褐色土アカホヤ粒子混在



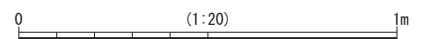
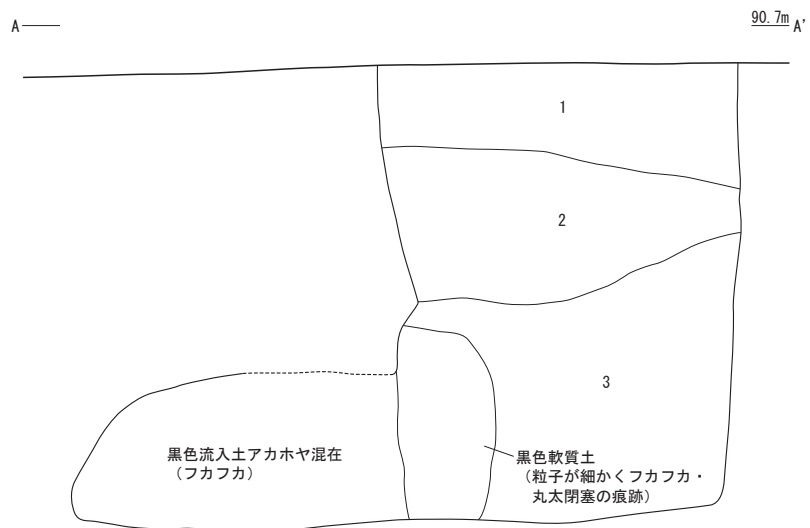
第140図 3号円形周溝墓(2)・出土土器



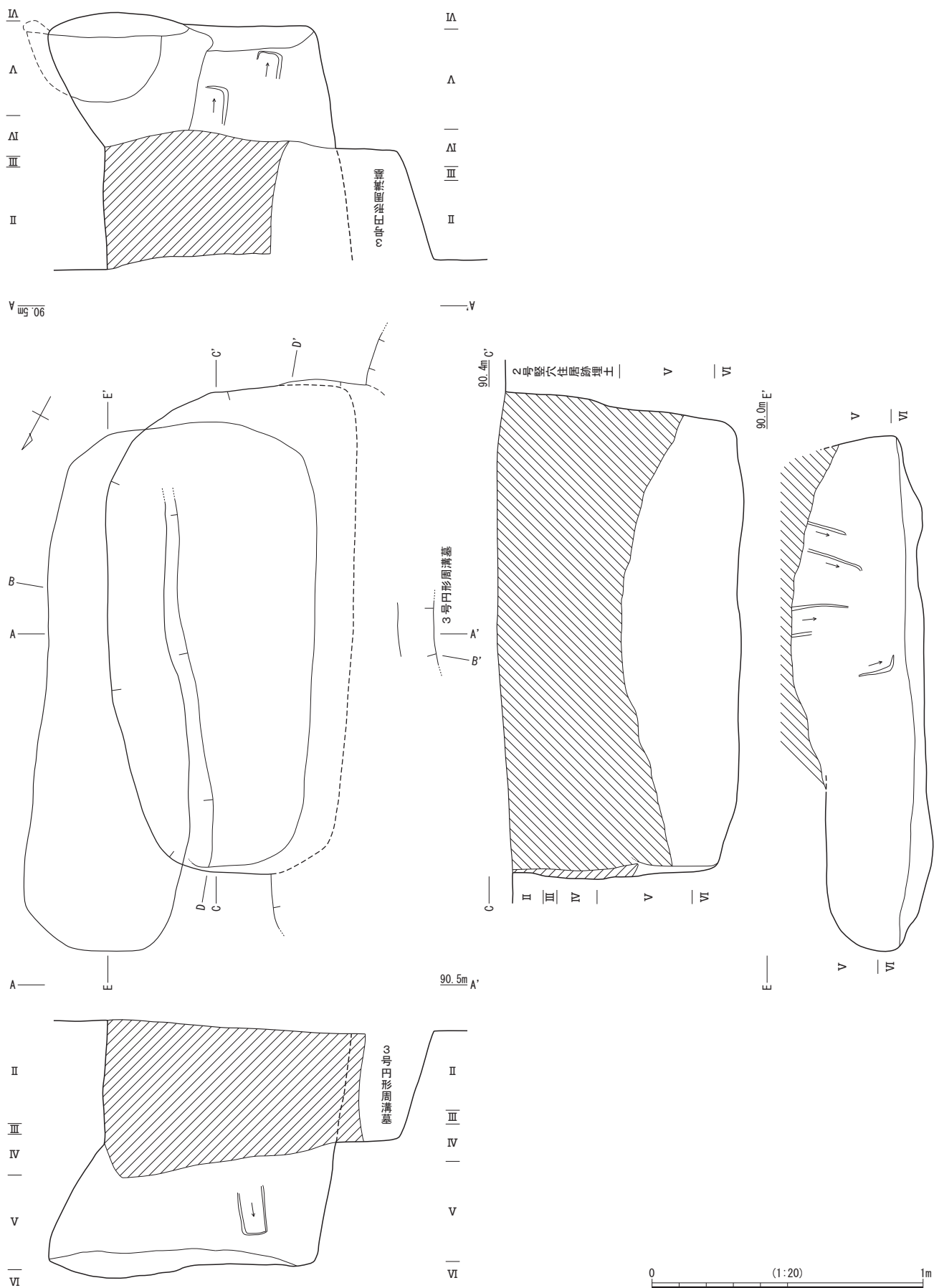
第141图 4号地下式横穴墓(1)



- 1 : 黒褐色粒子細かいアカホヤ混在10%
- 2 : 黒茶褐色土アカホヤ混在40%
- 3 : 茶褐色土アカホヤ混在80% (ややボロボロ)



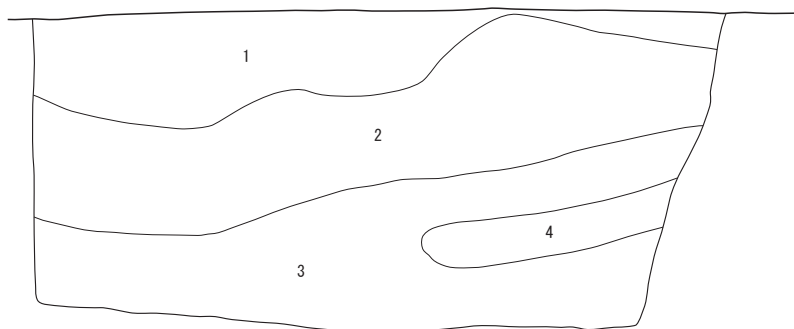
第142図 4号地下式横穴墓(2)



第143图 5号地下式横穴墓(1)

D——

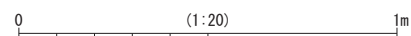
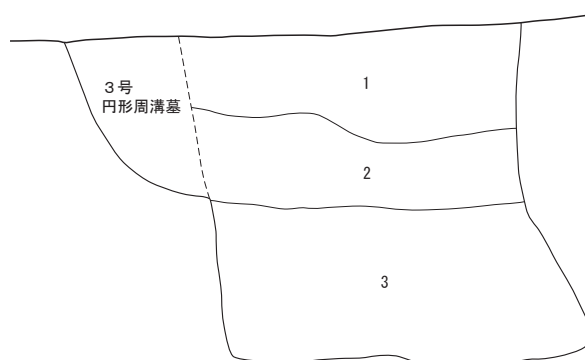
90.5m D'



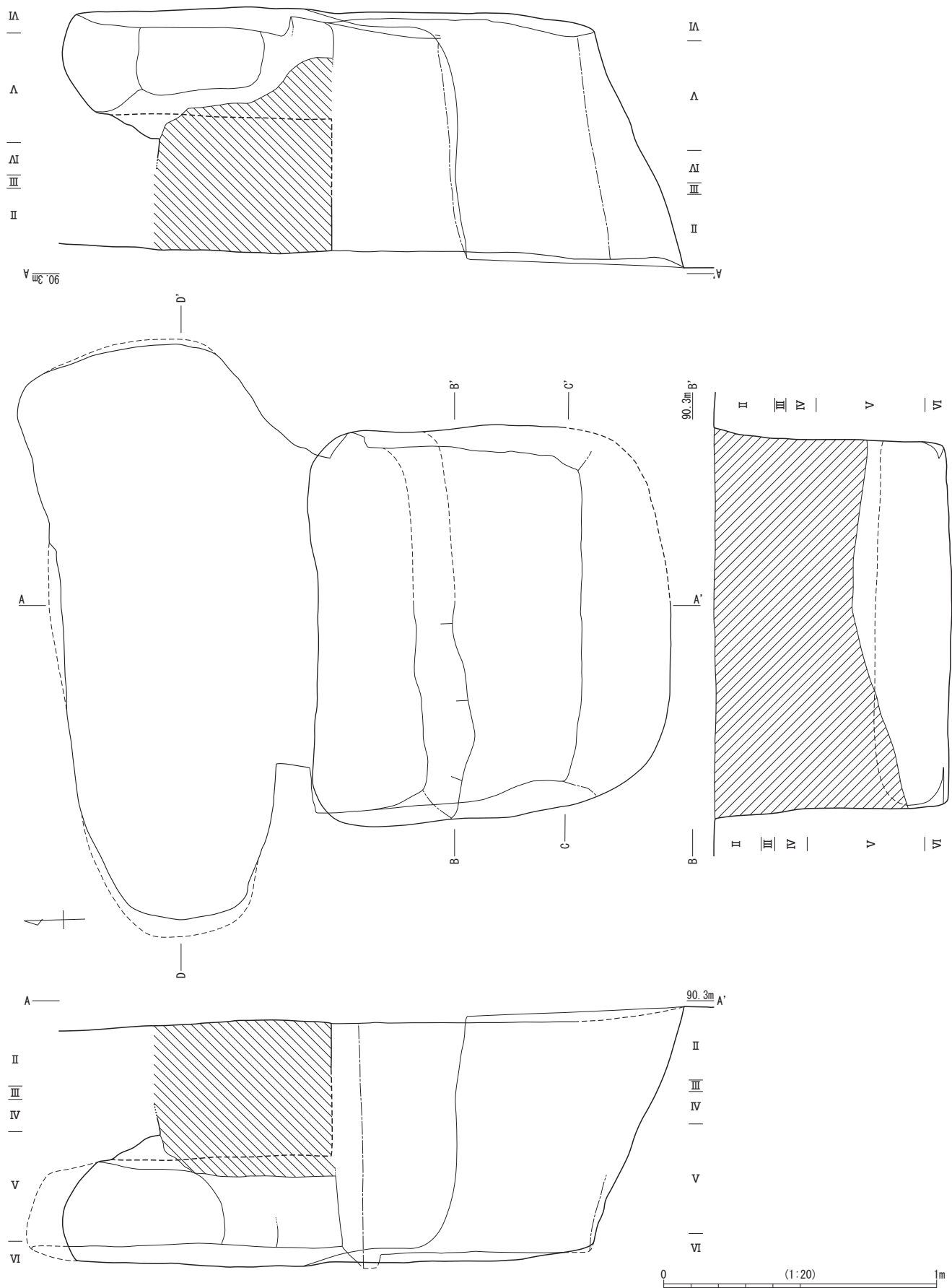
- 1 : 黒色土アカホヤ微量混在
- 2 : 黒茶褐色土アカホヤ混在20%
- 3 : 黄茶褐色土アカホヤ混在90%
- 4 : 黒色土アカホヤ微量混在

B'——

90.5m B



第144図 5号地下式横穴墓(2)



第145图 6号地下式横穴墓(1)

④ 4号円形周溝墓・7号地下式横穴墓（第147図・第148図）

F・G-19区において検出される。東西6m、南北7m、溝幅0.5m、深さ0.2mの円形周溝で南西側に3.2m幅の土橋がある。周溝内には地下式横穴墓は存在せず、東側に周溝を切って7号地下式横穴墓が存在する。

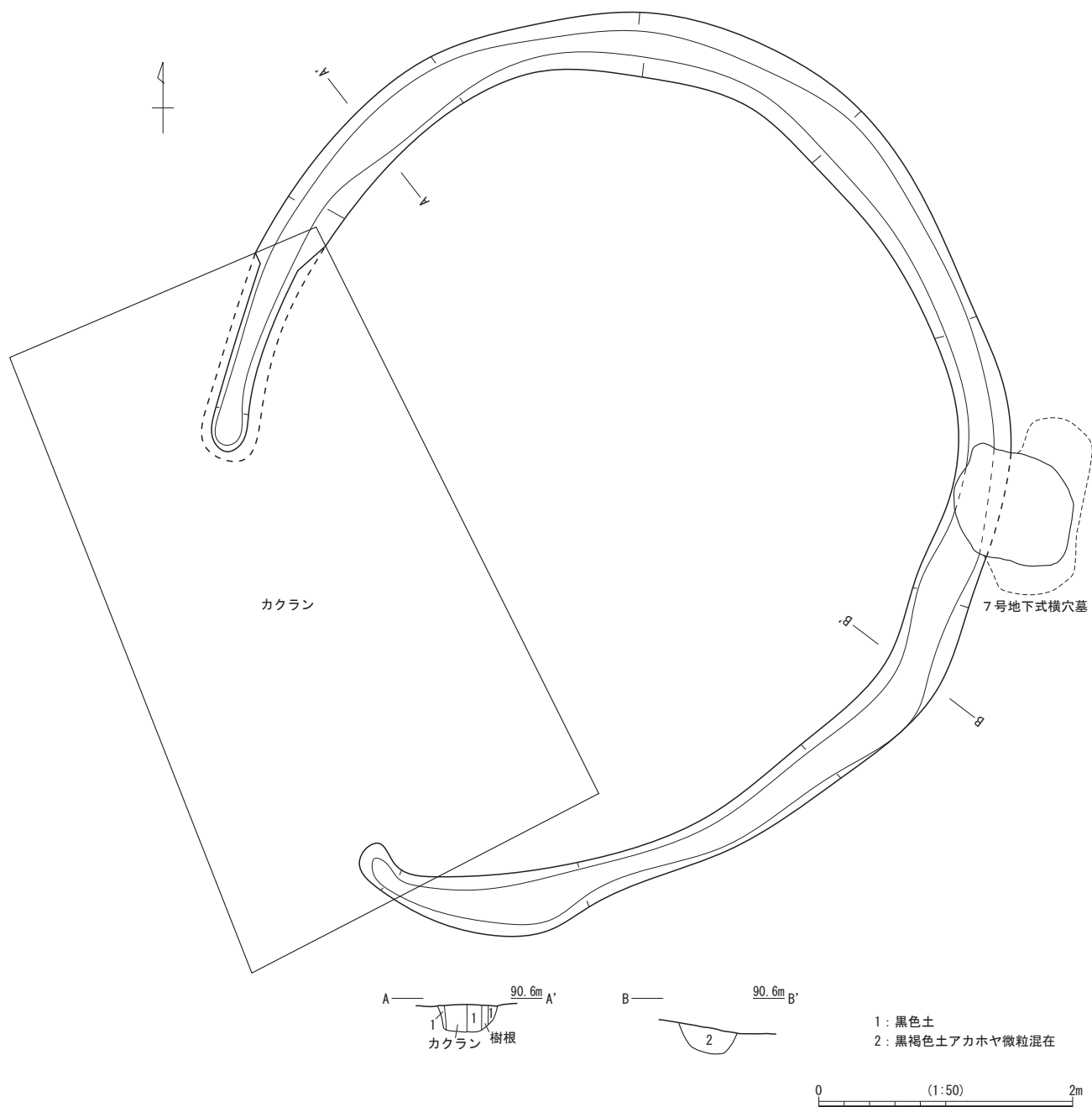
7号地下式横穴墓は1-①-a類である。周溝を掘り下げた後に検出されたものであるが、竪坑が溝を切ったものと思われる。玄室天井が崩落しているため竪坑の規模は明確につかめないが、現況で見ても小規模な竪坑である。

イ 弧状遺構・地下式横穴墓

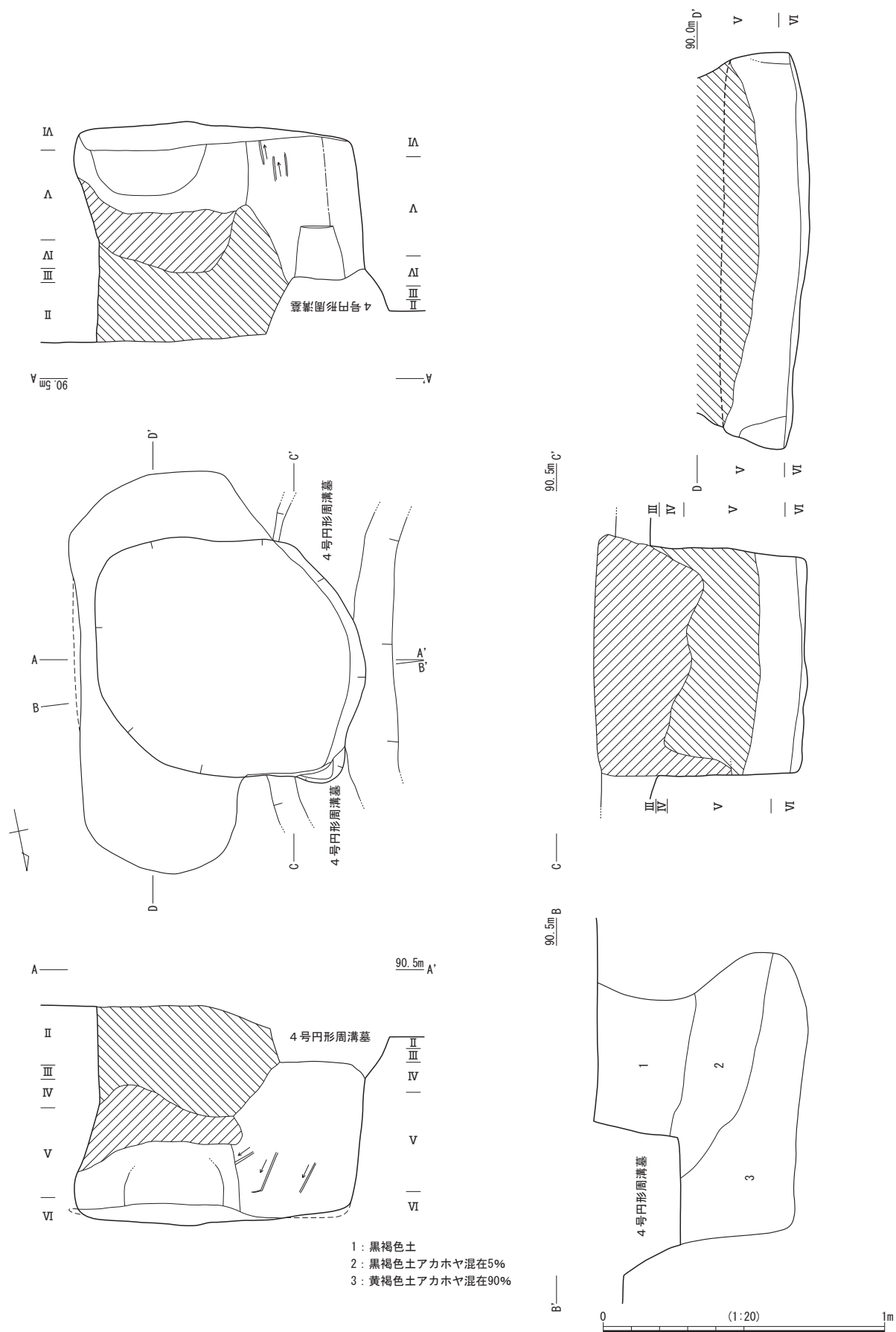
⑤ 1号弧状遺構・8号・9号地下式横穴墓（第149図～第154図）

F-20区に於いて検出される。長さ5m、溝幅0.6m、深さ0.3mの弧状を呈するものである。弧の中心部に8号地下式横穴墓が存在し、溝の東端に近い部分に溝を切った状況で9号地下式横穴墓が存在する。

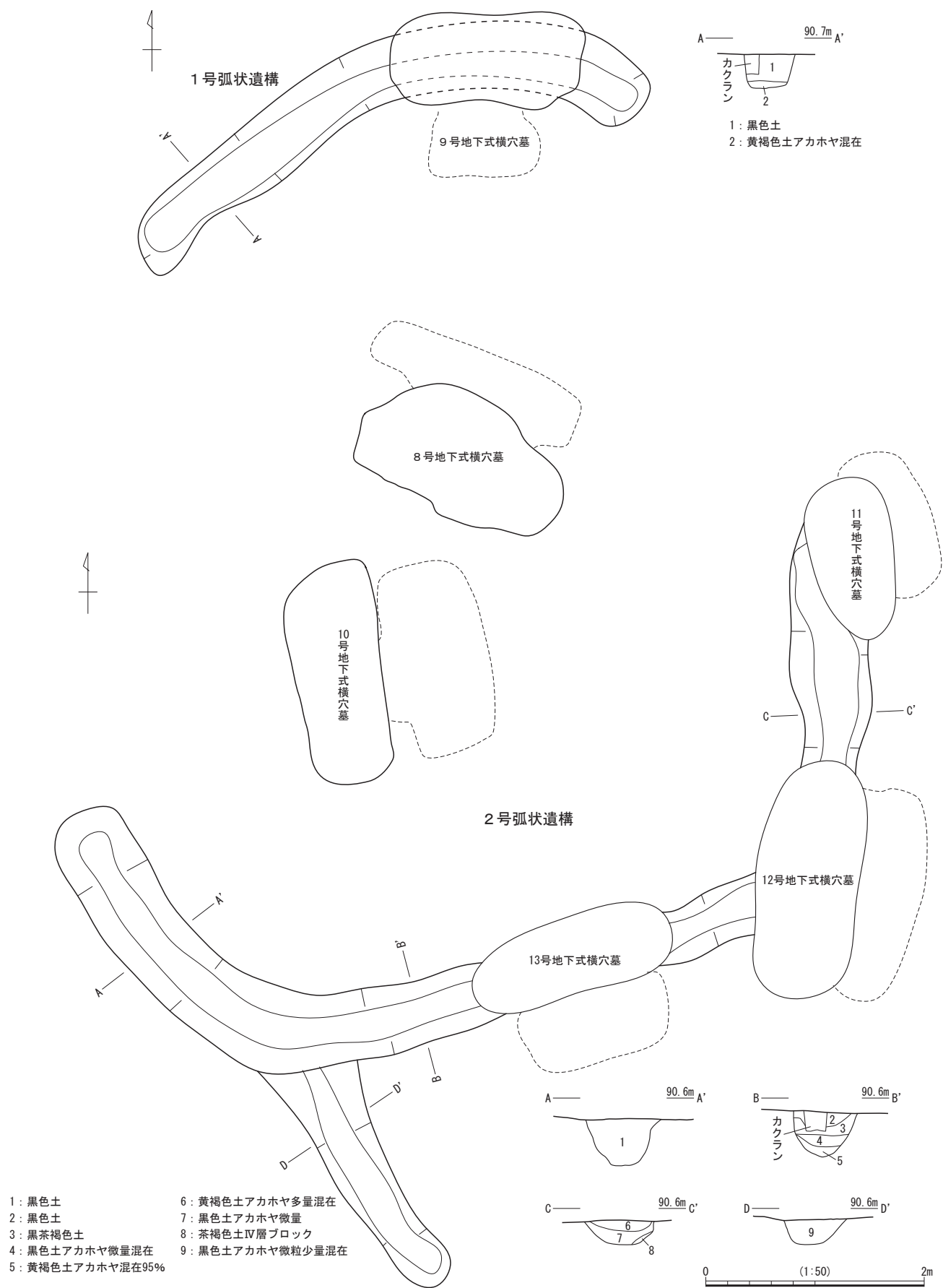
8号地下式横穴墓は2-②-c類である。竪坑の北側約1mの位置（玄室の直上）に土器1146と赤色顔料がある。玄室は竪坑の羨門側から段落ちて掘られている。



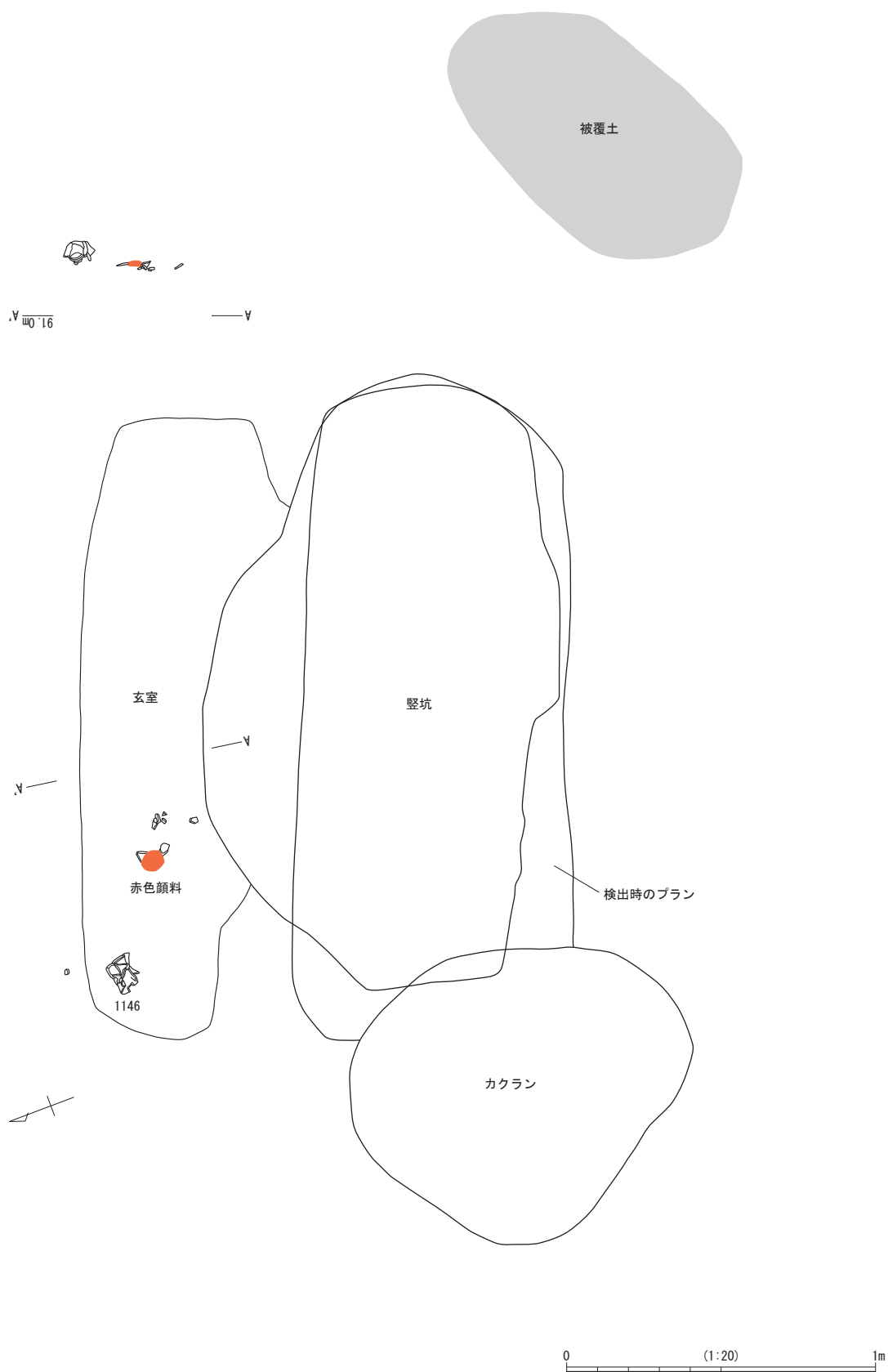
第147図 4号円形周溝墓



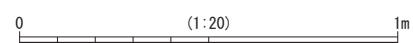
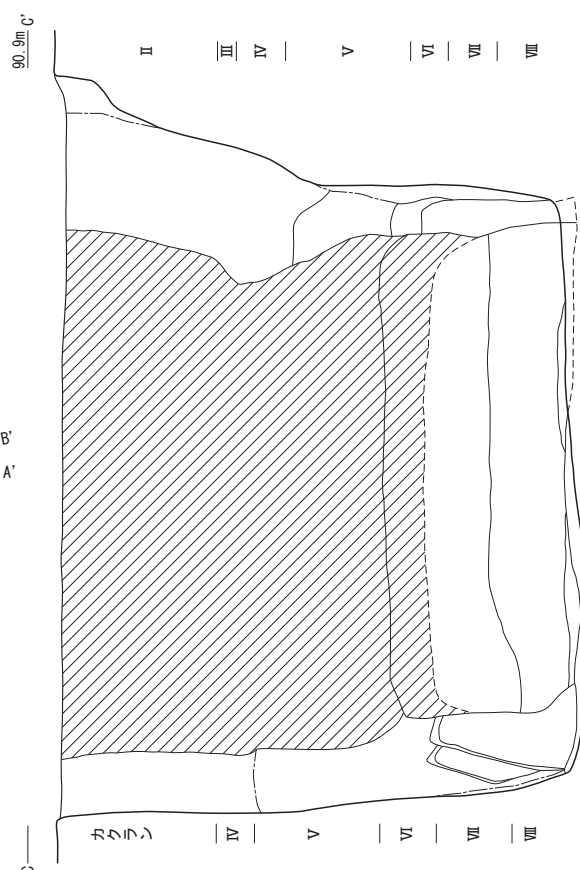
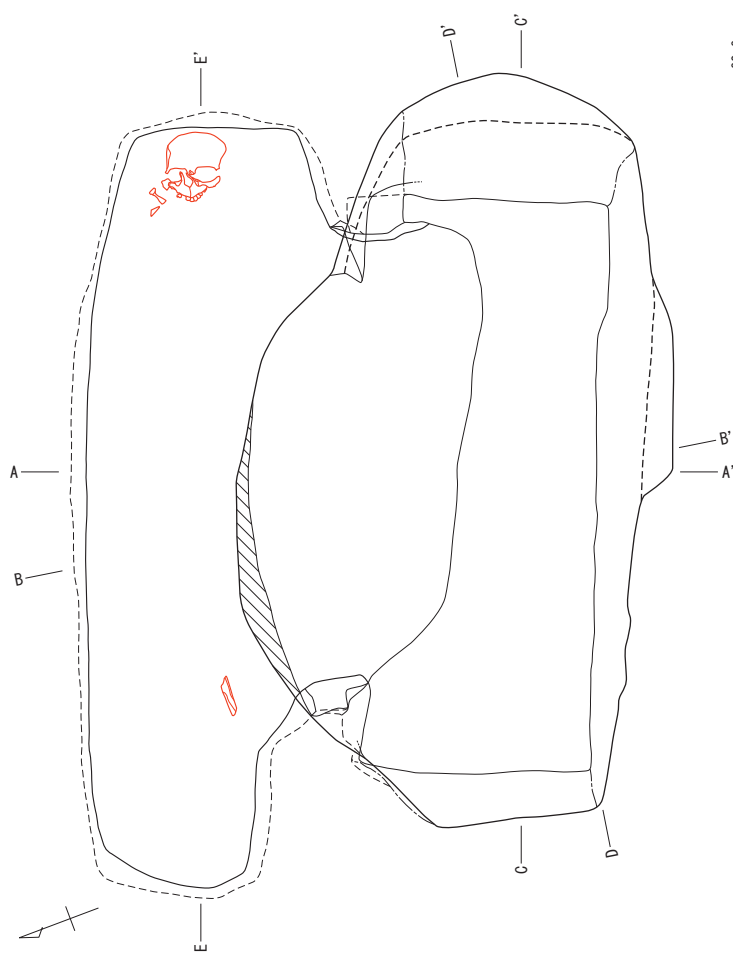
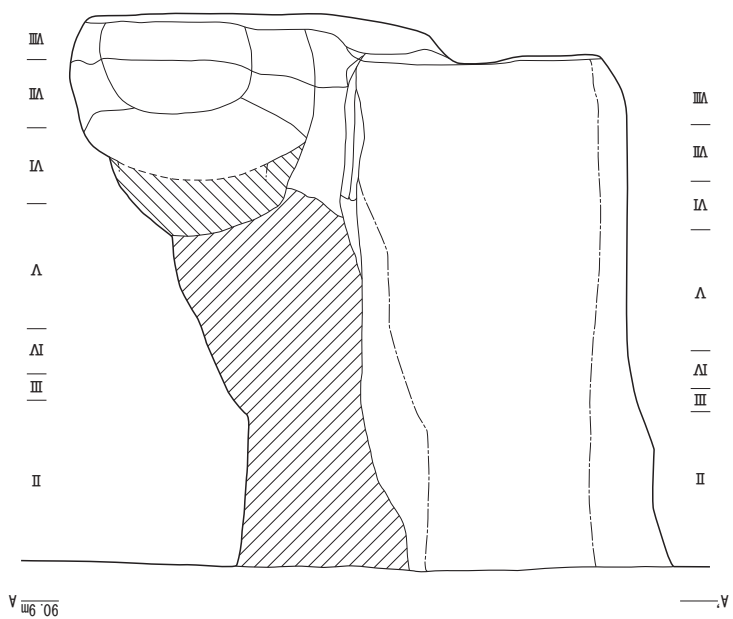
第148図 7号地下式横穴墓



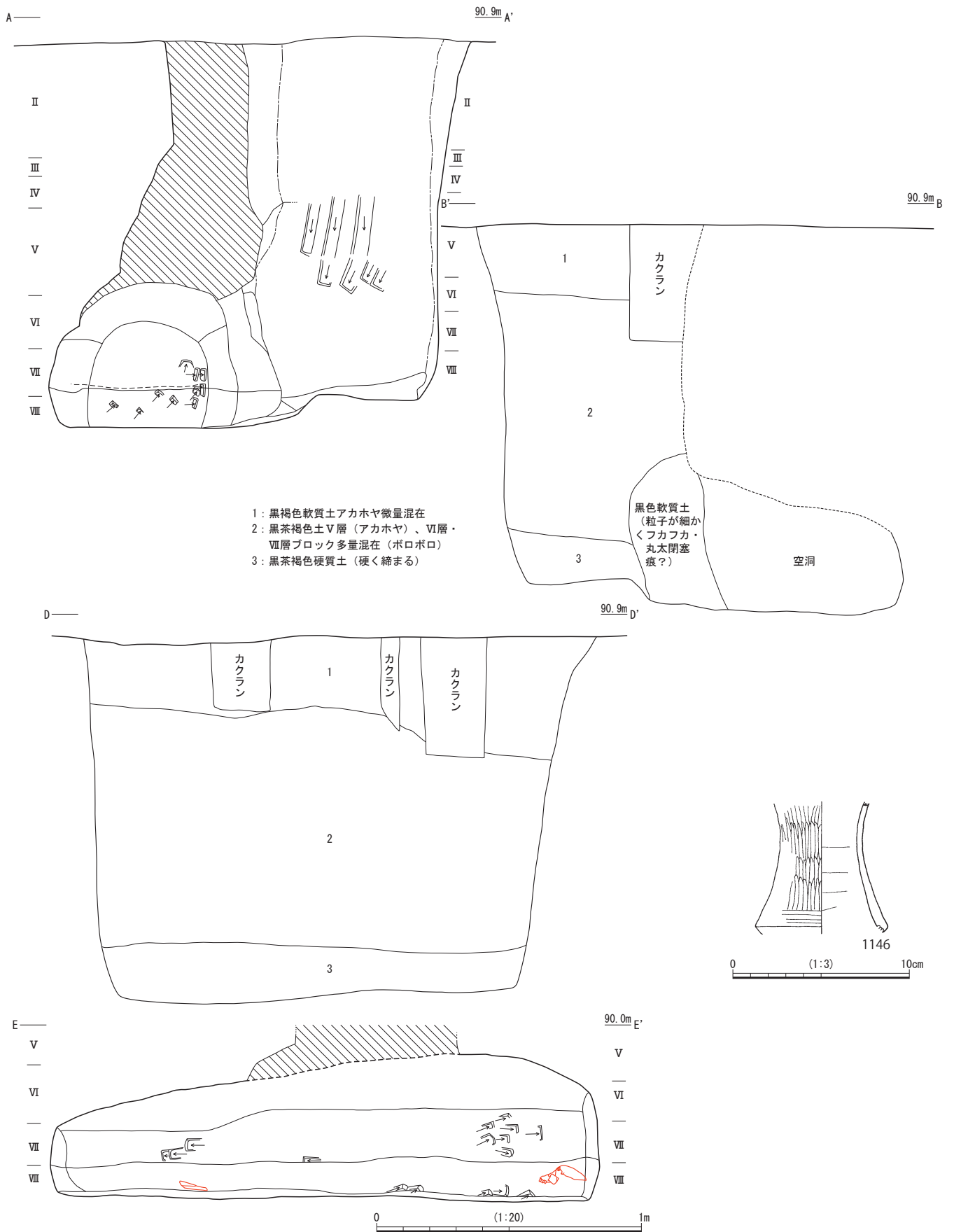
第149図 1号・2号弧状遺構



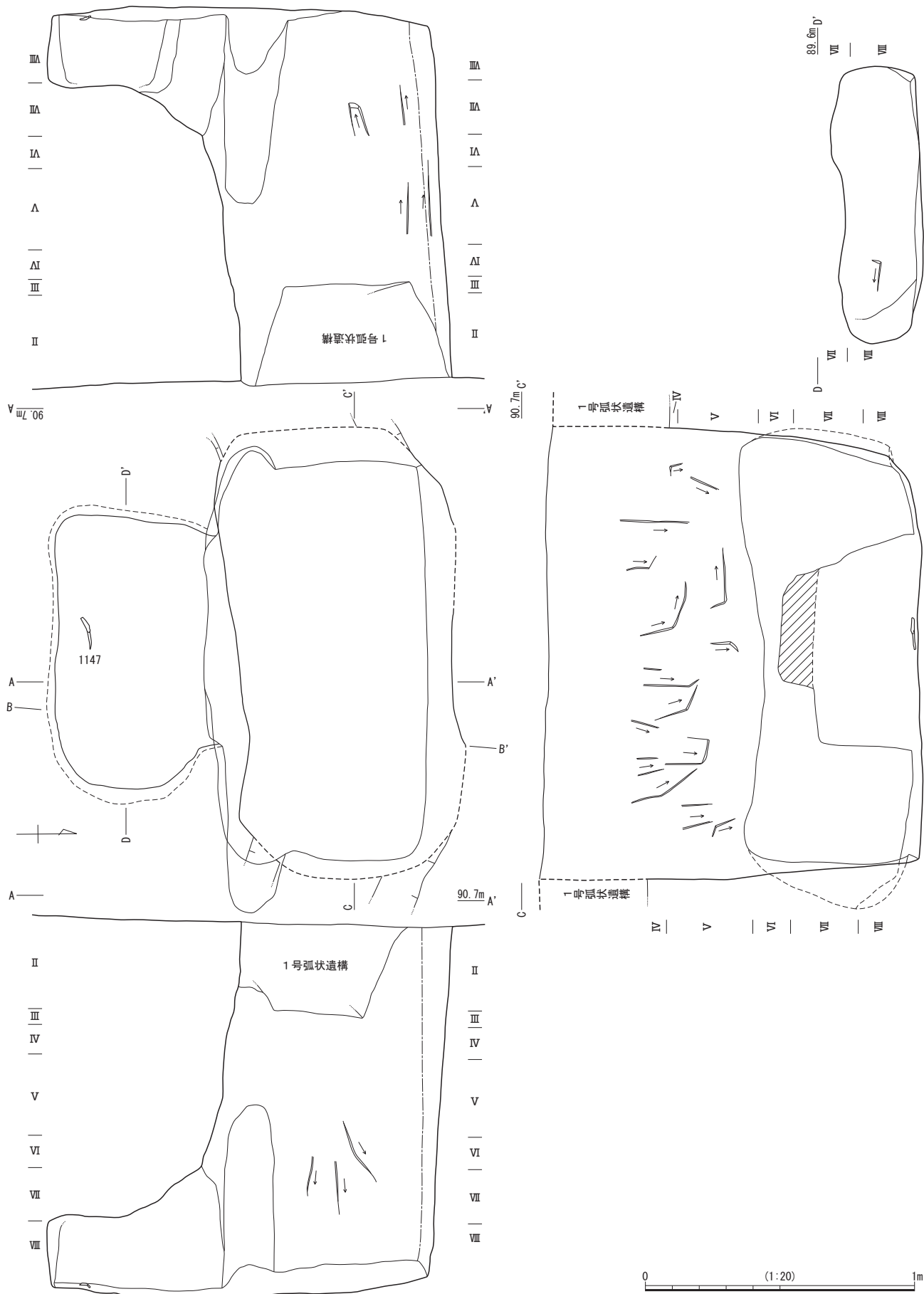
第150図 8号地下式横穴墓(1)



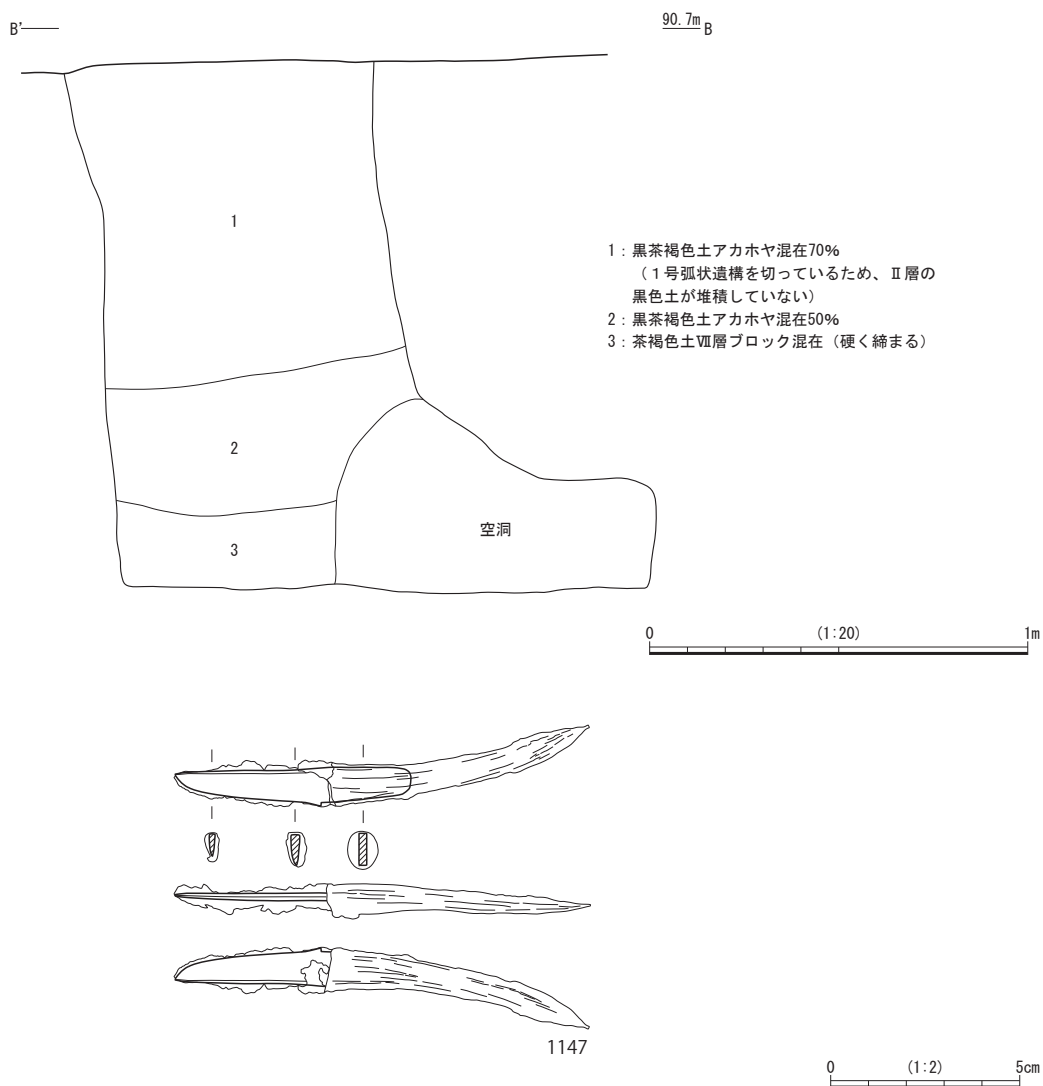
第151図 8号地下式横穴墓(2)



第152図 8号地下式横穴墓(3)・出土土器



第153图 9号地下式横穴墓(1)



第154図 9号地下式横穴墓(2)・副葬品

玄室の右奥(東側)に頭蓋, 左側に脛骨が遺存する。顔面には赤色顔料が付着している。熟年男性と思われる。1146は埴で口縁部と底部を欠損する。茎部が細長く体部は浅いものと思われる。外面は丁寧なヘラミガキが施されている。赤色顔料は丹である。

9号地下式横穴墓は3-②-a類である。竪坑に比して玄室が小規模である。竪坑の羨門寄りに挟りが見られ羨門の下位から玄室にかけては空洞で、丸太閉塞と思われる。玄室の中央奥部に刀子1点が副葬されている。1147は全長11cmの刀子である。刃部は3.8cmと短く、幅0.5cm～1.0cm、厚さ0.2cmである。関部は直角関であり、基部は2.3cmである。柄部は長さ7cm、幅0.6cm～0.8cm、厚さ0.2cm～0.3cmであるが、反りの大きいものである。

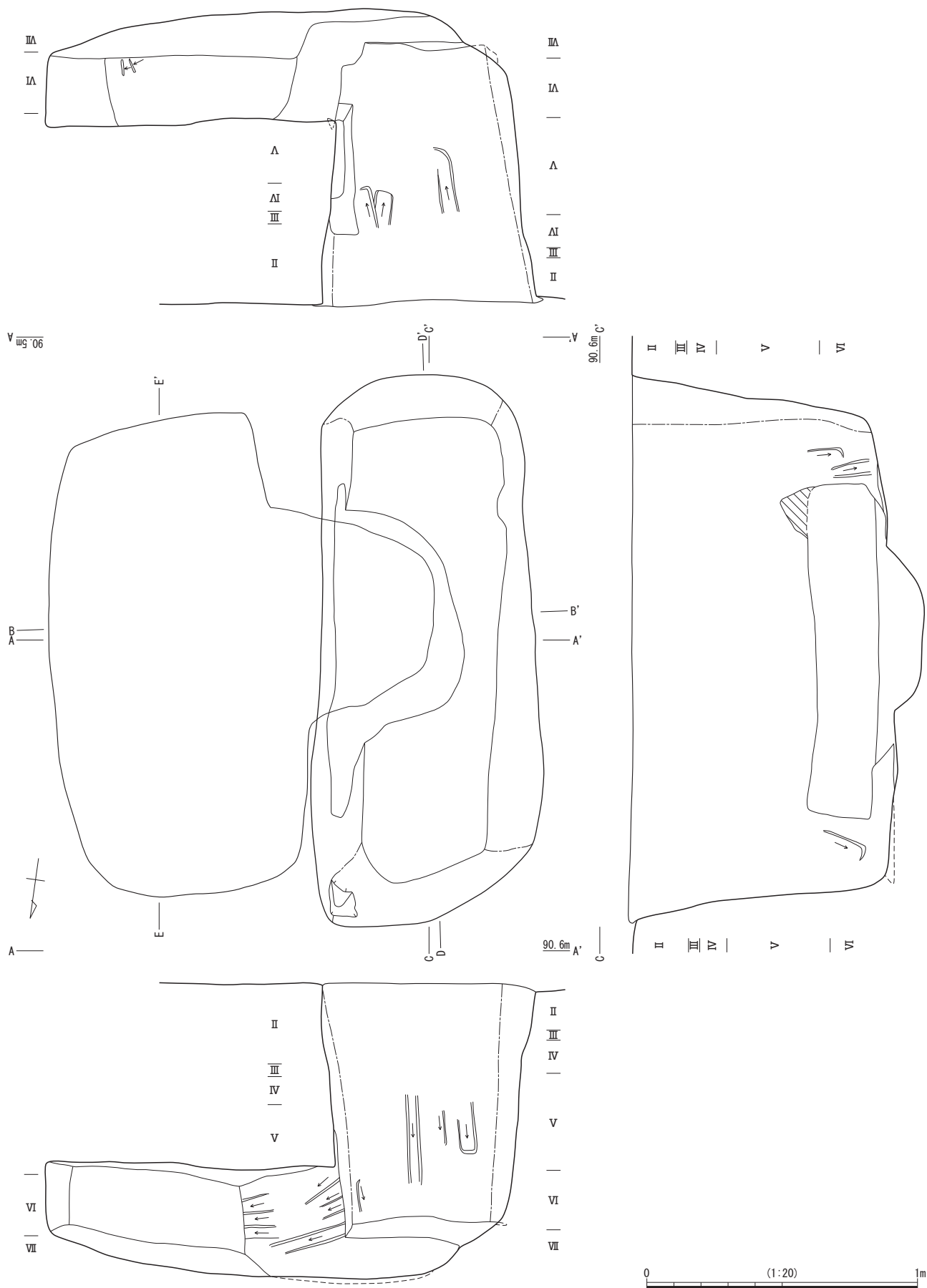
⑥ 2号弧状遺構・10号・11号・12号・13号地下式横穴墓(第149図・第155図～第163図)

G-19・20区にかけて検出される。長さ6.3m、溝幅0.7m、深さ0.4mの弧状を呈するものである。弧の中心部に10号地下式横穴墓が存在し、溝の東端から11号・12号・13号地下式横穴墓が溝を切った状態で存在する。

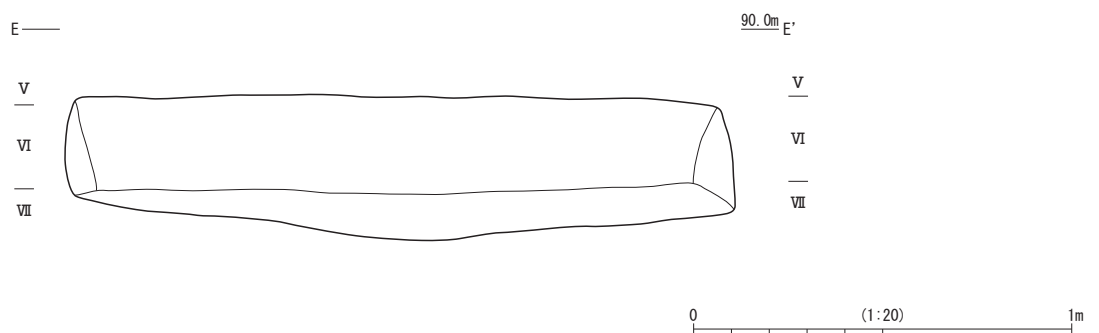
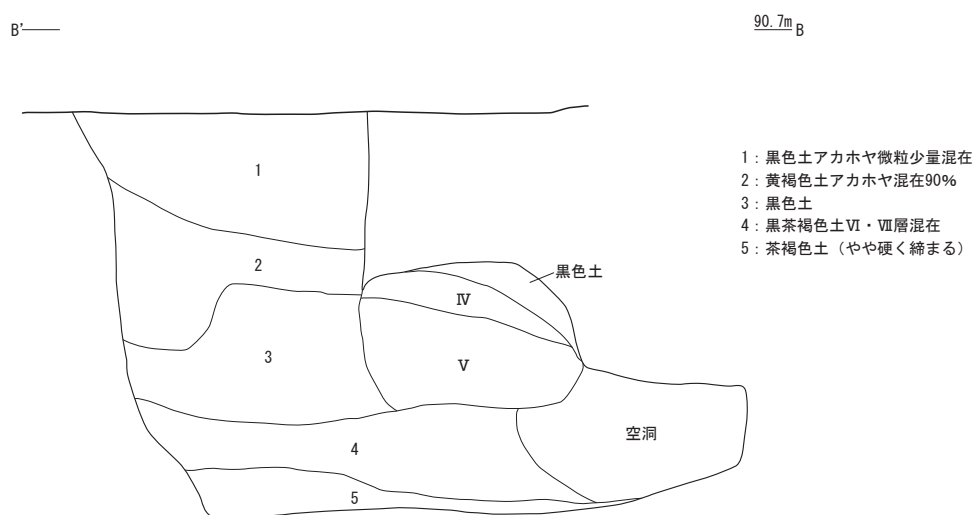
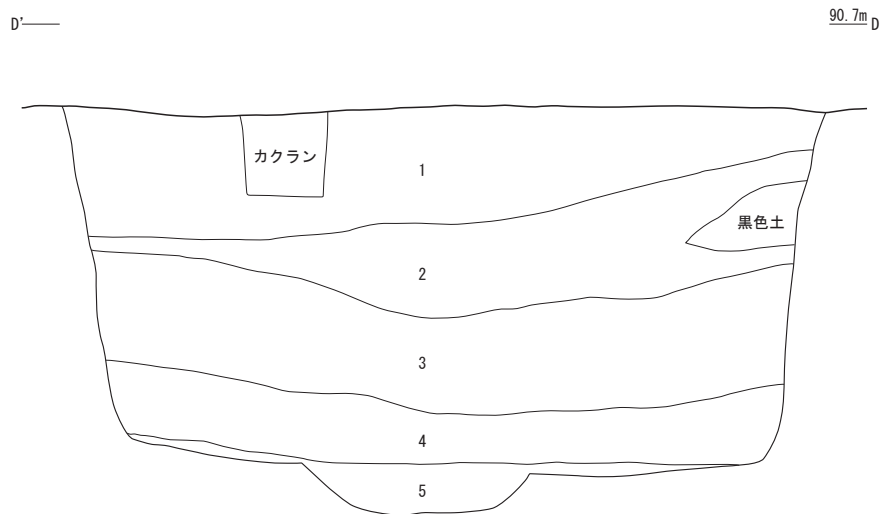
10号地下式横穴墓は、2-②-aである。竪坑は長方形で羨門側に挟りが見られる。竪坑の中央部から羨門下位にかけて約10cmの凹みを有し、玄室へと続くものである。遺体を入れるときのための凹みと思われる。

11号地下式横穴墓は、1-①-c類である。竪坑の羨門部寄りから段落ちで玄室へと続くものである。

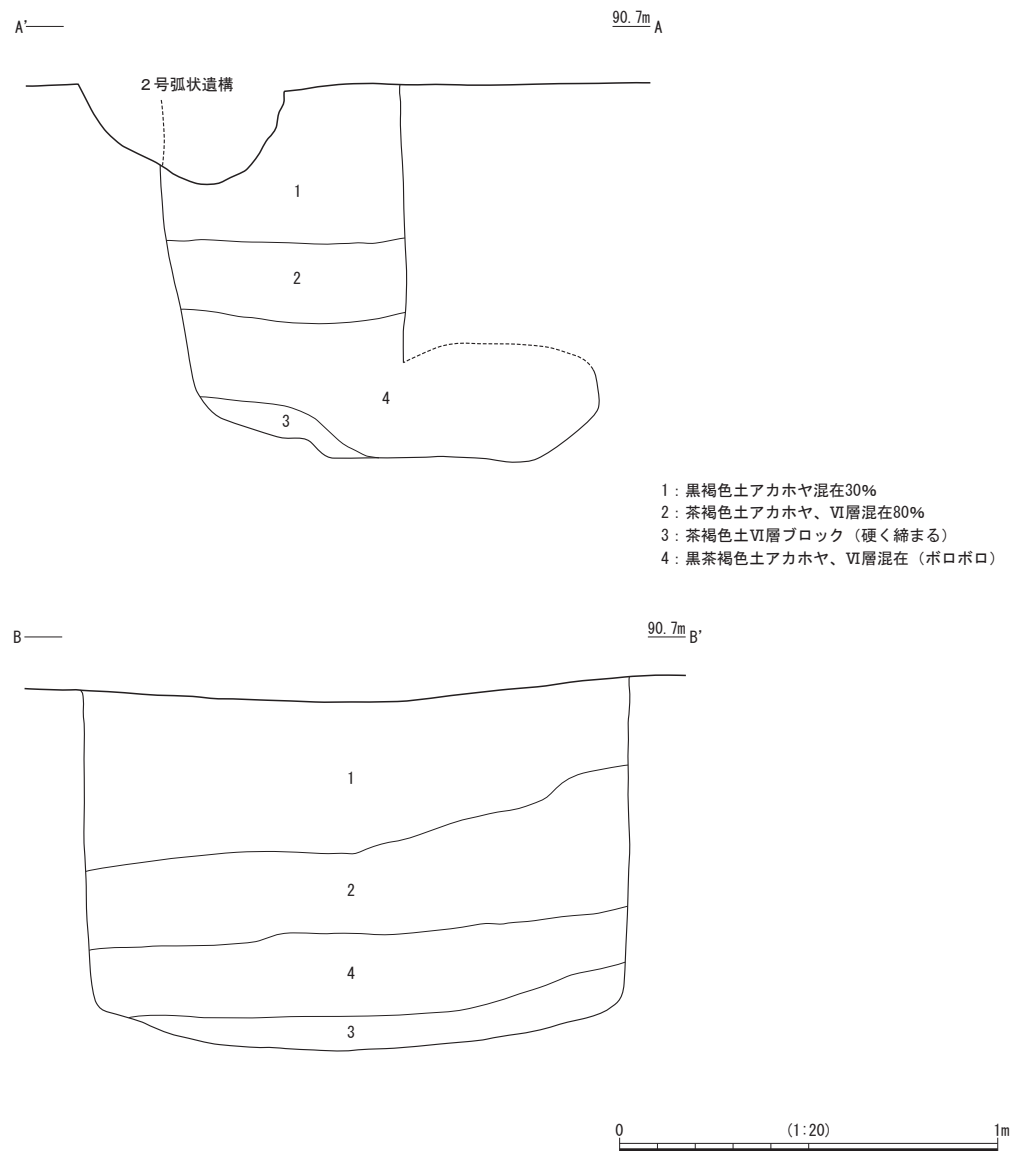
12号地下式横穴墓は、2-①-a類で、玄室の長さが2mとやや大型である。玄室の奥部に、剣・大型の圭頭鏃・異形鉄器が副葬されている。鉄器は、剣1点、圭頭鏃1点、異形鉄器1点である。1148は鉄剣である。



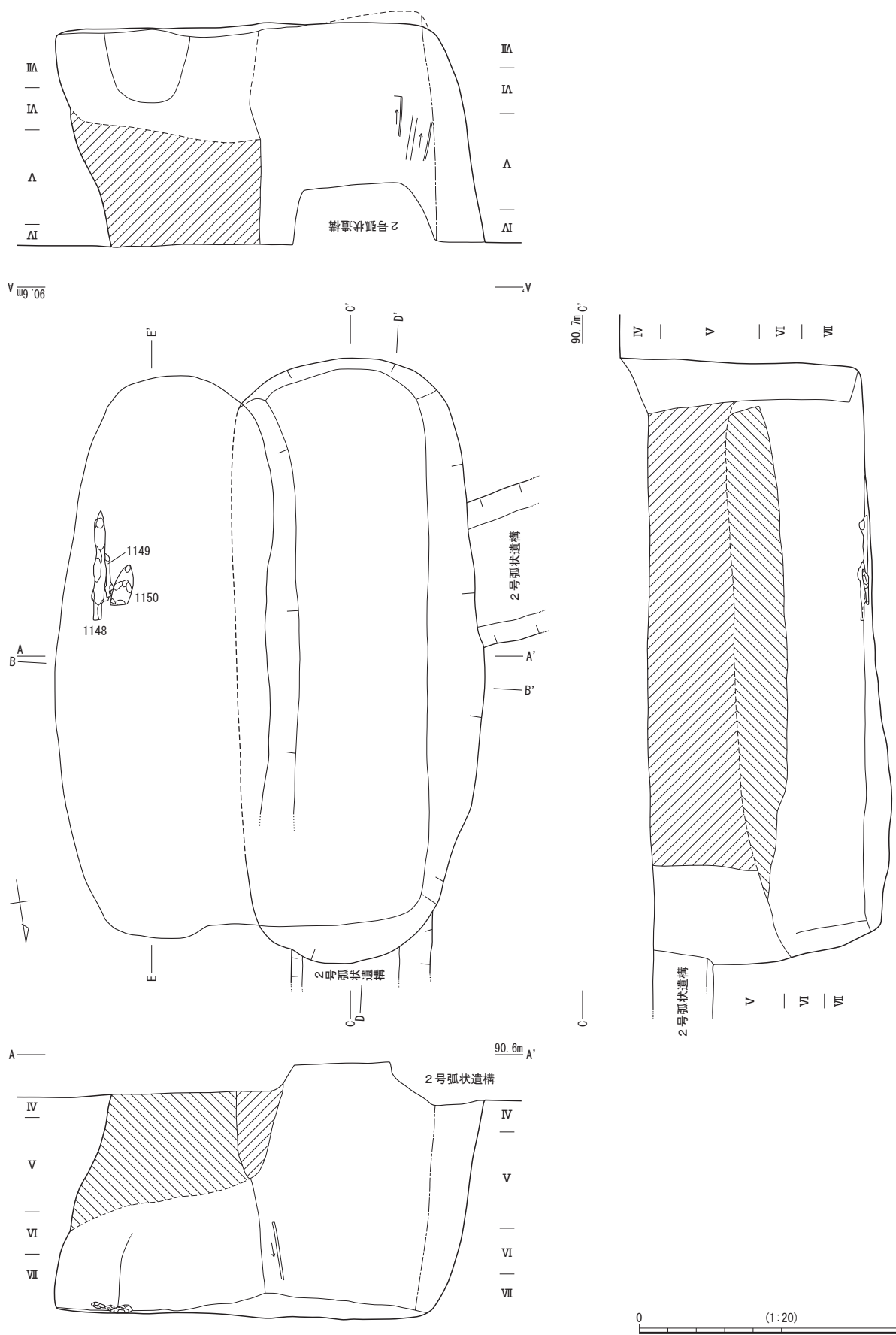
第155图 10号地下式横穴墓(1)

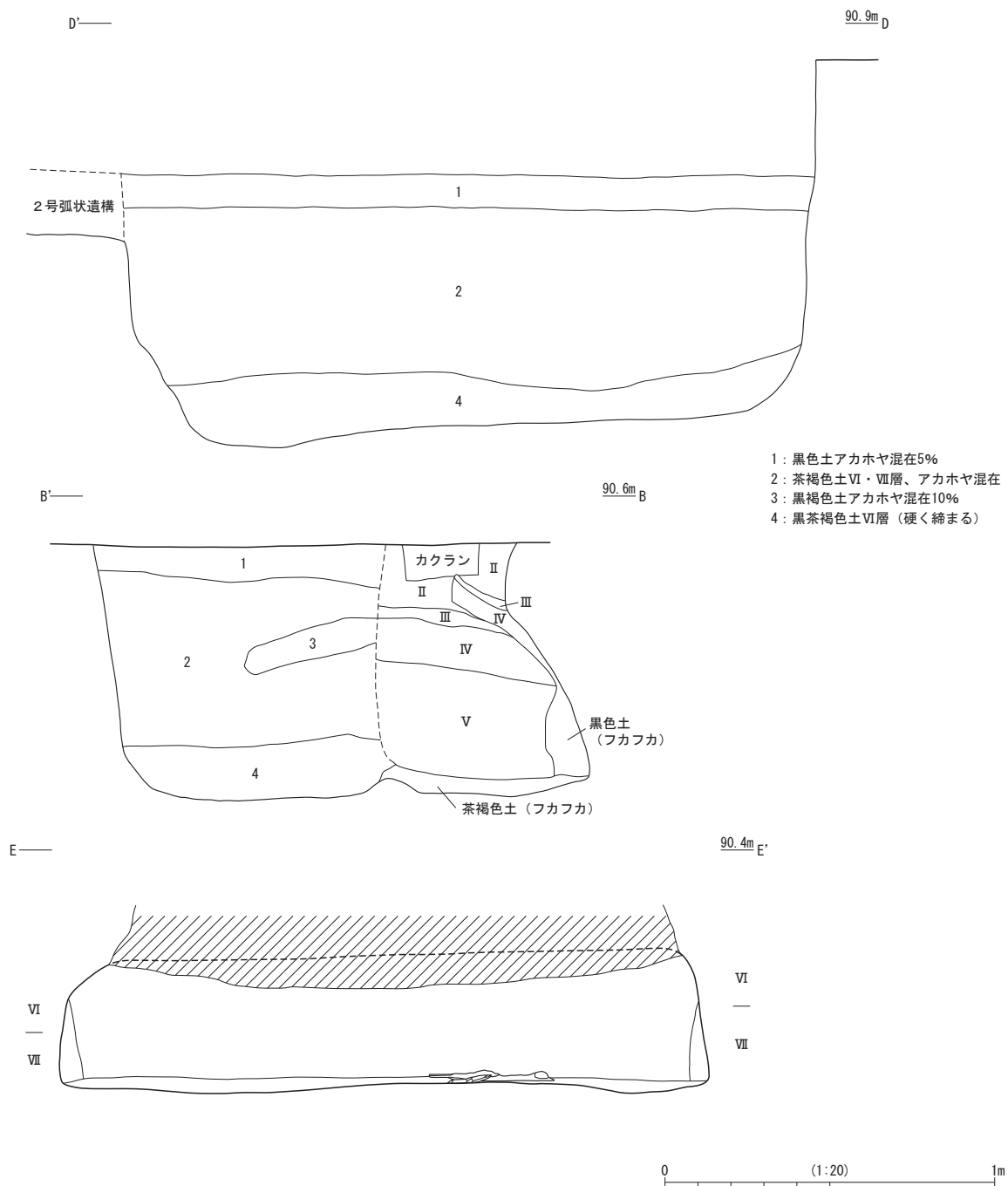


第156図 10号地下式横穴墓(2)



第158図 11号地下式横穴墓（2）

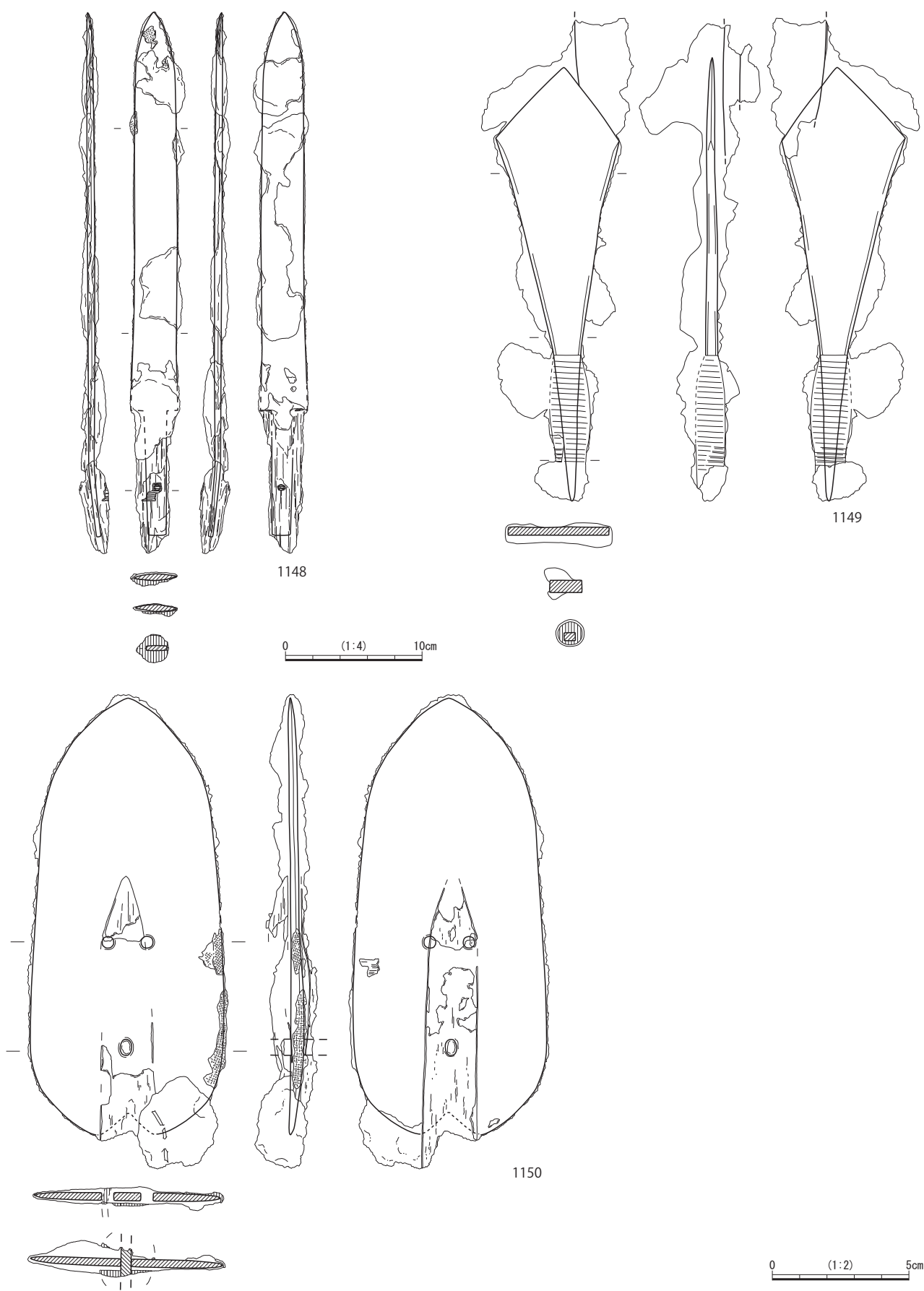




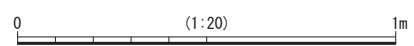
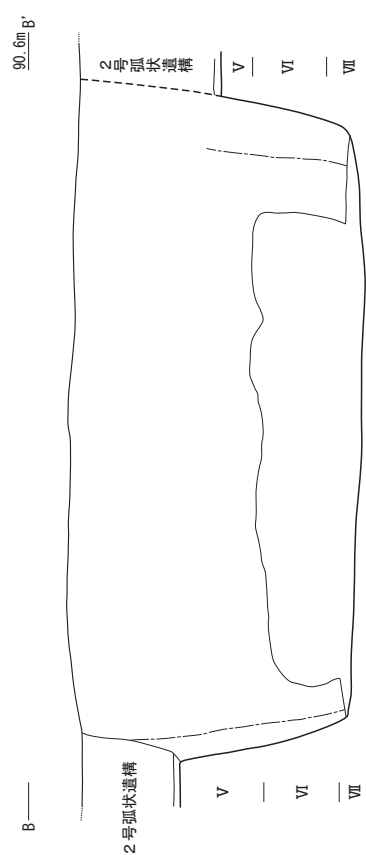
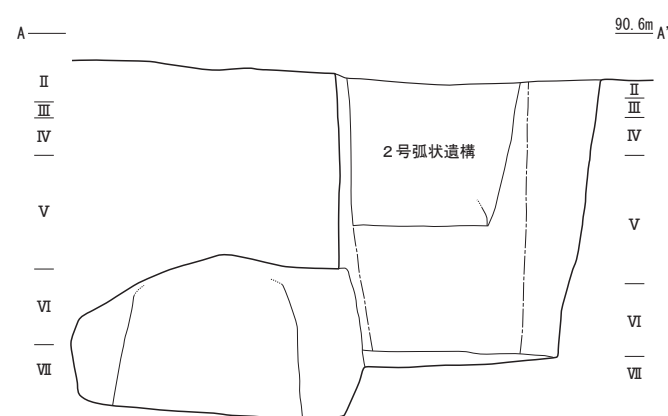
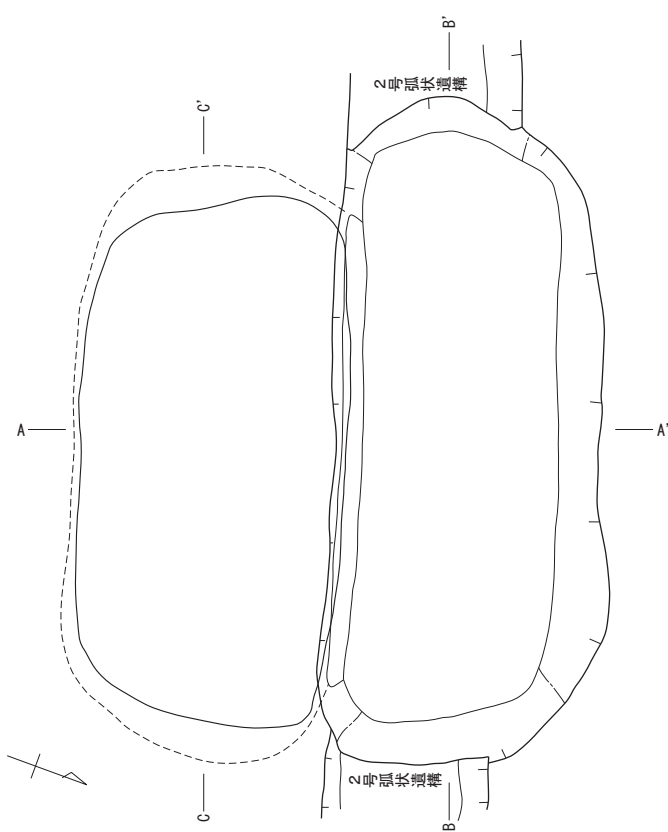
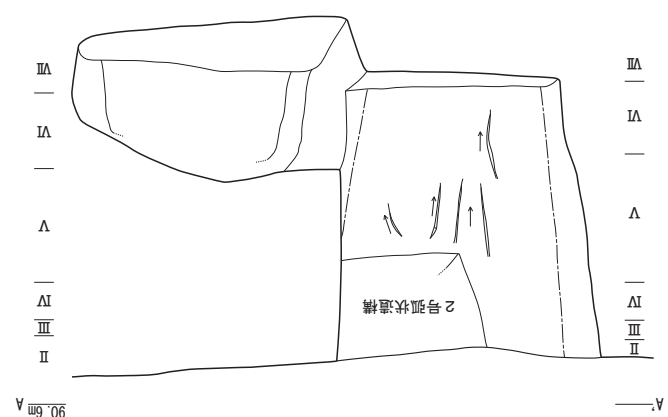
第160図 12号地下式横穴墓(2)

全長38.2cm, 刃部長14.7cm, 茎部長4.5cmを測る。刃部の断面は凸レンズ状を呈しているが、鑄は明瞭ではない。厚さは0.3～0.5cmである。刃部の幅は関部で3.4cm, 中位で3.2cm, 先端部近くで2.1cmと関部から先端部へと細くなっている。刃部最大幅は関部の3.4cmである。刃部の一部に銹化した平織布の痕跡が認められる。関部は左右対称で直角関を呈する。茎部の幅は最大幅が不明瞭であるが、おそらく1.7～1.3cmで厚さ0.5～0.35cmである。目釘穴は1孔で、関部から下方へ5.4cmの位置に径0.4cm

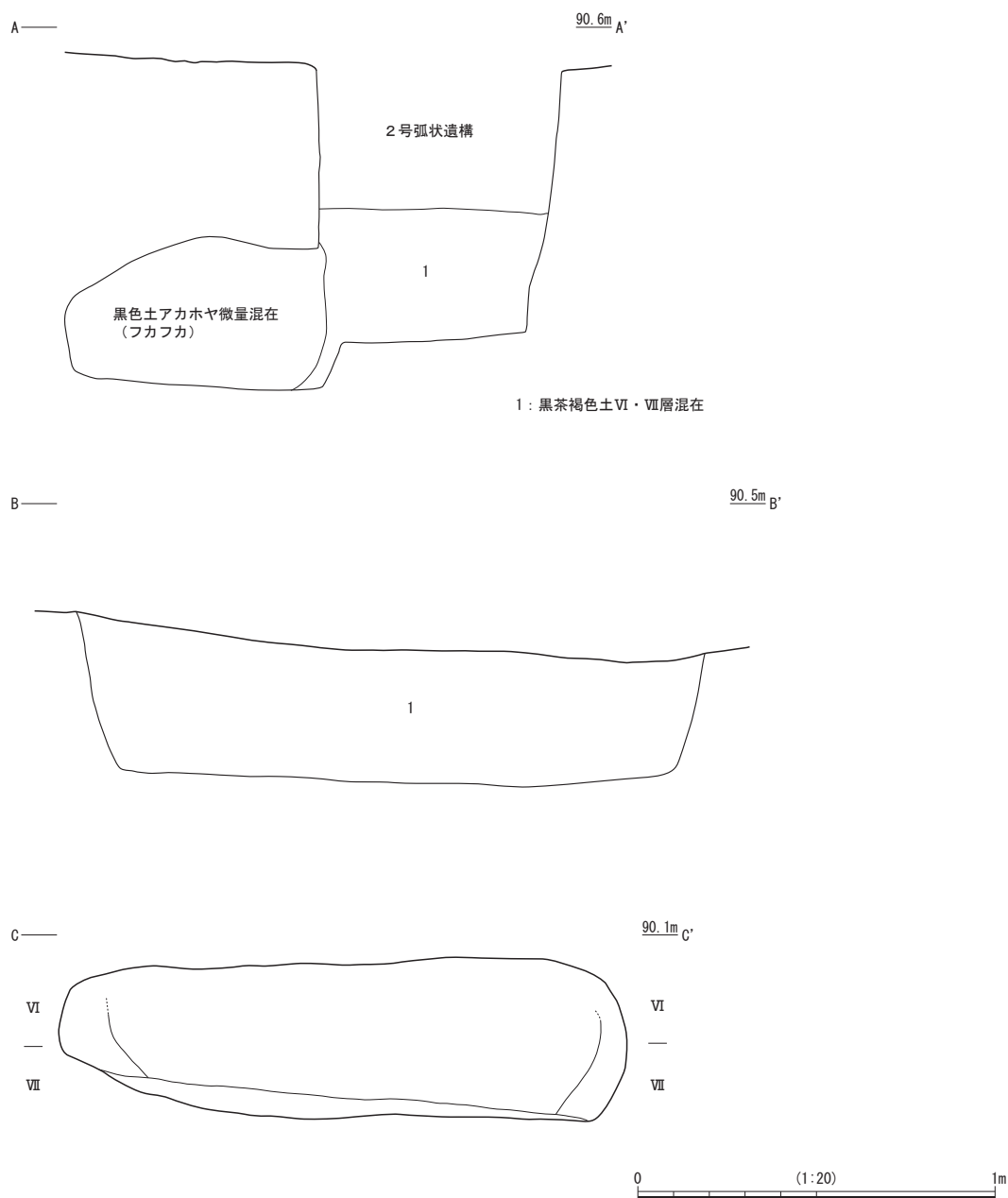
の孔が穿たれる。茎部に柄木が遺存するが形態は不明である。側面の一部にわずかに合わせ目が確認できることから、2枚合わせと考えられる。柄の一部に撚糸が確認できることから、1箇所の目釘と撚り糸による巻き上げによって固定されていたと考えられる。撚り糸の材質は状態が悪く不明である。1149は圭頭鎌である。全長15.8cm, 刃部幅4.5cmと大型である。刃部先端に銹塊が付着しており、刃部断面形が不明であるが、おそらく平造りと考えられる。先端に鉄剣の破片が付着する。



第161图 12号地下式横穴墓副葬品



第162図 13号地下式横穴墓(1)



第163図 13号地下式横穴墓（2）

1150は異形鉄器である。全長16.0cm、最大幅7.1cmと大型である。ふくらを持ち、全体的に丸みがあった形態をしている。縁部はすべて刃部を造っており、断面形は平造である。根挟は先端を三角形に加工している。根挟下の形態は明瞭ではないものの、X線写真の観察により逆V字状と推定した。穿孔が3孔あり、ほぼ中心に根挟を挟んで2孔、そこから3.3cm下の根挟み下に1孔施されている。中心の2孔は直径0.45cmで、紐状のものがわずかに付着している。下側の1孔は縦0.6cm、横0.4cmの楕円形を呈し、鉄製の釘が確認できる。よっ

て、上側2孔は紐状のものを通し、下側1孔は目釘状のもので根挟を固定していたと考えられる。表面から側面にかけて布の痕跡があることや、側面の布が鏃身にそって布目が変化していることから、布を巻いたような状態で副葬したと考えられる。鹿児島県指宿市山川町成川の成川遺跡で、先端部分が欠損しているものの類似したものが出土している。

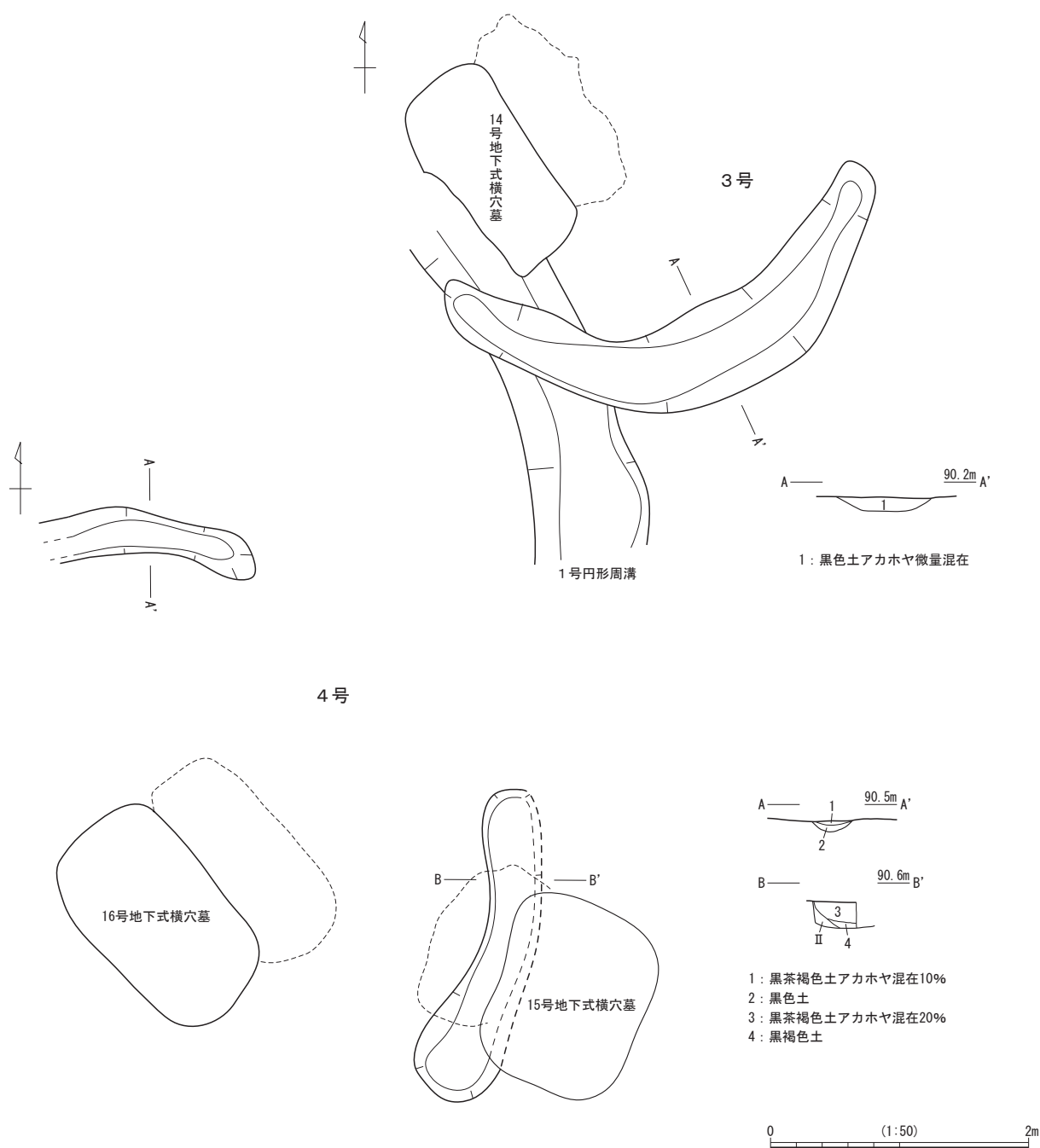
13号地下式横穴墓は、1-②-cである。羨門の直下から段落ちで玄室へ続くものである。

⑦ 3号弧状遺構・14号地下式横穴墓（第164図～第166図）

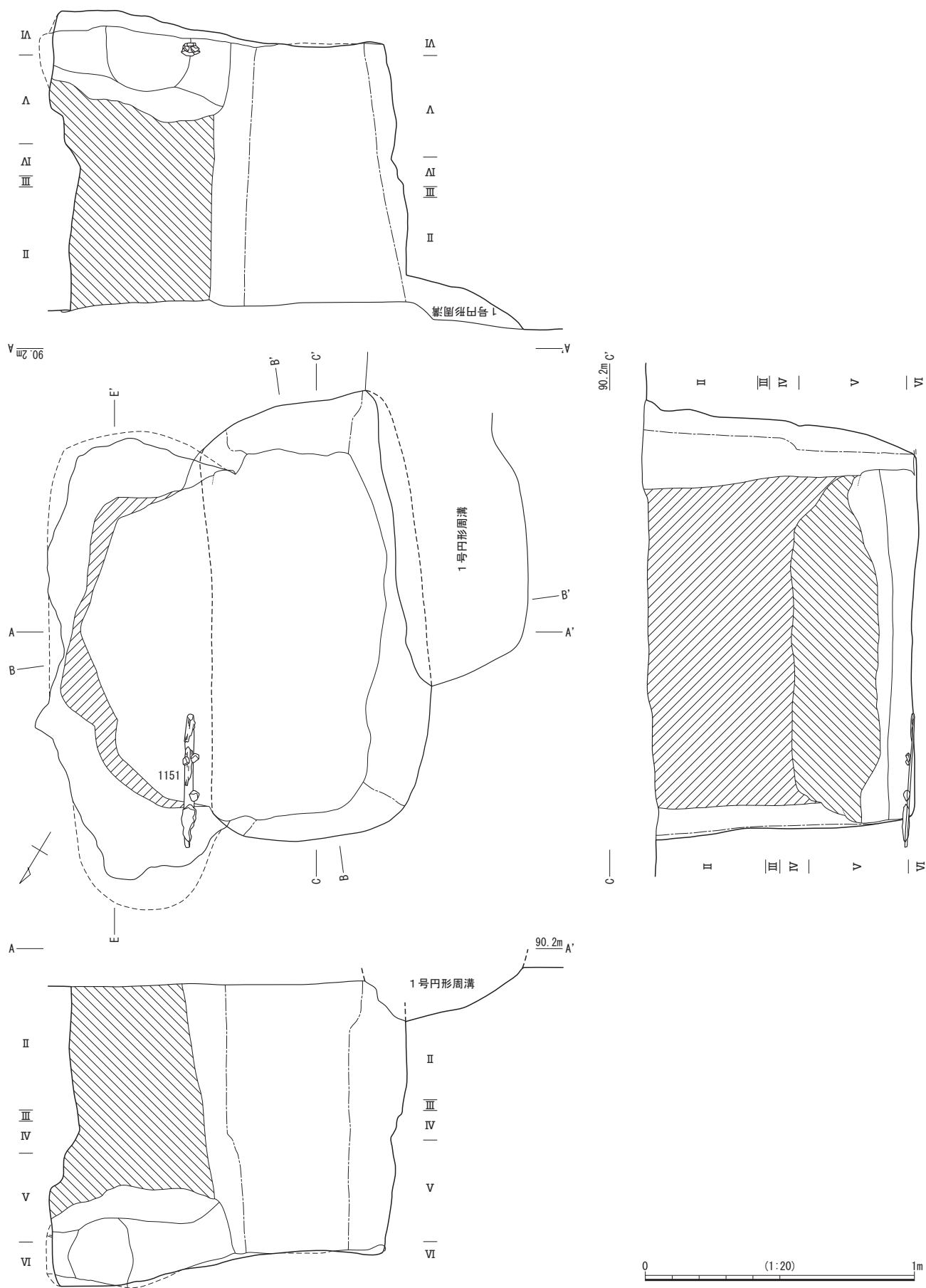
I-23区において検出される。長さ3.5m、溝幅0.4～0.7m、深さ0.1mの弧状を呈するものである。1号円形周溝墓を切った状態で検出され、弧のほぼ中央に14号地下式横穴墓が存在する。

14号地下式横穴墓は、2-①-a類である。玄室の羨門部寄りに剣1点が副葬してある。1151は全長47.9cmの鉄剣である。刃部36.1cm、茎部9.8cmである。刃部の断面は薄い凸レンズ状を呈しているが鎬は明瞭ではな

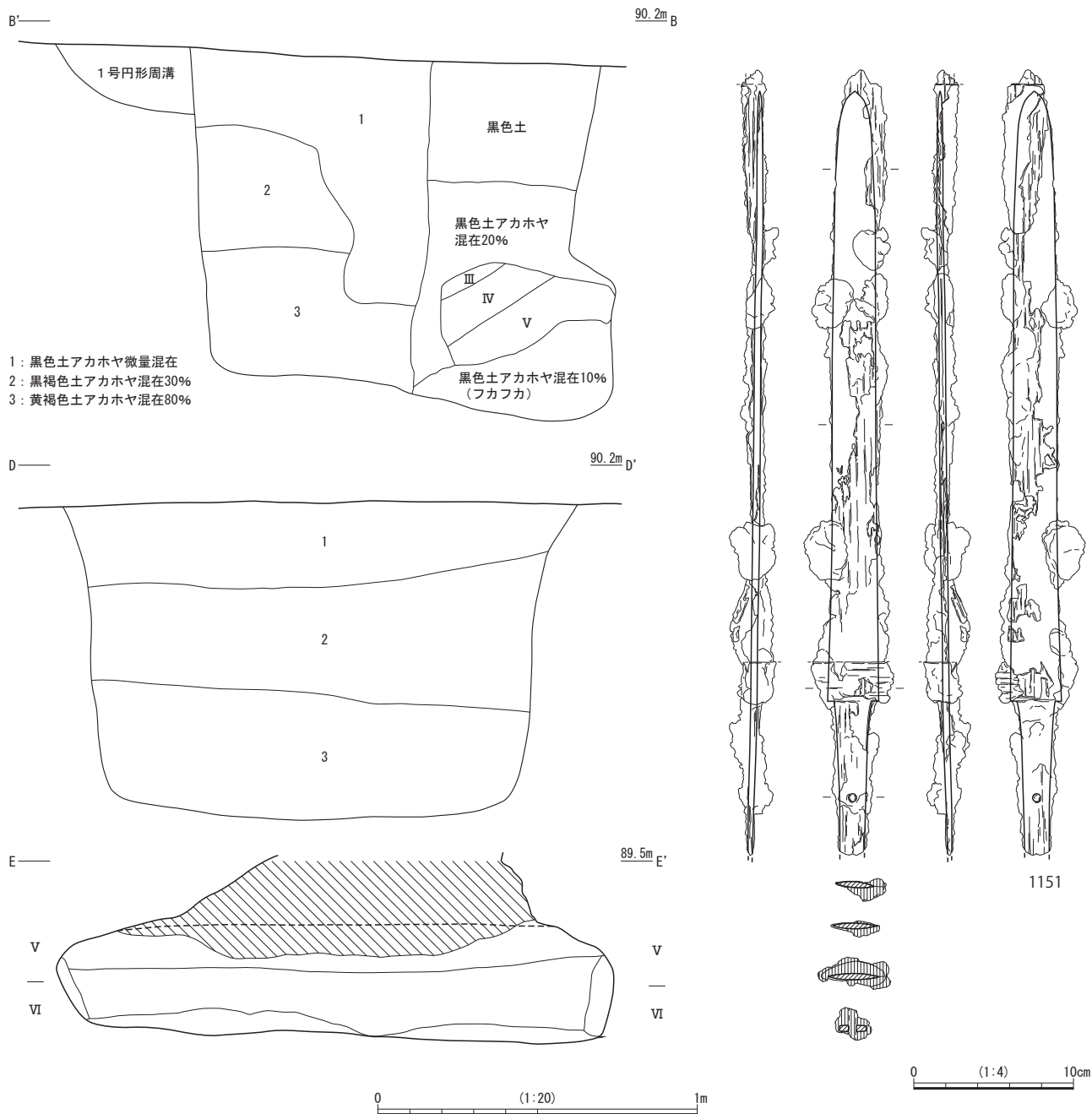
い。厚さは0.3～0.5cmである。刃部の幅は関部で3.2cm、中位で2.8cm、先端部近くで2～1cmと関部から先端部へと細くなっている。関部は左右対称で直角関を呈する。茎部の幅は1.5～2.3cmで厚さ0.3cmである。目釘穴は1孔で関部から下方へ5.8cmの位置に径0.4cmの孔が穿たれる。関部から上方へ2.4cmの幅が鞆口で木製である。刃部の鞆は木製であるが、一部樹皮巻きの痕跡が認められる。科学分析の結果、布・皮革が観察され、柄木から採取された木片はカエデ属でイタヤカエデの可能性が高いと考えられている。



第164図 3号・4号弧状遺構



第165图 14号地下式横穴墓(1)



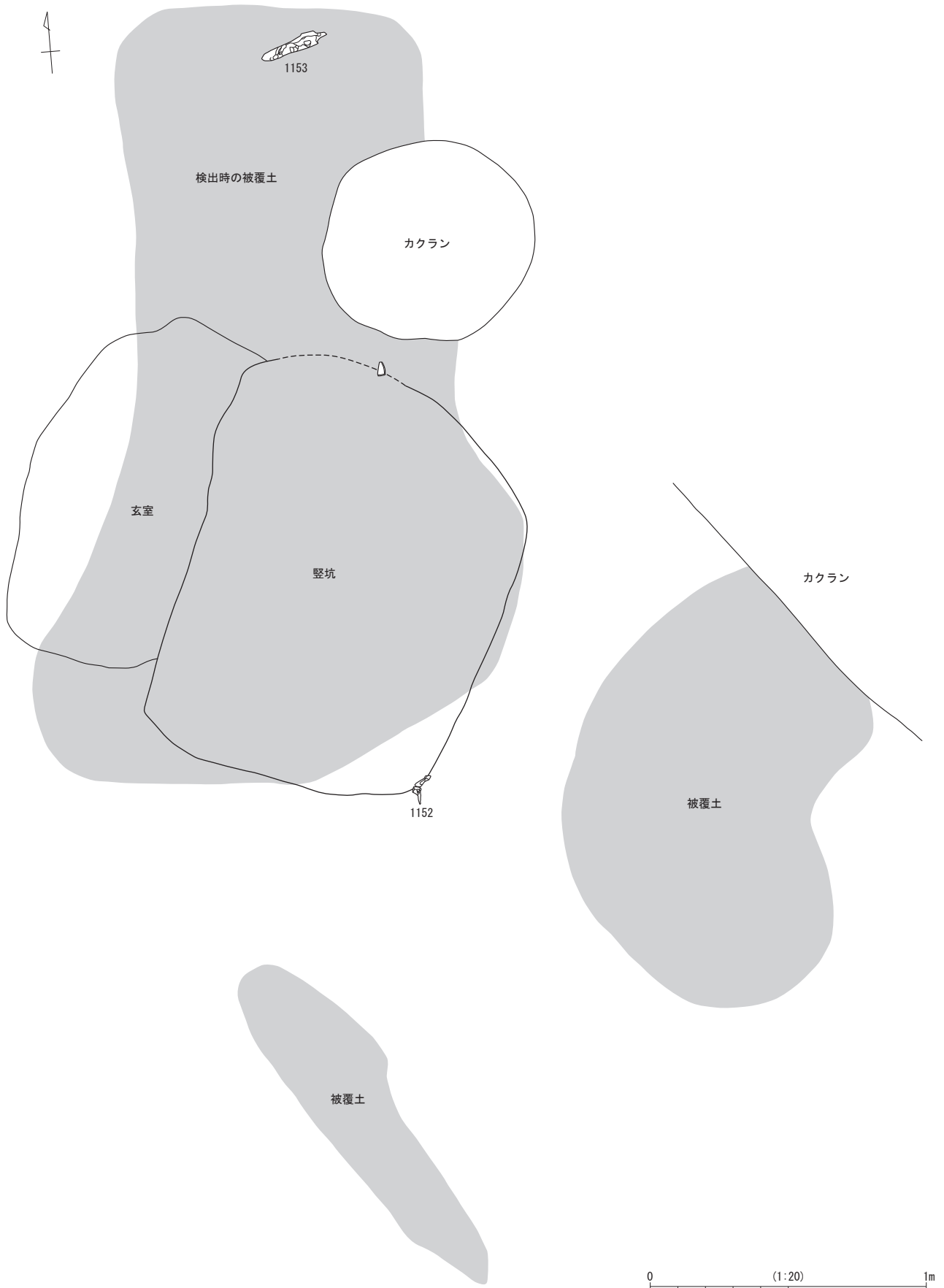
第166図 14号地下式横穴墓(2)・副葬品

⑧ 4号弧状遺構・15号・16号地下式横穴墓(第164図・第167図～第171図)

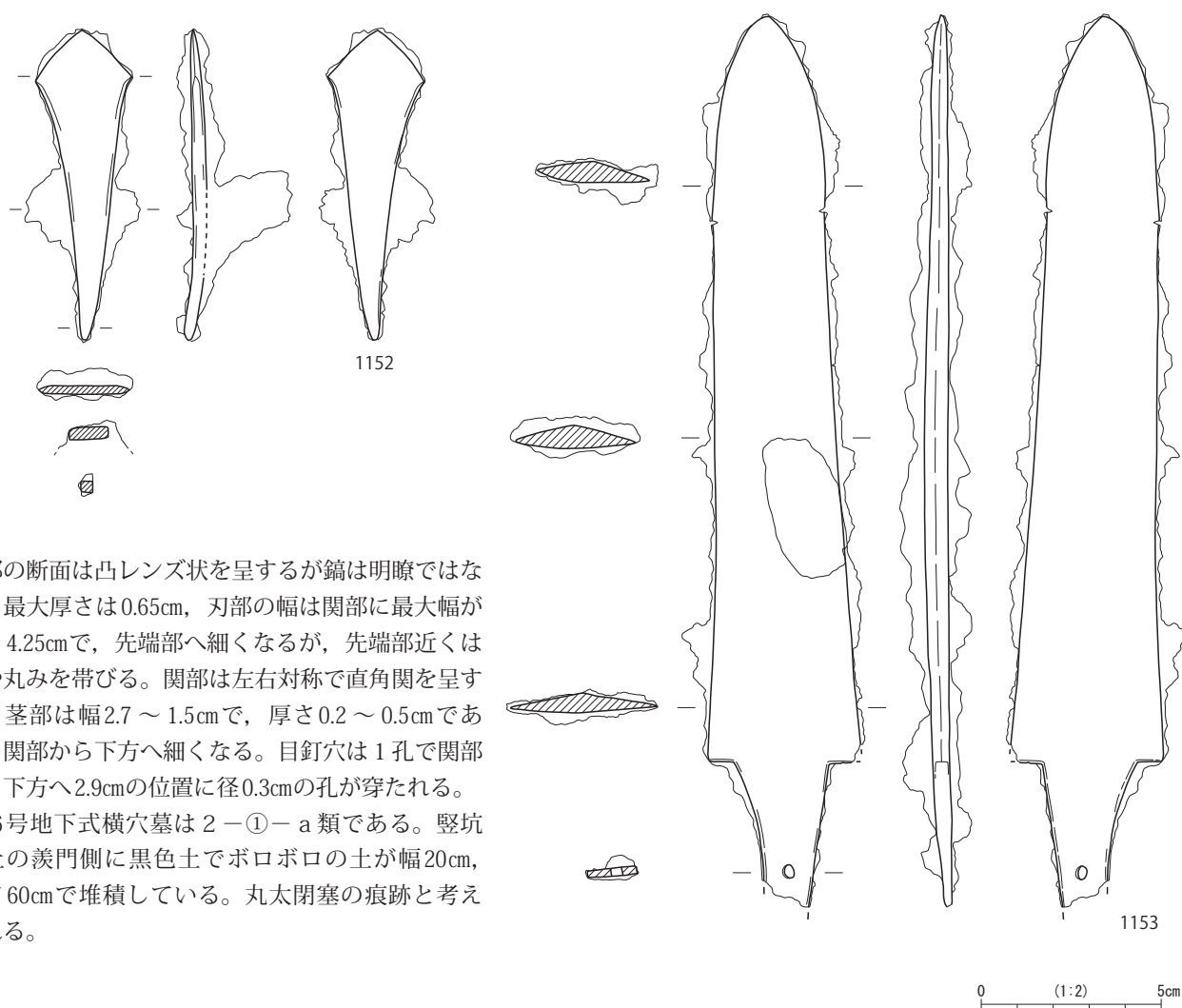
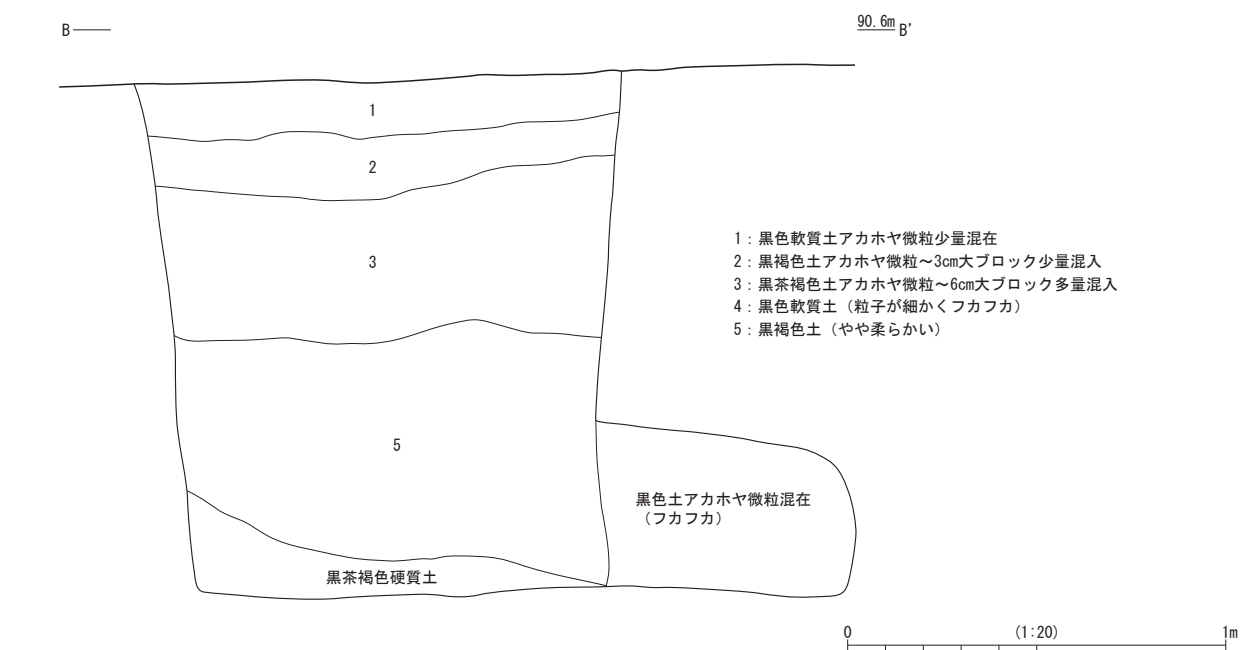
G-22区において検出される。東西1.8m, 溝幅0.3m, 深さ0.1mの溝と南北2.5m, 溝幅0.5m, 深さ0.1mの溝の2条の溝で構成されている。弧の中央部に16号地下式横穴墓が存在し, 南北溝を切った状態で15号地下式横穴墓が検出される。

15号地下式横穴墓は, 検出面においてアカホヤブロックや池田降下軽石の混在した部分が見られた。これは15号地下式横穴墓を造った時に掘り上げられたもので

被覆土と考えたい。また, 竪坑上部の被覆土には剣と鉄鏃が置かれていた。15号地下式横穴墓へ供献されたものと思われる。分類としては1-①-aである。竪坑の羨門側に片方であるが挟りが見られ丸太閉塞の痕跡と思われる。1152は圭頭鏃で残存長8.5cm, 刃部幅2.6cmである。関が明瞭で無く鏃身が緩やかに湾曲してすばまるナデ関ものである。茎部を含めて鏃身長は8.5cmである。厚さは刃部の最大幅の位置で0.2cm, 茎部先端部で0.3cmである。1153は残存長24.75cmの鉄剣である。刃部は20.75cm, 茎部は一部欠損しているが残存長4cmである。



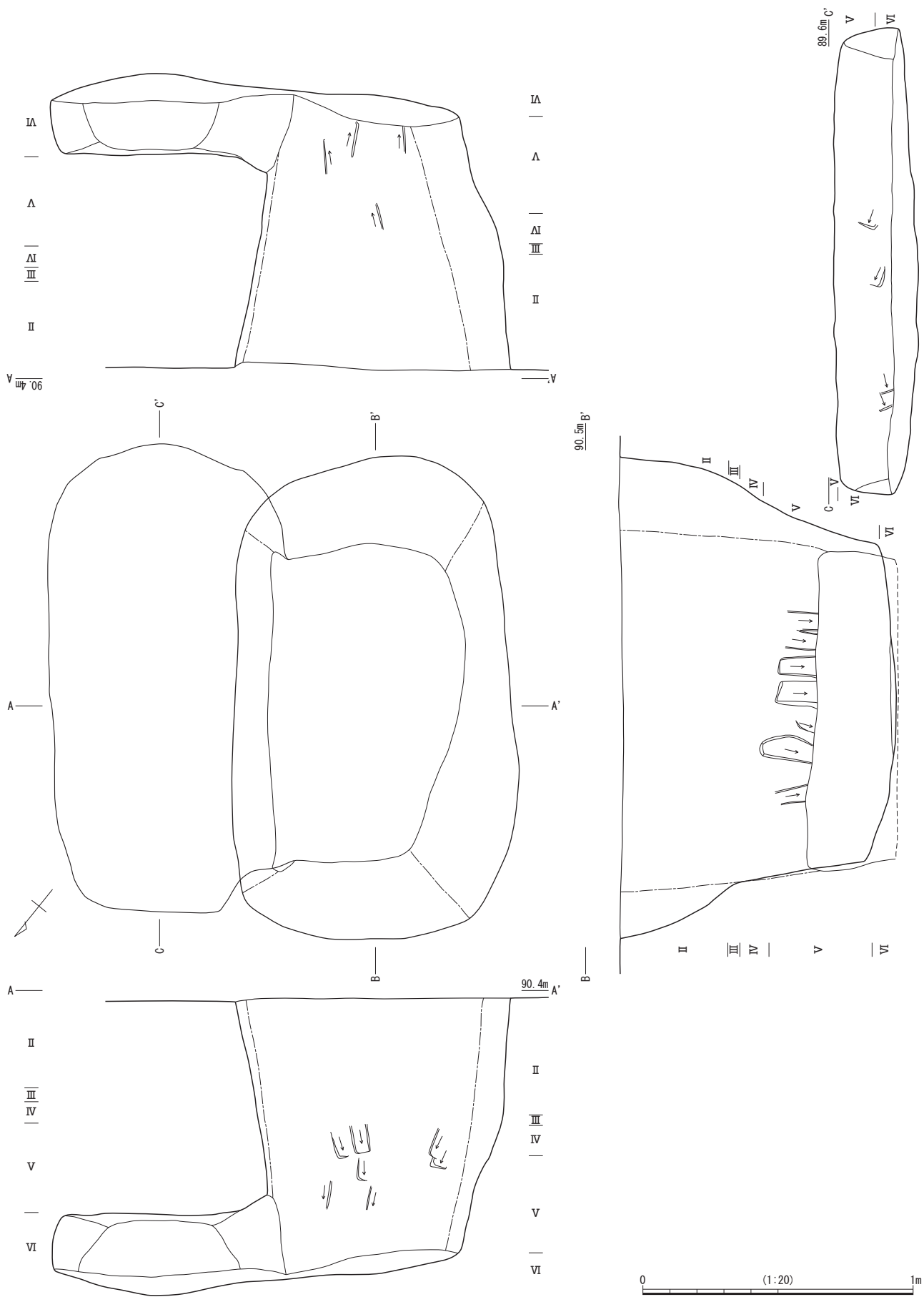
第167図 15号地下式横穴墓(1)



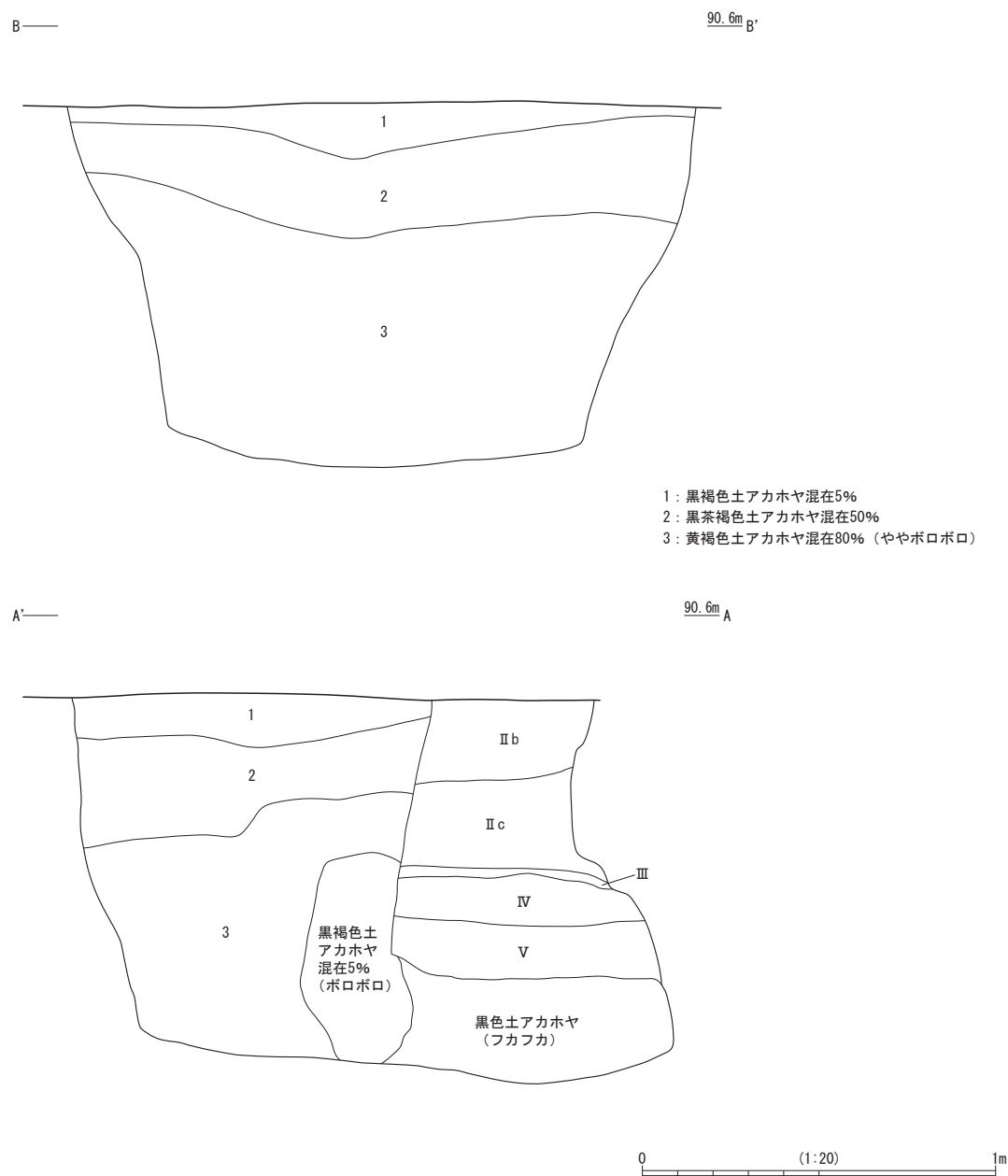
刃部の断面は凸レンズ状を呈するが鑄は明瞭ではない。最大厚さは0.65cm、刃部の幅は関部に最大幅があり4.25cmで、先端部へ細くなるが、先端部近くはやや丸みを帯びる。関部は左右対称で直角関を呈する。茎部は幅2.7～1.5cmで、厚さ0.2～0.5cmである。関部から下方へ細くなる。目釘穴は1孔で関部から下方へ2.9cmの位置に径0.3cmの孔が穿たれる。

16号地下式横穴墓は2-①-a類である。竪坑埋土の羨門側に黒色土でボロボロの土が幅20cm、高さ60cmで堆積している。丸太閉塞の痕跡と考えられる。

第169図 15号地下式横穴墓（3）・副葬品



第170图 16号地下式横穴墓(1)



第171図 16号地下式横穴墓 (2)

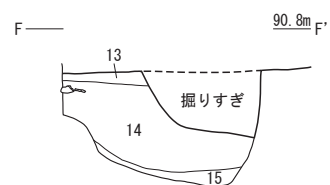
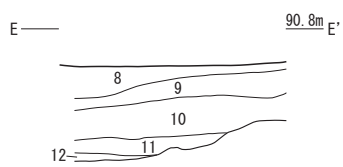
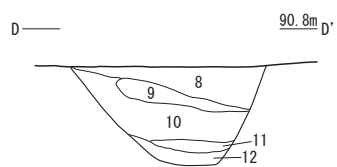
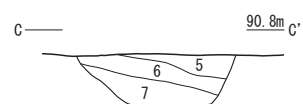
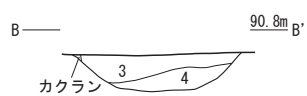
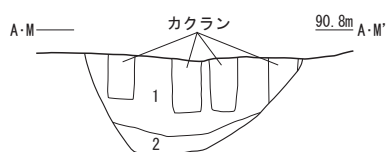
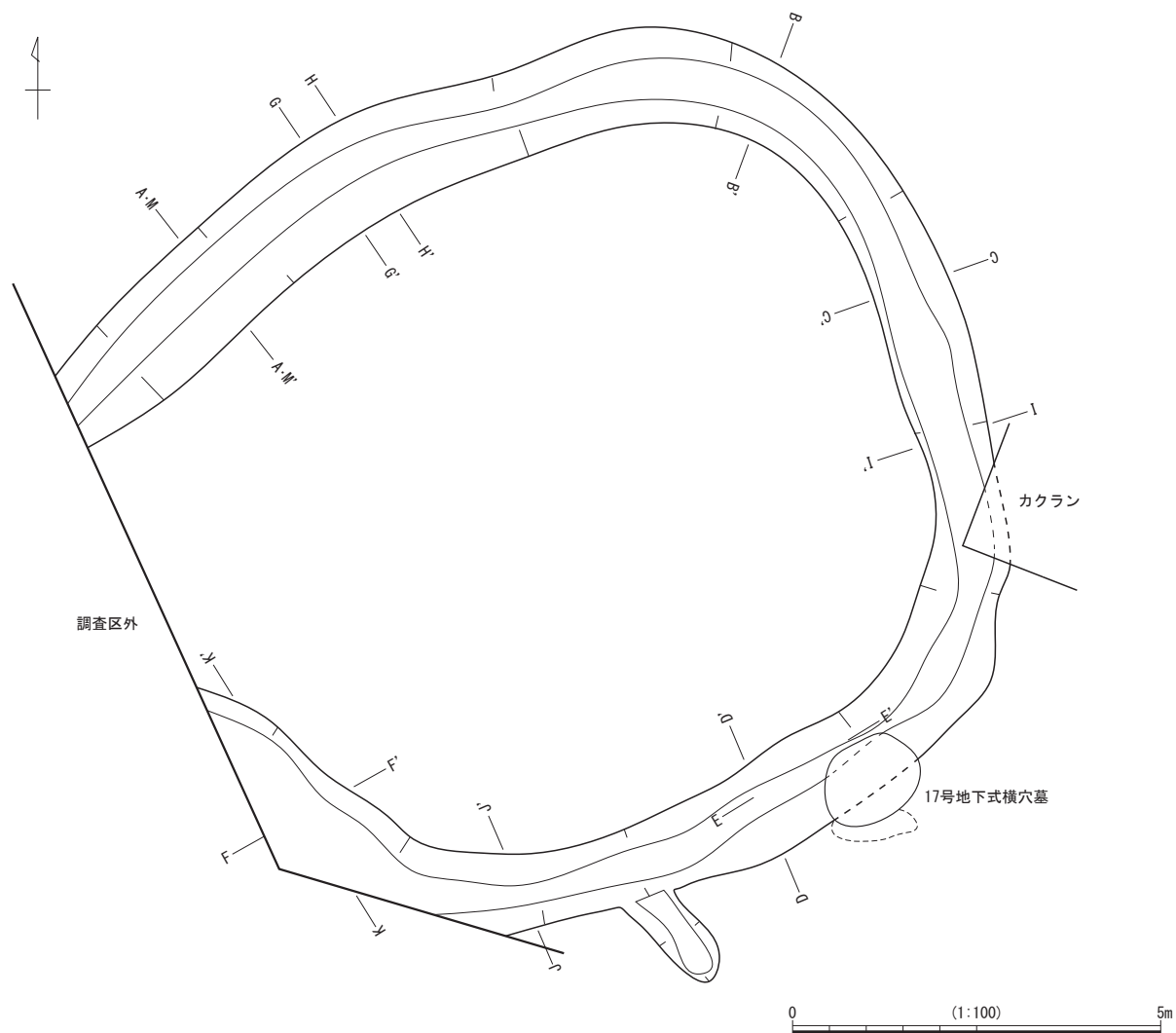
ウ 溝状遺構・地下式横穴墓

⑨ 1号溝状遺構・17号地下式横穴墓 (第172図～第178図)

H・I-19・20区に於いて検出されるが、西側には市道があるため今回の調査では一部調査区外とした。12m×13m (推定) の隅丸方形状を呈しているものと考えられる。溝幅は1～1.5m、深さ1.2mであるが、検出面がアカホヤ火山灰層の部分もあり現況では浅く検出される所もある。溝内には土器片が集中している所や、完形に近い土器等数多く出土している。また、

17号地下式横穴墓は竪坑が溝を切って造られており、掘り出した土が溝内に堆積している状況も観察できる。

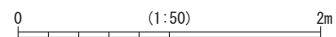
1号溝状遺構からは、壺形土器5点、高坏1点、砥石2点が出土している。1154は小型の壺形土器である。口縁部径9.6cm、器高10.8cmを測る。わずかに平らな底部から胴部は球形状に膨らみ頸部でしまる。口縁部はわずかに内湾気味に外反し、端部は丸くおさめる。外面は一部ヘラミガキで、大半はナデである。壺の内部には赤色顔料 (丹) が入れている。1155は頸部と口縁部の中間



- 1: 黒色土
- 2: 黄褐色土アカホヤ微粒混在
- 3: 黒色土
- 4: 黄褐色土アカホヤ
- 5: 黒色土
- 6: 黒褐色土アカホヤ少量混在

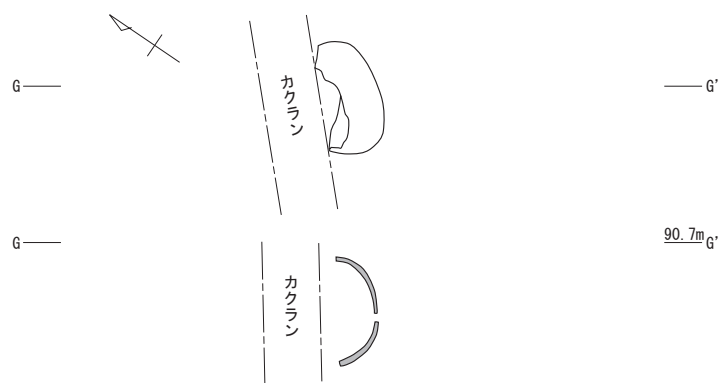
- 7: 黒色土
- 8: 黒色土
- 9: 茶褐色土アカホヤ、VI層ブロック混在
(17号地下式横穴墓の被覆土)
- 10: 黒色土
- 11: 黒茶褐色土アカホヤ少量混在

- 12: 黒色土アカホヤブロック混在
- 13: 灰黒色土硬い(紫コラ?)
- 14: 黒色土
- 15: 黒褐色土アカホヤ微粒混在

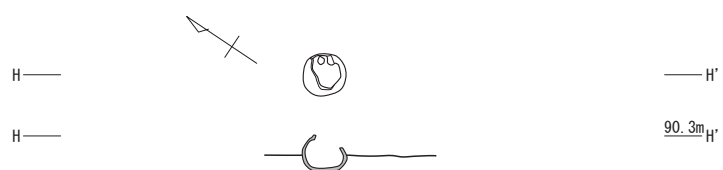


第172図 1号溝状遺構

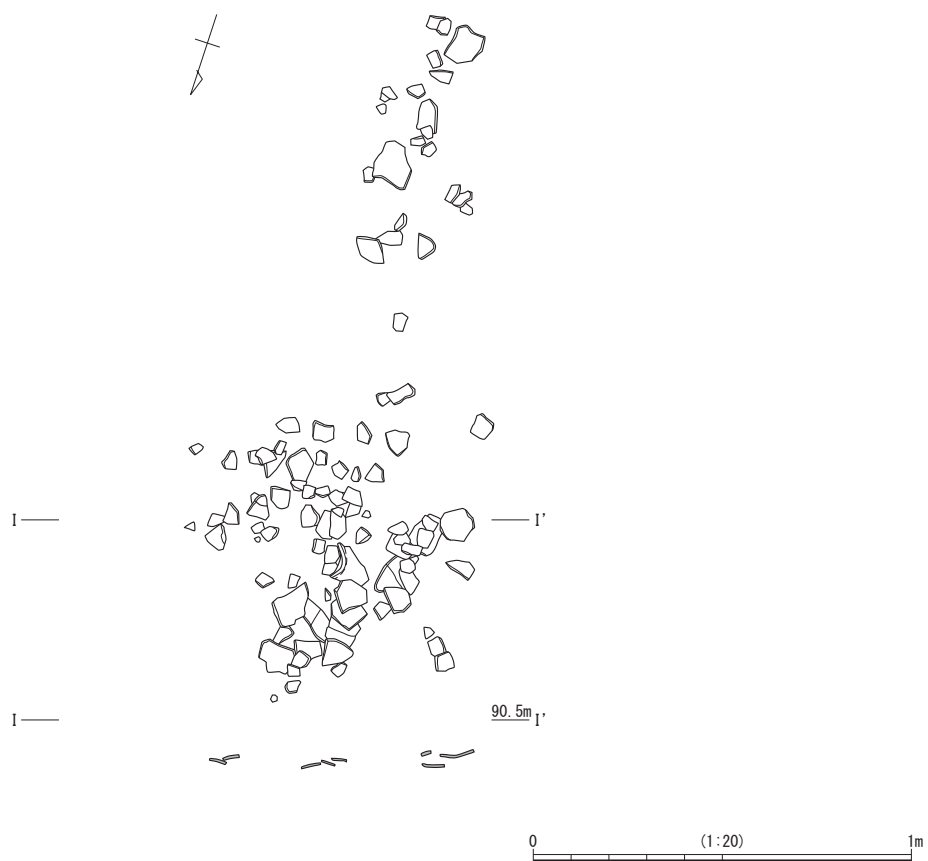
1158出土状況



1154出土状況

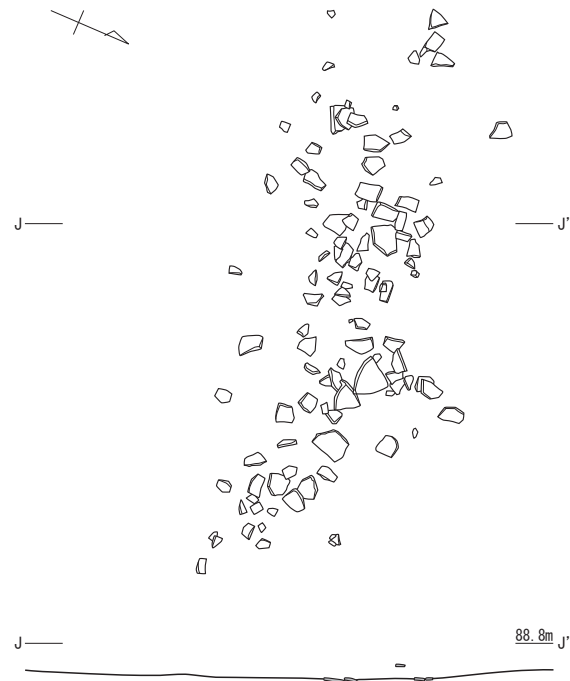


1157出土状況



第173図 1号溝状遺構内遺物出土状況(1)

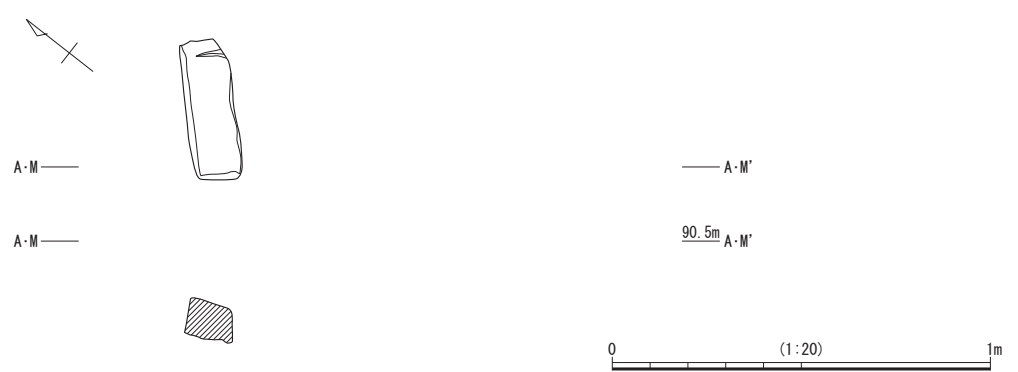
1159出土状況



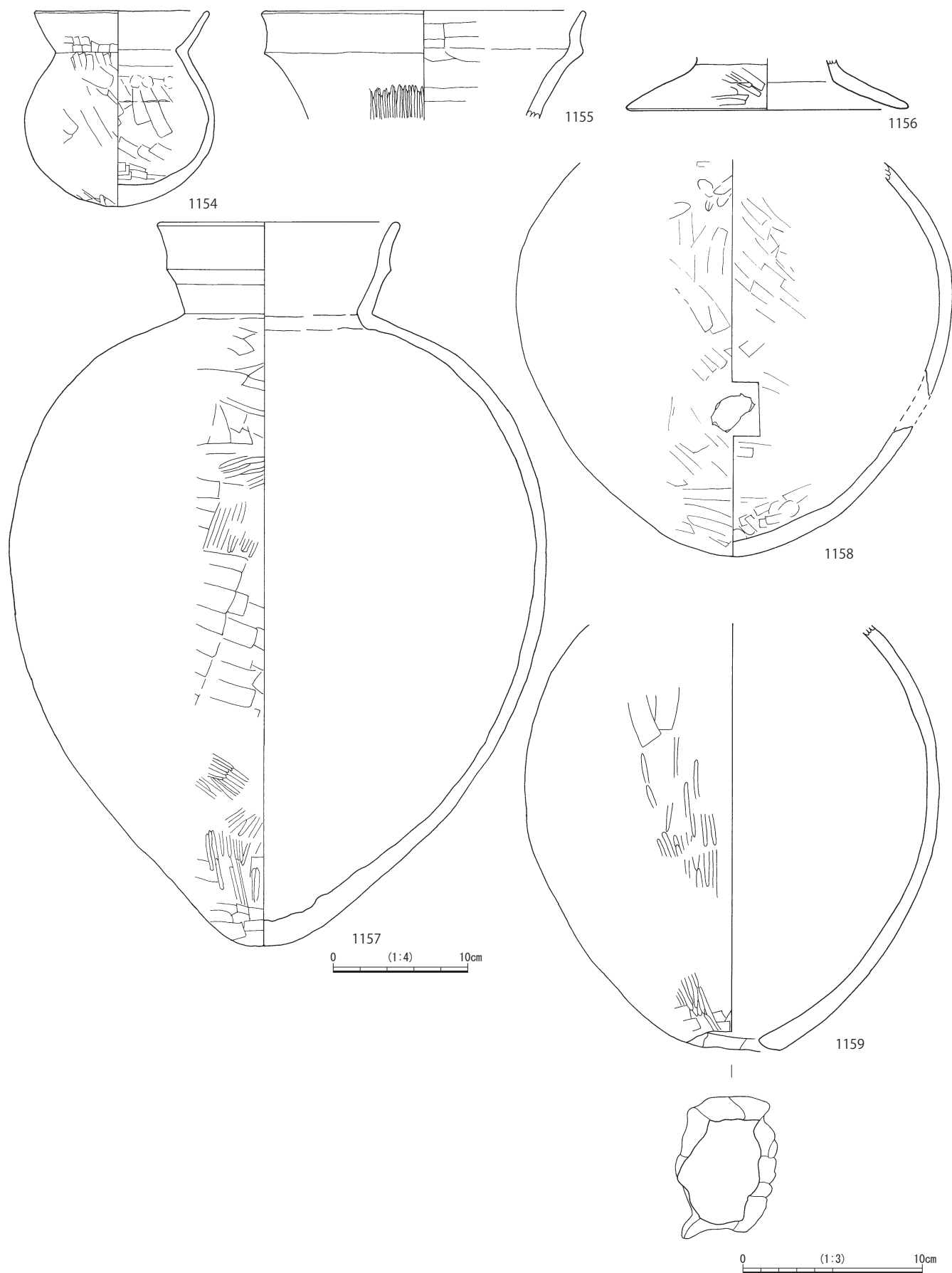
1155出土状況



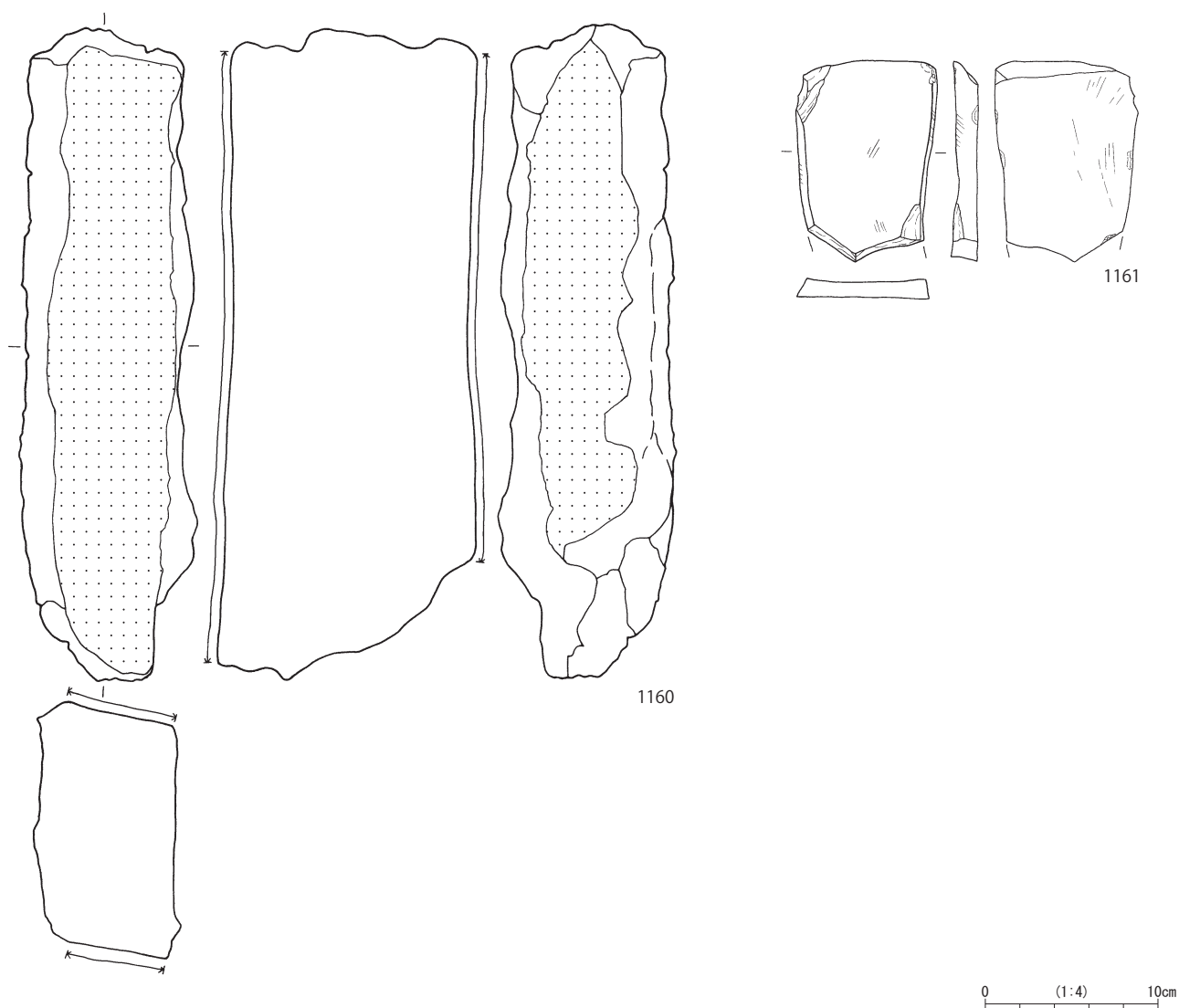
1160出土状況



第174図 1号溝状遺構内遺物出土状況(2)



第175図 1号溝状遺構出土土器

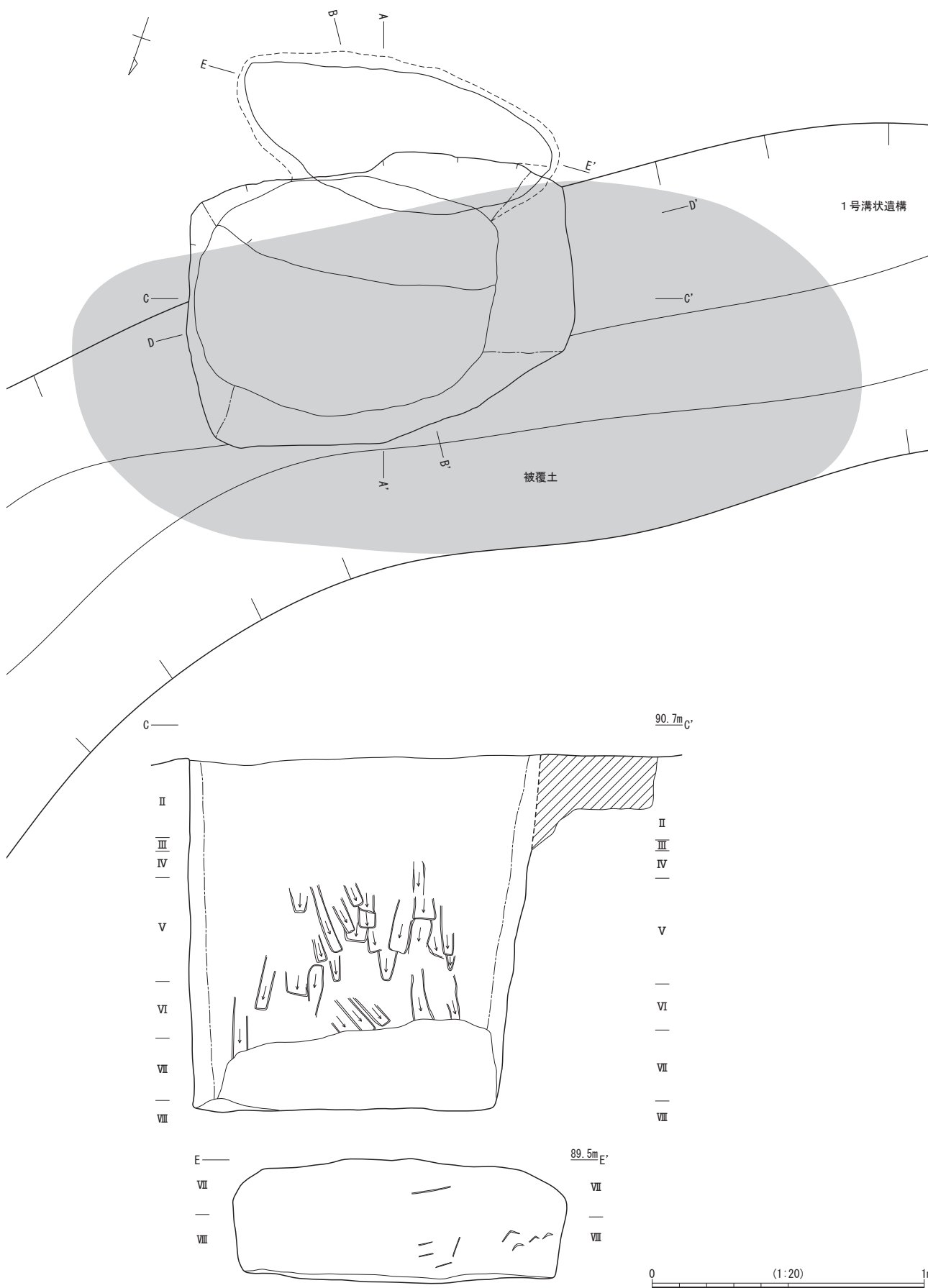


第176図 1号溝状遺構出土石器

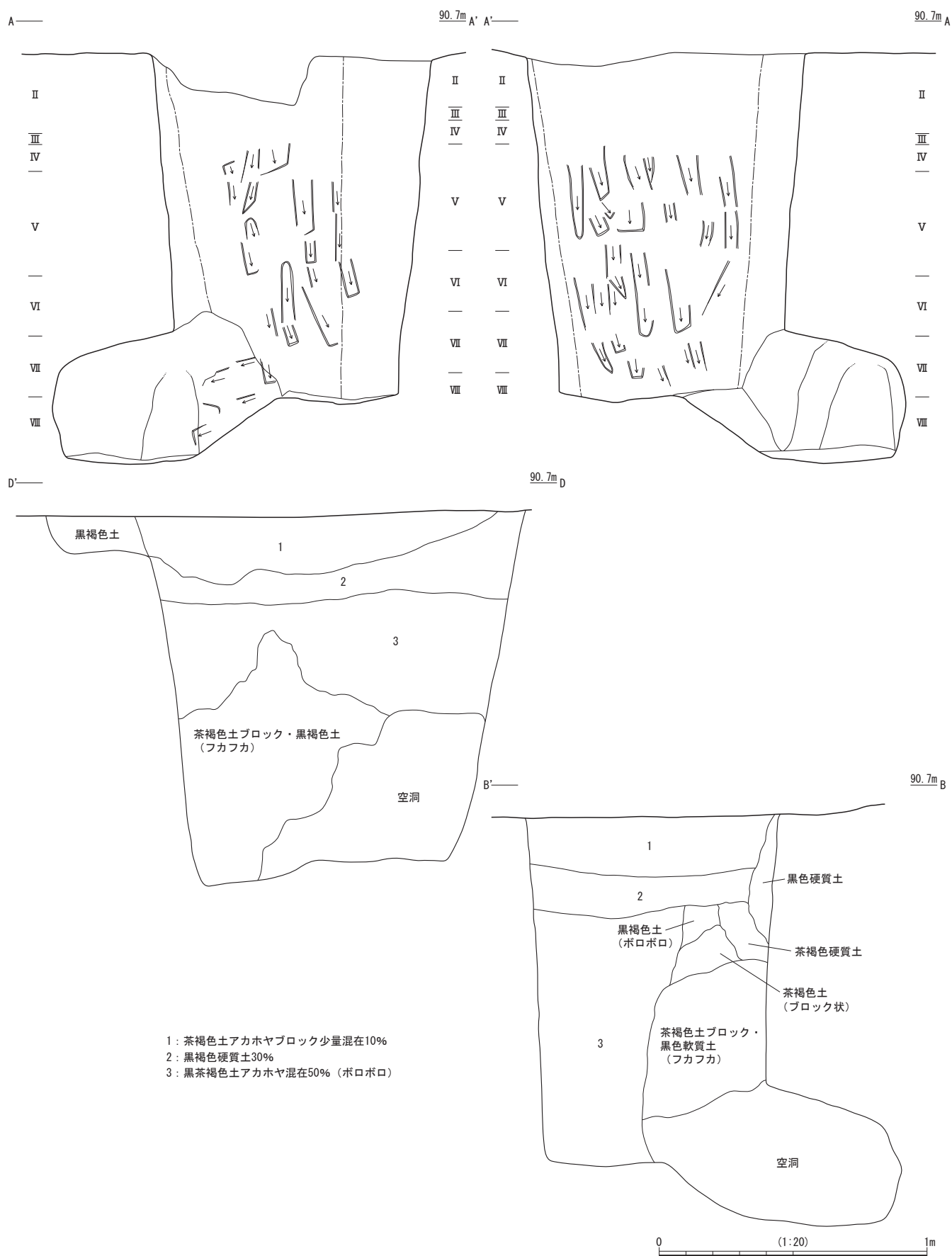
に屈曲部を有する二重口縁壺である。口縁部径17.4cmを測る。屈曲部はシャープで、口縁部は反り気味に立ち上がる。屈曲部の上下はナデ、頸部は縦方向のヘラミガキである。1156は高坏の脚部である。筒状と思われる脚柱から屈曲して裾部へと広がるもので、裾部の径は15.6cm。外面は斜め方向のヘラミガキである。1157～1159は壺形土器である。1157は口縁部径18cm、器高53.4cmを測る。胴部の最大径は中位よりやや上にあり39.8cmである。頸部と口縁部の間に屈曲部を有する二重口縁壺である。口縁部は屈曲部からやや反り気味に外反する。1158は頸部・口縁部を欠損する。胴部は球形状に膨らみ最大径は32.3cm。底部から上方へ9cmの位置に2×3.3cmの穿孔が見られる。穿孔は外側からの打撃によるものと思われる。1159も頸部・口縁部を欠損するものである。胴部はあまり膨らまず、最大径は29.4cmである。底部に5×7cmの穿孔が見られる。穿孔は外側

からの打撃によるものと思われる。1160・1161は砥石である。1160は安山岩で、現存部分で長さ37.5cm、幅10cm、厚さ15cmである。作業面は上下両面で幅約7cmである。上面はよく磨られているが、下面はさほど磨られていない。1161は粘板岩で現存部分で長さ8.6cm、幅5.8cm、厚さ0.9cmである。上面・下面共に使い込まれたつるつるしている。上面はわずかに凹んでいる。また、側面にも擦痕が認められる。

17号地下式横穴墓は1-②-c類である。玄室は竪坑と平行にはならず、やや斜めに造られている。玄室は竪坑の途中から斜めに掘り込まれている。竪坑埋土の羨門側では軟質土でフカフカした状態であり、玄室は空洞が残されていた。丸太材による閉塞が考えられる。また、竪坑の壁面には細長い工具痕が明瞭に残されている。



第177図 17号地下式横穴墓(1)



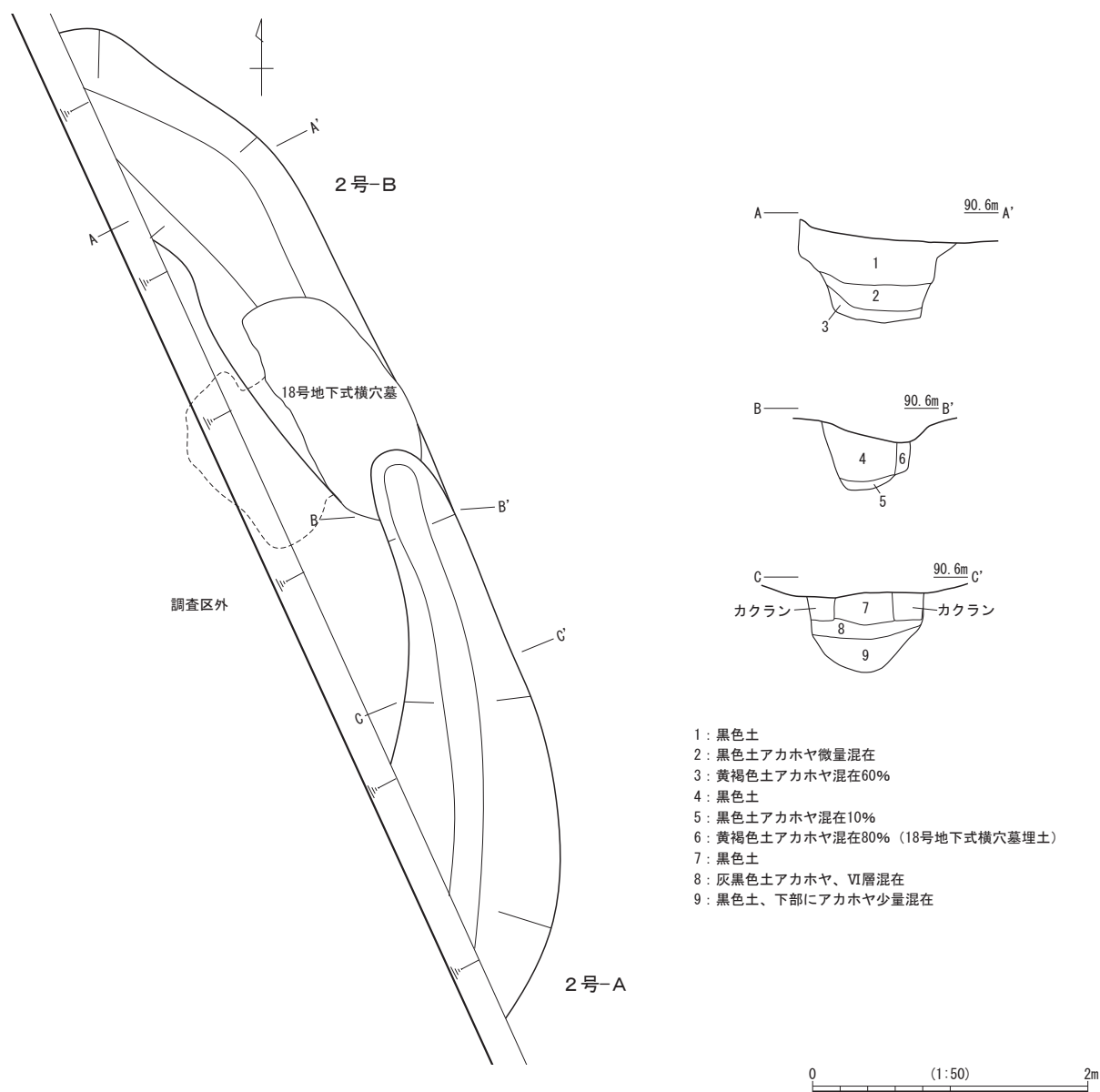
第178図 17号地下式横穴墓(2)

⑩ 2号-A・B溝状遺構，18号地下式横穴墓（第179図～第181図）

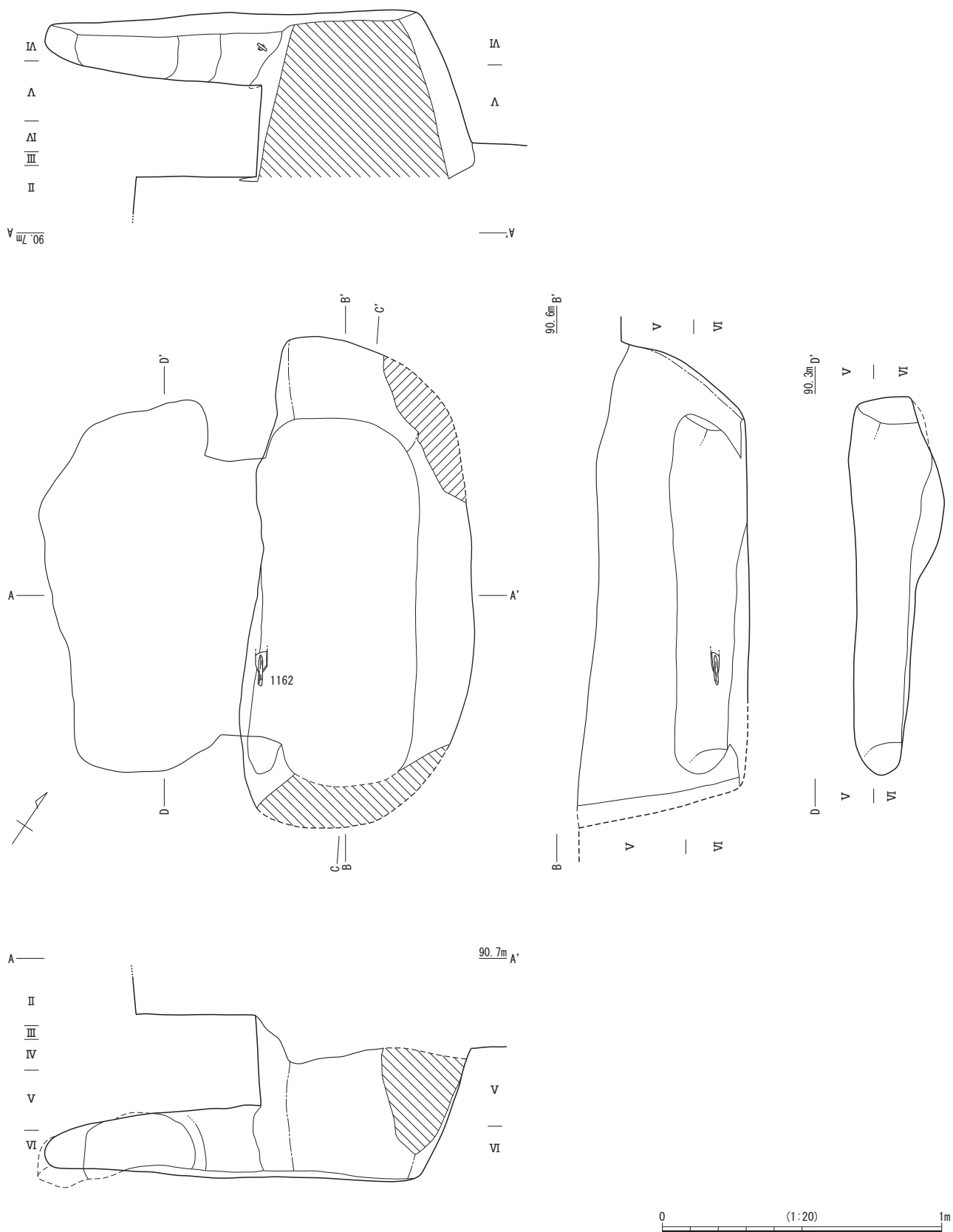
G・H-19区において検出される。2号-A溝状遺構は調査区内だけでは，長さ3.5m，溝幅1m，深さ0.6mで，18号地下式横穴墓の竪坑に切られている。2号-B溝状遺構は調査区内だけでは，長さ3.5m，溝幅0.6～1.2m，深さ0.6mで，18号地下式横穴墓を切っている。これら3基の遺構の新旧関係についてみると，2号-A溝状遺構が一番古く，次いで18号地下式横穴墓，最後に2号-B溝状遺構の順である。

18号地下式横穴墓は1-②-a類である。玄室の割に竪坑が大きいようである。また，玄室の天井が低く，奥行きが長い事も特徴である。羨門直下に異形鉄器が副葬されている。鉄器は1162の異形鉄器1点である。上

部を欠損しており，全長6cm，最大幅3.6cm，根挟を含めた残存長は11.15cmである。縁部はすべて刃部を造っており，断面形は両丸造である。根挟は先端を三角形に加工している。根挟下の形態は明瞭ではないものの，X線写真の観察により逆V字状と推定した。穿孔が3孔あり，上側に根挟みを挟んで2孔，そこから3.2cm下側の根挟み下に1孔施されている。上側の2孔は直径0.2cmで，紐状のものがわずかに残存している。下側の1孔は，直径0.2cmであり，釘は確認できないものの，12号地下式横穴墓の1150と同様に目釘状のものがあったと考えられる。鉄器直下から樹皮巻きが施されている。上側2孔は紐状のものを通し，下側1孔は目釘状のもの，さらに樹皮巻きの3箇所ので根挟を固定したと考えられる。



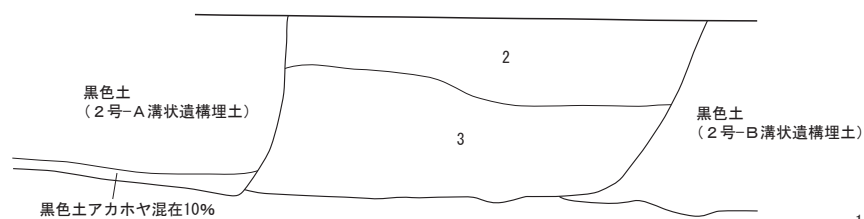
第179図 2号-A・B溝状遺構



第180图 18号地下式横穴墓(1)

C —

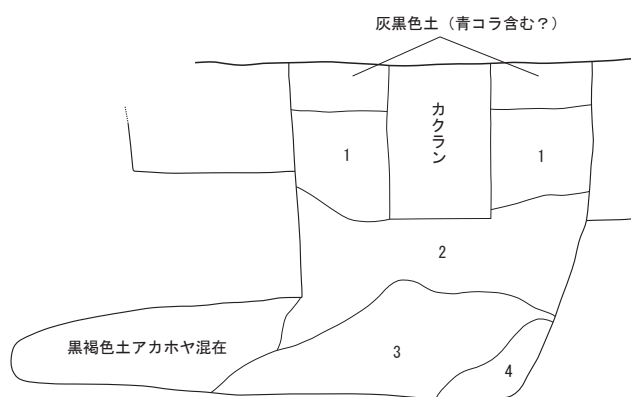
90.7m C'



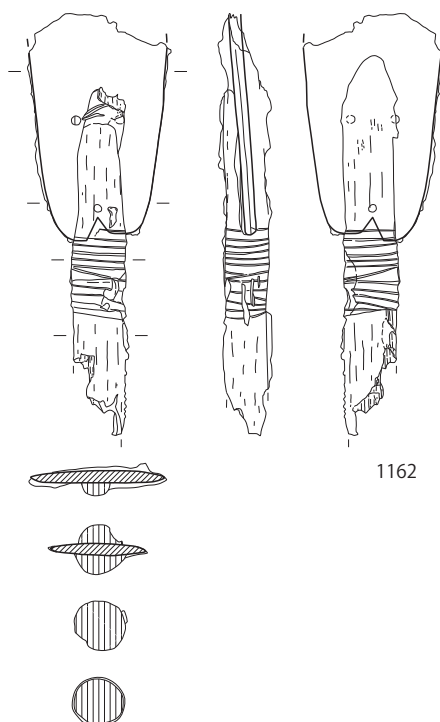
- 1: 黒色土
- 2: 黒褐色土アカホヤ混在30%
- 3: 黄褐色土アカホヤ混在90%
- 4: 黒褐色土

A —

91.0m A'



0 (1:20) 1m



0 (1:2) 5cm

第181図 18号地下式横穴墓(2)・副葬品

エ 地下式横穴墓

⑪ 1-①-a類地下式横穴墓

1-①-a類に分類される地下式横穴墓は19号～30号地下式横穴墓の12基が上げられる。

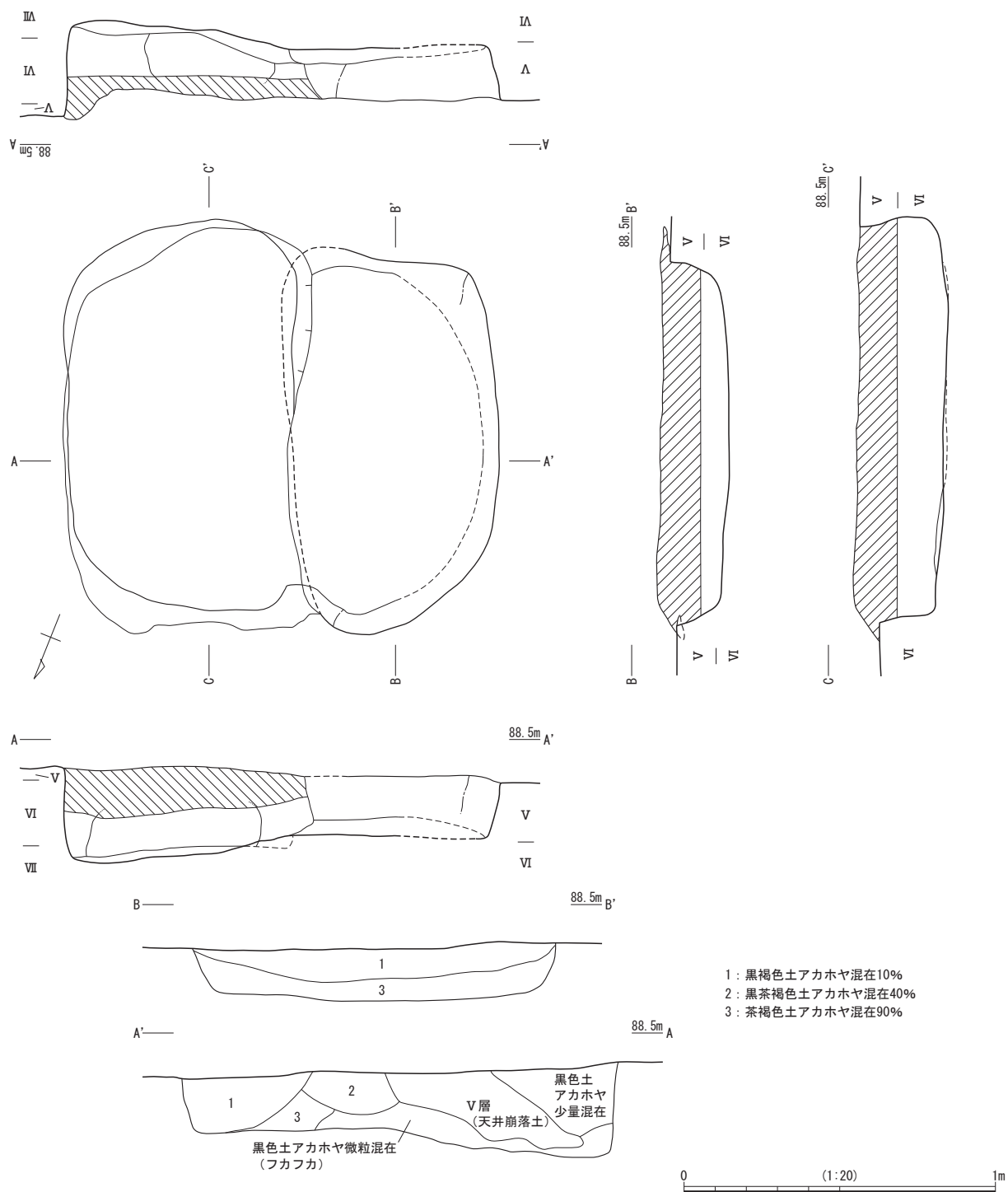
19号地下式横穴墓（第182図）

H・I-21区において検出される。上位の層は削平され、V層（アカホヤ）正面での検出のため竪坑及び玄

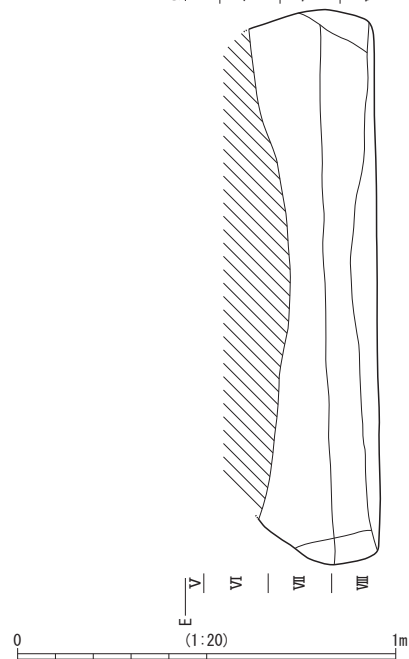
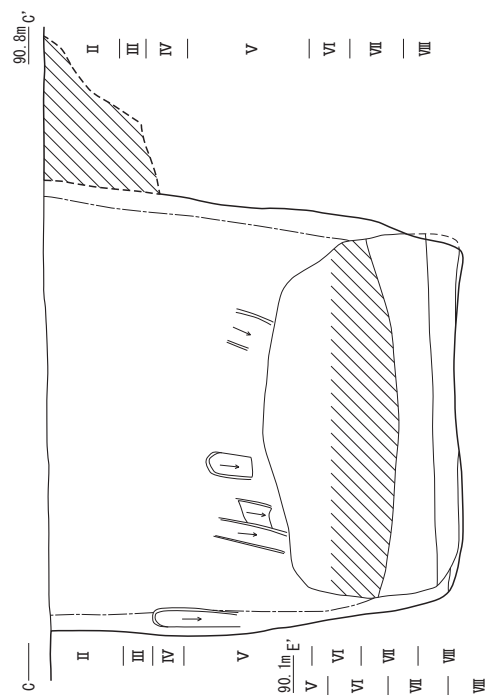
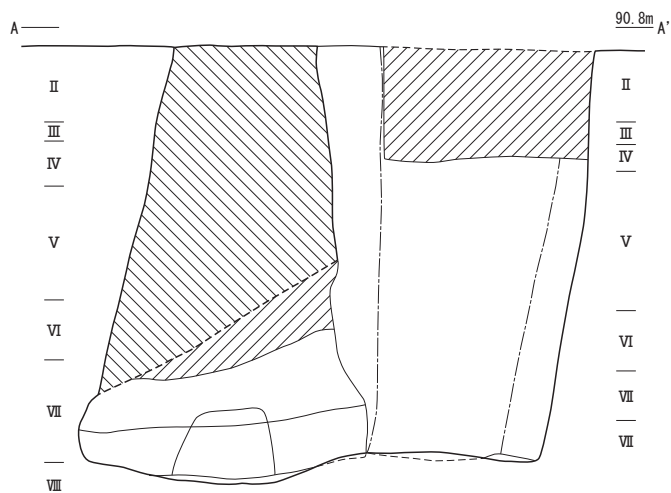
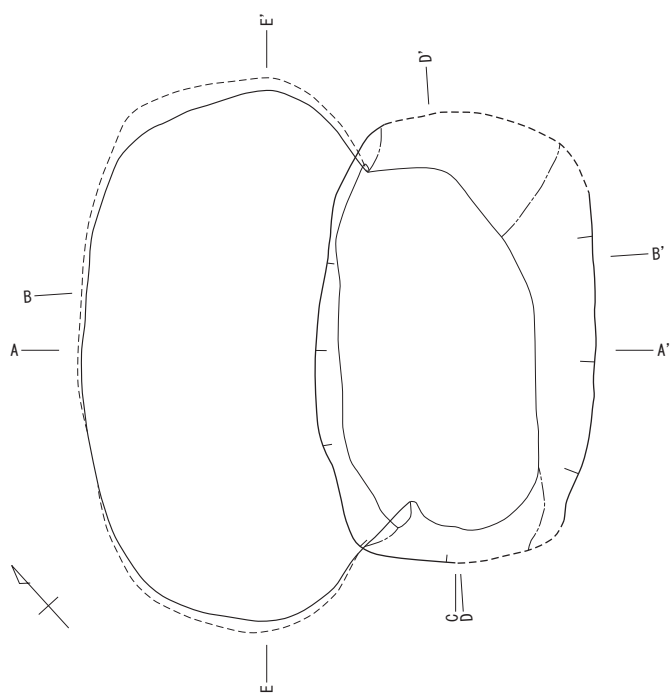
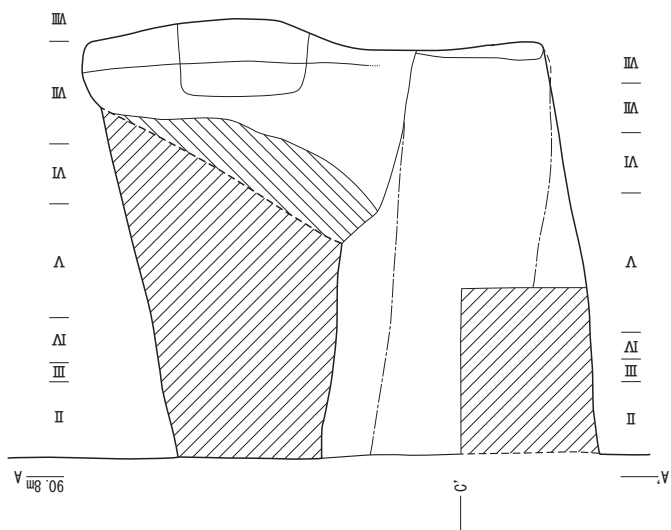
室天井部は大きく削平され原形を留めていない状況で、平面プランのみの観察である。玄室は竪坑から緩やかに傾斜をしている。

20号地下式横穴墓（第183図・第184図）

G・H-20区において検出される。竪坑は1.2m×0.75mと小さく、玄室はわずかに凹むものである。



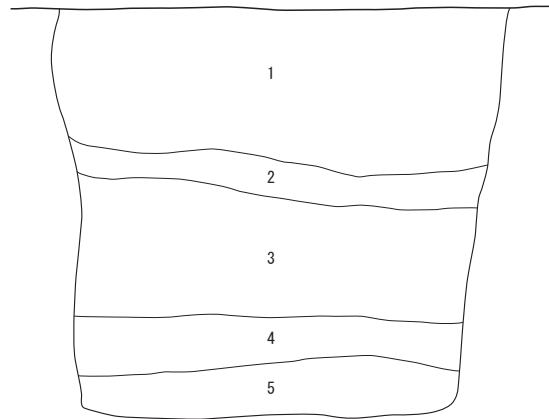
第182図 19号地下式横穴墓



第183图 20号地下式横穴墓(1)

D —

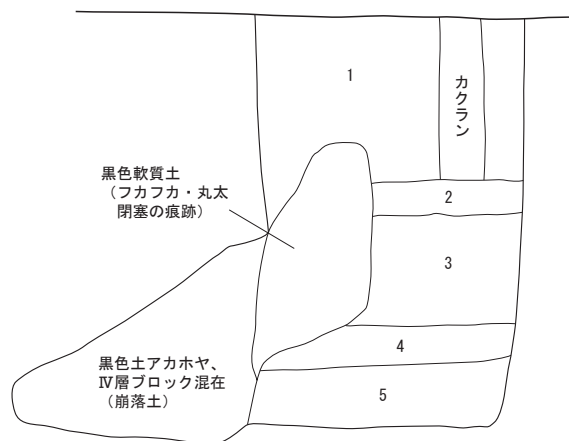
91.0m D



- 1: 茶褐色土 V・VI・VII層のブロック多量混在 (硬く締まる)
- 2: 黒茶褐色土アカホヤブロック混在
- 3: 茶褐色土 V・VI層ブロック多量混在 (ボロボロ)
- 4: 茶褐色土アカホヤブロック混在 (やや硬く締めてある)
- 5: 茶褐色硬質土 (締めて固めた状況)

B —

91.0m B



0 (1:20) 1m

第184図 20号地下式横穴墓(2)

21号地下式横穴墓（第185図）

H-20区において検出される。検出面がIV層（池田軽石）のため竪坑は32cmと浅い。玄室は楕円形であるが不整形である。また、玄室は竪坑のほぼ中央からはじまっている。

22号地下式横穴墓（第186図）

H-20区において検出される。平成22年度の確認調査で検出したものであるが一部トレンチで切られているため全体形状はつかめない。玄室は竪坑の一部からはじまっている。

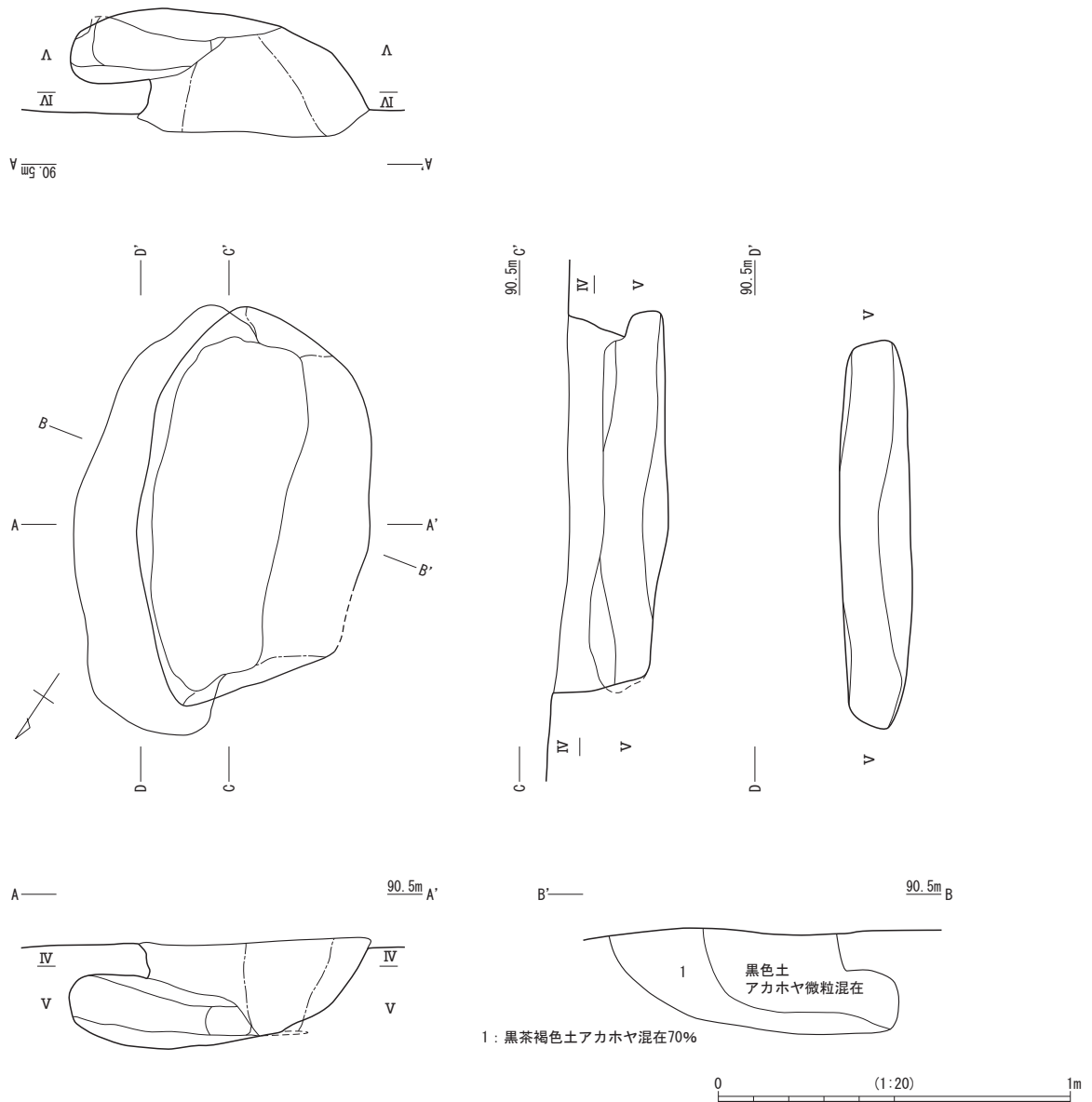
23号地下式横穴墓（第187図）

G-21・22区において検出される。竪坑の羨門側に

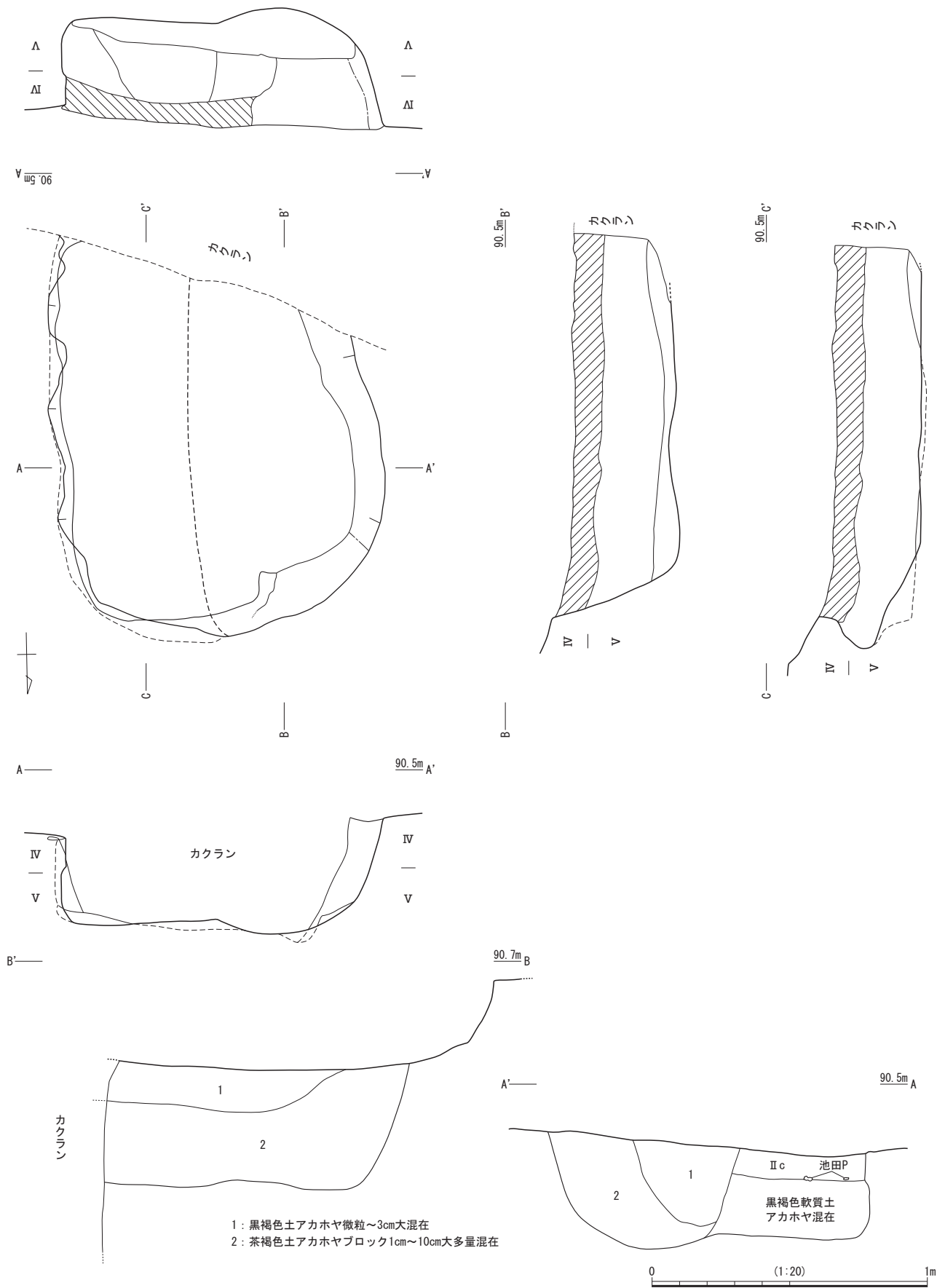
床面から20～50cmの挟りが認められ、埋土も羨門寄りには黒色土でフカフカしている。丸太材による羨門閉塞の痕跡と思われる。

24号地下式横穴墓（第188図・第189図）

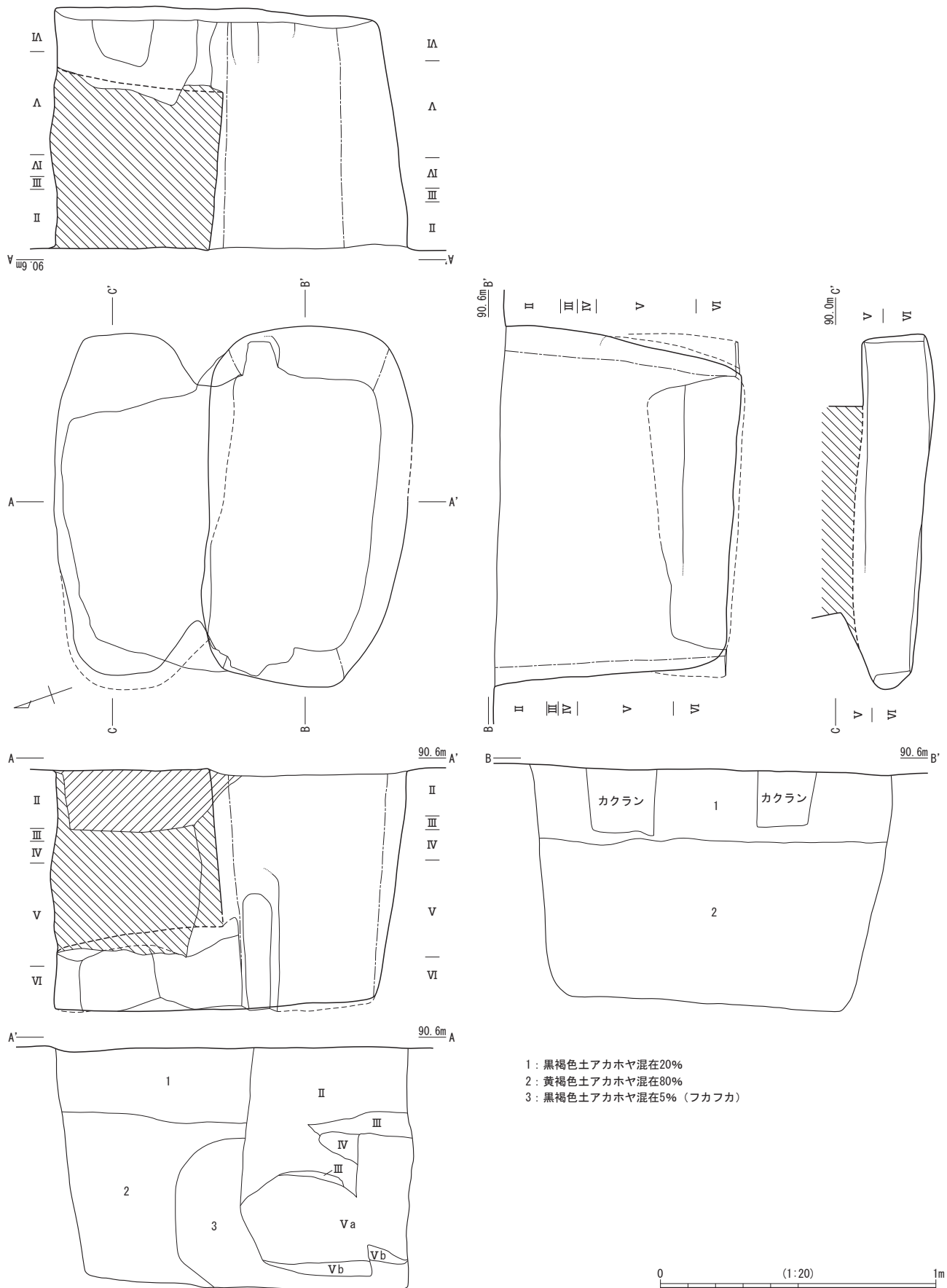
H-21区において検出される。竪坑の羨門側に浅い挟りが見られる。玄室の天井部はドーム状ではなく平坦である。玄室内の羨門寄りに刀子1点が副葬されている。1163は刀子。茎部を欠損するが現長12.5cm、茎部は現存長3.4cm、幅1～1.4cm、厚さ0.3cm。刃渡りは9.1cmで刃区を有し、幅1～1.8cm、背の厚さは0.2～0.3cmである。基部には柄と思われる木質が残る。茎部の装着は、柄に広めの挿入孔を空け茎部を挿入した後、隙間を詰めて固定する方法をとっている。



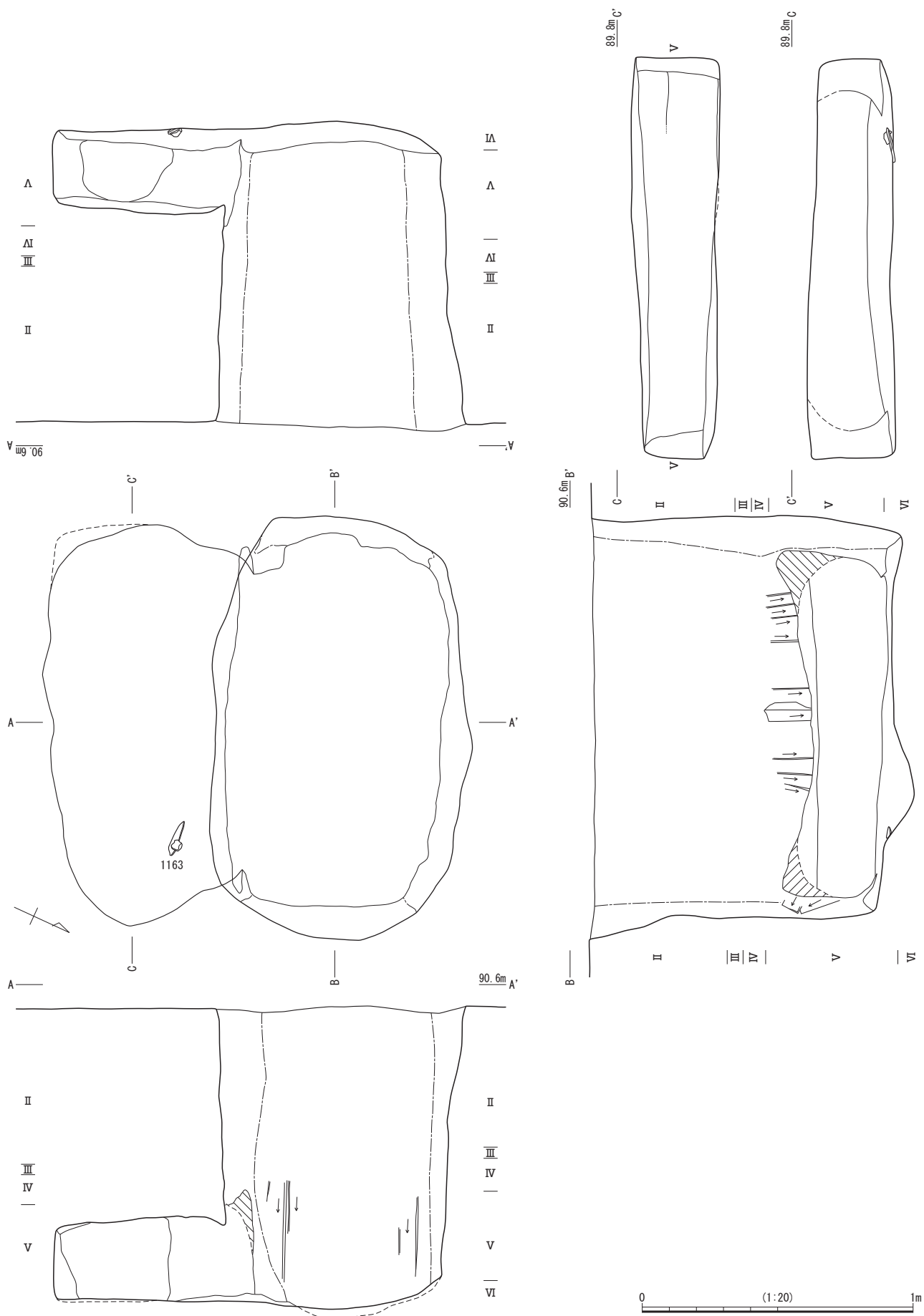
第185図 21号地下式横穴墓



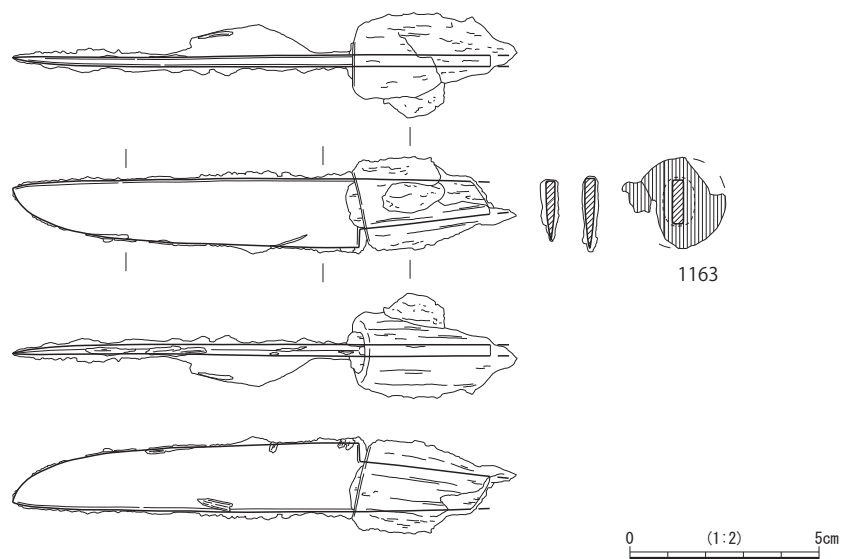
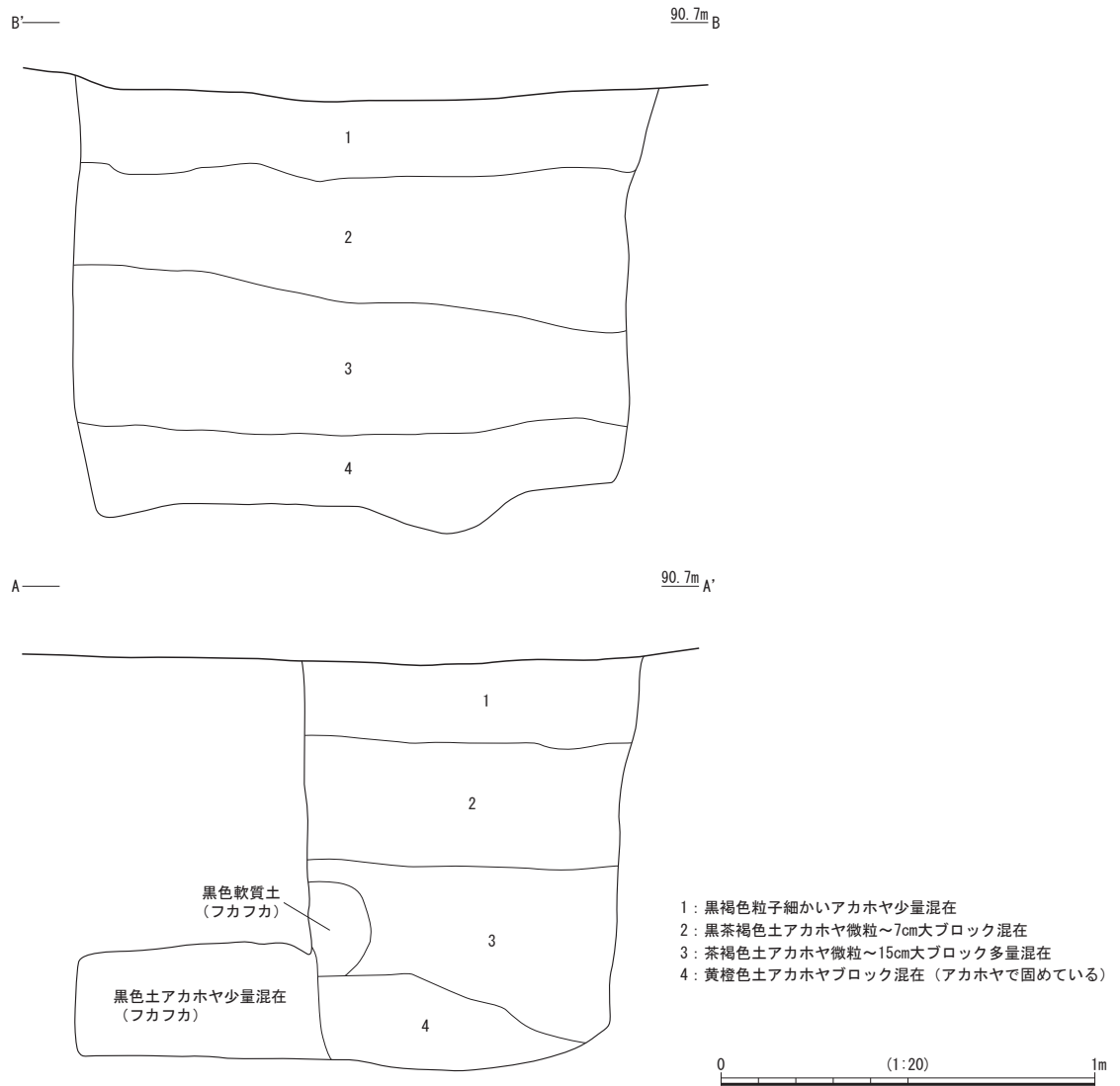
第186図 22号地下式横穴墓



第187図 23号地下式横穴墓



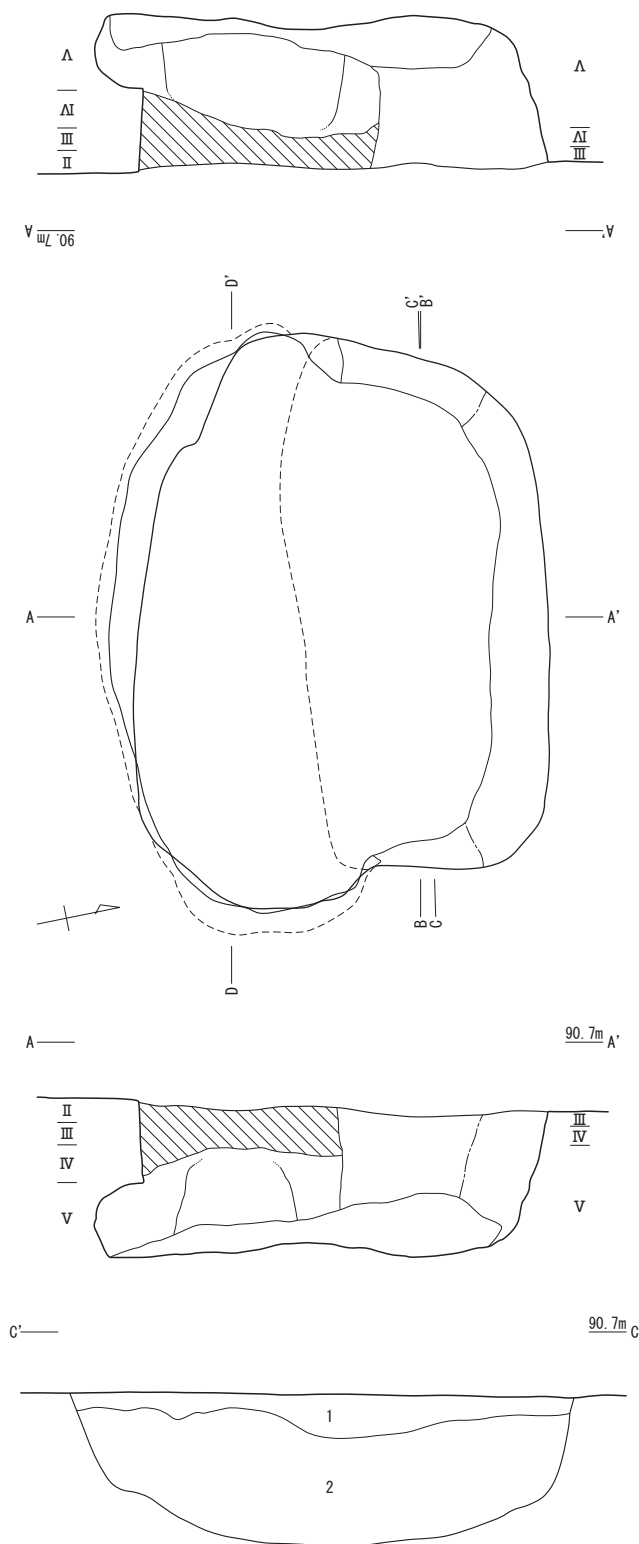
第188图 24号地下式横穴墓(1)



第189図 24号地下式横穴墓(2)・副葬品

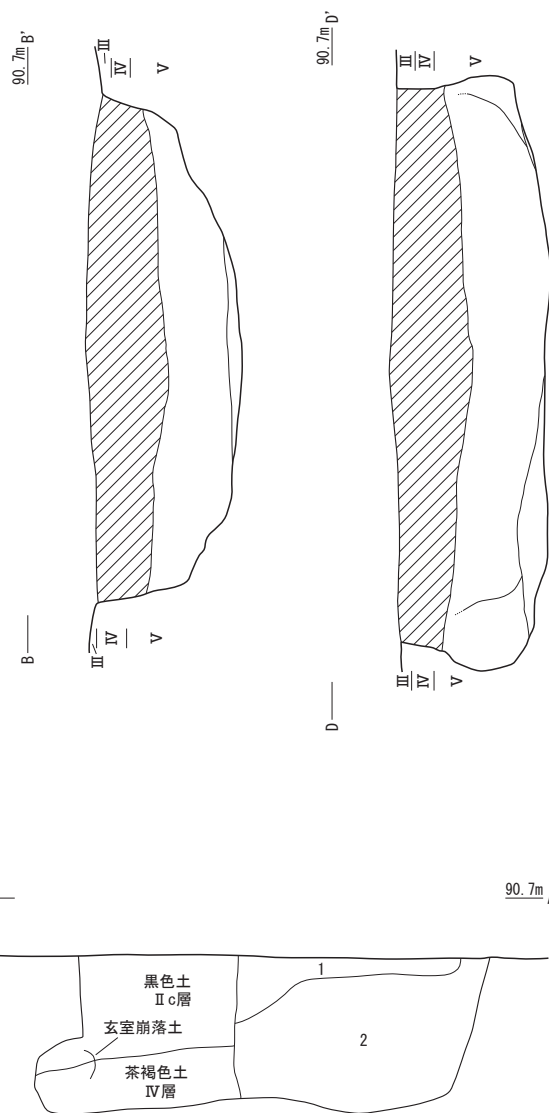
25号地下式横穴墓（第190図）

I - 21区において検出される。玄室天井部は崩落しているため形状は不明であるが、玄室は約20cmと低いものである。



26号地下式横穴墓（第191図～第193図）

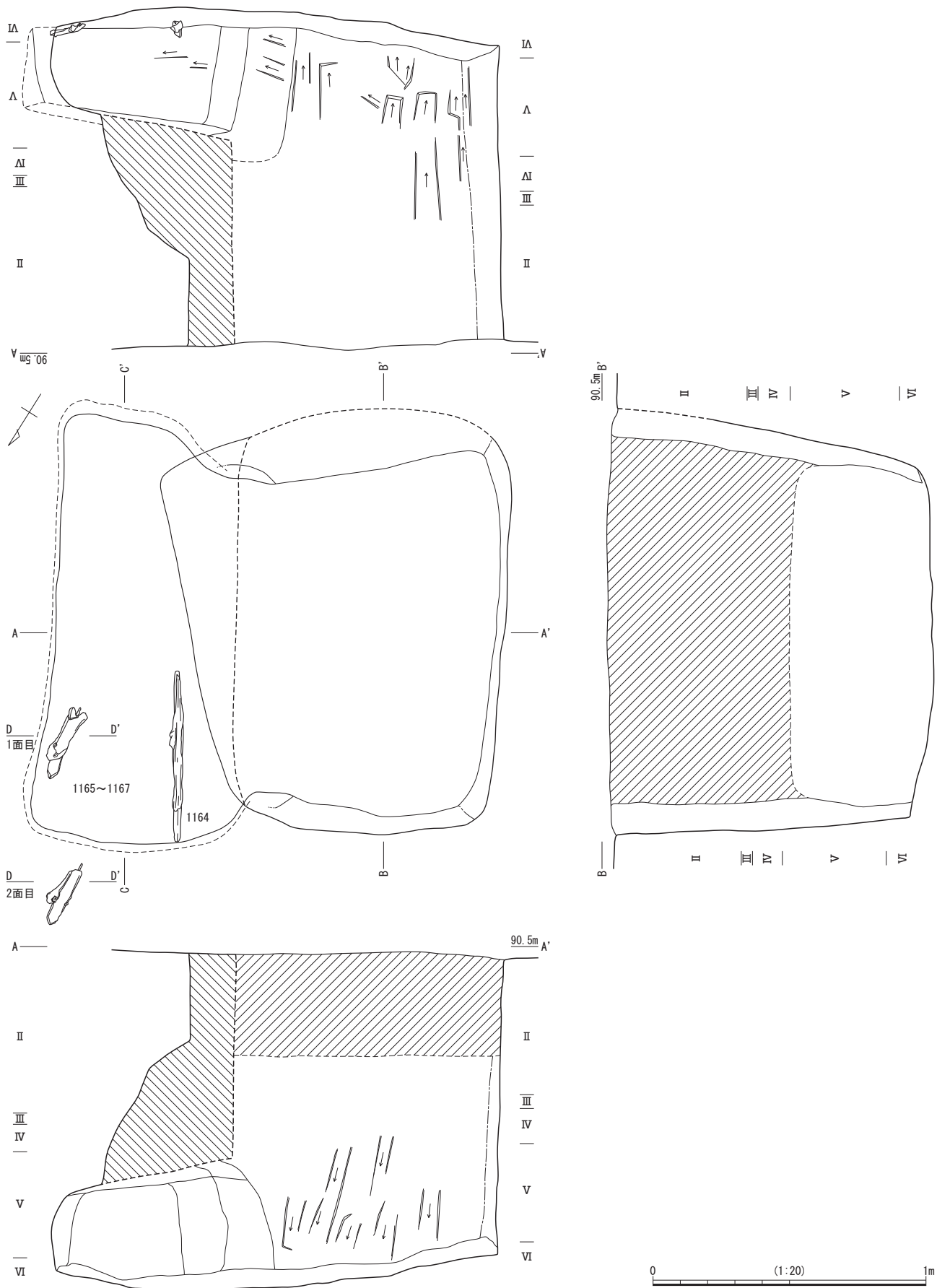
F・G - 22区において検出される。玄室平面は長方形に近いものである。玄室奥部に異形鉄器2点と圭頭鏃1点、玄室の羨門寄りに剣1点が副葬されている。1164は鉄剣である。全長59.9cm、刃部長48cm、茎部長12cmを測る。刃部の断面は凸レンズ状を呈しているが、鏃は明瞭ではない。厚さは0.4cmである。刃部の幅は関部で2.9cm、中位で2.7cm、先端部近くで2.2cmと関部から先端部へと細くなっている。刃部最大幅は関部の2.9cmである。刃部には木製の鞘が遺存しているが、表面の付加物は確認できない。鞘木は2枚合わせと考えられる。関部



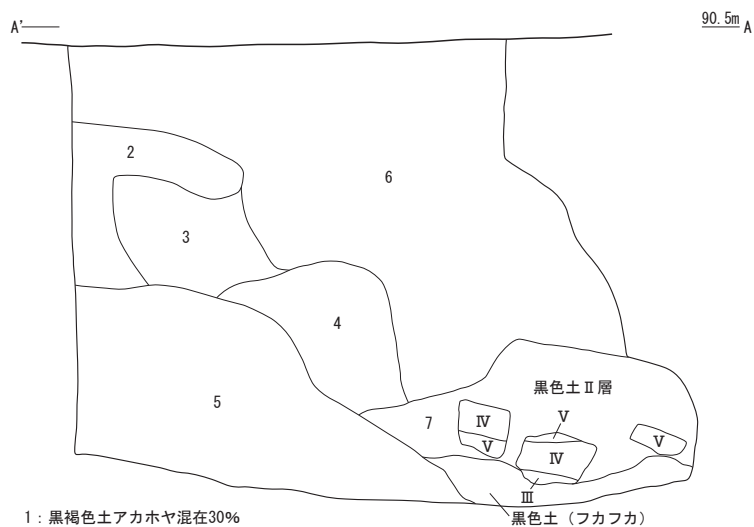
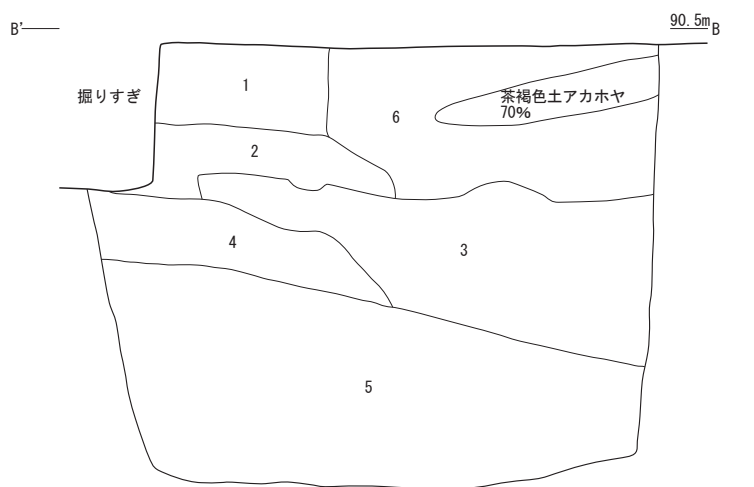
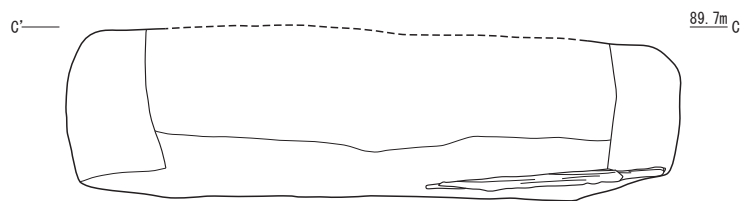
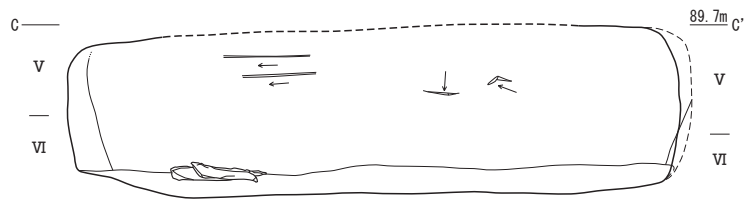
- 1: 黒褐色粒子細かいアカホヤ微量混在
- 2: 茶褐色土アカホヤブロック多量混在

0 (1:20) 1m

第190図 25号地下式横穴墓

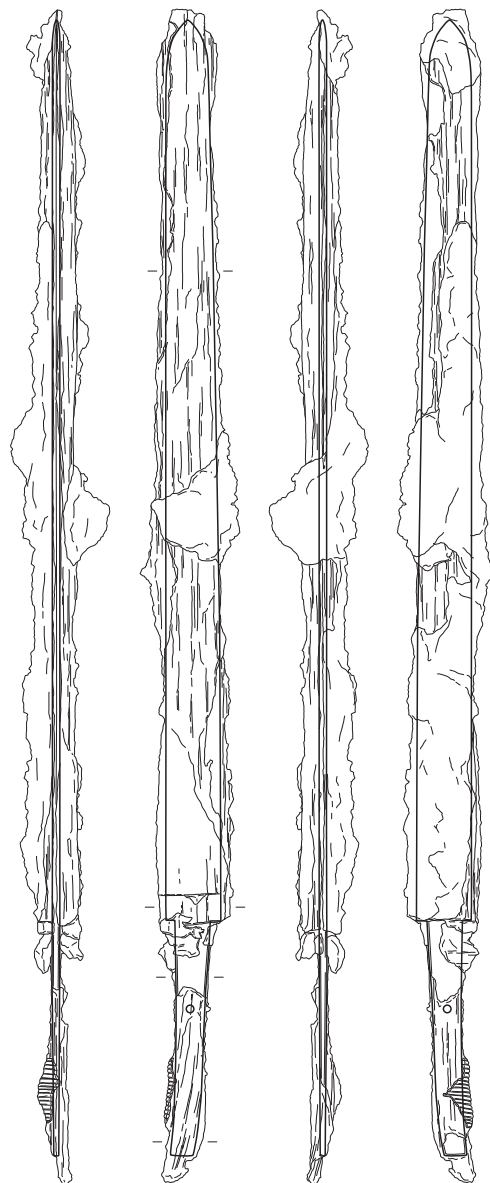


第191图 26号地下式横穴墓(1)



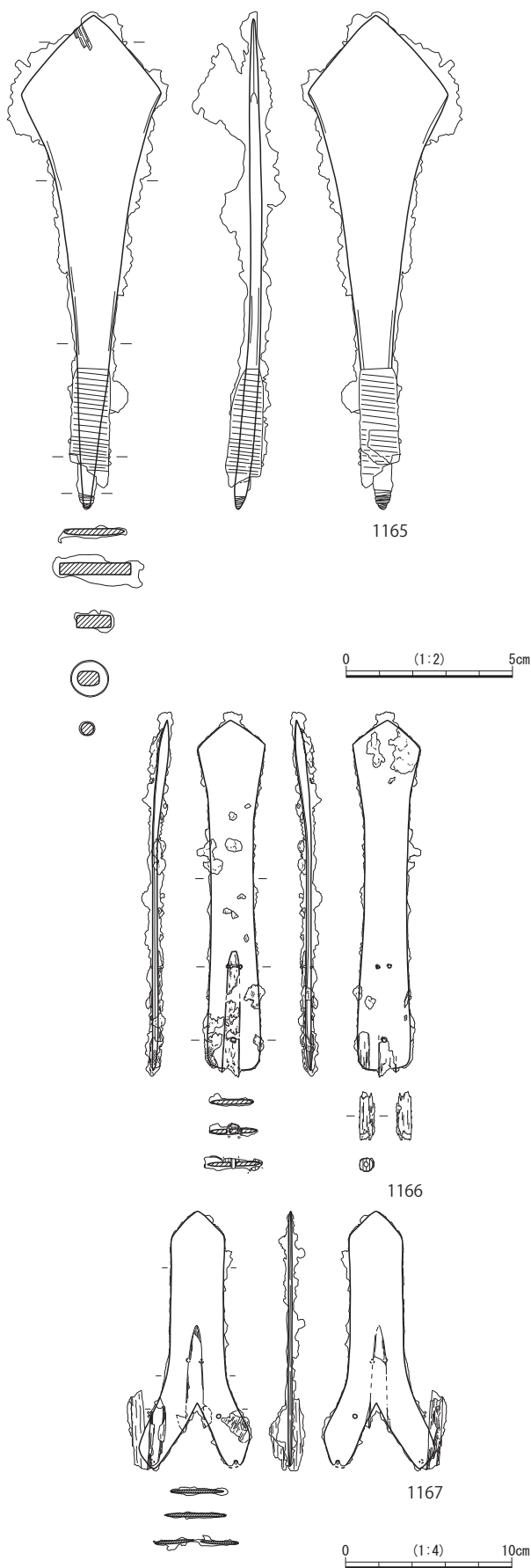
- 1 : 黒褐色土アカホヤ混在30%
- 2 : 黄褐色土アカホヤ混在80%
- 3 : 黒褐色土アカホヤ混在20%
- 4 : 黄褐色土アカホヤ混在70%
- 5 : 黄褐色土アカホヤ混在90% (ボロボロ)
- 6 : 黒色土
- 7 : 黒色土 (フカフカ)

0 (1:20) 1m



0 (1:4) 10cm

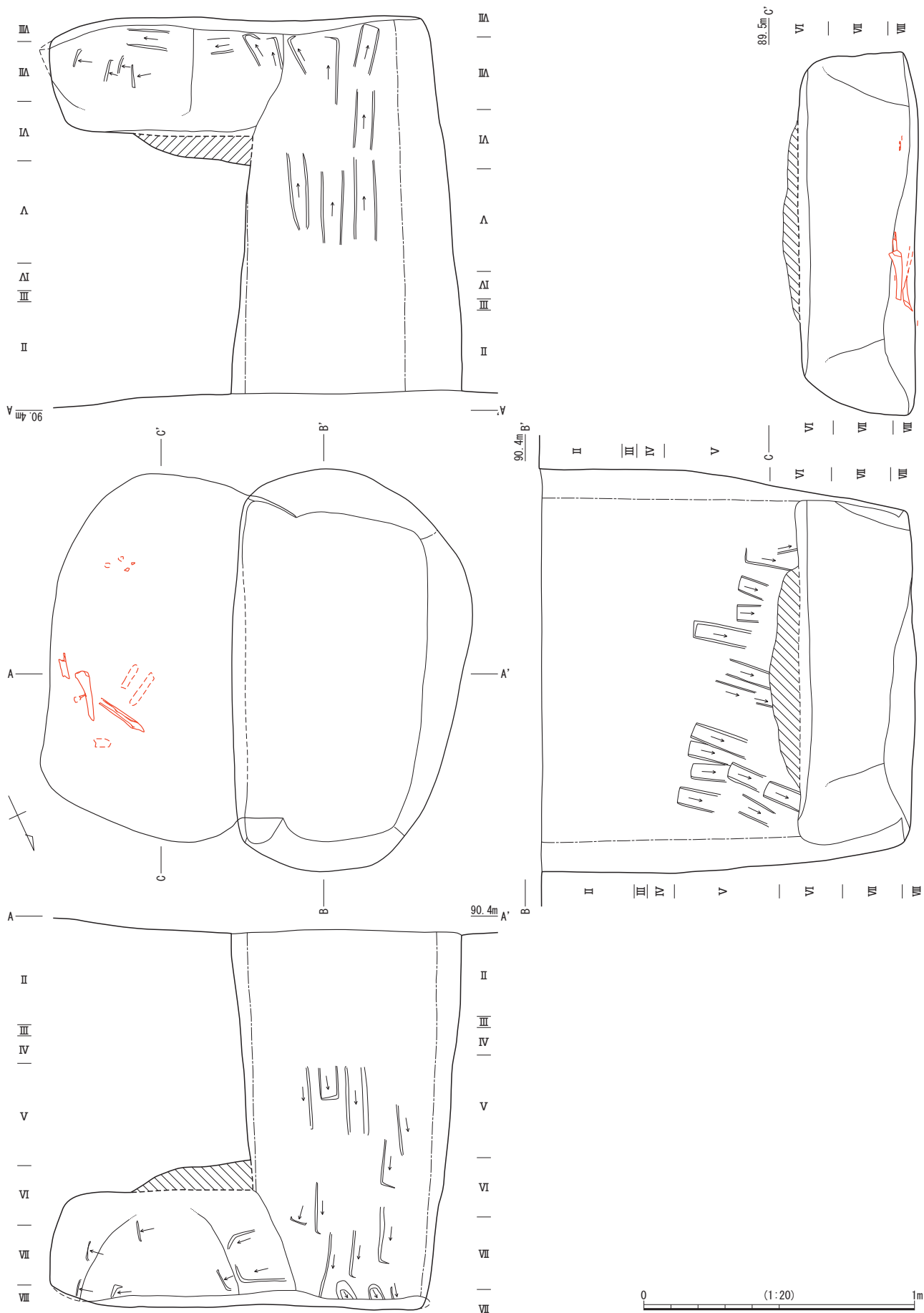
第192図 26号地下式横穴墓(2)・副葬品(1)



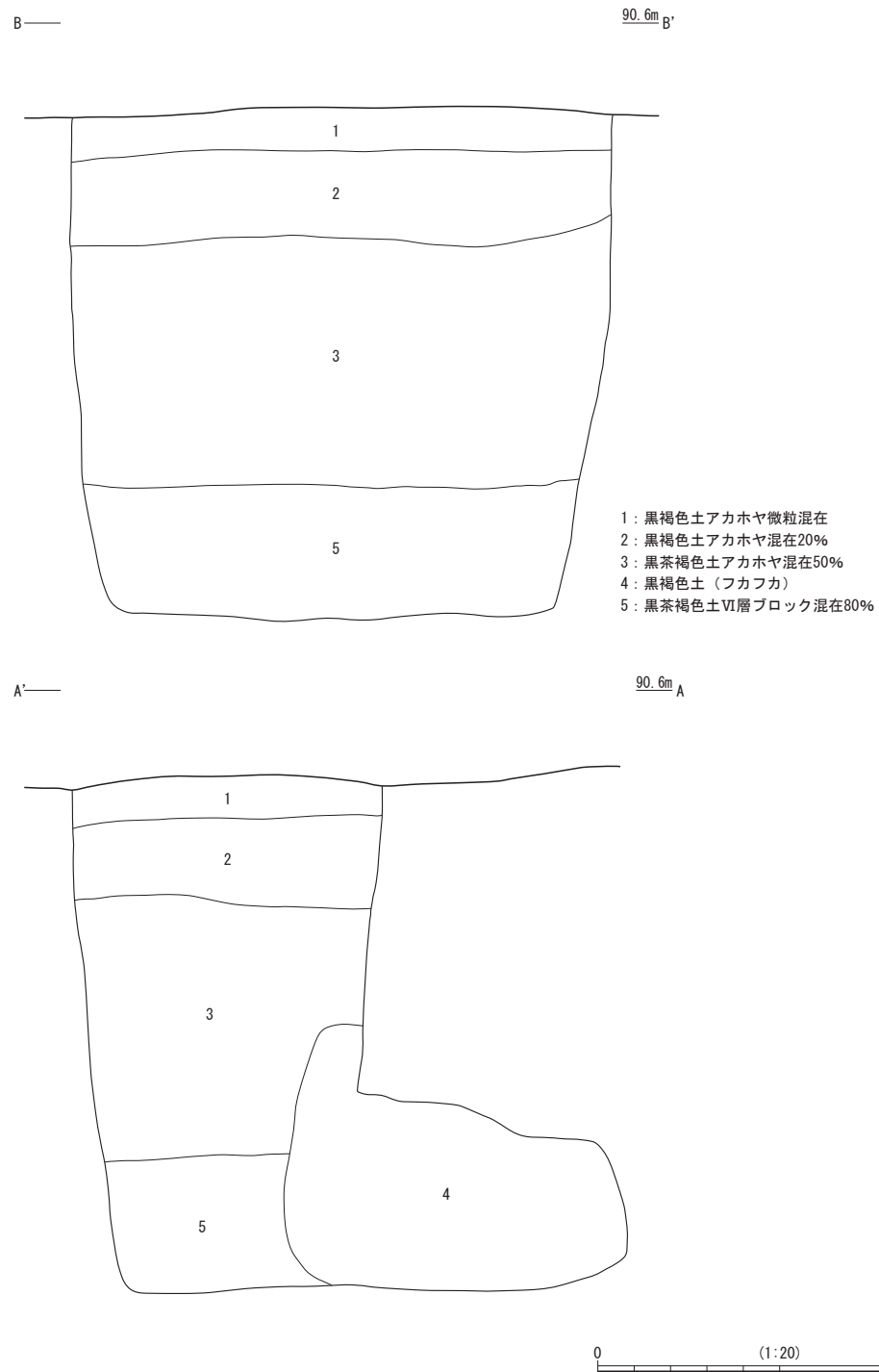
は左右対称で直角関を呈する。茎部の幅は1.85～1.2cmで厚さ0.4～0.3cmである。目釘穴は1孔で関部から下方へ4.5cmの位置に径0.4cmの孔が穿たれる。茎部に柄木が遺存しており、残存状態が悪く明確ではないものの、2枚あわせと考えられる。把の一部に紐巻きが確認できることから、1箇所の目釘と紐による巻き上げによって固定されていたと考えられる。紐巻きは、断面から一本の紐に二つの空洞があることが確認できることから、二本芯並列コイル状二重構造糸巻きと考えられる。鹿角製と思われる柄縁が一部残存しているが、残存状態が悪く明確ではない。1165は圭頭鏃である。全長14.75cm、刃部幅4.1cmと大型である。茎部の矢柄挿入部分に滑り止めの糸巻が認められる。0.5mmの糸で、撚りはみられない。刃部の一部に銹化した植物繊維が付着する。

1166・1167は異形鉄器である。1166は全長21.0cm、最大幅4.0cmを測り、町田堀遺跡出土の異形鉄器の中で最長である。先端部は圭頭形を呈しそこからゆるやかにくびれており、最小幅は2.55cmを測る。縁部はすべて刃部を造っており、断面形は平造である。根挟は先端を三角形に加工している。根挟下の形態は明瞭ではないものの、X線写真の観察によりゆるやかな逆V字状と推定した。穿孔が3孔あり、先端から16.7cm下に根挟みを挟んで2孔、そこから4.2cm下の根挟み下に1孔施されている。上側の2孔は直径0.2cmで、左右で高さがややずれている。根挟部分は遺存していないものの、表面に紐状のものがアーチ状に残存している。下側の1孔は直径0.3cmで、釘は確認できないものの、12号地下式横穴墓の1150と同様に目釘状のものがあったと考えられる。よって、上側2孔は紐状のものを通し、下側1孔は目釘状のもので根挟を固定していたと考えられる。表面から側面にかけての一部に布の痕跡があることから、布を巻いたような状態で副葬したと考えられる。1167は全長15.45cm、最大幅6.55cmを測る。身部は圭頭形を呈し、直線的に伸びて足部に至る。茎部はなく、根挟が施されている。すべて刃部を造っており、断面形は平造である。根挟は先端を三角形に加工している。根挟下の形態は逆V字状を呈する。穿孔が3孔あり、先端から8.9cm下に根挟みを挟んで2孔、足部の左側の端部に1孔施されている。足部の右側は欠損しているものの、同様の穿孔があったと考えられる。上側の2孔は直径0.2cmで、左右で高さがややずれている。上側2孔で紐状のものを通して根挟を固定していたと考えられる。足部に皮革と別個体の木質が付着している。

第193図 26号地下式横穴墓副葬品(2)



第194图 27号地下式横穴墓(1)



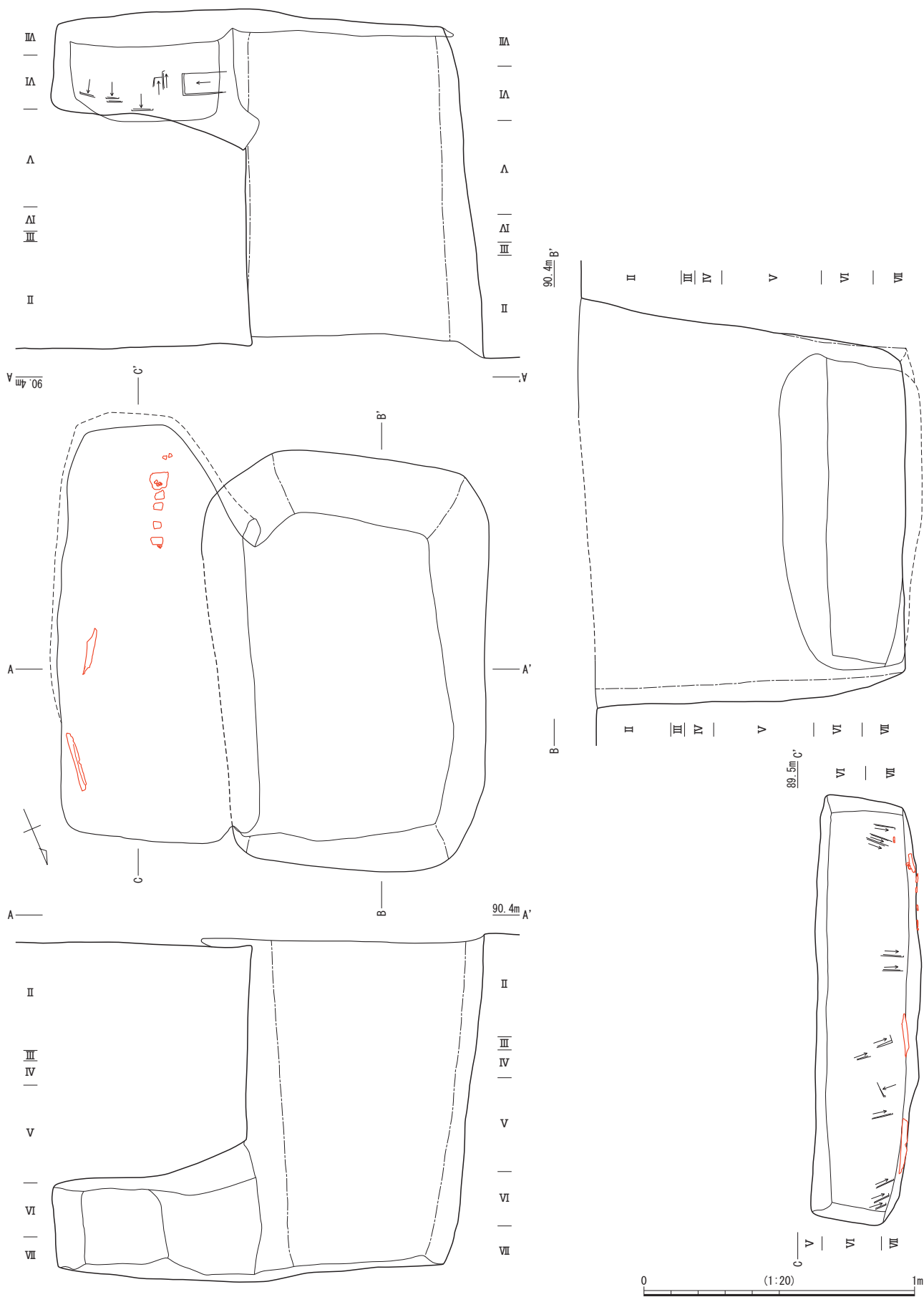
第195図 27号地下式横穴墓 (2)

27号地下式横穴墓 (第194図・第195図)

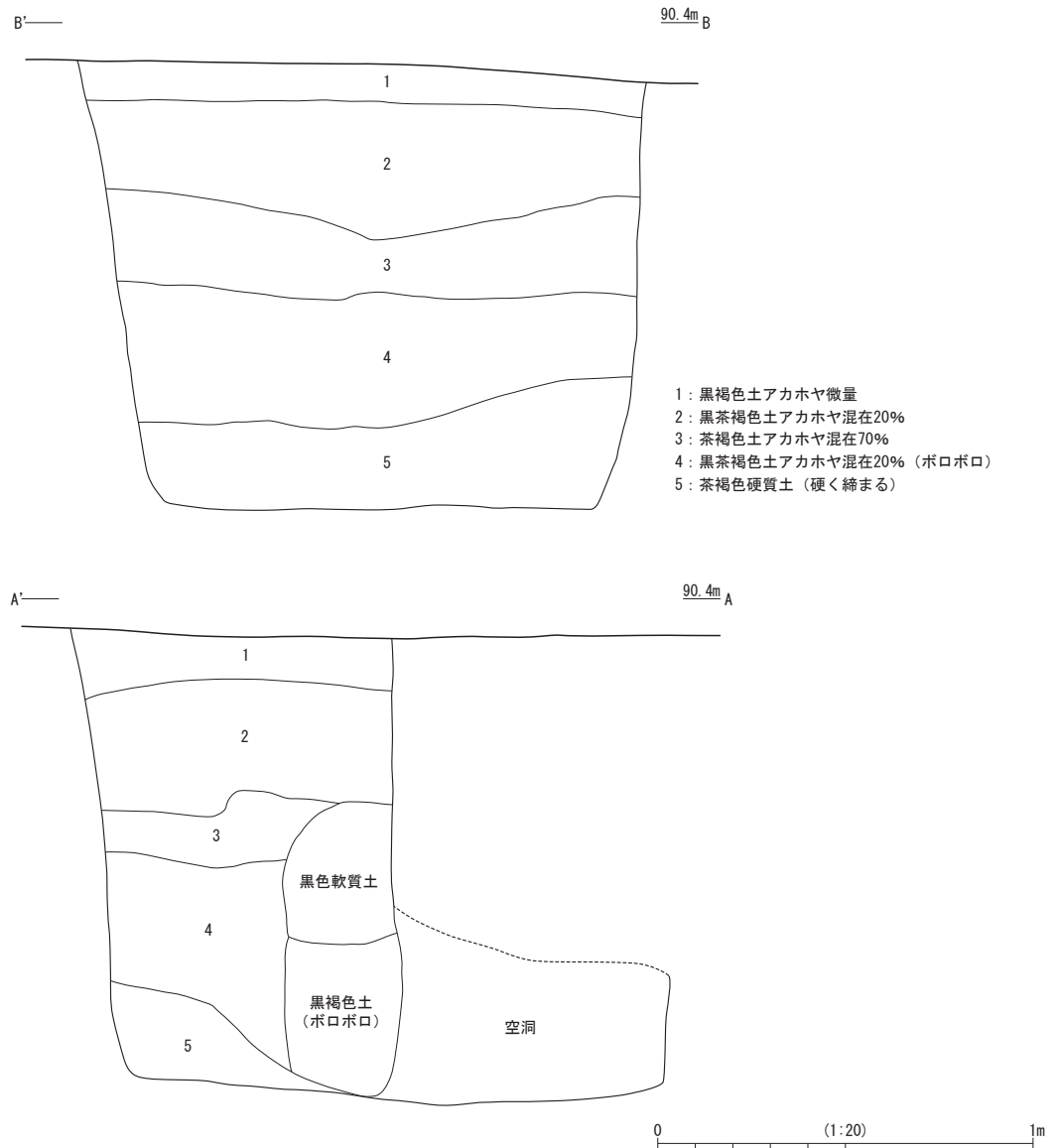
G-22区において検出される。竪坑の羨門側の片側に挟りが見られ、反対側にはわずかな挟りが認められる。また、竪坑埋土の羨門側から玄室内部においてはフカフカした黒色土で丸太材による羨門閉塞が想定される。竪坑壁面には明瞭な縦方向の工具痕が観察される。玄室の左側に大腿骨と思われる管骨と右側に歯が遺存する。

28号地下式横穴墓 (第196図)

I-22区において検出される。竪坑は長方形で、玄室は奥に向かって右側が広くなり、やや片袖気味である。竪坑壁面は縦方向、玄室奥部は横方向の工具痕が認められる。



第197图 29号地下式横穴墓(1)



第198図 29号地下式横穴墓 (2)

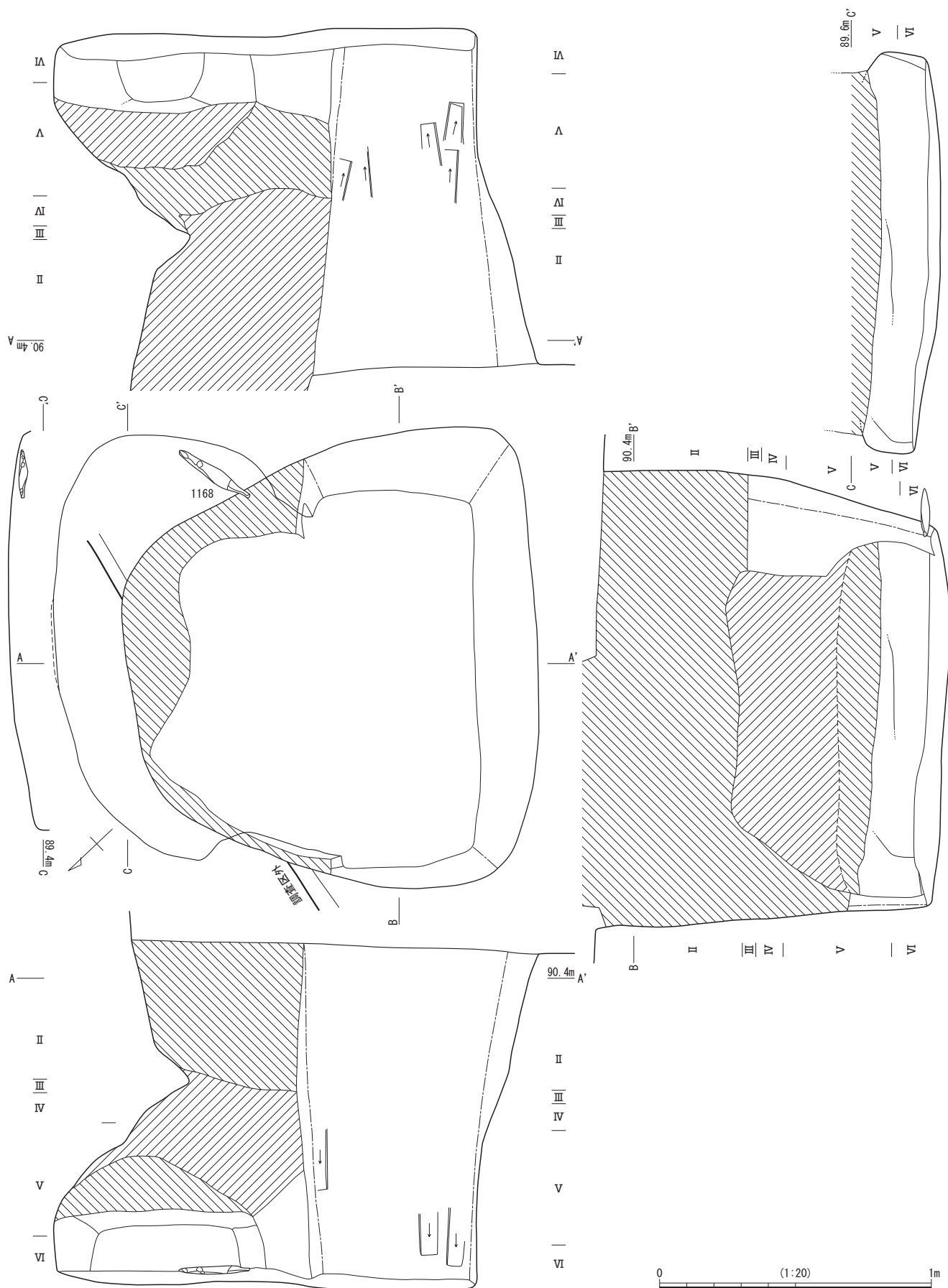
29号地下式横穴墓 (第197図・第198図)

G・H-23区において検出される。玄室は奥に向かって右側が広くなり、片袖気味である。竪坑埋土は羨門側でボロボロした黒褐色土で玄室内部は空洞が残されている。羨門閉塞は丸太材によるものと想定される。玄室奥部においては短い縦方向の工具痕が認められる。玄室内には管骨等が遺存する。

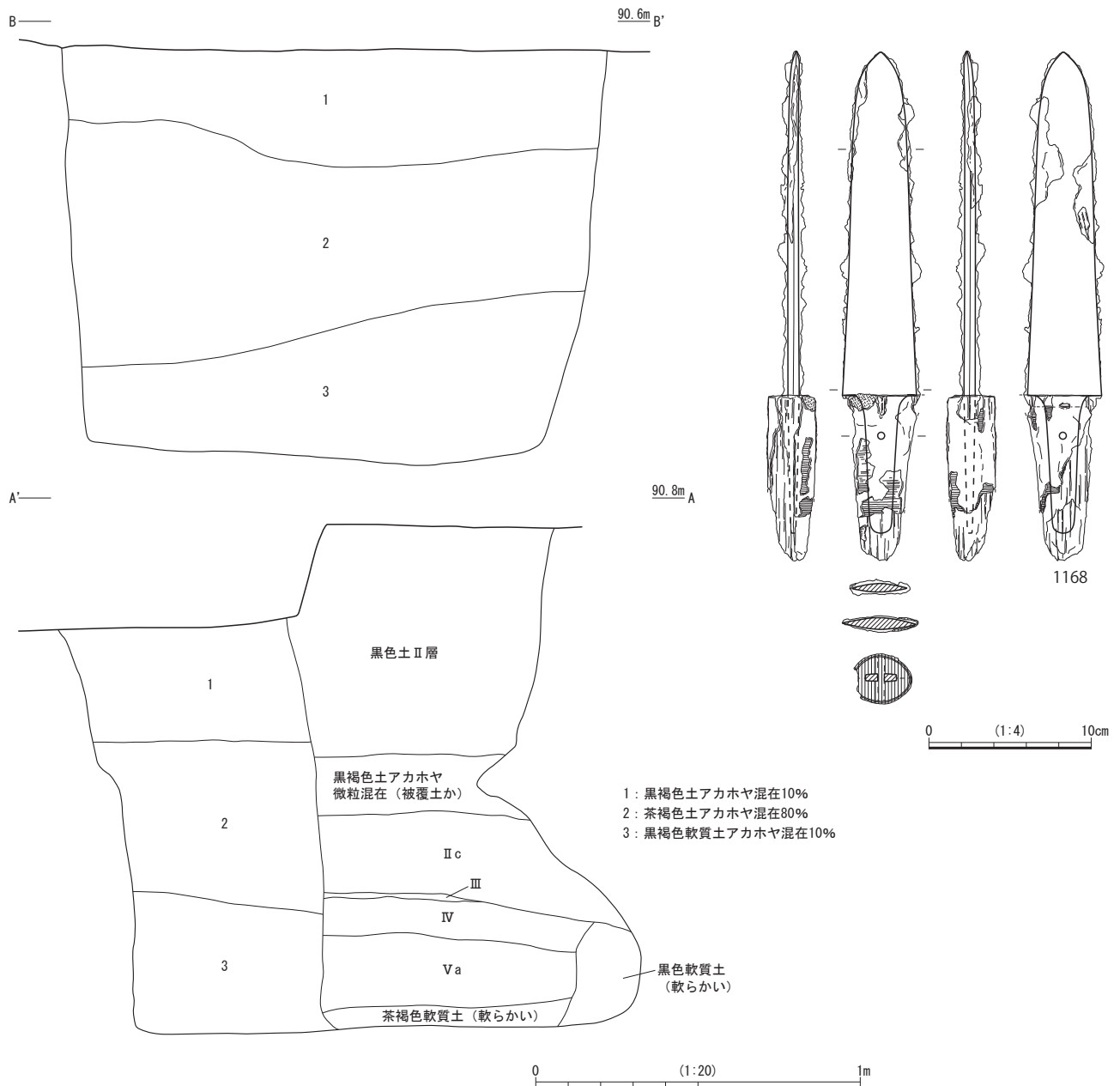
30号地下式横穴墓 (第199図・第200図)

G-23・24区において検出される。玄室の天井部は崩落しており現況を留めていない。崩落土はⅡc層からⅤa層であるが、Ⅱc層の上部に黒褐色土で微粒のアカホヤが混在している層が見られるが、被覆土の可能性が考えられる。玄室の右奥にヤリが副葬されている。1168はヤリで全長29.6cm、刃部は21.1cm、茎部は8.5cmを測る。

刃部断面は凸レンズ上に近いが鑄は明瞭ではない。刃部の最大幅は関部にあり4.5cmである。刃部の厚さは0.6cm～0.7cmとやや薄手である。関部は左右対称に作り出され、直角関を呈する。茎部幅は1.4cm～3.0cm、厚さは0.3cm～0.6cm、目釘穴は1孔で、関部より2.2cm下方に径0.4cmの孔が穿たれる。茎部は柄木2枚を合わせて挟み、その上に柄巻きをする。更に柄巻きの上に革等を巻くか、漆を塗り膜層を作るものである。また、柄の上位には柄巻きのズレを防ぐためか突起の痕跡が認められる。柄部は3.1cm×3.9cmの楕円形を呈する。科学分析の結果、柄木、柄巻上に有機質が観察されているが劣化しており判別できていない。柄巻きの糸は赤色である。また、平織の布も観察され、赤色の燃糸が観察されている。柄木の一部と思われる木片は広葉樹散孔材と思われる。



第199图 30号地下式横穴墓(1)



第200図 30号地下式横穴墓(2)・副葬品

⑫ 1-①-b類地下式横穴墓

1-①-b類に分類される地下式横穴墓は31号～41号地下式横穴墓までの11基が上げられる。

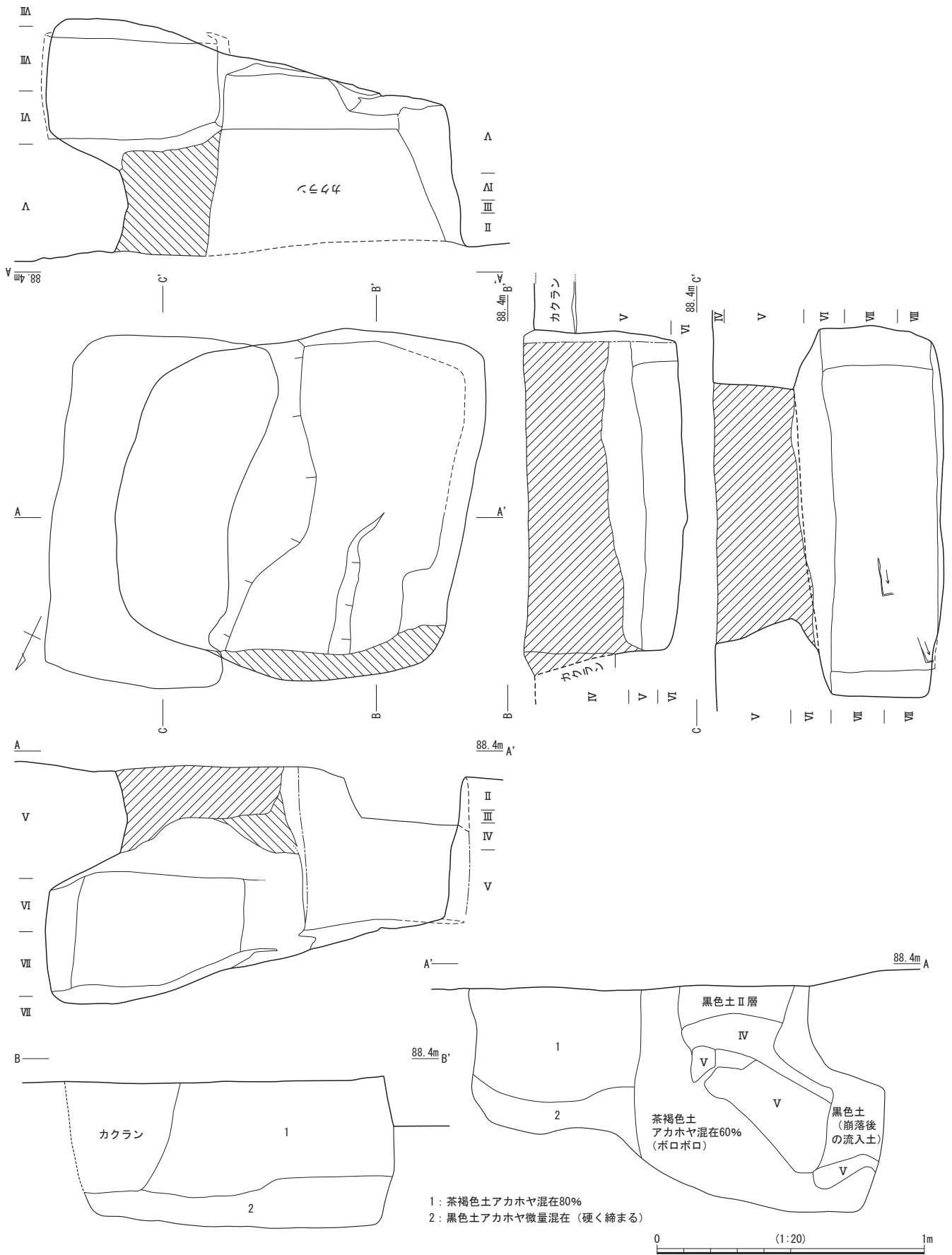
31号地下式横穴墓(第201図)

I-17区に於いて検出される。玄室の平面形は略長方形で、竪坑の玄室寄りから傾斜している。

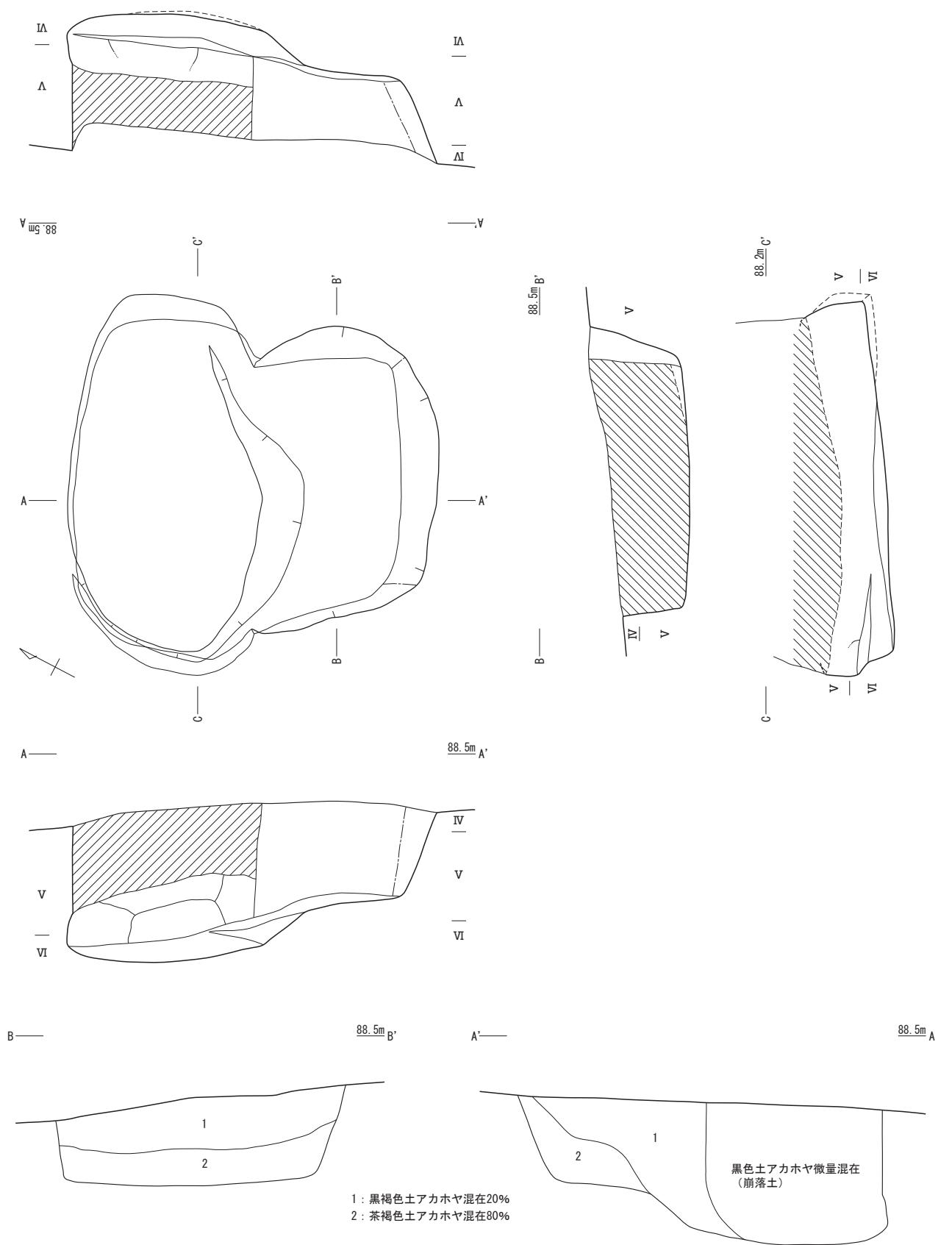
32号地下式横穴墓(第202図)

H-22区において検出される。玄室平面形は楕円形で、羨門の下位において傾斜して玄室に至り玄室はやや

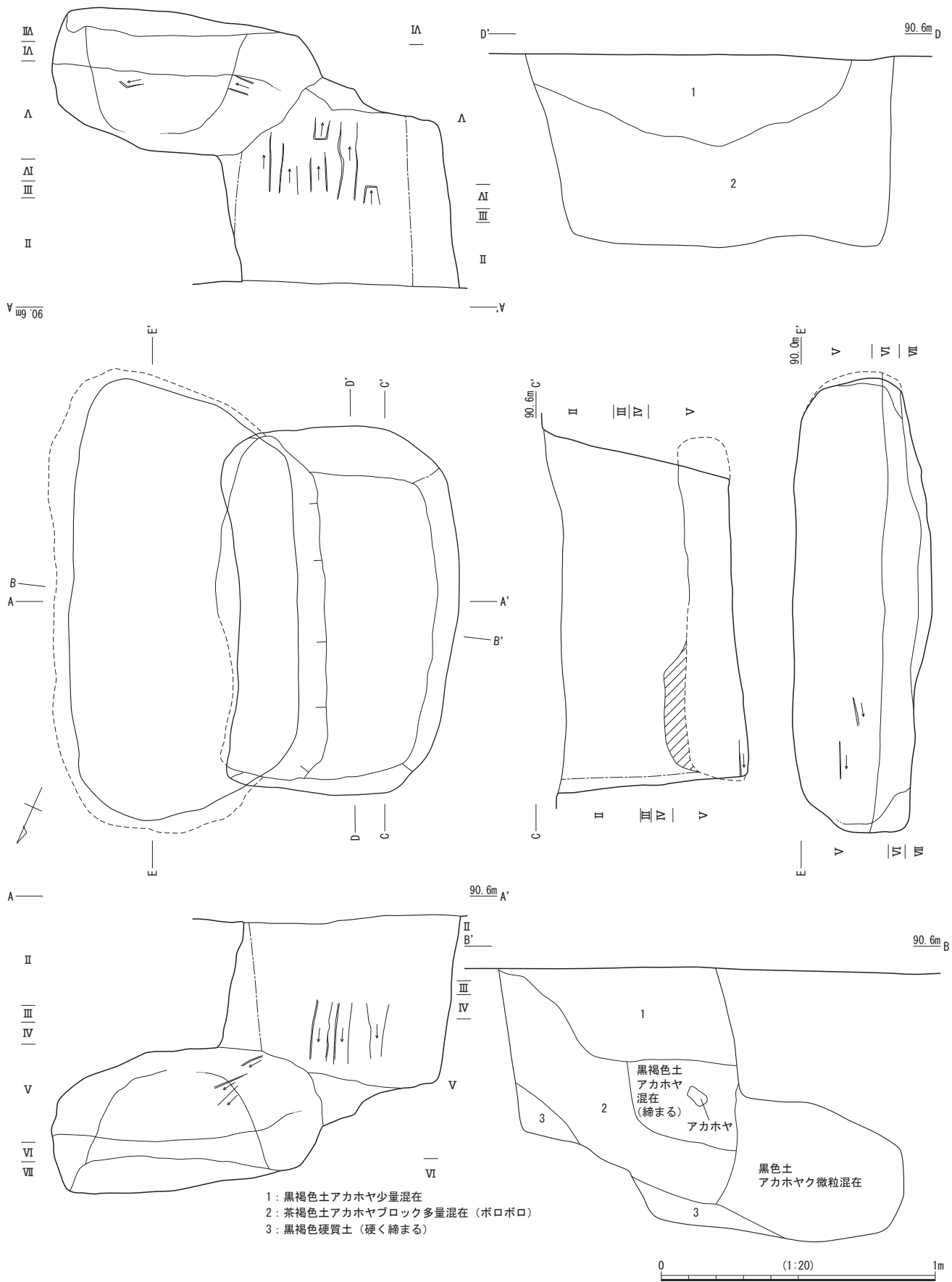
凹んでいる。玄室の右側奥部に鉄鏃3点が副葬されている。3点共に一段腸挟柳葉鏃である。1169と1170は銹により癒着しておりそのまま実測した。1169は全長9.8cm、鏃身部長5.1cmを測る。関部は山形突起で茎部は3.7cmである。刃部は最大幅が逆刺部にあり2cmで、先端部に近い部分に布の痕跡が認められる。茎部には、下地巻き・樹皮巻き・木質が観察される。1170は全長8.9cm、鏃身部長5.4cmを測る。関部は山形突起で茎部は4.2cmである。刃部は最大幅が逆刺部にあり2.2cmで、先端部に近い部分及び中位に布の痕跡が認められる。茎部には木質が観察される。1171は全長10.3cm、鏃身部長



第201図 31号地下式横穴墓



第203図 33号地下式横穴墓



第204図 34号地下式横穴墓

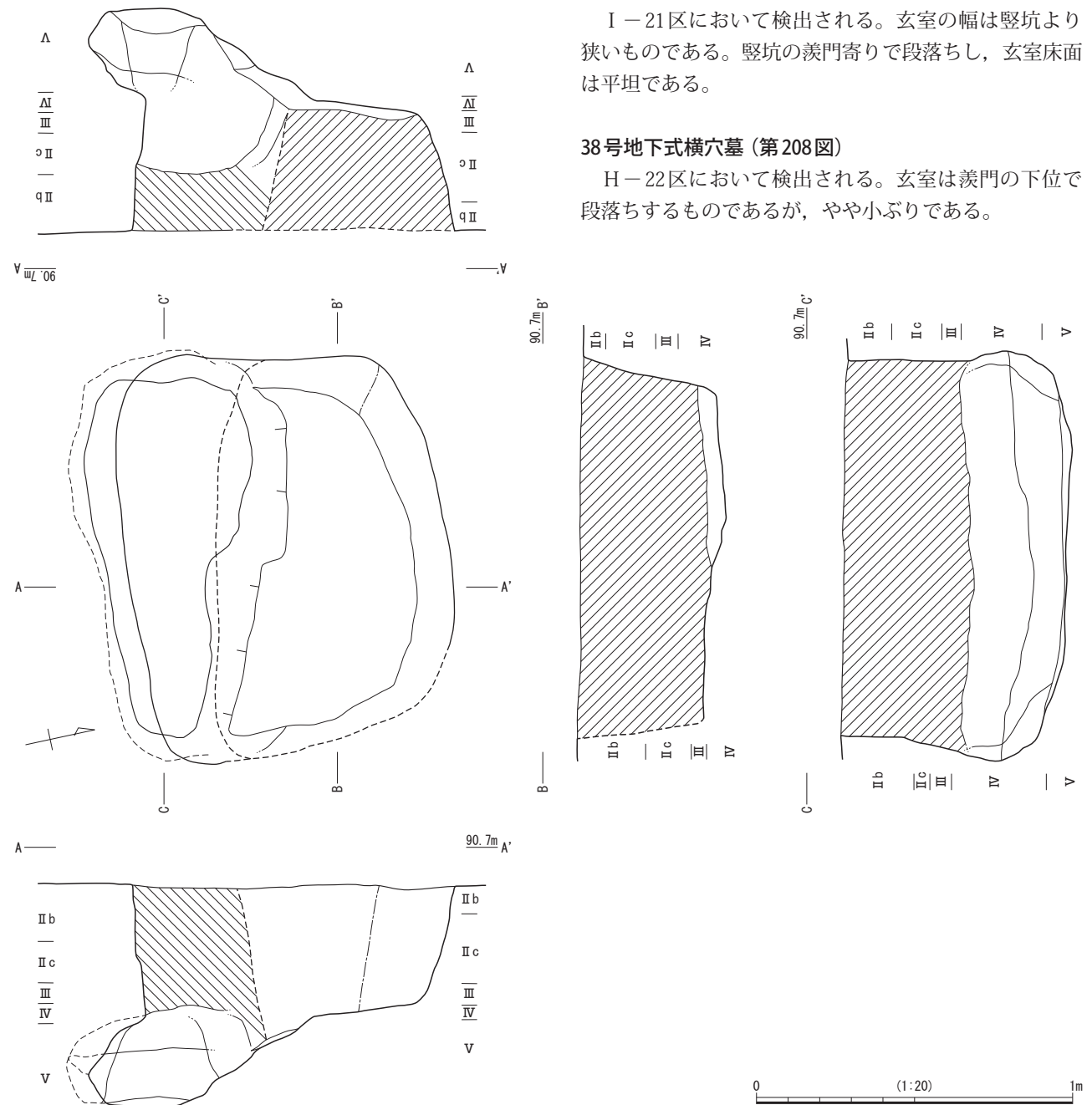
5.8cmを測る。関部は山形突起で茎部は4.5cmである。刃部は最大幅が逆刺部にあり2.35cmである。

33号地下式横穴墓（第203図）

I－17区において検出される。羨門の下位から傾斜して玄室はやや凹む。

34号地下式横穴墓（第204図）

H－21区において検出される。玄室の平面形は台形状で、竪坑の一部から段落ちして、奥部へわずかに傾斜する。



第205図 35号地下式横穴墓

35号地下式横穴墓（第205図）

I－20区において検出される。玄室の平面形は不整形で、玄室奥に向かって右側が広く、左側は狭いものである。竪坑の一部から段落ちして玄室へ至り、床面はわずかに凹む。

36号地下式横穴墓（第206図）

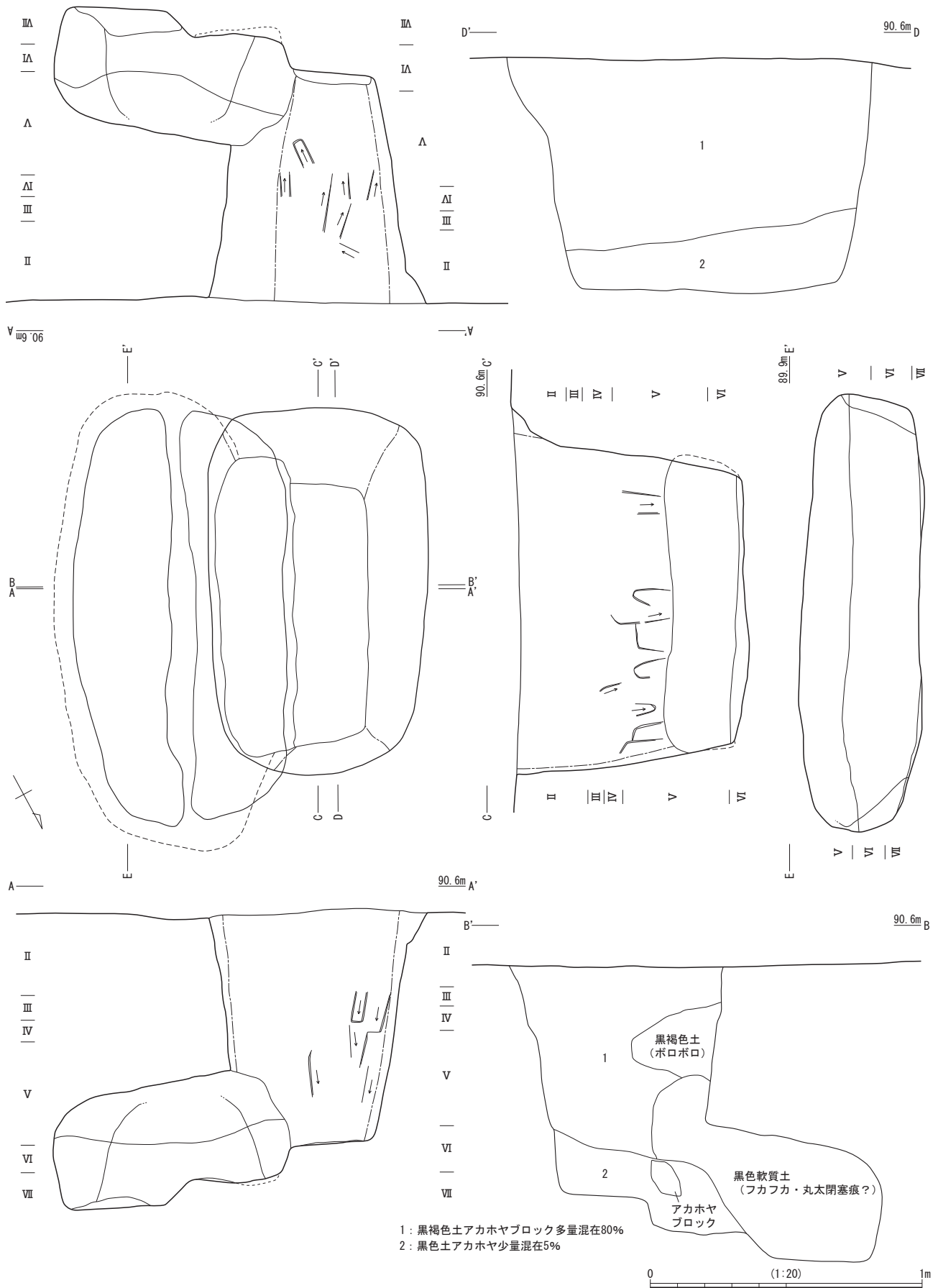
H・I－21区において検出される。玄室は竪坑の羨門寄りで段落ちし、さらに、玄室内で段落ちしている。竪坑の壁面には縦方向の工具痕が認められる。

37号地下式横穴墓（第207図）

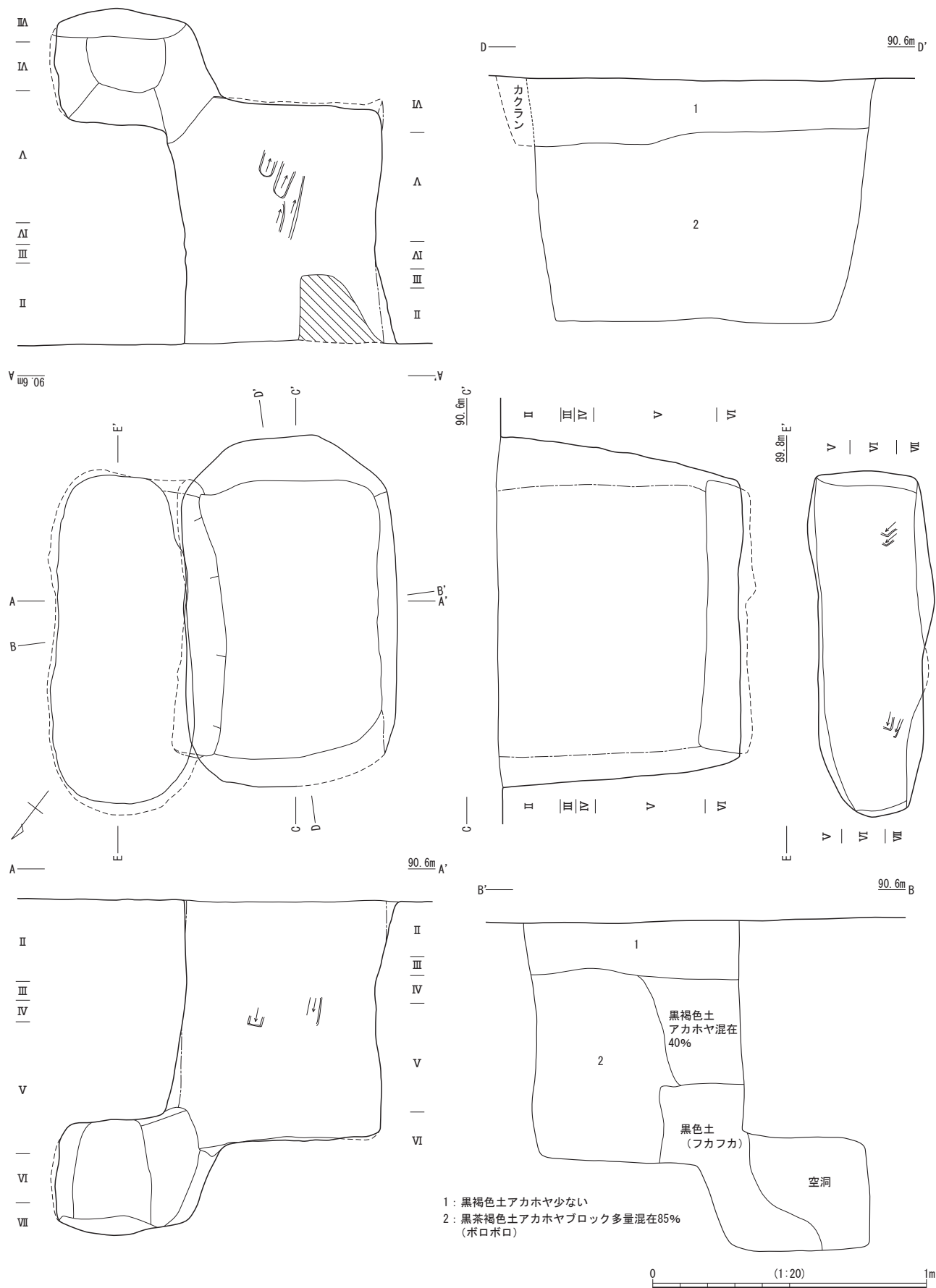
I－21区において検出される。玄室の幅は竪坑より狭いものである。竪坑の羨門寄りで段落ちし、玄室床面は平坦である。

38号地下式横穴墓（第208図）

H－22区において検出される。玄室は羨門の下位で段落ちするものであるが、やや小ぶりである。



第206図 36号地下式横穴墓



第208图 38号地下式横穴墓

39号地下式横穴墓（第209図）

F-21区において検出される。玄室は羨門の下位から段落ちするものである。竪坑壁面にはやや広めの工具痕が認められる。

40号地下式横穴墓（第210図）

G-22区において検出される。玄室は竪坑の羨門寄りで段落ちし、そこから玄室へと傾斜するものである。

41号地下式横穴墓（第211図）

I-24・25区において検出される。竪坑は細長いもので玄室は不整形である。竪坑のほぼ中央から段落ちして玄室に至るが、玄室の奥は短いものである。

⑬ 1-②-a類地下式横穴墓

1-②-a類に分類される地下式横穴墓は42号～52号地下式横穴墓までの11基が上げられる。

42号地下式横穴墓（第212図）

G-20区において検出される。竪坑の羨門寄りに挟みが見られるもので、丸太材閉塞と思われる。

玄室奥壁には工具痕が明瞭に認められる。

43号地下式横穴墓（第213図・第214図）

F-20・21区において検出される。竪坑検出面がⅡ層上面で、深さが1.5mと深いものであるが、他の地下式横穴墓の竪坑も本来はこの程度の深さがあったものと思われる。玄室平面形はやや不整形で主軸が斜めになっていると共に片袖気味である。

玄室の左奥（西側）に頭蓋、右側に大腿骨が遺存する。大腿骨は横方向で屈葬と思われる。老年女性である。

44号・45号地下式横穴墓（第215図・第216図）

I-20区において検出された。最初に45号の竪坑が検出され、掘り下げを実施したところ、竪坑の床面から鉄鏃が出土した。ところが、竪坑の東側及び西側に壁の立ち上がりが存在せず、両側に掘り進められる状況を呈してきた。掘り進めた結果、西側に竪坑と思われる掘り込みが検出され、東側には玄室と思われる広がりが見られた。その結果、44号と45号は切り合い関係にあるものと判明した。44号地下式横穴墓の玄室の直上から45号地下式横穴墓の竪坑が掘り込まれている状況が明らかになった。更に44号・45号共に玄室内に鉄鏃1点づつを副葬していることも認められた。1172は45号の玄室の羨門寄りに副葬されていたもので、圭頭鏃である。全長13.7cm、鏃の全長は11.25cmである。刃部は幅3cm、厚さは0.2～0.25cm。関は鏃身関で山形突起である。茎部は長さ5cm、厚さ0.3cmであるが、径1.1cmの矢柄が残存

する。1173は44号の玄室奥部に副葬されていたもので柳葉鏃である。全長は15.45cmで、鏃の全長は12.1cmである。鏃身部長は6.3cmで、関はナゲ関で茎尻へと先細りで延びる。頸部から茎部長は6.5cmである。刃部幅は2.1cmで厚さは0.2cmを測る。茎部には樹皮による口巻き及び矢柄が残存している。

これまで、地下式横穴墓が群集しているものの切り合いはほとんど無かったにも関わらず切り合いが確認された。明らかに45号が後から造られているが、44号の玄室を直撃するように造られていることは、そこに墓があり、人が埋葬されていることを熟知していたものと考えられる。このことは、地下式横穴墓の存在が解るような状況（何らかの目印か約束事）があったものであろう。また、一見破壊行為のような現象であるが、何らかの意図を持っていたものと考えられる。

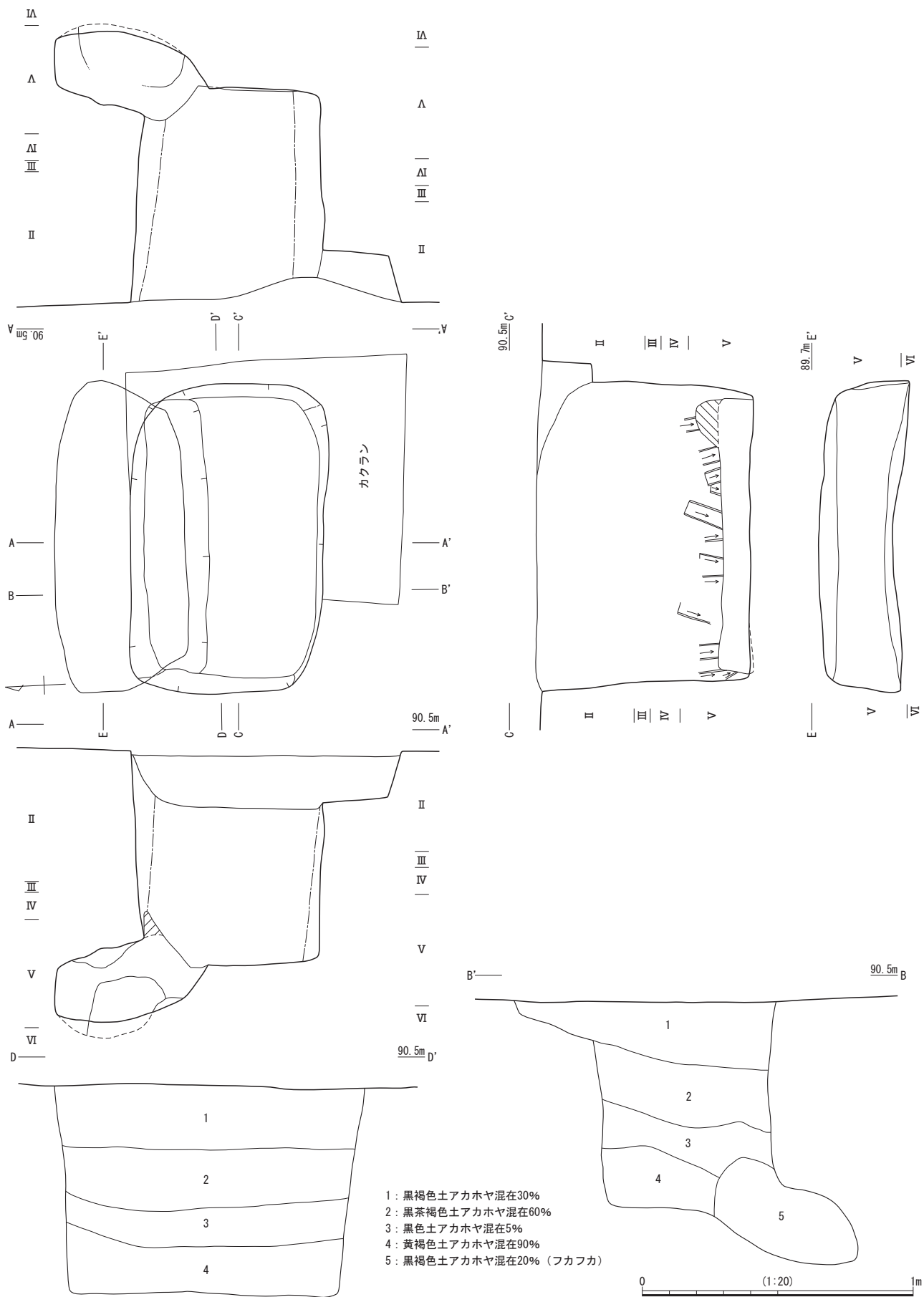
46号地下式横穴墓（第217図・第218図）

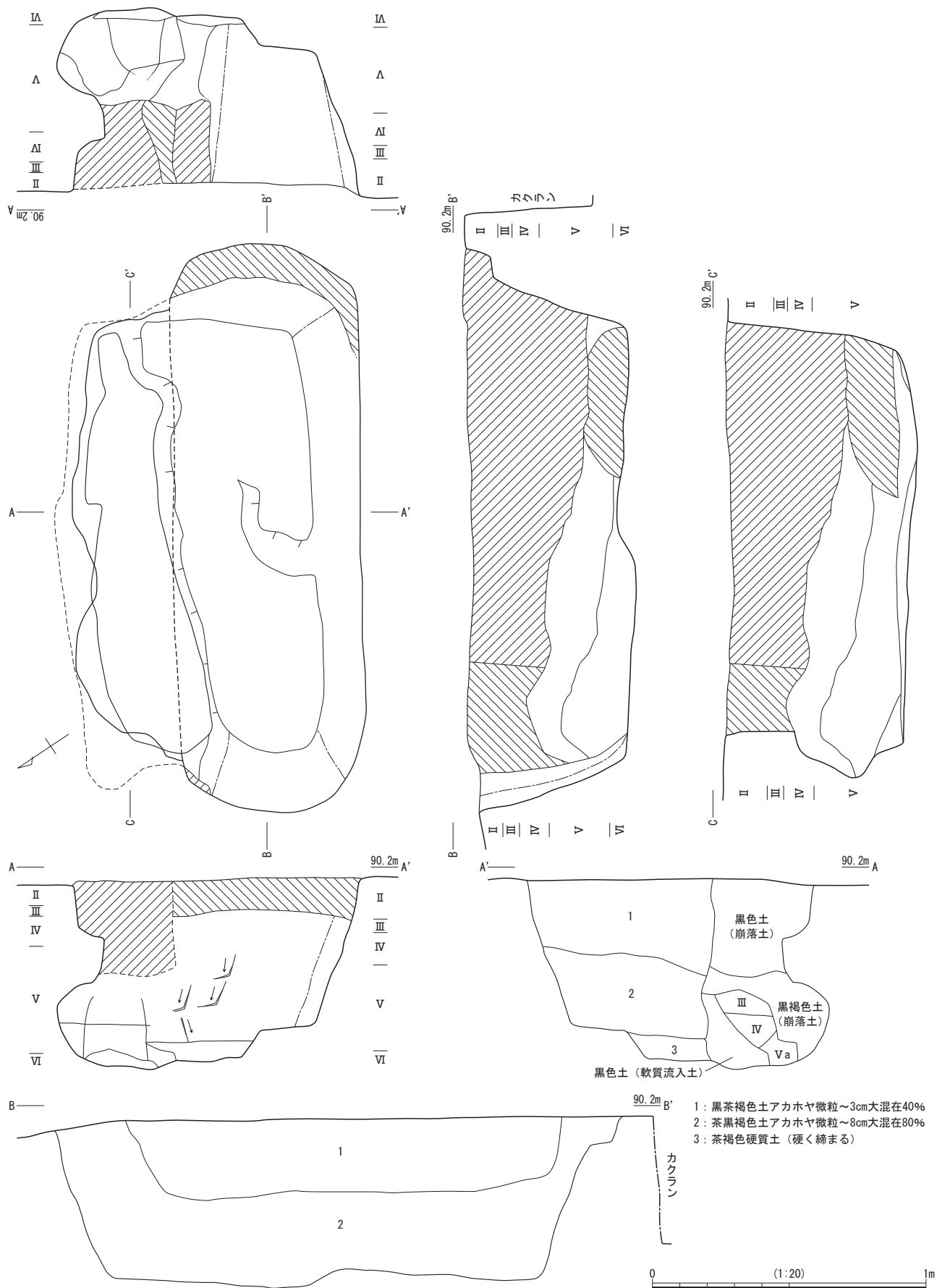
F-21区において検出される。約20cmの羨道部を有するもので、羨道部の床面に赤色顔料が点在する。玄室の天井は低く奥行きも深いものである。竪坑の壁面には縦方向の工具痕が明瞭に認められる。

47号地下式横穴墓（第219図～第223図）

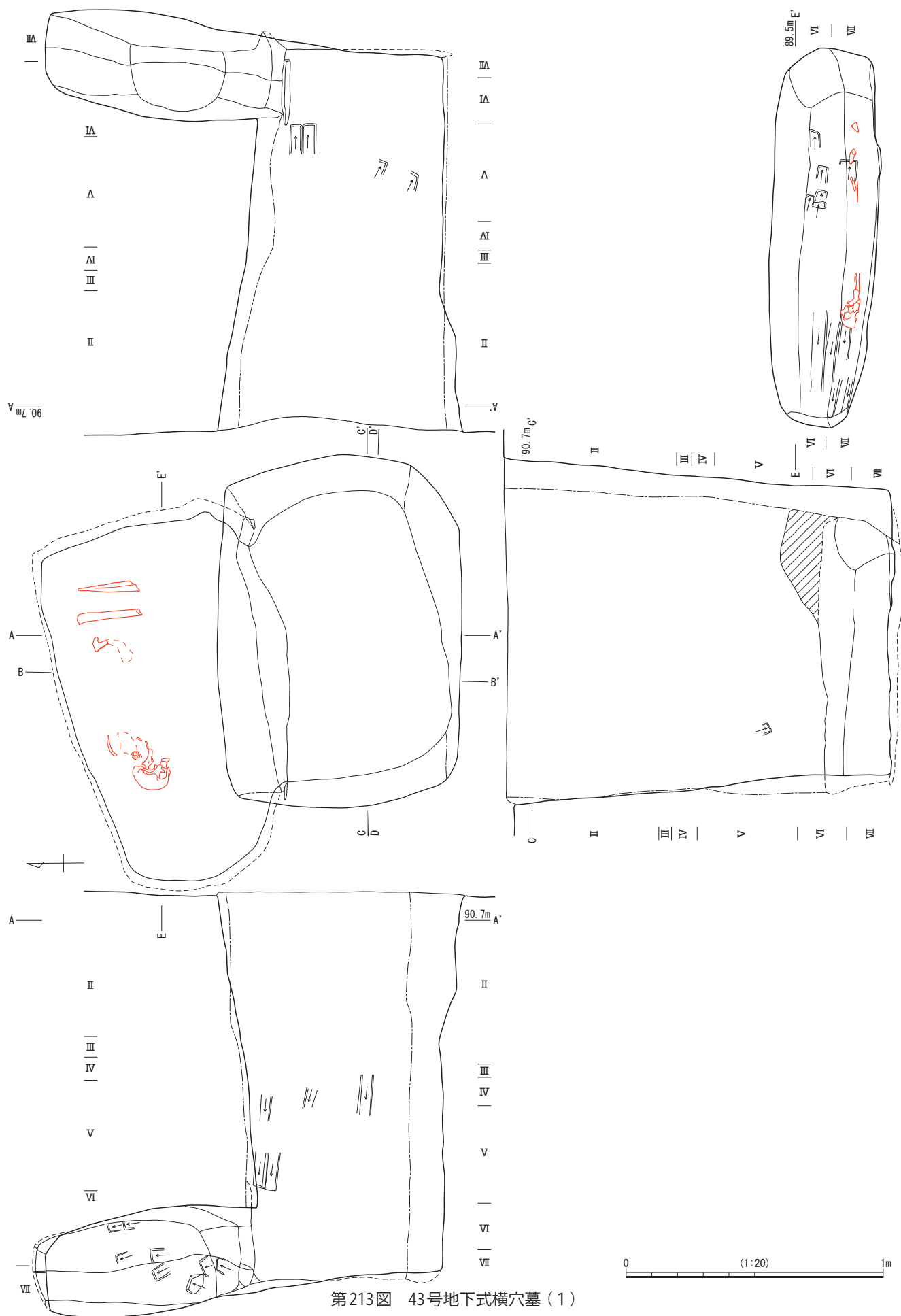
F-22区において検出される。羨門から開いて玄室へと至るものである。玄室の右奥（東側）に頭蓋片、中央に管骨が遺存する。

玄室の右奥部頭蓋片のすぐ横に鉄鏃18点が副葬されている。15点が柳葉鏃で3点が一段腸袂柳葉鏃である。鉄器は、鉄鏃20点（柳葉鏃14点、一段腸袂柳葉鏃3点、短頸鏃1点、茎部・矢柄のみ2点）である。1174・1175、1176・1177、1179～1183、1188・1189は錆により癒着しておりそのまま実測した。1174～1186、1188は柳葉鏃である。鏃身部長は6.7cm～5.0cmと大きさにややばらつきがある。ほとんどに矢柄が残存している。1174は矢柄の残存状態が良好で、14.7cm残存する。矢柄の一部に皮革と毛の付着が確認された。科学分析の結果、大型哺乳類の毛と考えられている。1175は残存状態が良好で、矢柄が6.1cm残存する。樹皮巻きは一部錆により不明瞭な部分があるものの、巻き始めと巻き終わりが確認できる。1176は鏃身部長6.7cmを測り、柳葉鏃の中で最も大型である。鏃身部最大幅部分が一部欠損する。鏃身部の一部に皮革の痕跡が確認できる。山形突起から矢柄の先端までが2.7cmを測り、矢柄が他の柳葉鏃より下に位置している。1177は鏃身部先端が欠損する。鏃身部の一部に皮革の痕跡が確認できる。1178は矢柄の残存状態が良く15cm残存する。樹皮巻きの巻き終わりが確認できる。矢柄の一部に蓆のような痕跡が付着する。1179～1183は全体に鏃を納めた容器と思われる有

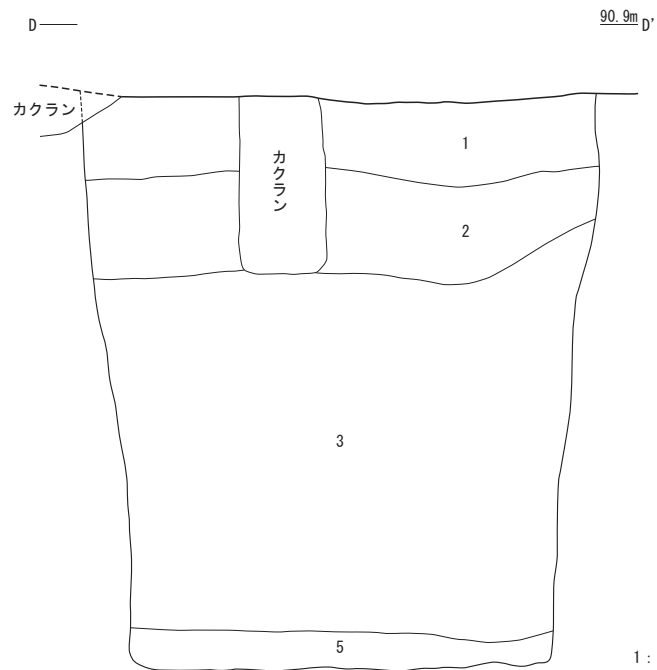




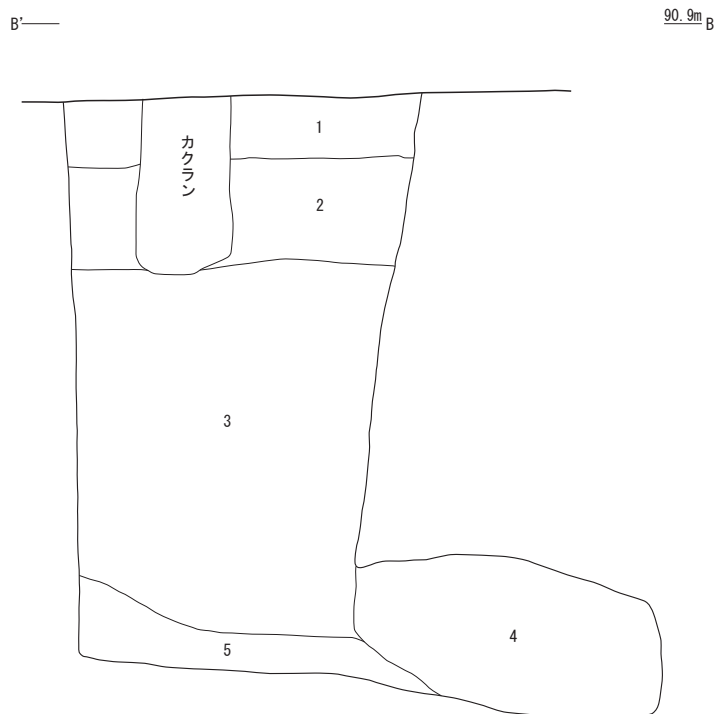
第211図 41号地下式横穴墓



第213图 43号地下式横穴墓(1)

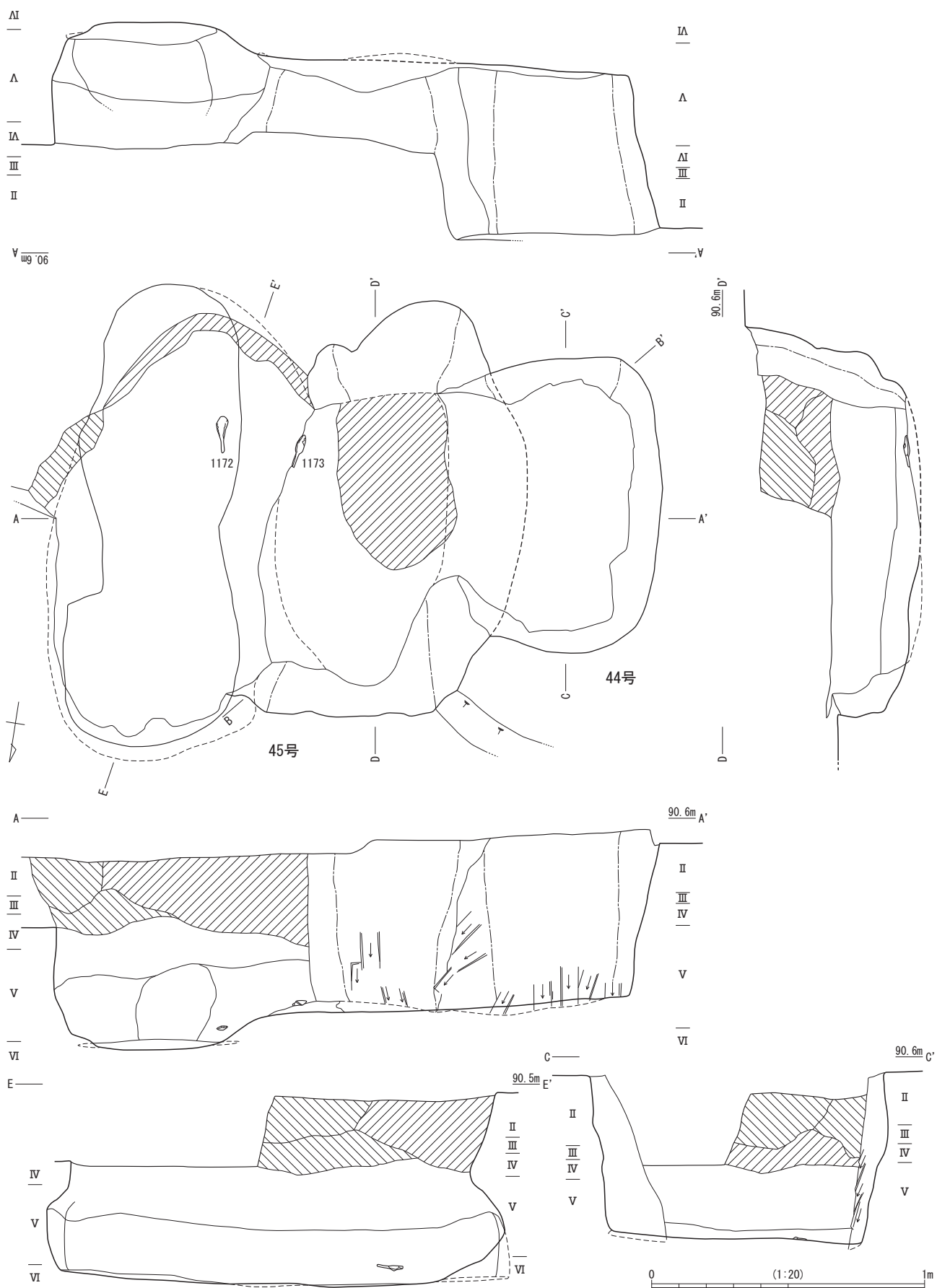


- 1 : 黒茶褐色土アカホヤ混在60%
- 2 : 黒褐色土アカホヤ混在10%
- 3 : 黒褐色土アカホヤ混在40%
- 4 : 黒色軟質土（フカフカ）
- 5 : 黒色硬質土（硬く締まる）

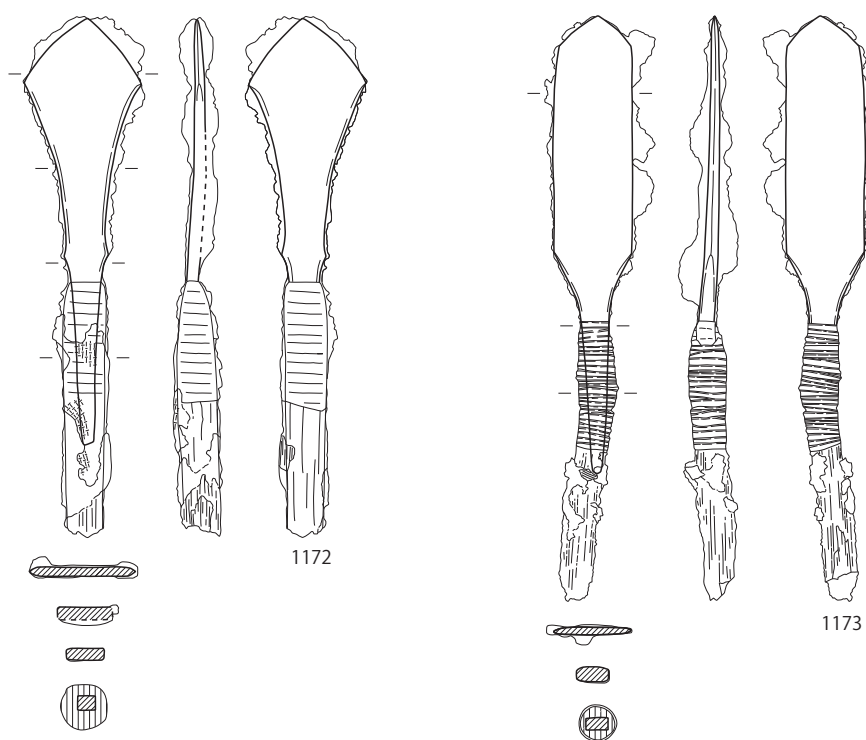
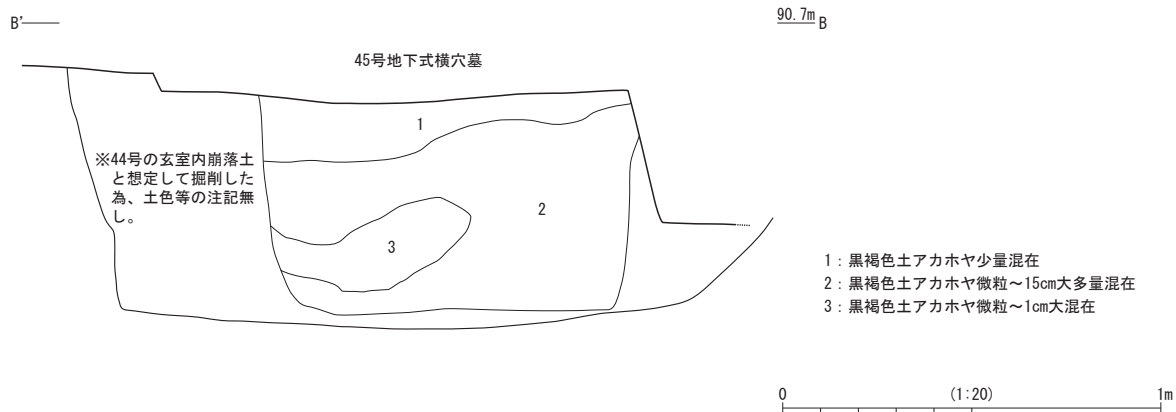


0 (1:20) 1m

第214図 43号地下式横穴墓（2）

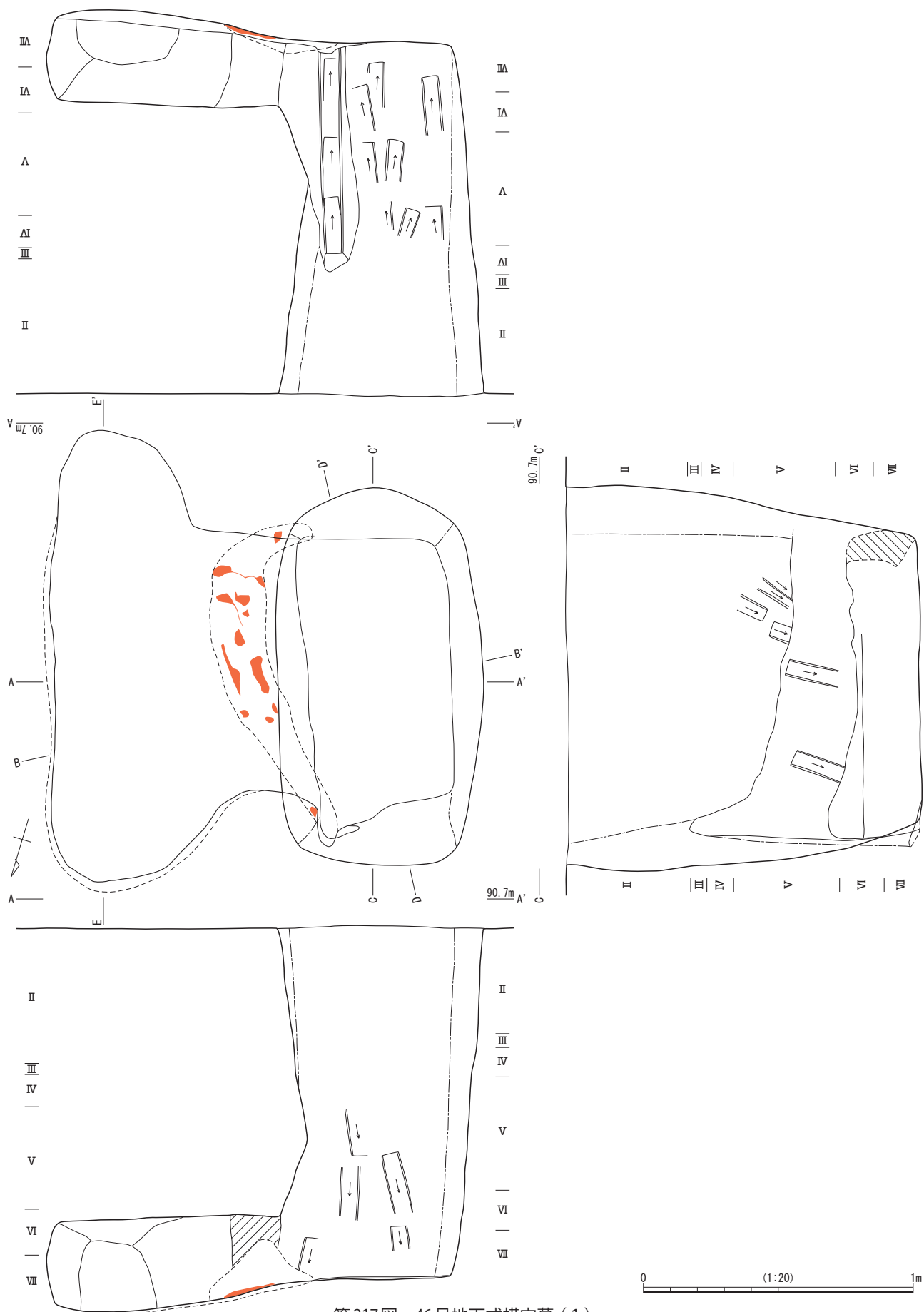


第215图 44号·45号地下式横穴墓(1)

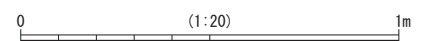
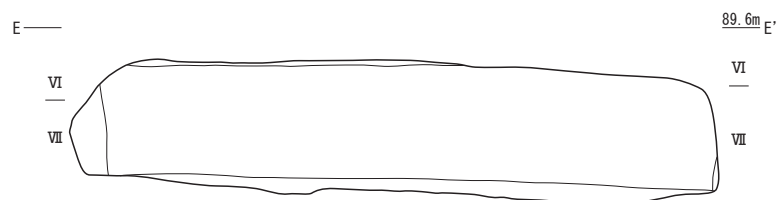
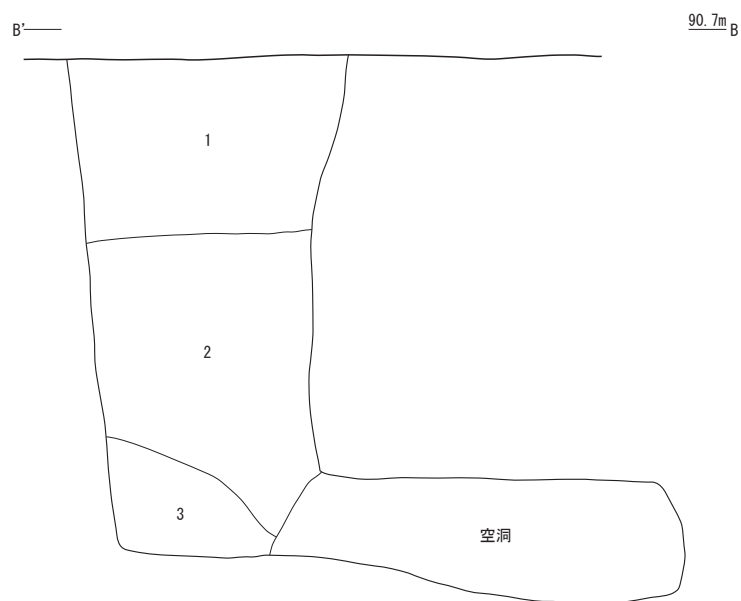
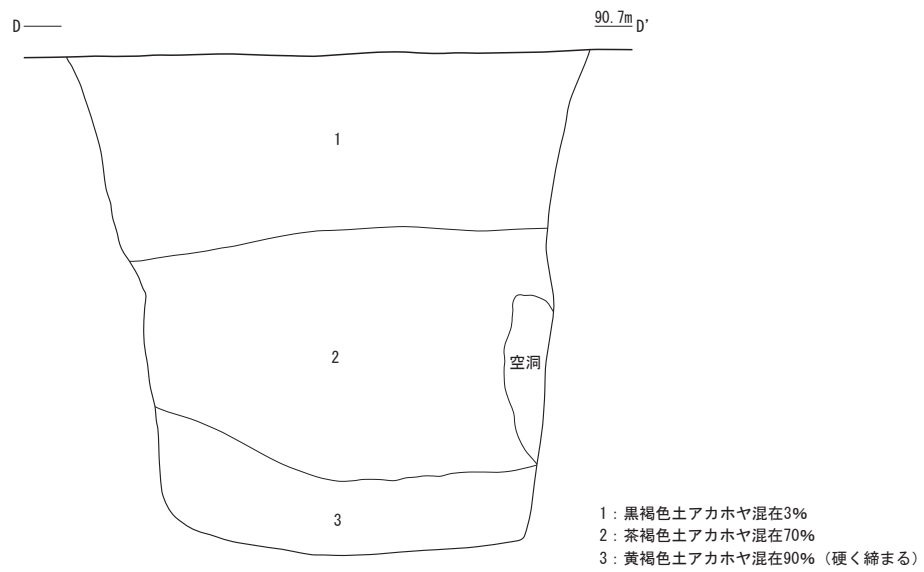


0 (1:2) 5cm

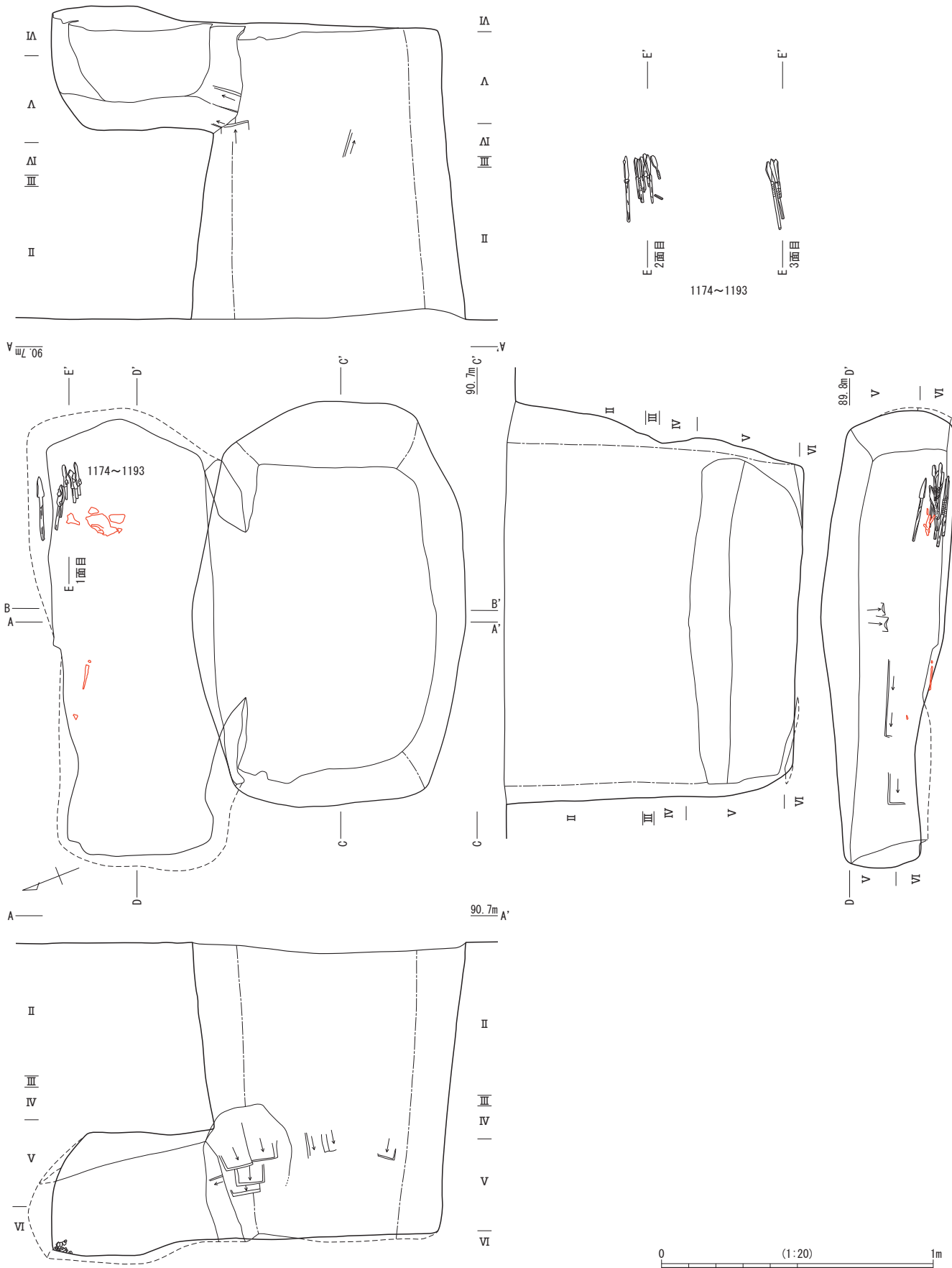
第216図 44号・45号地下式横穴墓(2)・副葬品



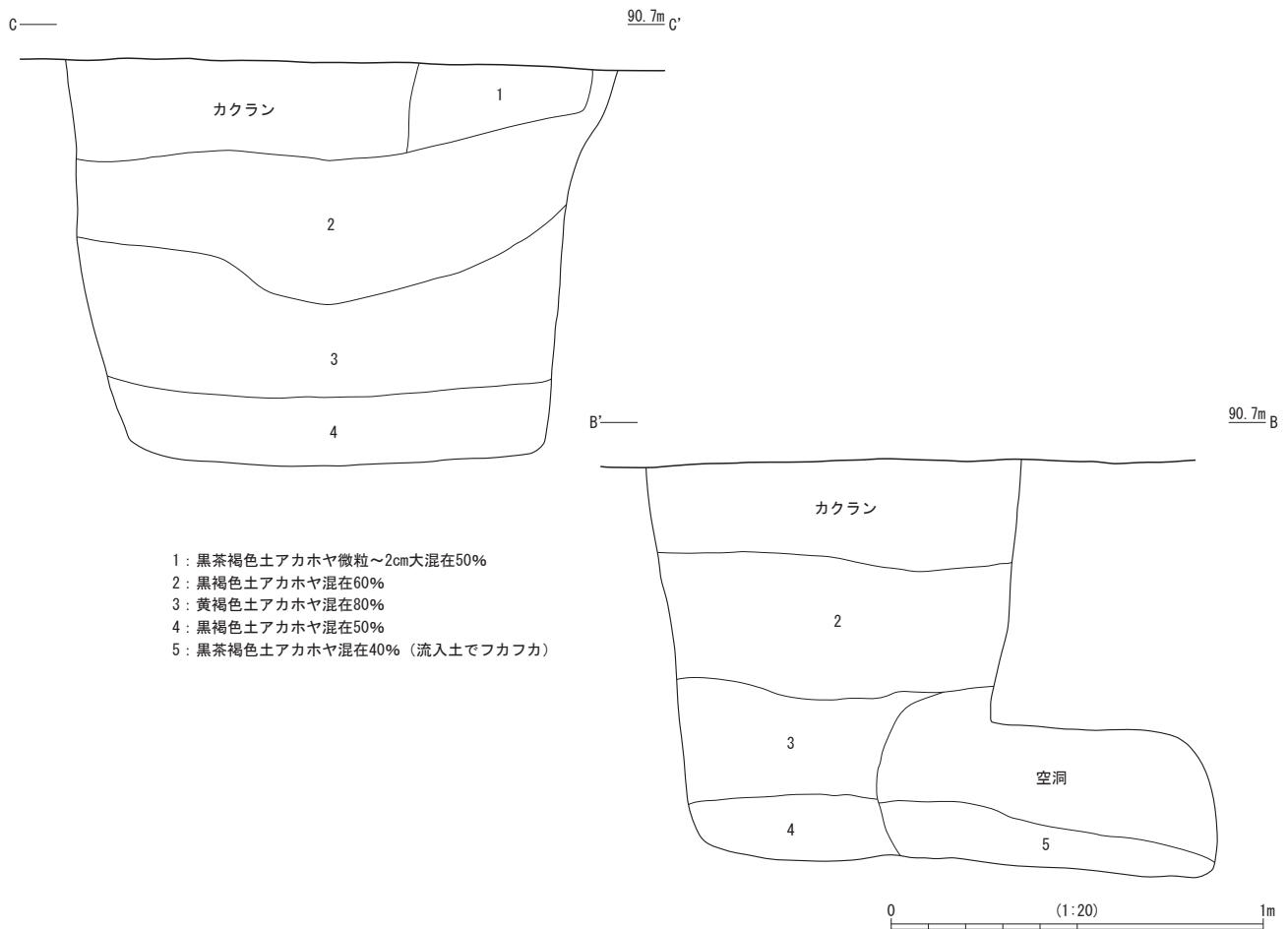
第217图 46号地下式横穴墓(1)



第218図 46号地下式横穴墓(2)



第219图 47号地下式横穴墓(1)



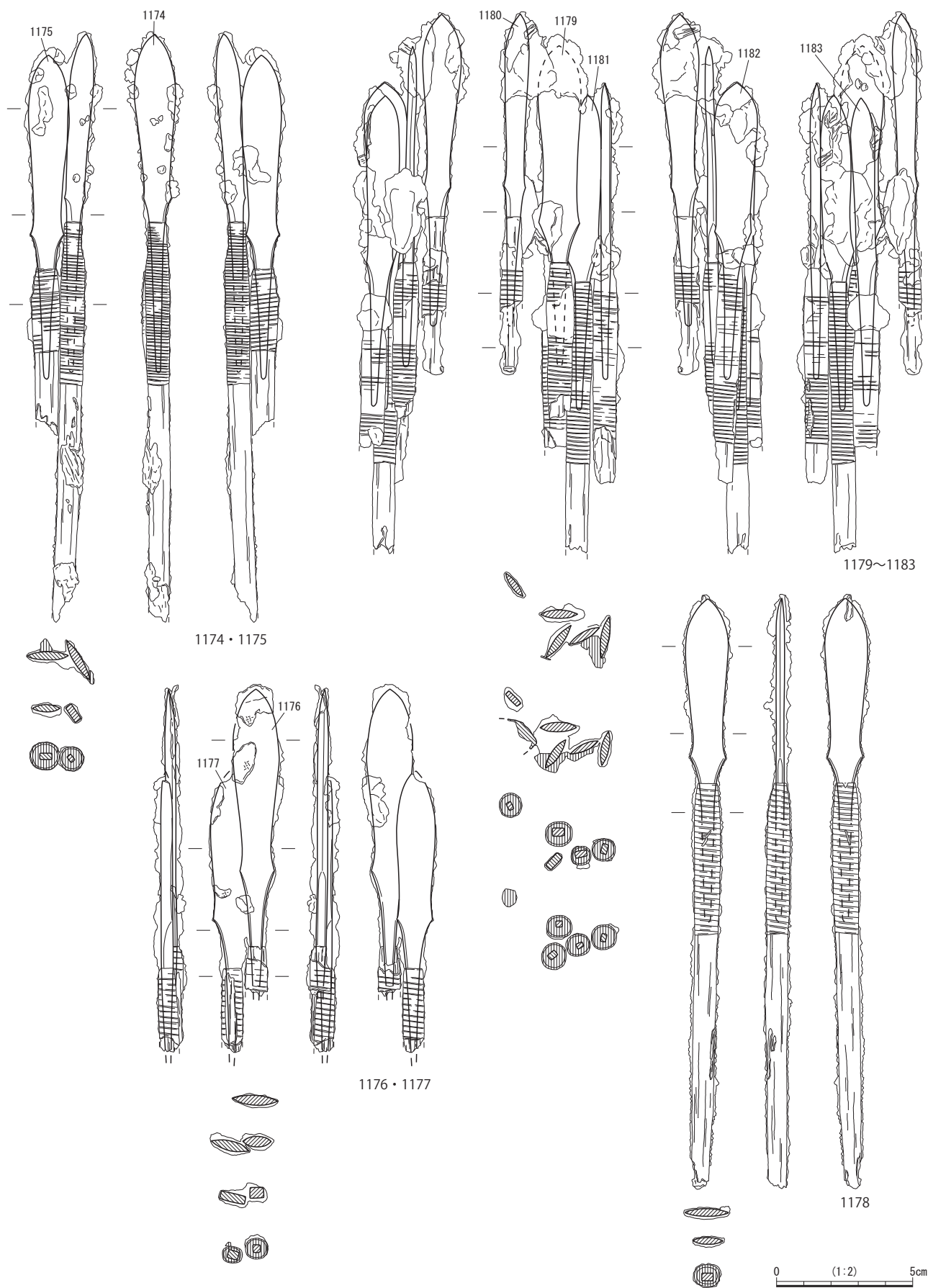
第220図 47号地下式横穴墓(2)

機質の痕跡が認められる。1179は銹により鏃身部先端が不明瞭である。1180は矢柄が残存するものの、大部分が欠損している。1181は鏃身部先端に木質が付着する。矢柄の残存状態が良く9.9cm残存し、樹皮巻の巻終わりが確認できる。1182は茎部と矢柄の先端部分が銹により一部膨張しており矢柄の始まりが不明であるが、確認できる部分でも8.1cm残存する。1183は茎部と矢柄の先端部分が銹により一部膨張している。矢柄の樹皮巻が確認できるものの、銹により一部不明瞭である。1184は茎部の全長が確認できるものの中で最も長く、7.4cmを測る。矢柄の残存状態が良く6.4cm残存し、樹皮巻の巻き始めと終わりが確認できる。矢柄の末端部分に別個体の矢柄と樹皮巻が付着する。1185は山形突起下のくびれが強く、山形突起が発達している。鏃身部先端に有機質の痕跡が確認できるが、劣化により材質は不明である。1186は鏃身部長が5.0cmを測り、柳葉鏃の中で最も小型である。鏃身部の大部分に皮革と毛の付着が確認できる。1188は銹化が進行しておりやや状態が悪い。鏃身部のくびれが強く山形突起が発達している。鏃身部のほぼ全体に皮革の付着が認められる。矢柄の残存状態が良く、9.4cm残存する。

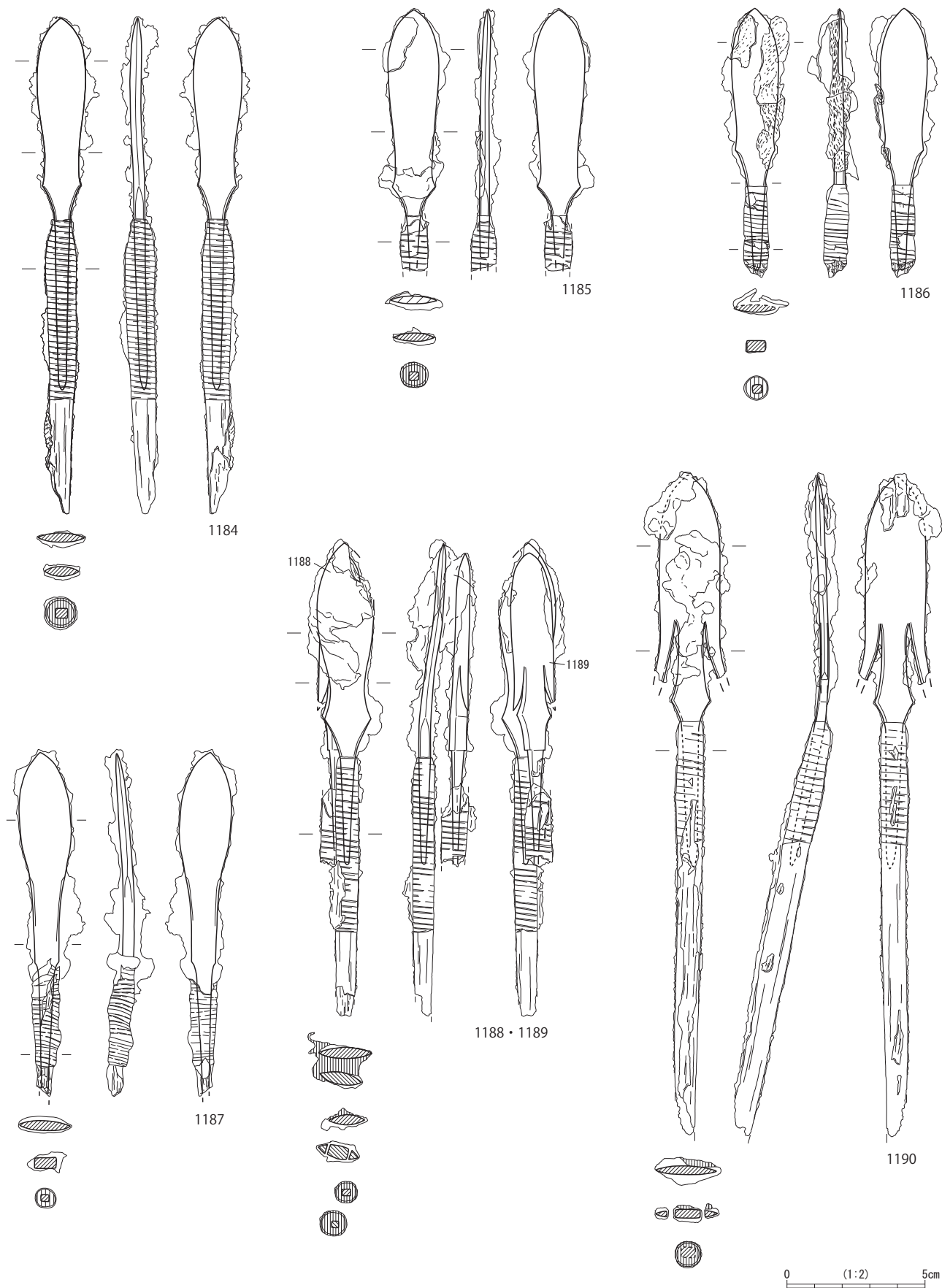
1187は短頸鏃である。鏃全長8cm、刃部長4.4cm、最大幅1.85cmを測る。刃部は平造りで、頸部の関部はナデ関である。

1189～1191は一段腸挟柳葉鏃である。腸挟はやや外側に広がり、山形突起を有する。1189は鏃身長5.8cm、鏃身部上部の最大幅1.6cmを測り、最も小型である。片方の腸挟の先端が欠損する。関部は角関である。1190は鏃身部長8.2cm、鏃身部上部の最大幅2.2cmを測り最も幅が広い。腸挟の両端が欠損する。鏃身部の広い範囲に布の痕跡が残る。矢柄の残存状態は良好で、14.7cm残存する。縦方向に幅0.2cmの植物繊維が4本付着している。束ねる糸は確認できないものの、蓆と思われる。1191は鏃身部長8.2cmを測り1190とほぼ同長だが、鏃身部上部の最大幅は1.6cmと細身で、くびれのない直線的な造りである。片方の腸挟が欠損している。銹により茎部が変形している。矢柄の始まりが不明であるが確認できる部分でも14cm残存する。

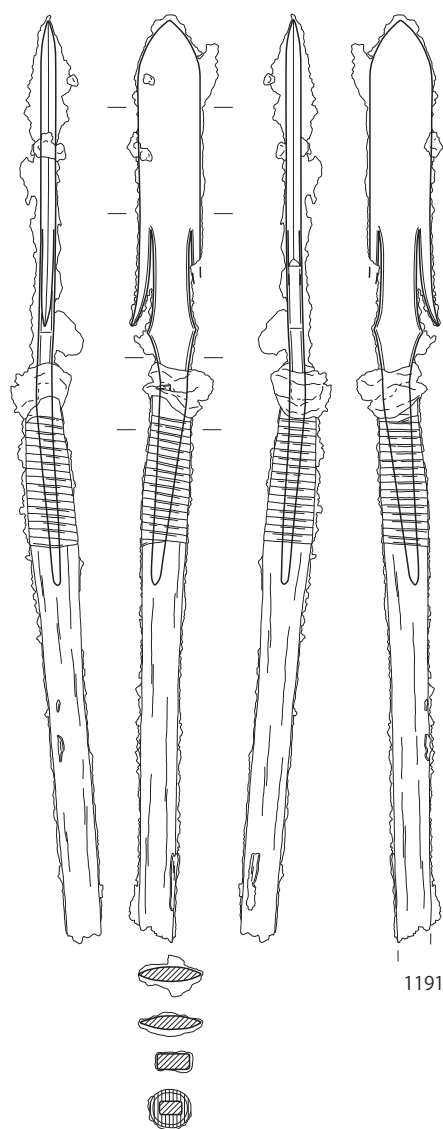
1192は鉄鏃の茎部片である。矢柄が残存しており樹皮巻が観察できるものの銹により単位が一部不明瞭である。1193は矢柄の破片である。樹皮巻が一部残存している。



第221图 47号地下式横穴墓副葬品(1)



第222图 47号地下式横穴墓副葬品(2)



第223図 47号地下式横穴墓副葬品(3)

48号地下式横穴墓(第224図)

G-22区において検出される。竪坑の羨門側に高さ約60cm、幅10cmの埴りが認められる。また、竪坑埋土の羨門側がフカフカした黒色土のため丸太材閉塞の痕跡と思われる。玄室の平面形は長方形で、左側のみ羨道が認められる。

49号地下式横穴墓(第225図)

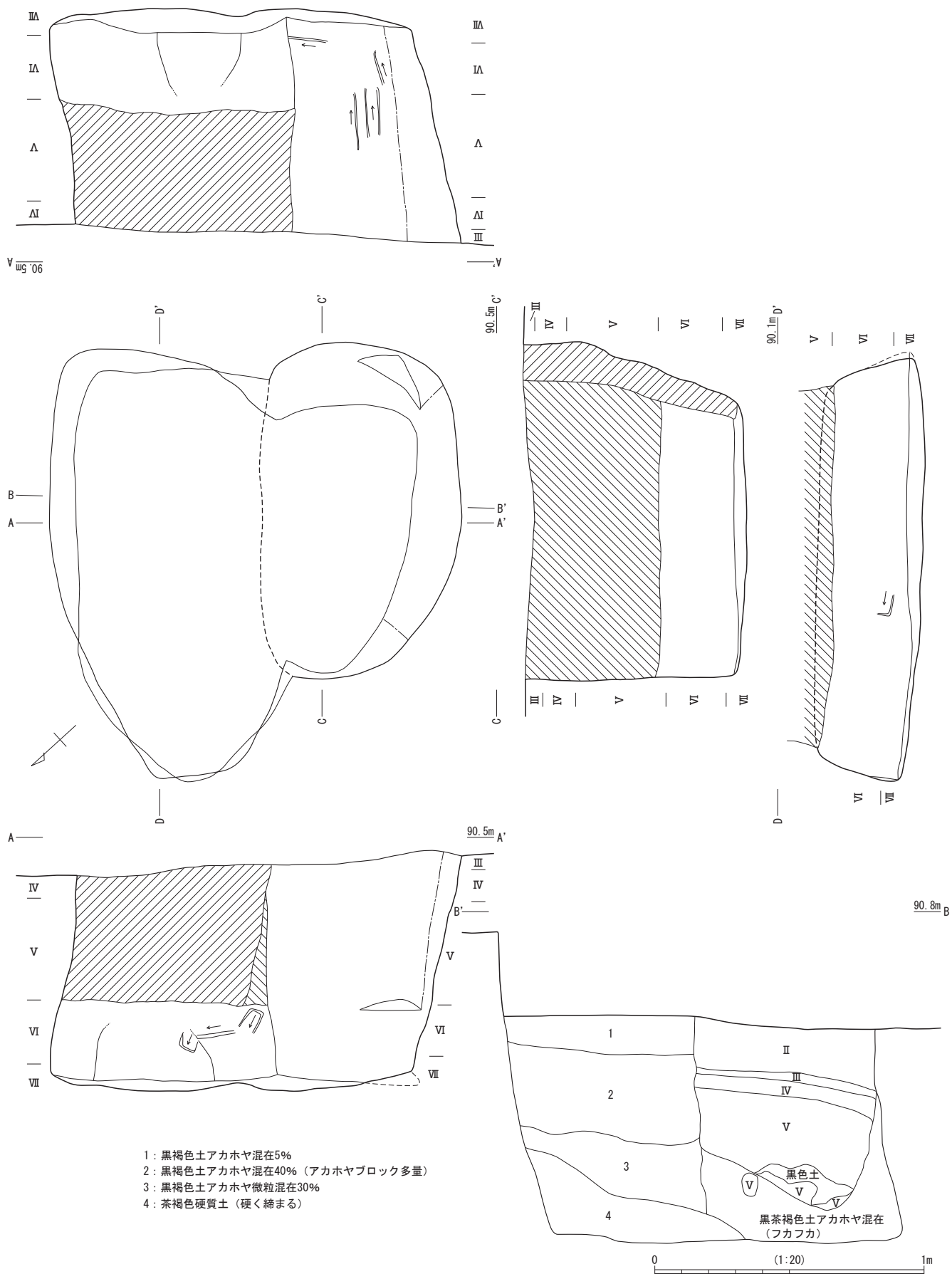
I・J-22区において検出された。竪坑は1.25m×0.8mと小さく玄室は不整形である。

50号地下式横穴墓(第226図・第227図)

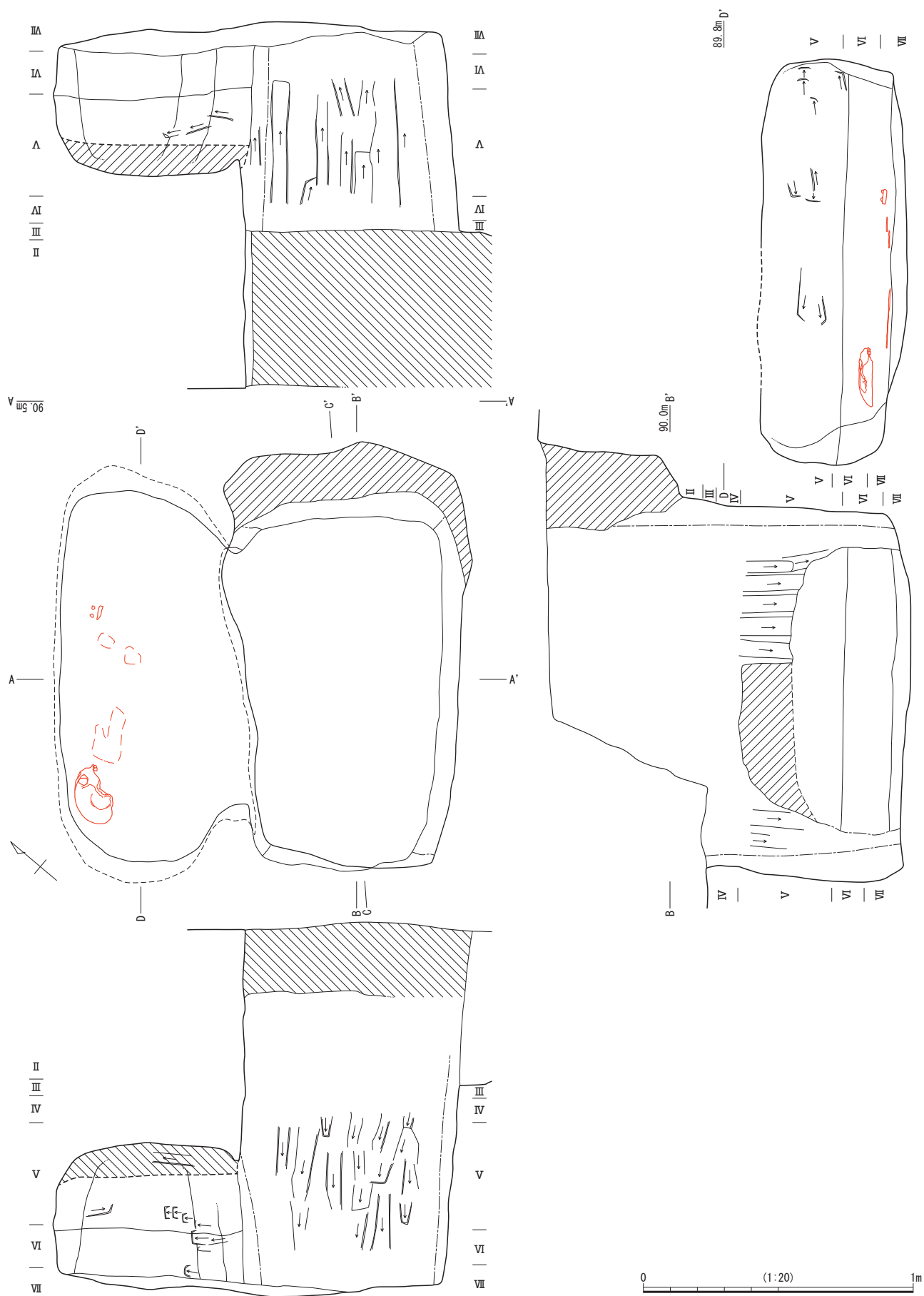
G-23区において検出される。羨門は竪坑からわずかに埴りがあり、10cmの羨道部を有する。竪坑の壁面には縦方向に細長い工具痕が明瞭に認められる。玄室の左奥(西側)に頭位を置いた人骨が遺存している。頭蓋と体の一部が骨粉状であるが、熟年女性と思われる。

51号地下式横穴墓(第228図～第230図)

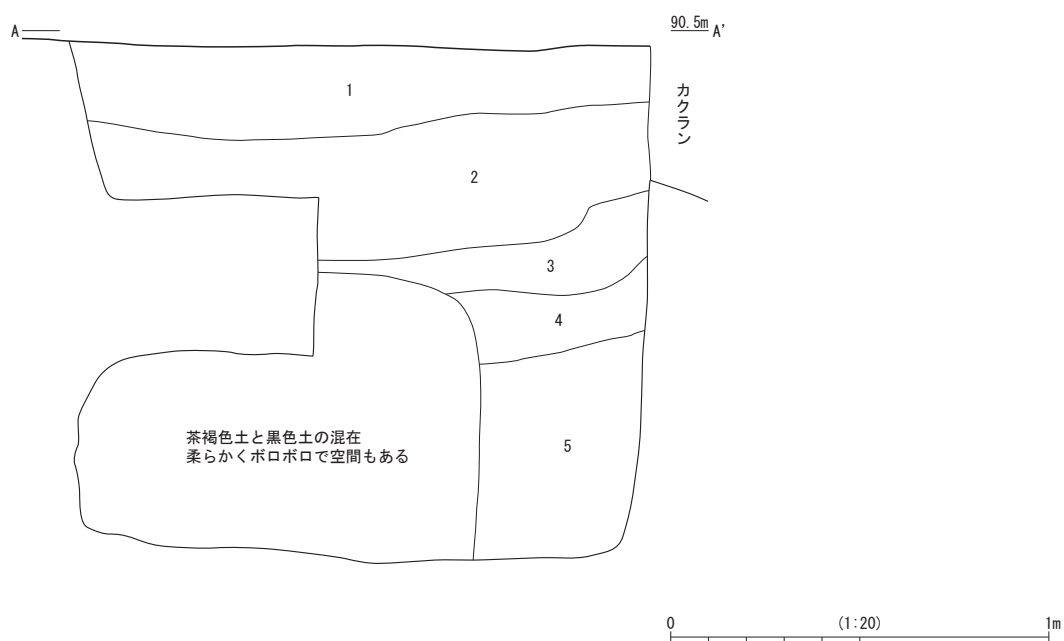
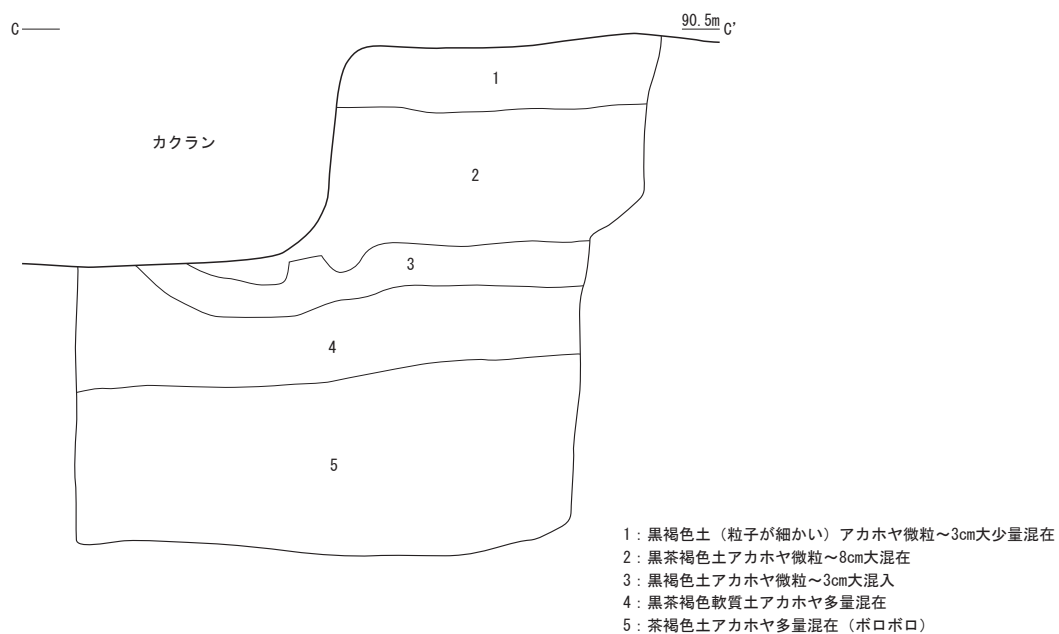
H-24区において検出される。羨門は竪坑の左隅に設けられ、玄室は1.38mの楕円形を呈する。玄室のほぼ中央部に鉄鏃2点が重なり、その奥に大小の剣2点が重ねられて副葬してある。羨門及び玄室が竪坑の中央からずれる例はこれまでに見られなかったものである。1194は全長57.2cmと長めの鉄剣である。刃部43cm、茎部14.2cmである。刃部の断面は凸レンズ状であるが、鏃は鞘と思われる木質に隠れて見えないが断面の形状から無いものと思われる。厚さは0.3～0.5cmである。刃部の幅はほぼ均一で0.5cmで先端部は緩やかに細くなり切っ先へと至る。関部は左右対称で直角関を呈する。茎部の幅は2cmとほぼ均一で厚さ0.3cmである。目釘穴は2孔で、関部から下方へ8cmと12cmの位置に径0.4cmの孔が穿たれる。刃部は2枚合わせの鞘木に納められていたものと思われる。鞘口は関部を中心に上下2cmと思われる。柄縁は鞘口から下方へ3cmで



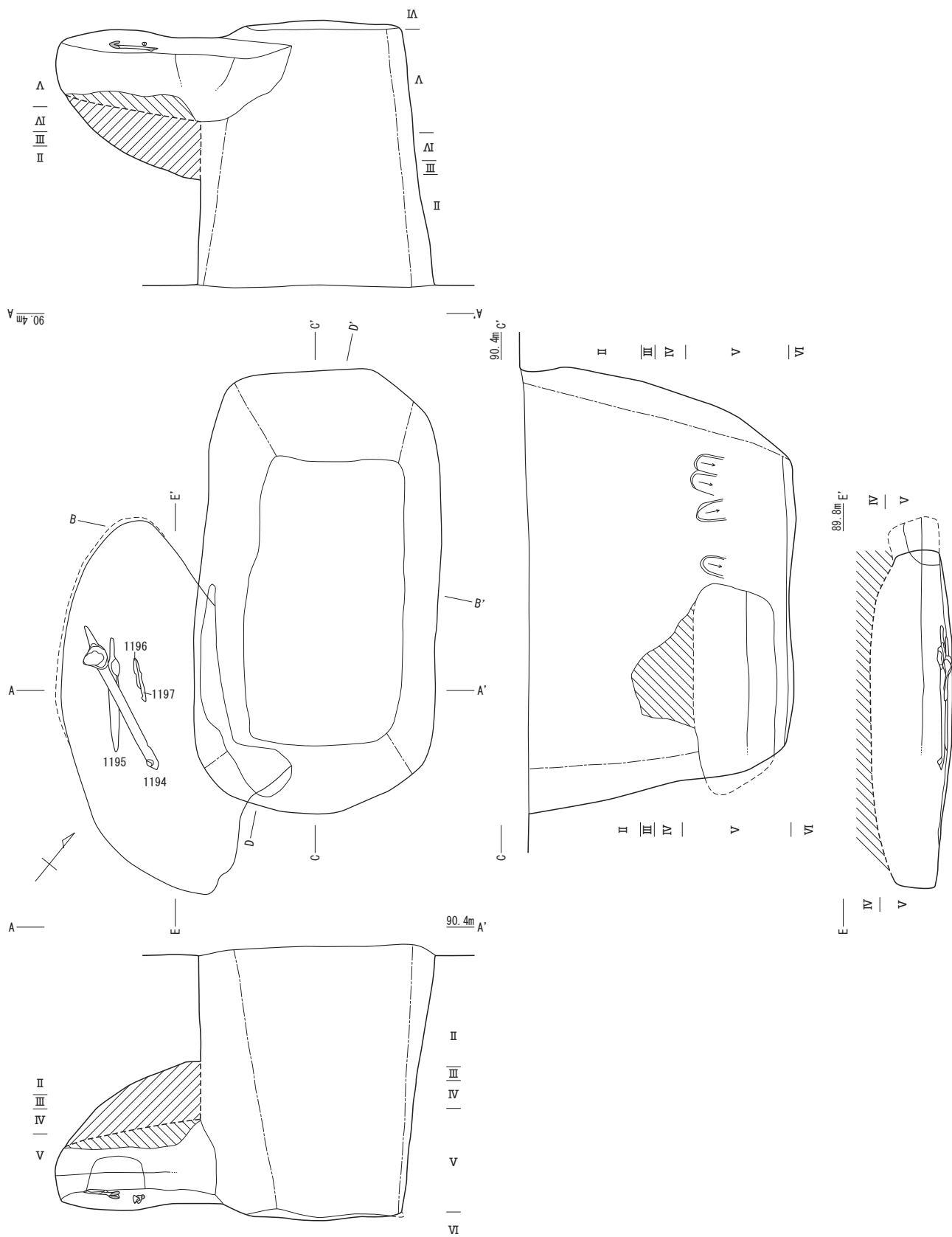
第225図 49号地下式横穴墓



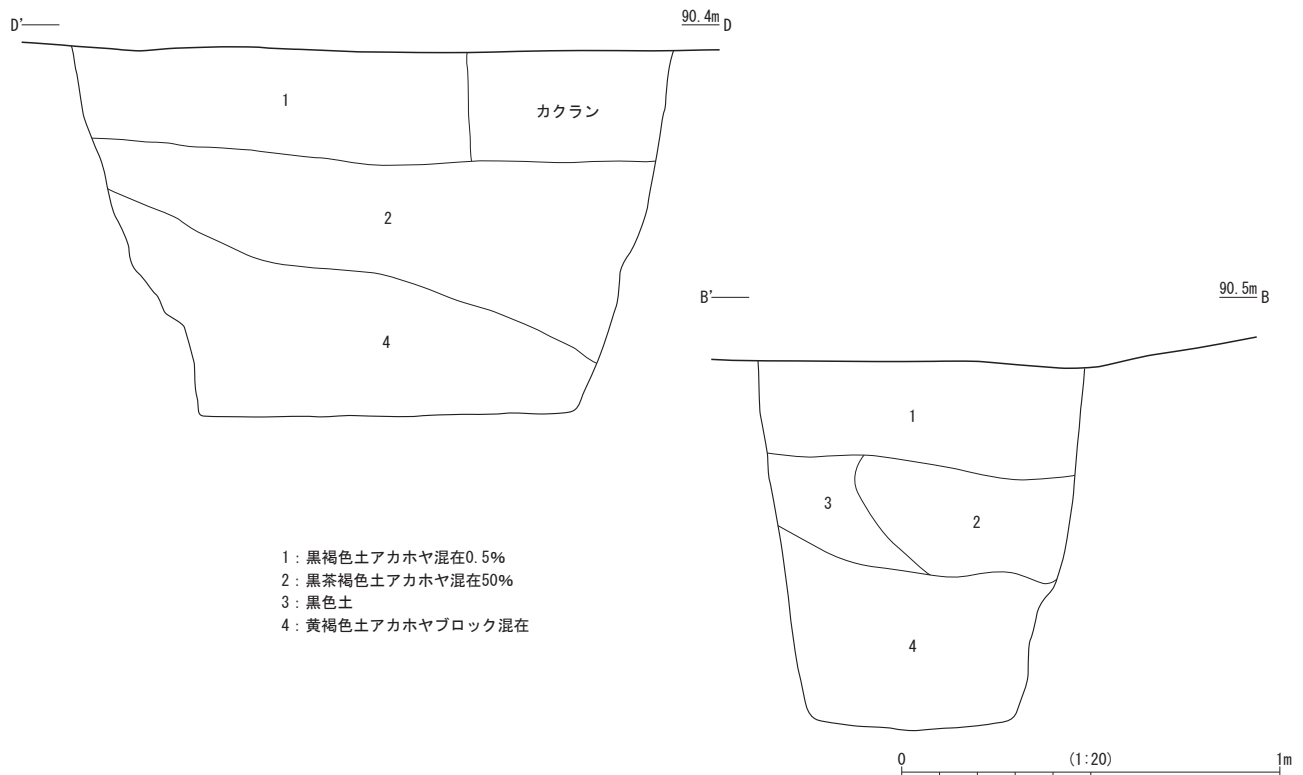
第226图 50号地下式横穴墓(1)



第227図 50号地下式横穴墓（2）



第228图 51号地下式横穴墓(1)



第229図 51号地下式横穴墓(2)

約4cmの突起が認められる。しかしながら銹のため形状は不明である。柄間にも一部木質が残存する。木質等の科学分析の結果、鞘の一部に布痕跡、茎部に柄巻きの糸の痕跡が観察されている。鞘木と柄木から採取された木質はヒノキ科で杉の可能性が高いという結果がでている。柄木の木片は樹種の識別は困難であるが、広葉樹散孔材と考えられる。1195は全長40cmの鉄剣である。刃部28.6cm、茎部11.4cmである。刃部は凸レンズ状であるが鎬は明瞭ではない。厚さは0.3～0.5cmである。刃部の幅は関部で2.4cm、先端部で1.8cmで切っ先はやや丸みを帯びる。関部は左右対称で直角関を呈する。茎部は幅1.5cm、厚さ0.3cmで、下方がやや湾曲する。目釘孔は2孔で関部から下方へ4.1cmと9.9cmの位置に0.3cmの孔が穿たれる。鞘木には2枚合わせの合わせ口がはずれ、合わせ目が観察される。鞘口から上方4.5cmの幅には鞘の表面に紐の帯が巻かれた状態が認められる。鞘口は関部から上方へ2.1cm幅である。柄縁部は銹のため肉眼では見えないがX線写真により確認できる。釦を持つ突起付の装具であったものと考えられる。柄木も2枚合わせと思われる、一部紐による柄巻きが観察される。科学分析によると、刃部においては布の痕跡が観察され、平織と考えられるものもある。組紐は0.21cmの平組紐と考えられ、柄巻きの糸も観察された。鞘木についてはヒノキ科と考えられる。1196・1197はいずれも圭頭鏃であるが、銹に

より癒着しておりそのまま実測した。1196は全長15.8cm、鏃全長13.1cm、刃部幅3.5cmである。関は緩やかにすばまるナデ関で、厚さは刃部最大幅で0.3cm、茎部の厚さは0.4cmで有機物が付着している。口巻きは認められるが銹のために不明瞭である。端部において一部矢柄の痕跡も認められる。1197は全長(鏃全長)11cm、刃部幅3.1cmである。関はナデ関で厚さは刃部最大幅で0.2cmと薄い。茎部の厚さは0.4cmで明瞭ではないが口巻きが認められる。

52号地下式横穴墓(第231図)

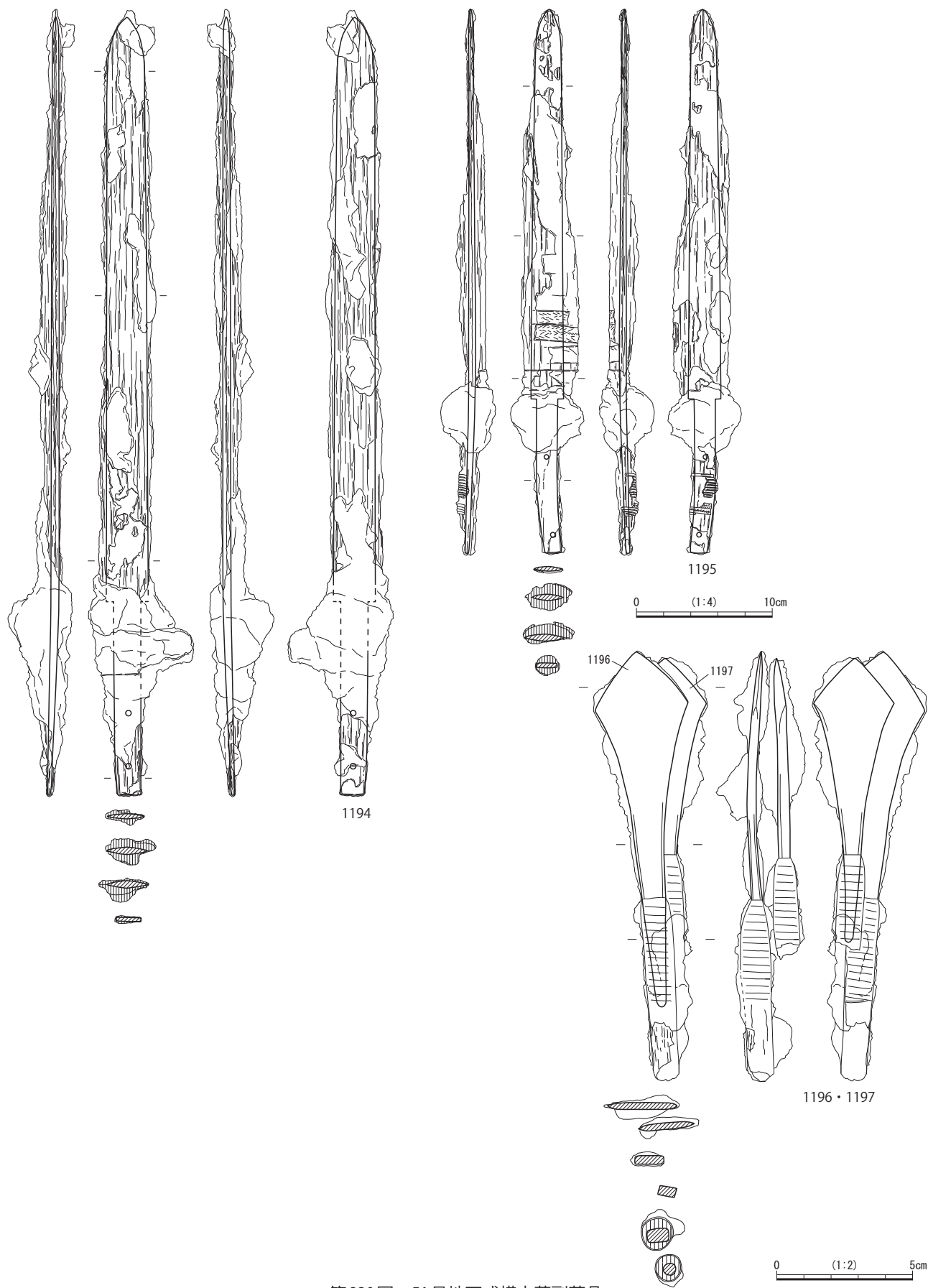
J-25区において検出される。竪坑・玄室の北西側は立木の抜根の際に攪乱を受けているため全容は明らかでない。玄室は天井が剥落しており高さは不明であるが奥行きは85cmと深い。

⑭ 1-②-b類地下式横穴墓

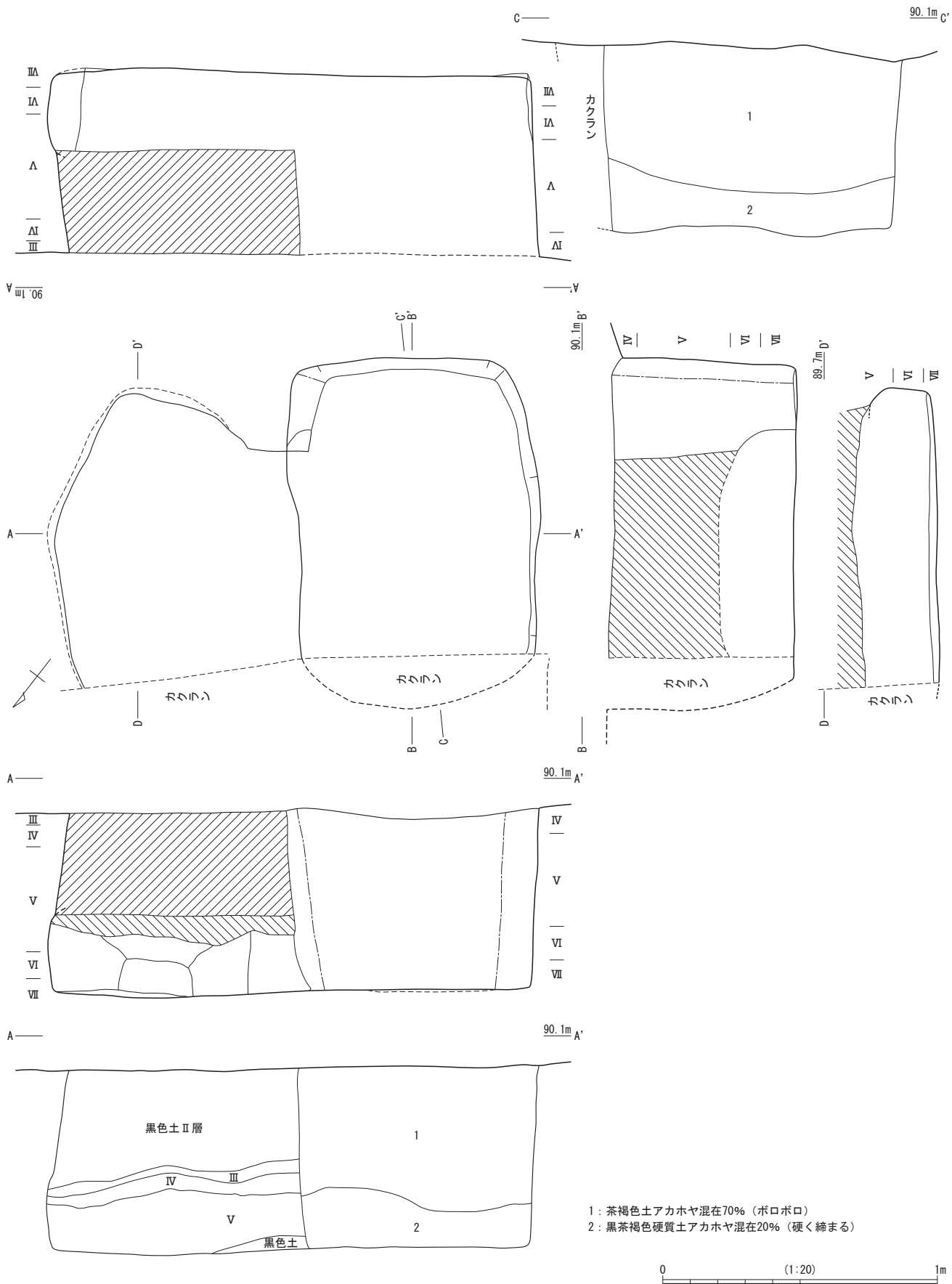
1-②-b類に分類される地下式横穴墓は53号と74号の2基であるが、74号は後述する。

53号地下式横穴墓(第232図)

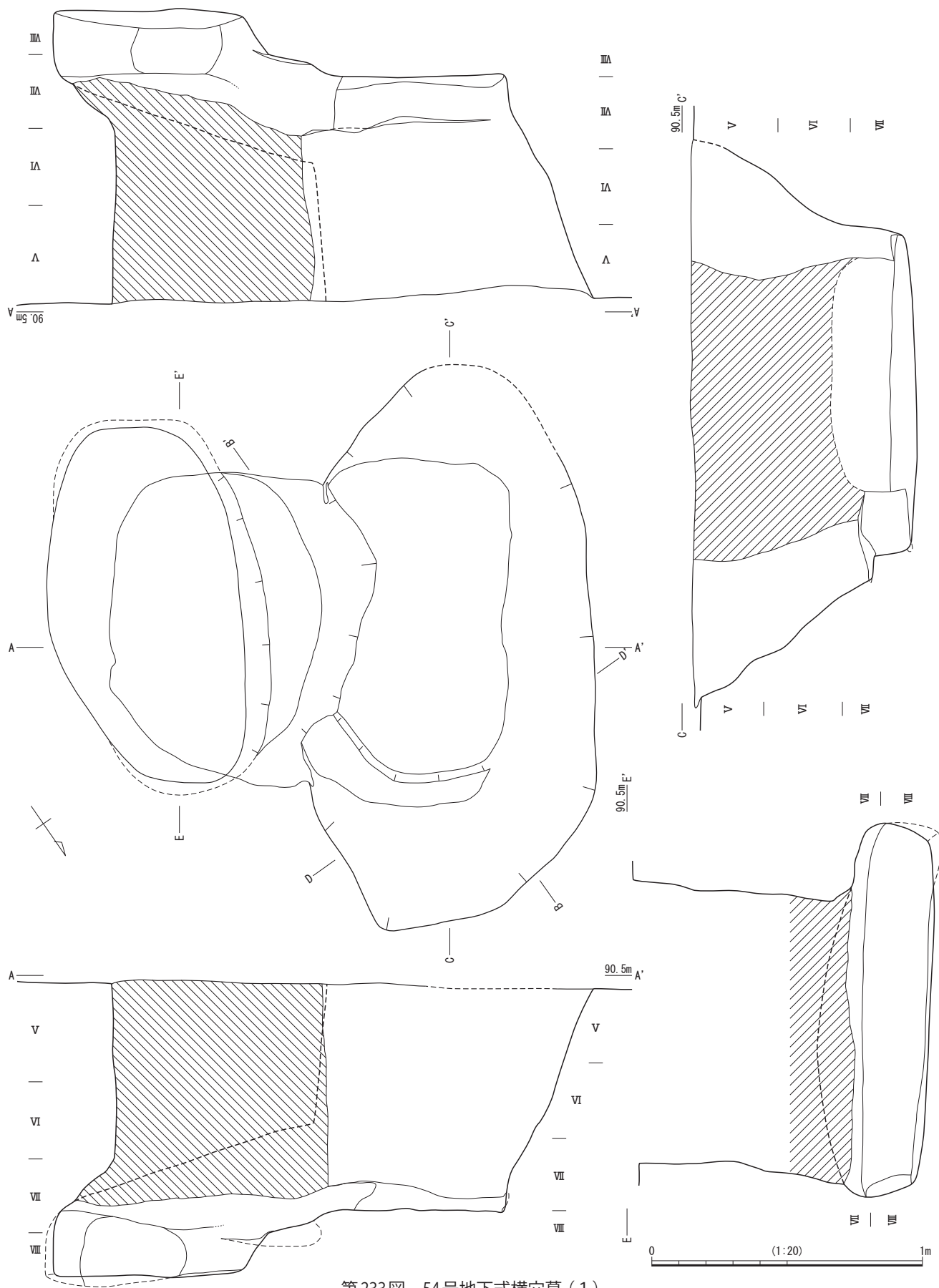
F-20区において検出される。竪坑内の羨門側を一段高くし、羨門の下位から玄室へ下ってゆくものである。玄室の左奥に20cm×25cmの範囲に赤色顔料の塊(丹)が見られる。こちらが頭位であったものと考えられる。



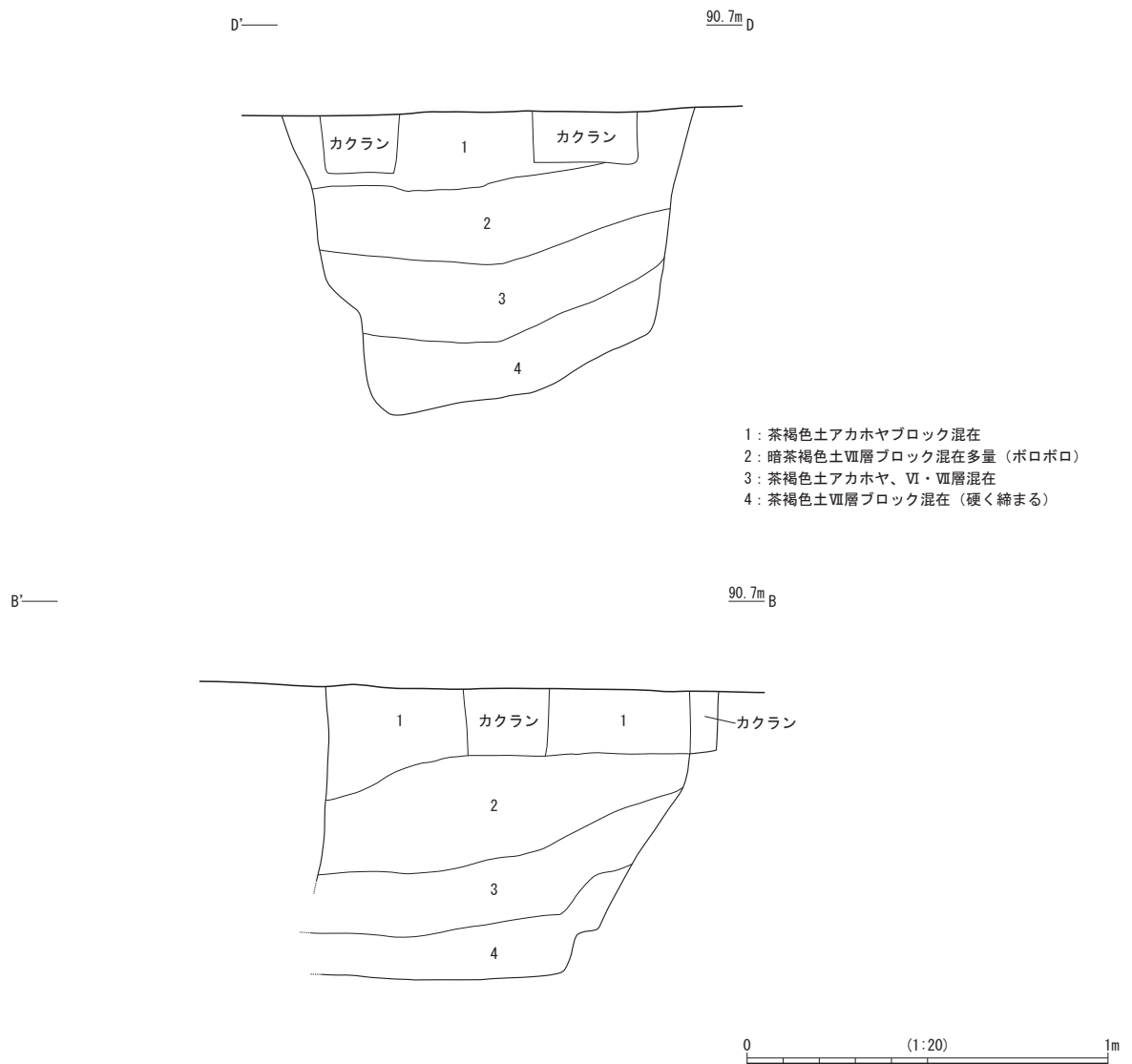
第230图 51号地下式横穴墓副葬品



第231図 52号地下式横穴墓



第233图 54号地下式横穴墓(1)



第234図 54号地下式横穴墓 (2)

⑮ 1-②-c 類地下式横穴墓

1-②-c 類に分類される地下式横穴墓は54号～56号の3基である。

54号地下式横穴墓 (第233図・第234図)

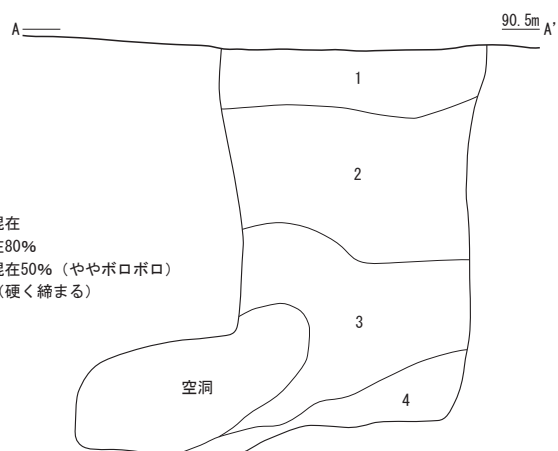
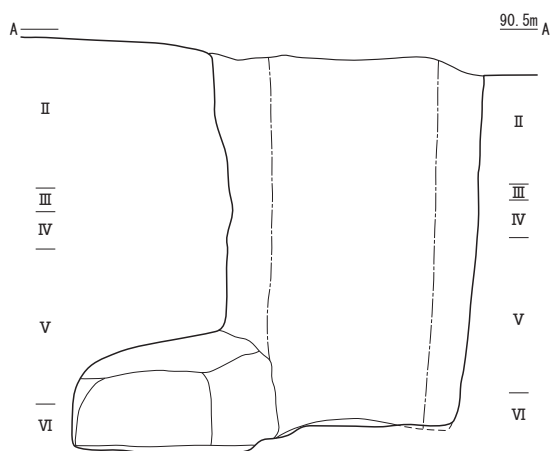
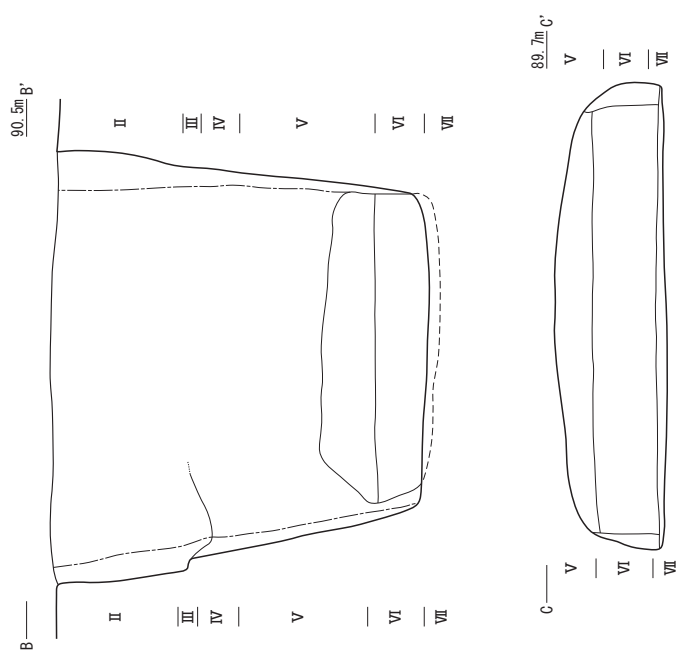
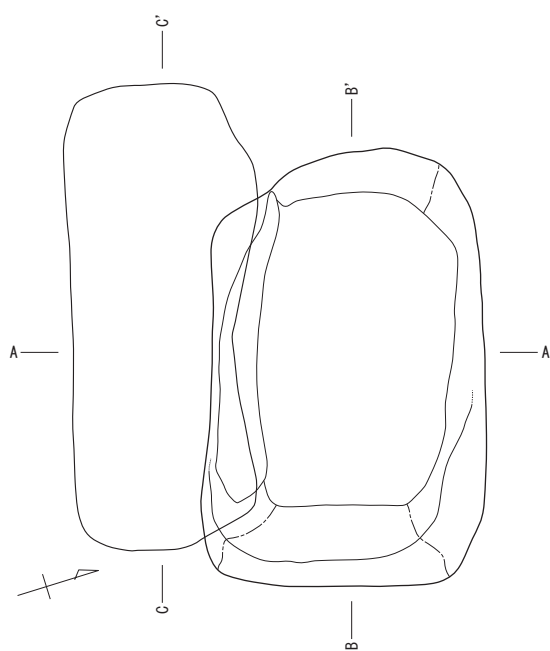
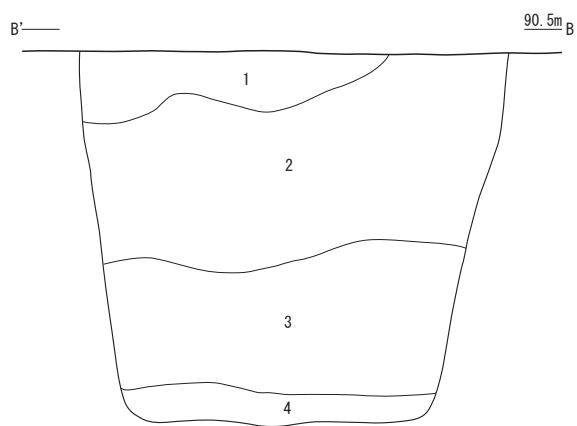
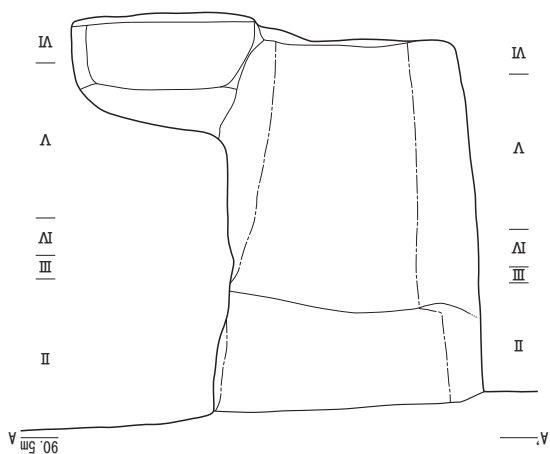
F-18区において検出される。竪坑が2.1m×1mの不整形な楕円形で、玄室の規模に比して大きなものである。羨門の下位でわずかに凹み、玄室は一段下がっている。玄室の天井部は剥落しているが、羨門の下位との関係で見ると、玄室の天井部は斜めになっていたものと想定される。

55号地下式横穴墓 (第235図)

G-21区において検出される。玄室はやや右側にかたよっている。また、羨門の下位においてわずかに凹んで玄室に至る。竪坑の羨門寄りから玄室内は空洞になっており、木材による閉塞が想定される。

56号地下式横穴墓 (第236図・第237図)

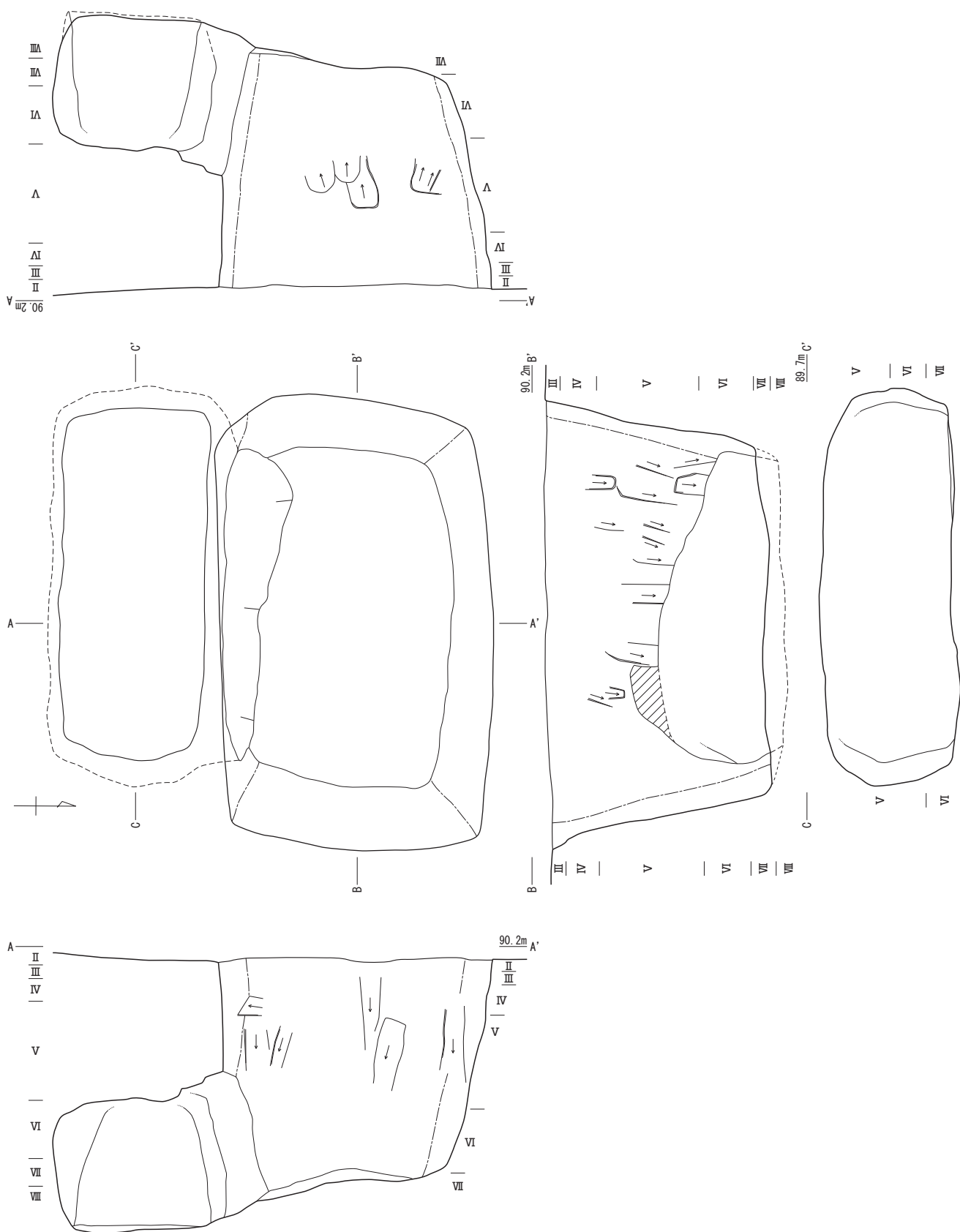
I-24区において検出される。玄室に比べて竪坑が大きいタイプである。竪坑の壁面には縦方向の工具痕が明瞭に観察される。また、竪坑の西側に赤色顔料の塊 (丹) が置いてある。



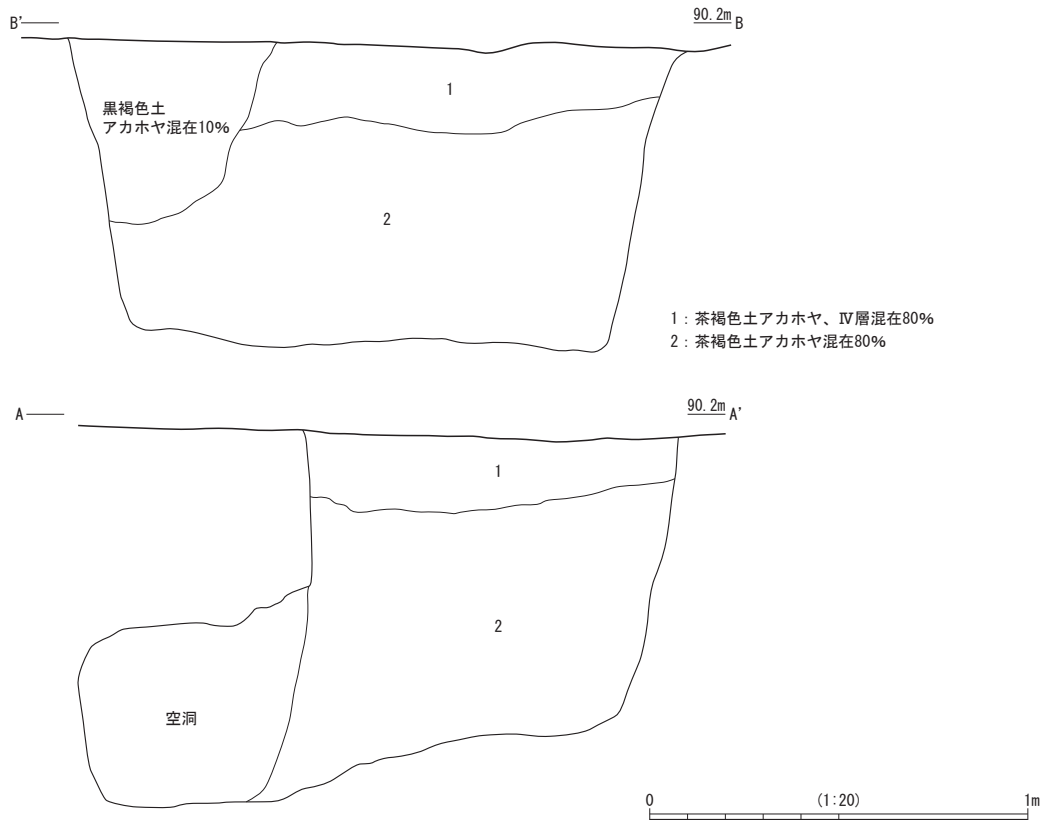
- 1 : 黒色土アカホヤ微量混在
- 2 : 茶褐色土アカホヤ混在80%
- 3 : 黒茶褐色土アカホヤ混在50% (ややボロボロ)
- 4 : 黒茶褐色土VI・VII層 (硬く締まる)

0 (1:20) 1m

第235図 55号地下式横穴墓



第236图 56号地下式横穴墓(1)



第237図 56号地下式横穴墓(2)

⑩ 2-①-a 類地下式横穴墓

2-①-a 類に分類される地下式横穴墓は57号～60号の4基である。

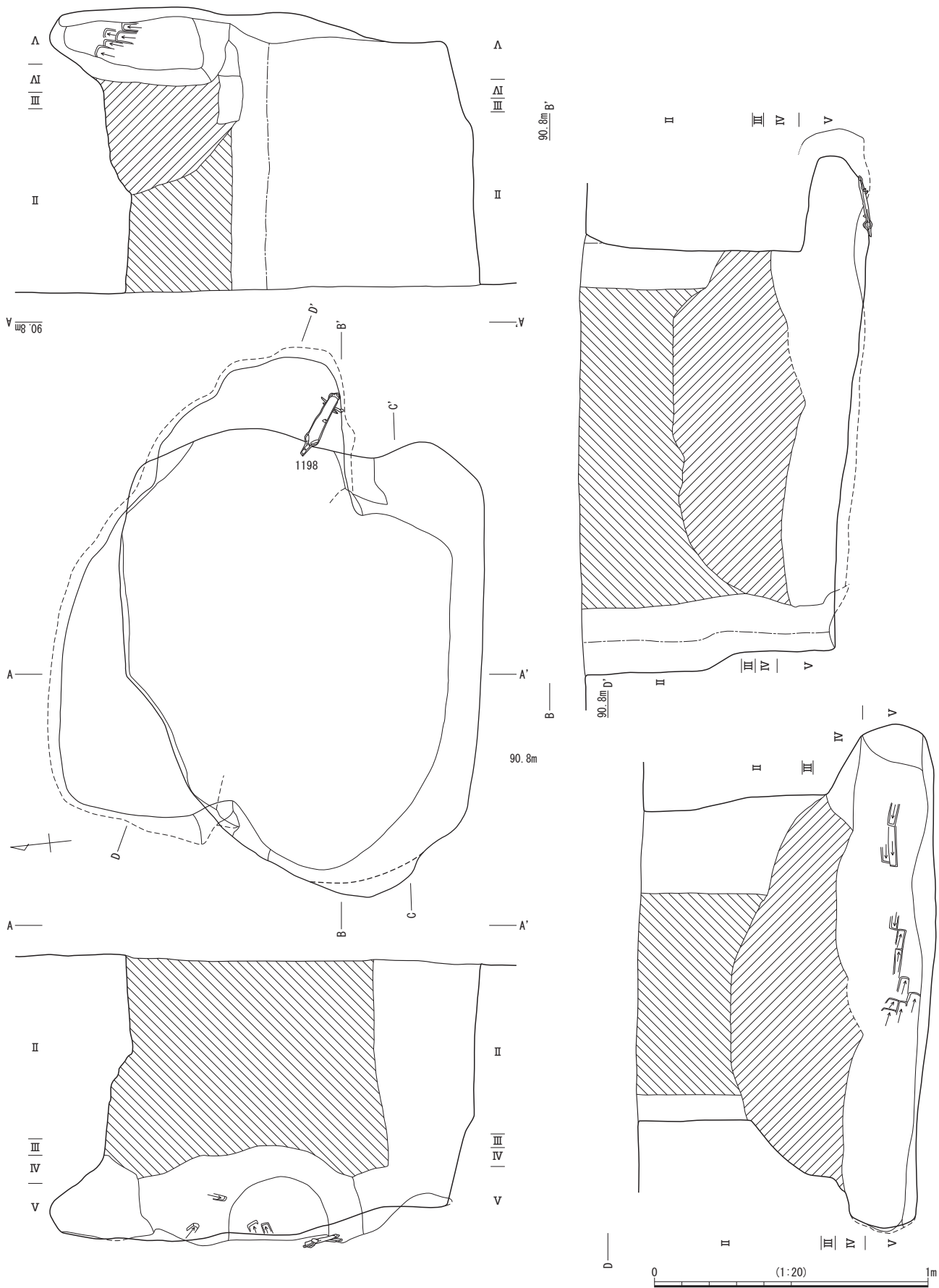
57号地下式横穴墓(第238図・第239図)

G-21区において検出される。玄室の天井部は大きく剥落している。平面形はいびつで右側が細くなり竪坑に対して斜めになっている。玄室の右側手前に短剣1点が副葬されている。1198は全長23.6cmの短剣である。刃部18.4cm、茎部5.2cmである。刃部の断面は凸レンズ状であるが、鑄は認められない。刃部の厚さは0.4～0.7cmで、幅は関部で3.6cm、先端部で2.4cmで切っ先は丸みを帯びる。関部は左右対称ではないが直角関である。茎部の幅は関部で3.6cm、末端部で1.1cm、厚さ0.5cmである。目釘孔は1孔で関部より下方へ2.5cmの位置に径0.4cmの孔が穿たれる。科学分析によると刃部に平織の布の痕跡及び紐の痕跡が観察され、刃部に付着している木質は、タケ亜科と思われる。

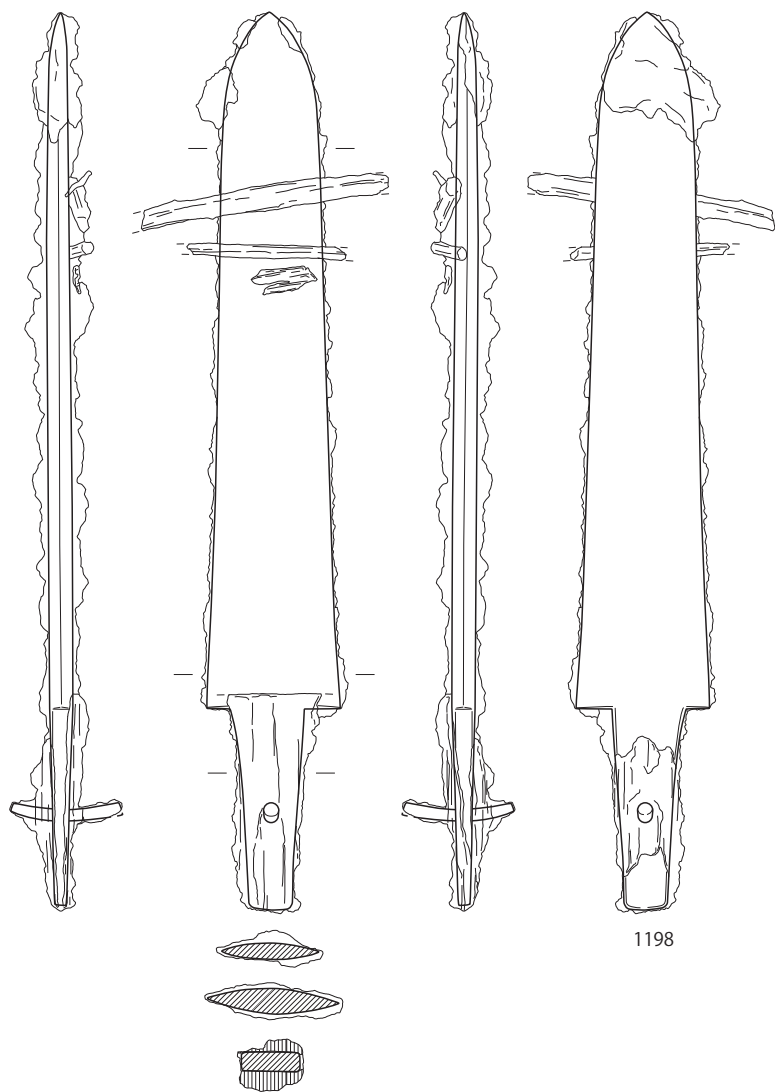
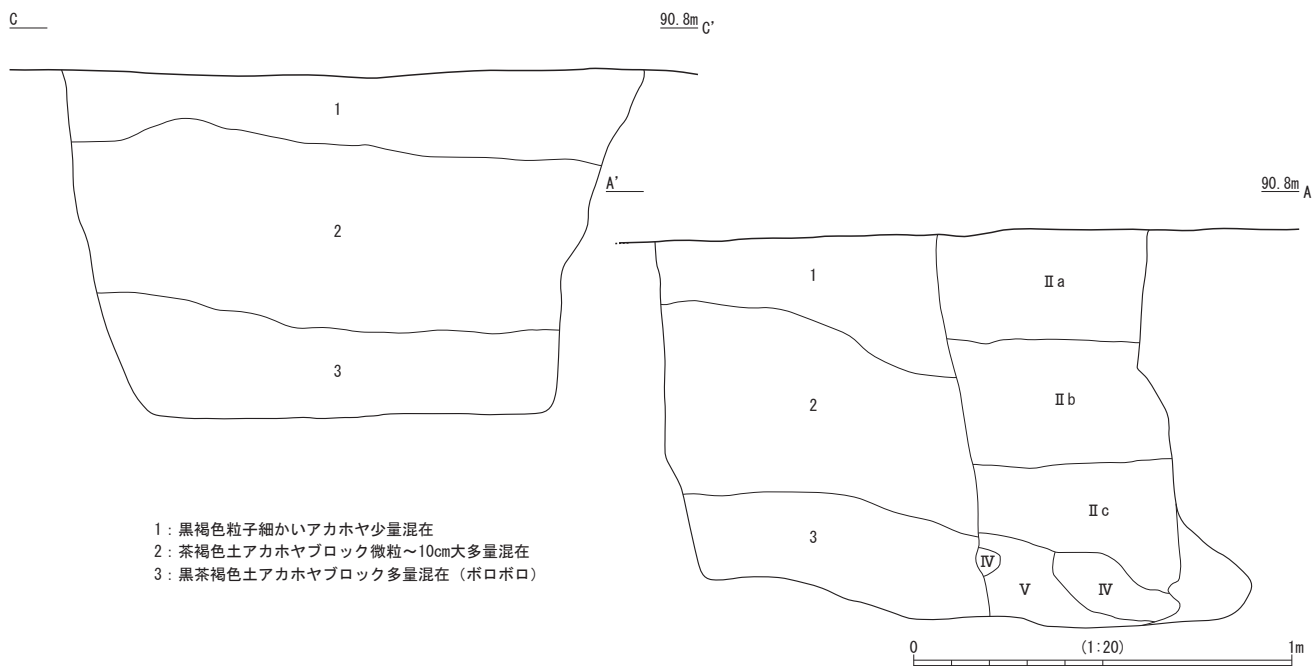
58号地下式横穴墓(第240図・第241図)

I-20・21区において検出される。竪坑の玄室の反対側の壁面が直ではなく段々になっている。また、竪坑の床面に平坦面を有することなく玄室へ至るものである。玄室の左隅に異形鉄器2点が副葬されている。根挾

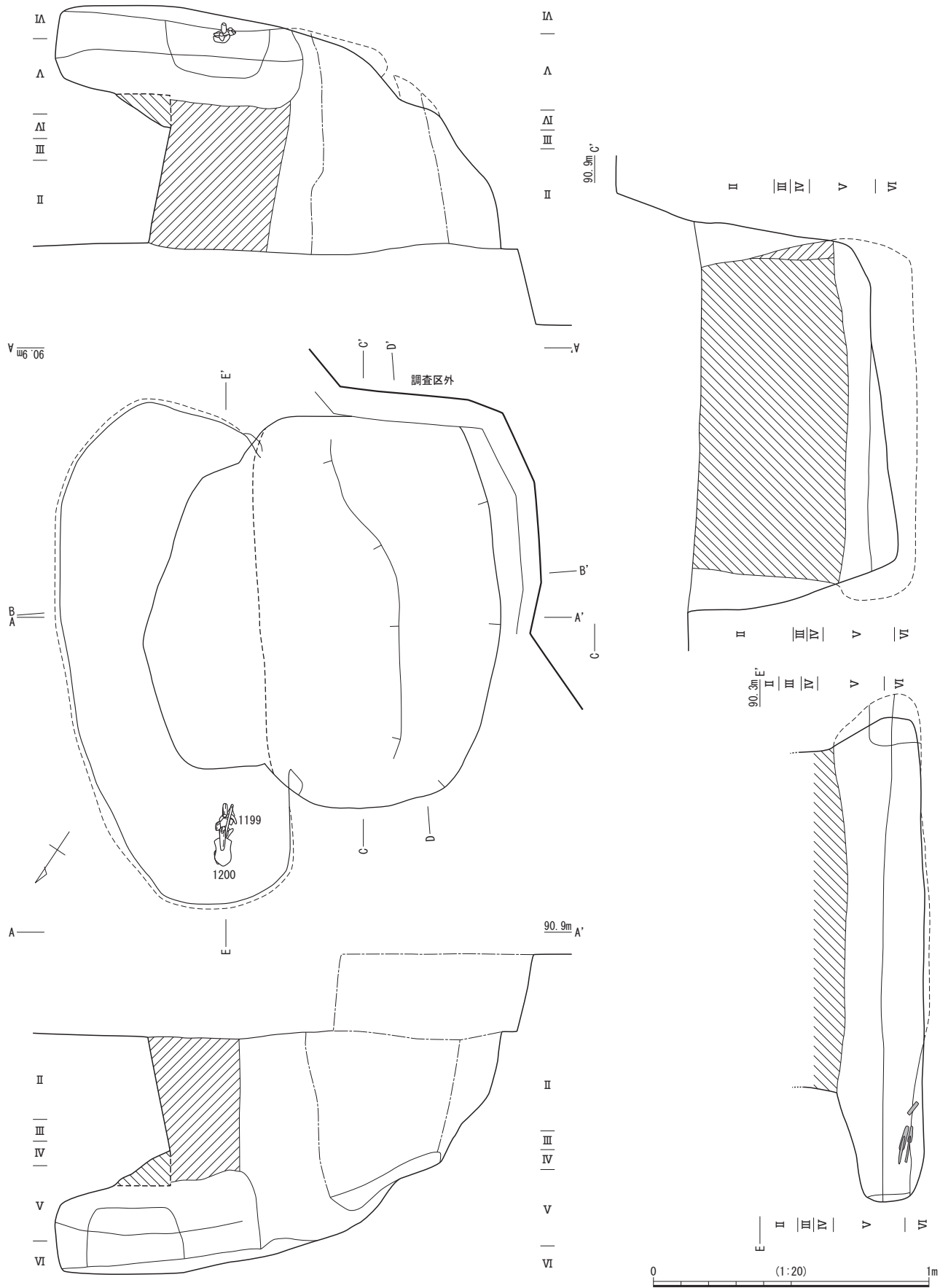
が良好な状態で残存する。皮革と毛の付着が確認され、科学分析の結果、大型哺乳類の毛と推定された。1199は足部のある本体部分と、U字状鉄器で構成される。本体部分は全長15cm、最大幅3.8cmを測る。身部はふくらを有する柳葉形で、最大幅からややくびれて足部に至る。茎部はなく、根挾が施されている。足部の内面以外すべて刃部を造っており、断面形は平造である。根挾は先端を三角形に加工している。根挾下の形態は逆U字状を呈する。穿孔が5孔あり、先端から9.1cm下に根挾みを挟んで2孔、そこから1cm下の根挾下に1孔、足部の両端に1孔ずつ施されている。中心の2孔は直径0.35cmで紐状のものがわずかに付着しており、根挾に紐を固定するためのミゾ状の加工がみられる。下側の1孔は直径0.45cmで目釘状のものがあつたと考えられる。足部の根挾から樹皮巻きが1.8cm施されており、巻き始めと巻き終わりが観察できる。上側2孔は紐状のものを通し、下側1孔は目釘状のもの、さらに樹皮巻きの3箇所根挾を固定したと考えられる。足部の両端の穿孔は直径0.2cmを測り、紐を通した跡が明瞭に残っている。U字状鉄器は、長さ5.1cm、最大幅1.15cmを測る。左右非対称で、右側は先端を丸く造っており最大幅は0.9cmと細いが、左側は先端が平らに造られており、最大幅は1.15cmである。両端に直径0.25cmの穿孔が1つずつ施されており、紐を通した痕跡がみられる。本体の足部両端にも同様



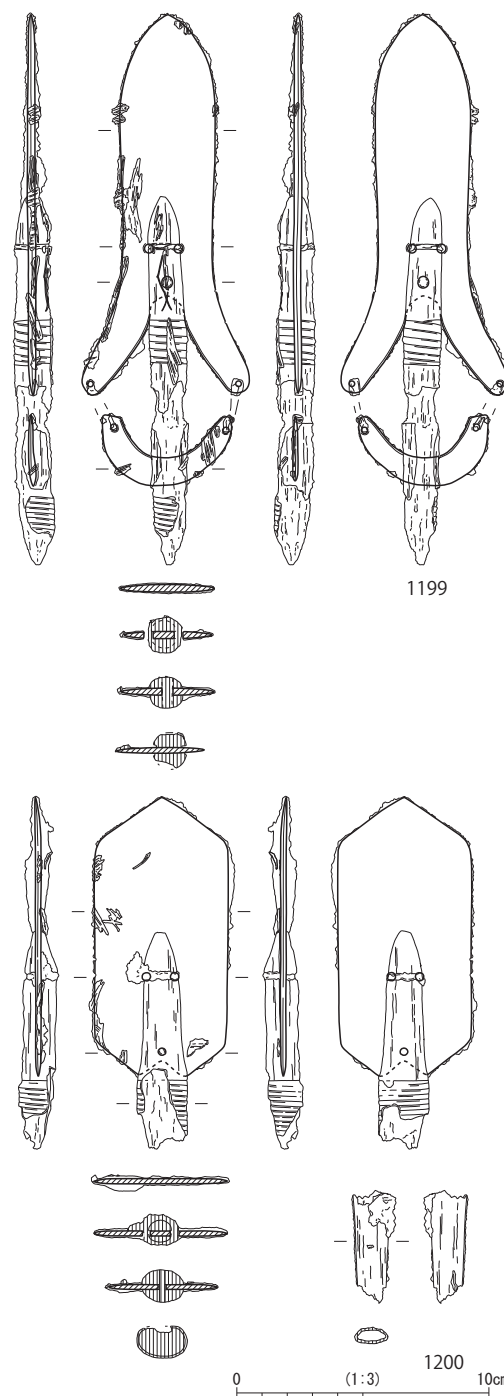
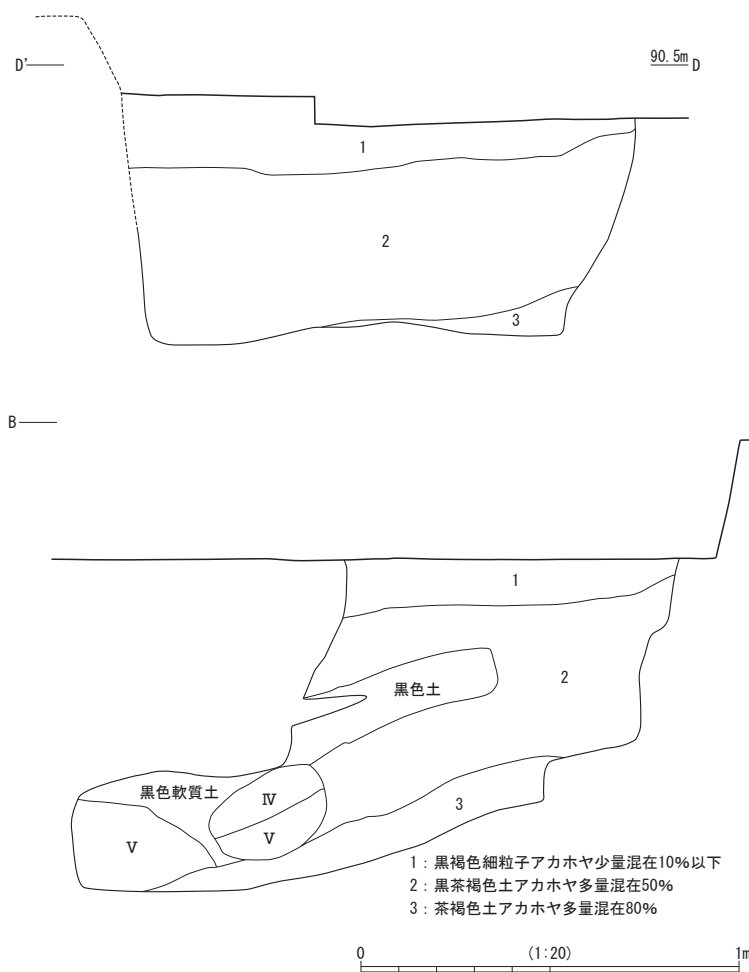
第238图 57号地下式横穴墓(1)



第239図 57号地下式横穴墓(2)・副葬品



第240図 58号地下式横穴墓(1)



第241図 58号地下式横穴墓(2)・副葬品

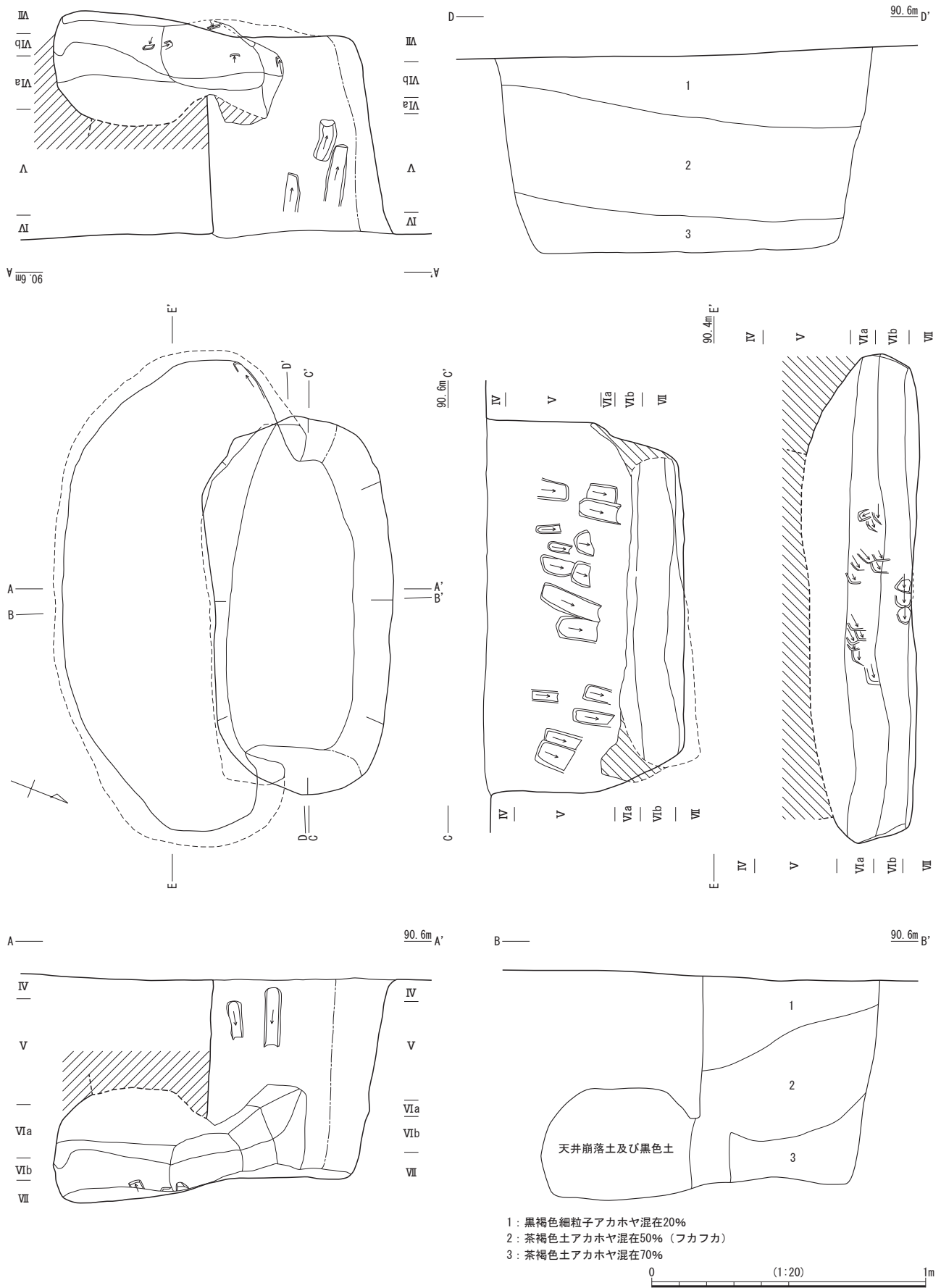
59号地下式横穴墓(第242図)

I-22区において検出される。竪坑が $1.4\text{m} \times 0.7\text{m}$ と小さいもので、玄室平面形は不整形である。竪坑の壁面には縦方向の工具痕が認められる。特に羨道上部においては多く見られる。また、玄室の奥壁においては横及び斜め方向の短めの工具痕が認められる。

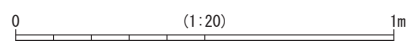
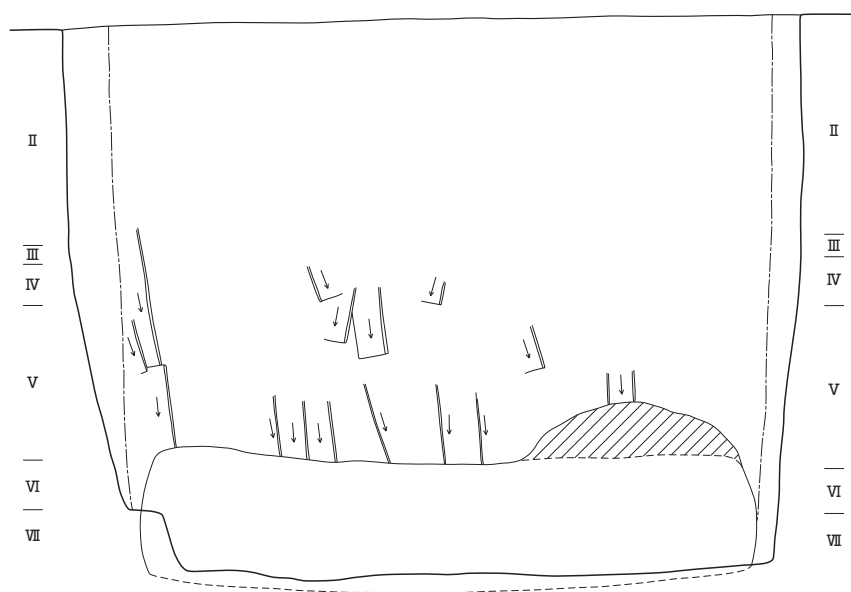
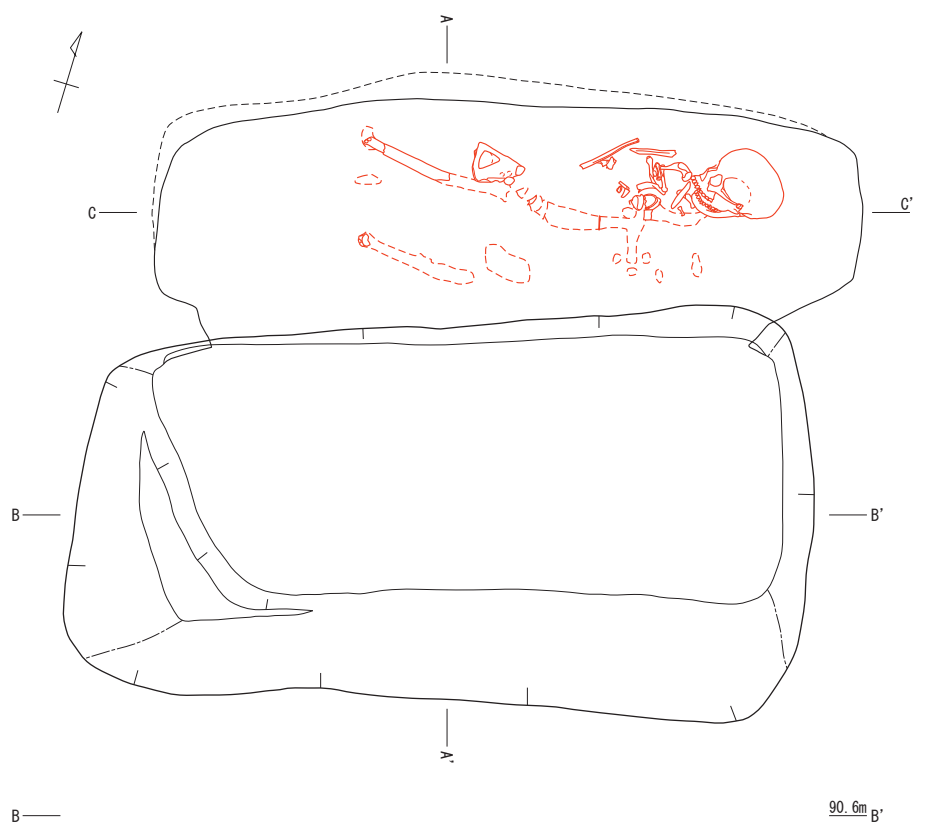
60号地下式横穴墓(第243図～第245図)

G-23区において検出される。竪坑も玄室も大型で

の紐の痕跡が残っていることや、残存する紐の角度が足部からU字状鉄器に繋がることから、それぞれの両端が紐で結ばれていたと考えられる。U字状鉄器の0.5cm下から再び樹皮巻きが施されている。U字状鉄器は根挟で挟んだ痕跡が見られず、根挟に孔を開け差し込むように取り付けたと思われる。U字状鉄器が伴う異形鉄器は本遺跡で初めて出土した。1200は全長11cm, 最大幅5.3cmを測り大型である。ふくらはなく、全体的に直線的な形態をしている。縁部はすべて刃部を造っており、断面形は平造である。根挟は先端を三角形に加工している。根挟下の形態は明瞭ではないものの、X線写真の観察により逆V字状と推定した。穿孔が3孔あり、ほぼ中心に根挟を挟んで2孔、そこから3cm下の根挟み下に1孔施されている。中心の2孔は直径0.3cmで紐状のものがわずかに付着しており、根挟に紐を固定するためのミゾ状の加工がみられる。下側の1孔は直径0.25cmで、目釘状のものがあったと考えられる。鉄器直下から樹皮巻きが施されている。上側2孔は紐状のものを通し、下側1孔は目釘状のもの、樹皮巻きの3箇所て根挟を固定したと考えられる。



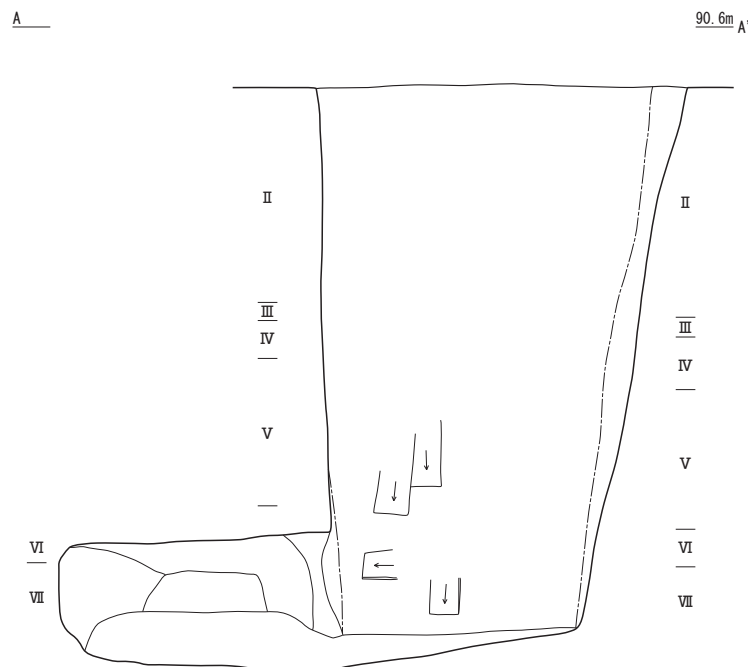
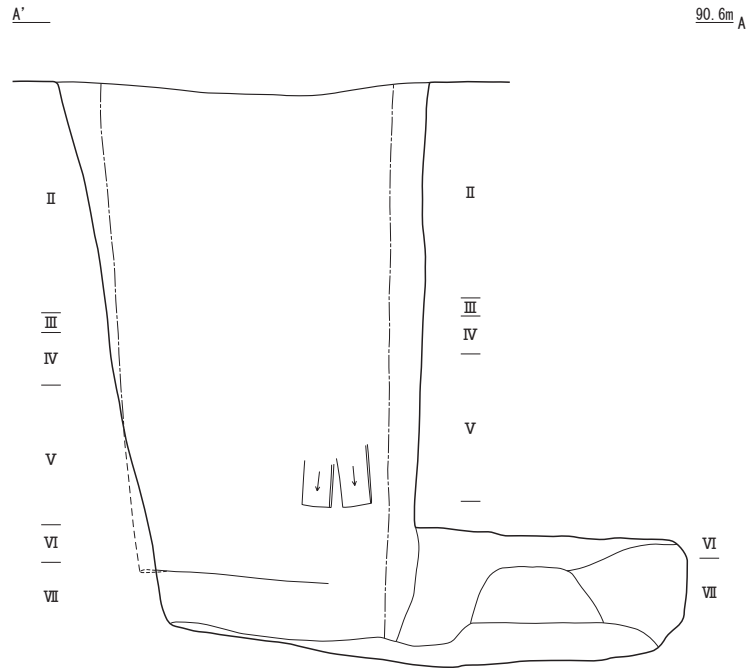
第242図 59号地下式横穴墓



第243図 60号地下式横穴墓(1)

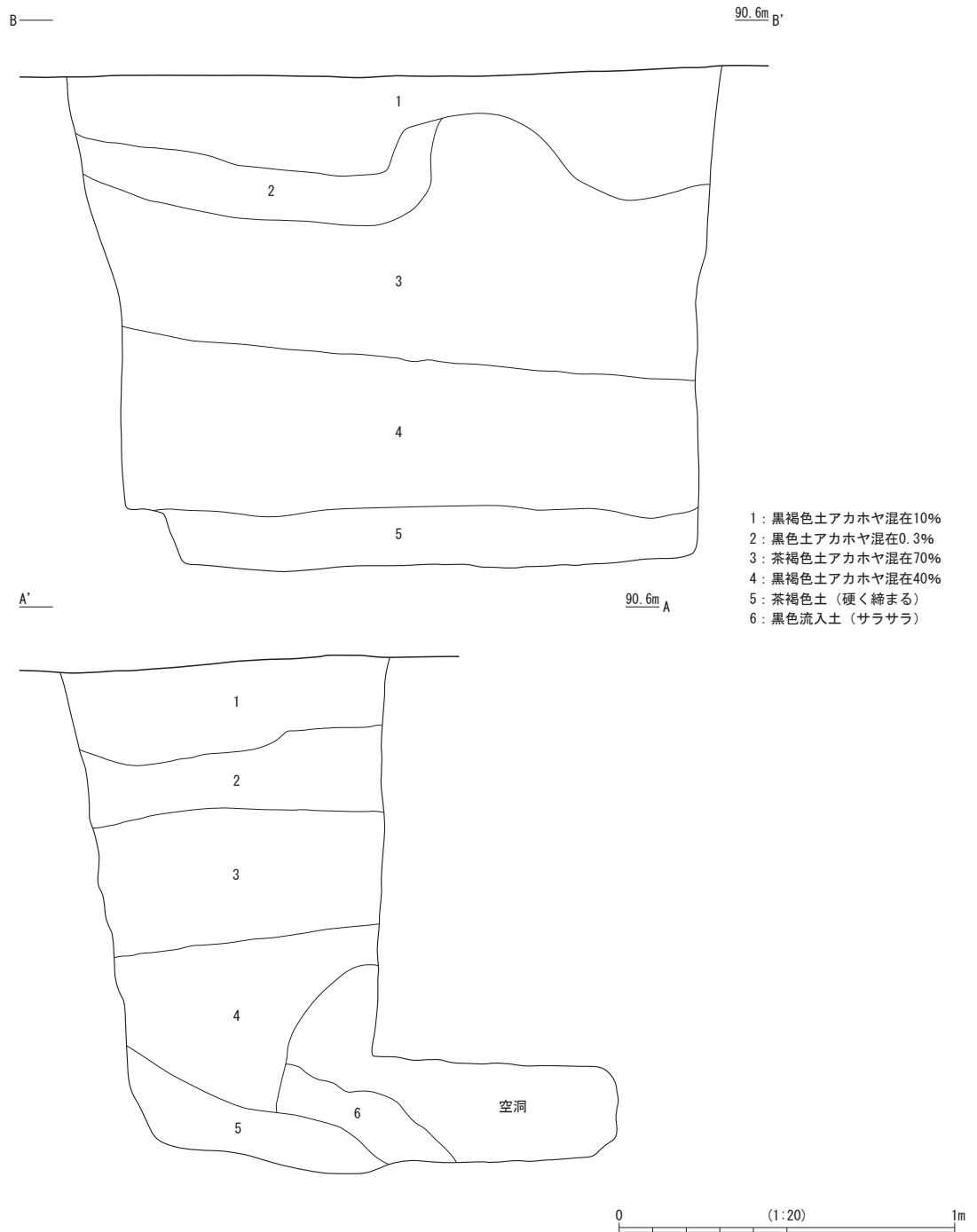
ある。残存状況が良好で、玄室も空洞であった。大型の割に玄室の高さは30～40cmと低い。空洞のため人骨も良好に残っていた。頭位が玄室の右側（東側）にあり、その部分の天井が40cmである。人骨は頭蓋から大腿骨

までが良好に遺存しており、伸展葬である。頭蓋の遺存は特に良好で歯も32本遺存している。肋骨や指も残っている。膝頭から下位は遺存していないが、身長は約160cmであろう。壮年男性と思われる。



0 (1:20) 1m

第244図 60号地下式横穴墓（2）



第245図 60号地下式横穴墓（3）

⑰ 2-①-b類地下式横穴墓

2-①-b類に分類される地下式横穴墓は61号の1基だけである。

61号地下式横穴墓（第246図）

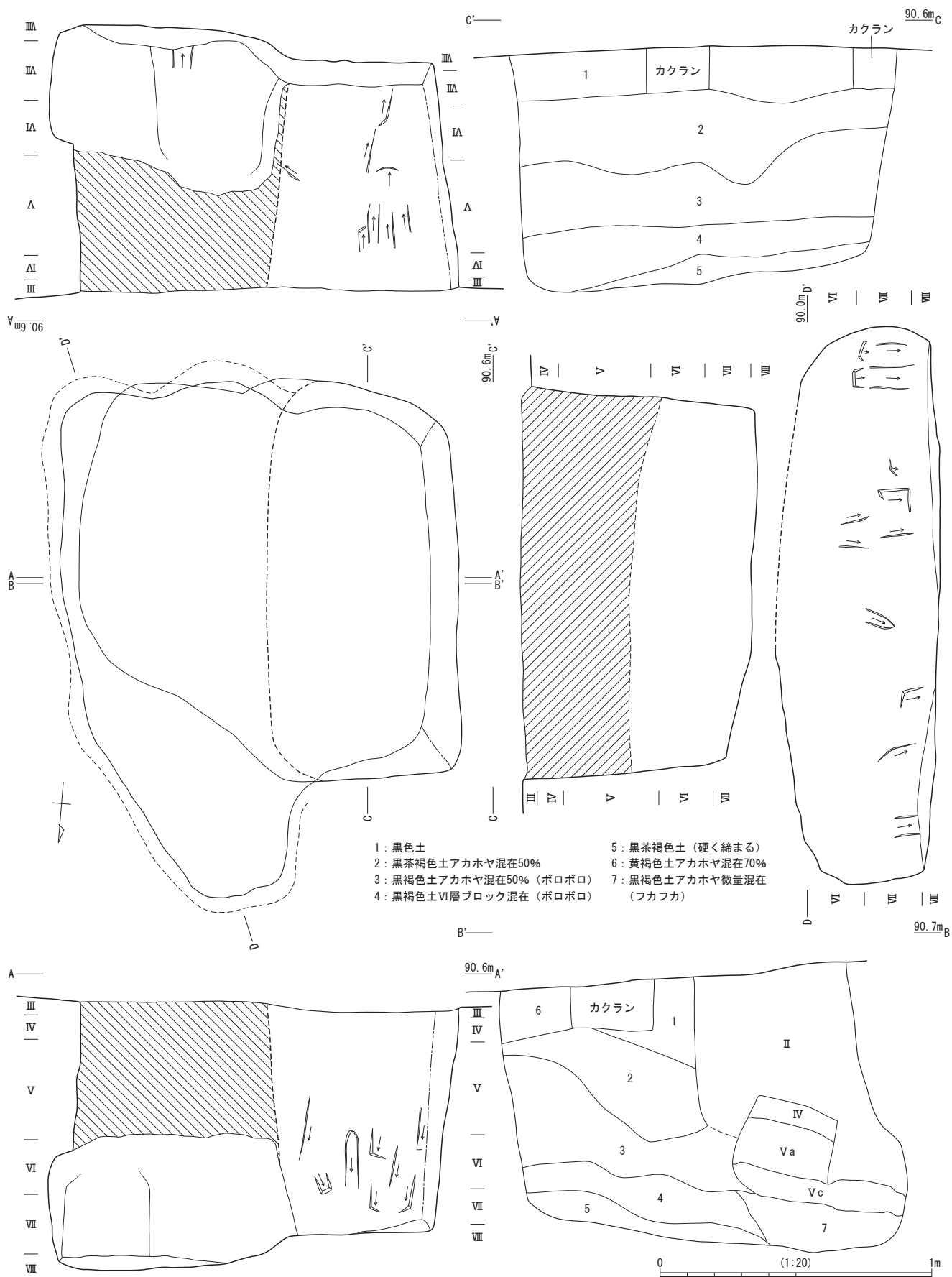
G-23区において検出される。玄室は大規模であるが不整形で、左側が細くなっている。竪坑の壁面には縦方向、玄室の奥壁には短めの縦方向の工具痕が認められる。

⑱ 2-①-c類地下式横穴墓

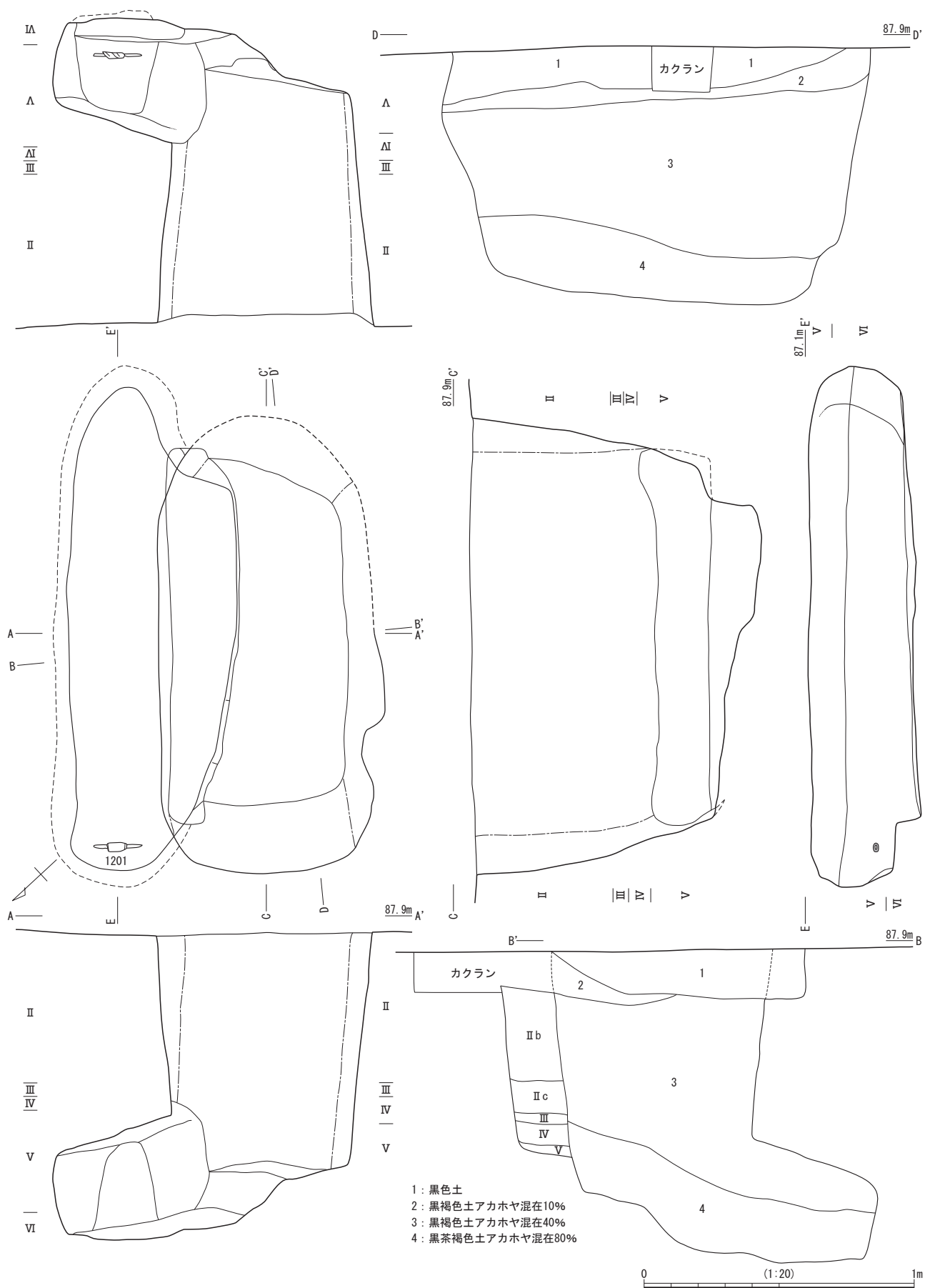
2-①-c類に分類される地下式横穴墓は62号～67号までの6基である。

62号地下式横穴墓（第247図・第248図）

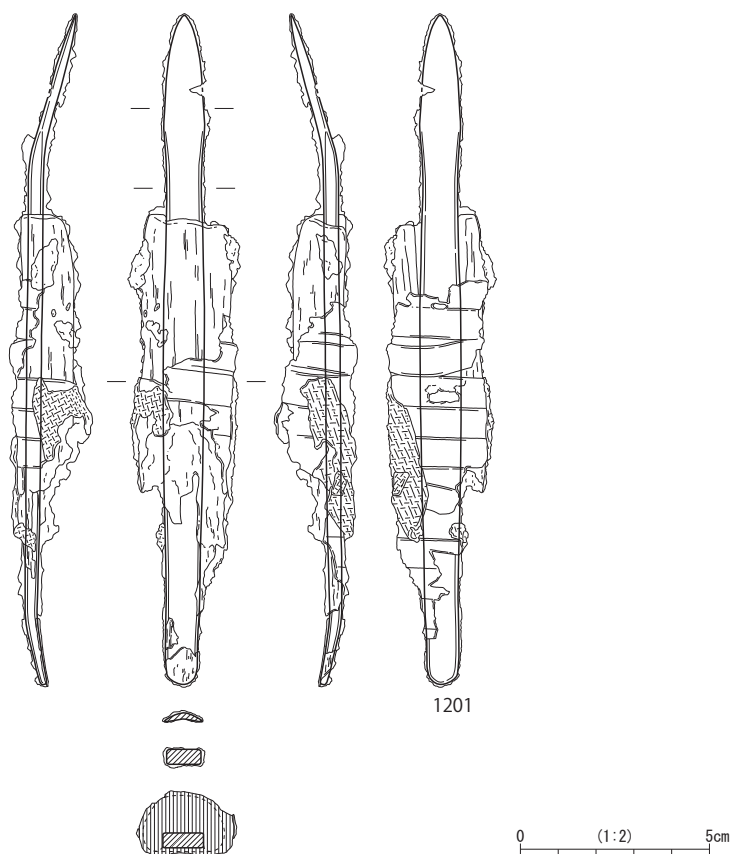
G-23区において検出される。玄室は竪坑のほぼ真ん中で段落ちしており、奥行きは短い。玄室の左奥に鉋1点が副葬されている。1201は全長17.8cmの鉋である。切っ先部は茎部から緩やかに反り返るもので長さ3.4cm、



第246図 61号地下式横穴墓



第247図 62号地下式横穴墓



第248図 62号地下式横穴墓副葬品

幅1cm、厚さ0.2cmを測る。刃は両刃で丸みを帯び裏側は浅い隙間がある。茎部は断面長方形で長さ14.4cm、幅は0.8～1cmで中央に最大幅がある。厚さは0.4cmである。柄は木質で一部残存している。茎部の装着は木質を掘り込んだ所にはめ込んである。通常、掘り込んだ面の反対側に切っ先部が向くようにはめ込まれるが、これは表裏逆に装着する珍しい事例である。柄には樹皮巻きとその上の布の痕跡が認められる。科学分析の結果、柄部に樹皮と平織の布が観察されており、布の繊維は生糸の絹と考えられる。

63号地下式横穴墓（第249図）

I－17区において検出される。羨道は竪坑の羨門寄りで段落ちして玄室へ至るもので、羨道は20～35cm幅である。また、玄室はわずかに傾斜する。

64号地下式横穴墓（第250図）

F－22区において検出される。玄室は羨道部分で段落ちするものである。

65号地下式横穴墓（第251図）

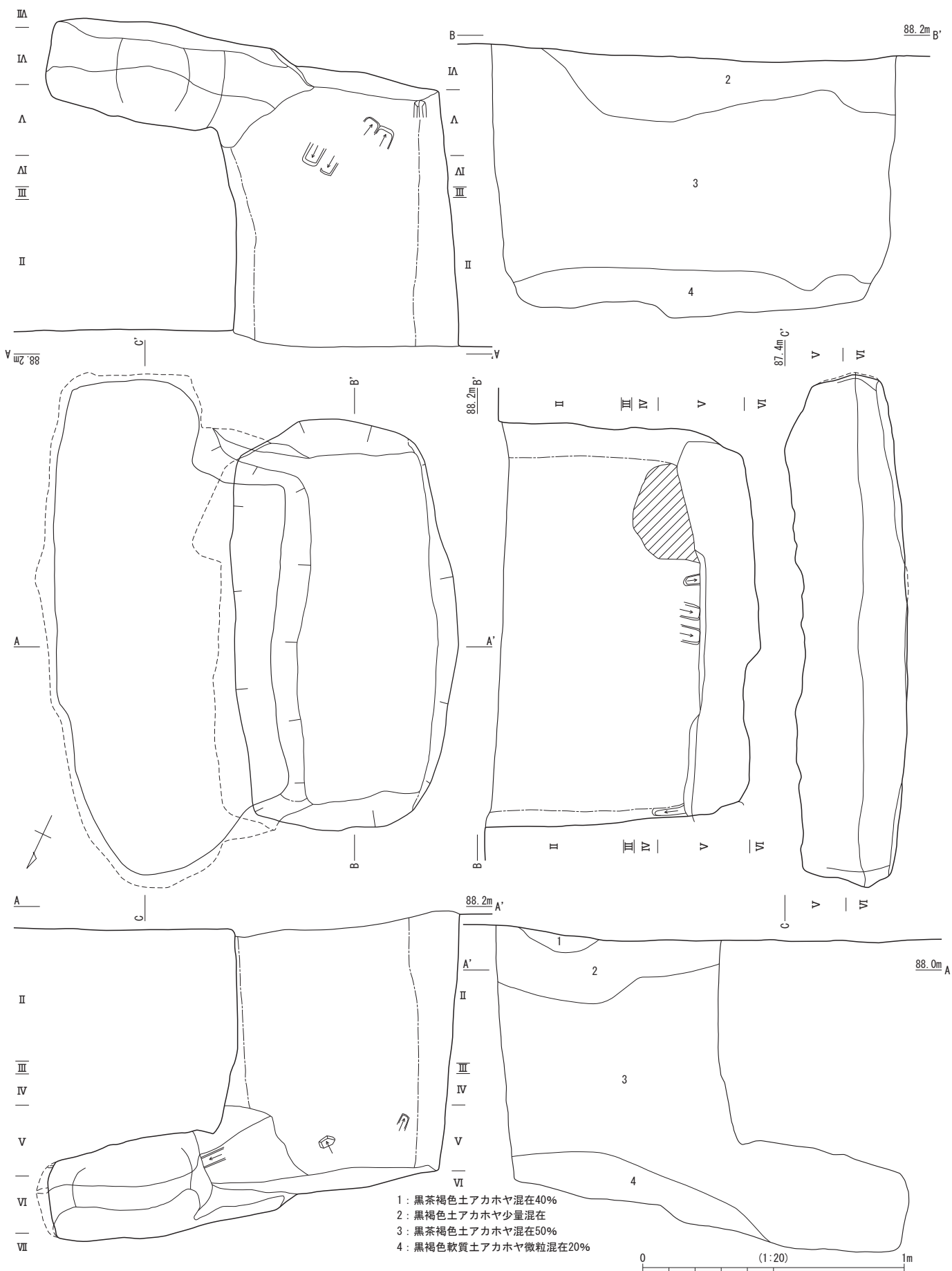
I－21区において検出される。羨道は竪坑の羨門よりで段落ちして玄室へ至るものである。

66号地下式横穴墓（第252図）

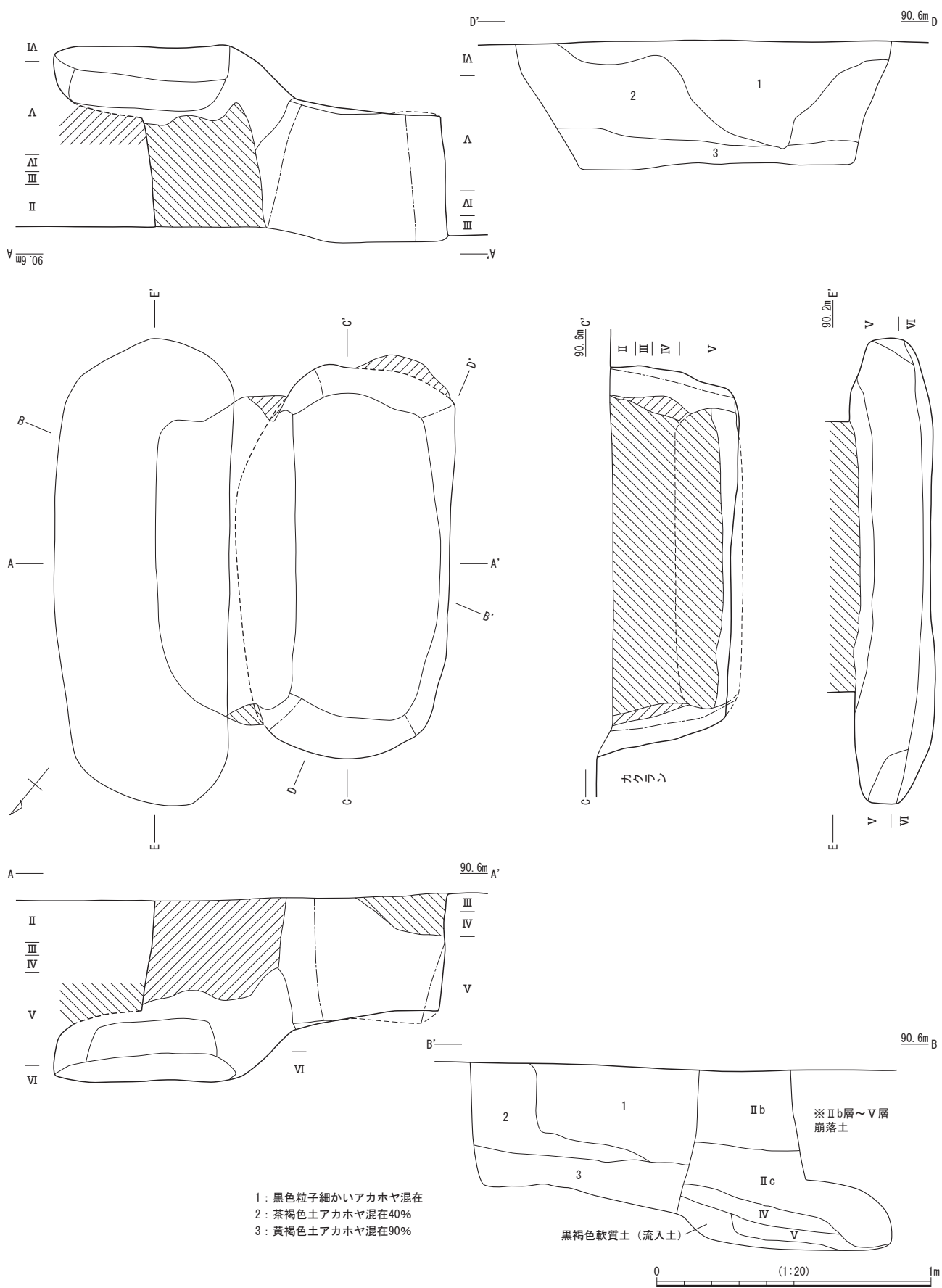
H・I－24・25区において検出される。玄室は羨門寄りで段落ちするもので、奥行きは短い。竪坑の壁面にはやや幅の広い工具痕が認められる。

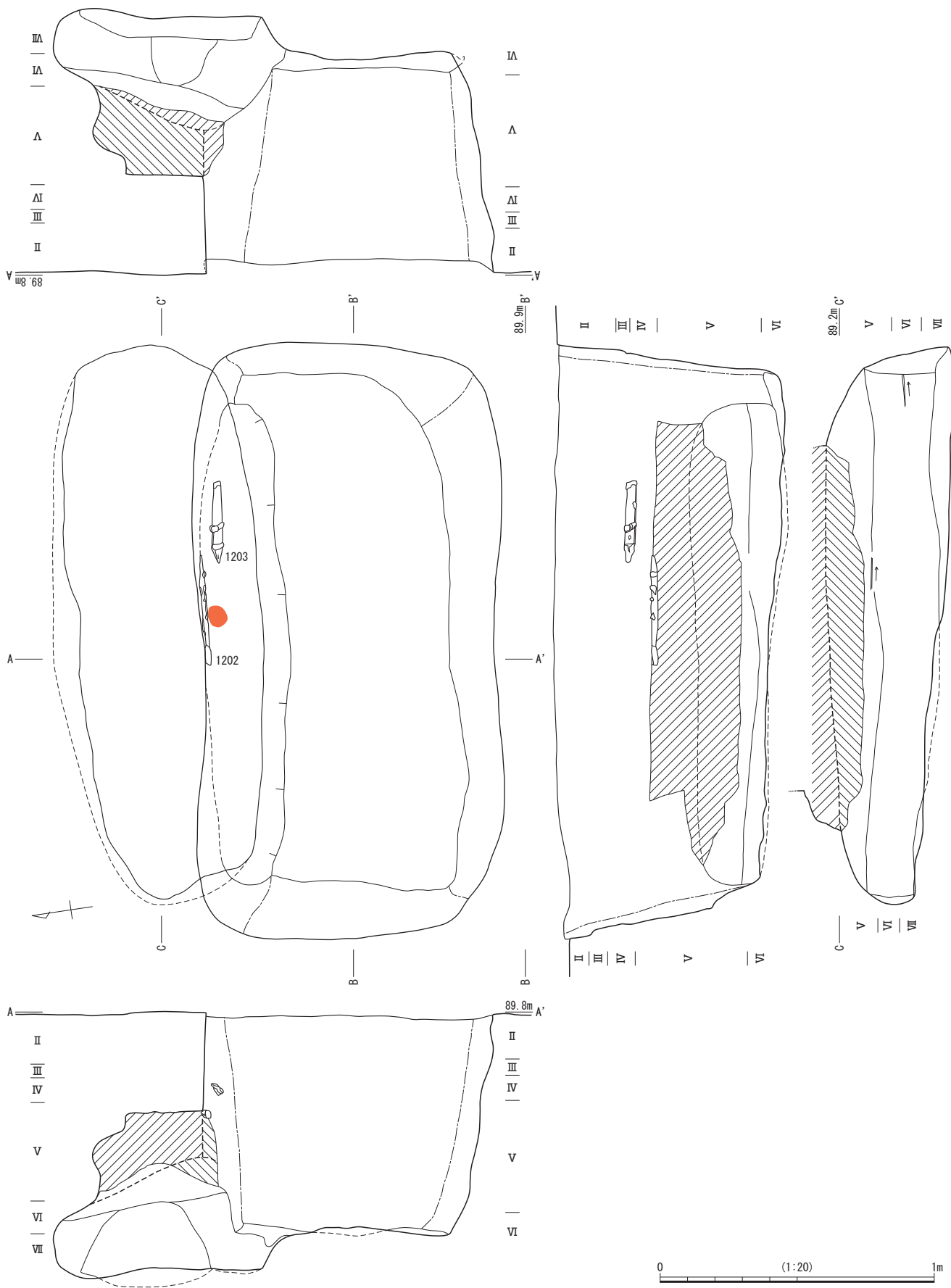
67号地下式横穴墓（第253図・第254図）

H－25区において検出される。竪坑の羨門寄りで段落ちして玄室へ至るものである。竪坑の玄室側壁の羨門上位に剣2点が置かれてある。また、羨門の真下に径約10cmの範囲で赤色顔料が置かれてある。1202は竪坑のほぼ中央部に置かれていたもので、全長39.9cmの鉄剣である。刃部30cm、茎部9.9cmである。刃部の断面は薄い凸レンズ状で錆は認められない。厚さは0.2～0.3cmで、刃部の幅は2.2～1.5cmと細身である。関は左右対称ではなくナデ関に近い。茎部の幅はほぼ1cm、厚さ0.2cmである。目釘孔は2孔で関部より下方へ2.8cmと9.1cm（茎部の末端近く）の位置に径0.2cmの孔が穿たれる。茎部では2枚合わせの柄木が観察され、柄幹も良好に残り関部から下方へ7.4cmの位置で留めと思われるように1本が他の紐の下に入っている状況も観察される。科学分析の結果、断面が豚の鼻様にみえる柄巻きが観察され拡大してみると絹と思われる糸の残存が確認される。1203は竪坑のやや右寄りに置かれていたもので、

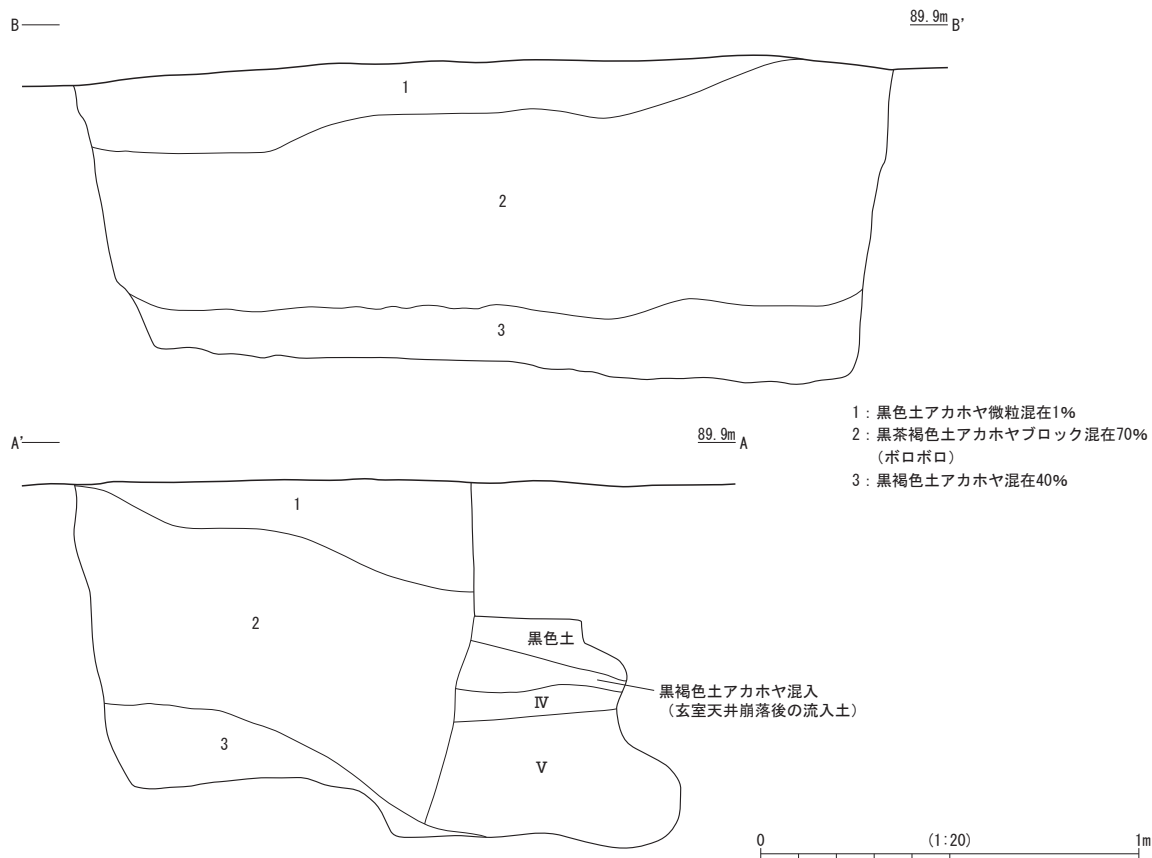


第249図 63号地下式横穴墓

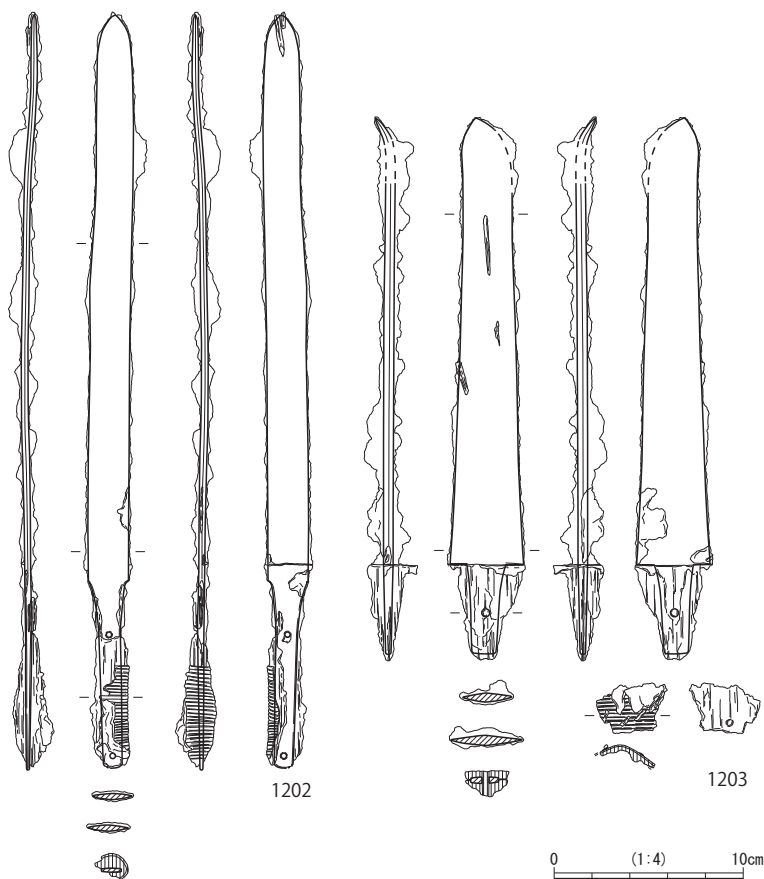




第253图 67号地下式横穴墓(1)



全長28.34cmの短剣である。刃部23.6cm，茎部4.75cmである。刃部の断面は凸レンズ状を呈するが鑄は認められない。厚さは0.5～0.6cmである。刃部の幅は関部に最大幅があり3.9cmで先端部近くで3cmを測る。先端部は錆のためか歪んでいる。関部は左右対称で直角関を呈する。茎部の幅は1.3～2cmで厚さ0.3cmである。目釘孔は1孔で関部より下方へ2.3cmの位置に径0.4cmの孔が穿たれる。また，木製の目釘が残存する。茎部は柄木2枚を合わせて挟む。1203より剥落したと考えられる破片の科学分析では幅2.4cmの組紐が観察され，組紐の断面では絹と思われる繊維が観察される。また，柄木の一部と考えられる剥落片は広葉樹散孔材(モチノキ科の材の可能性が高い)と思われる。赤色顔料は水銀朱である。



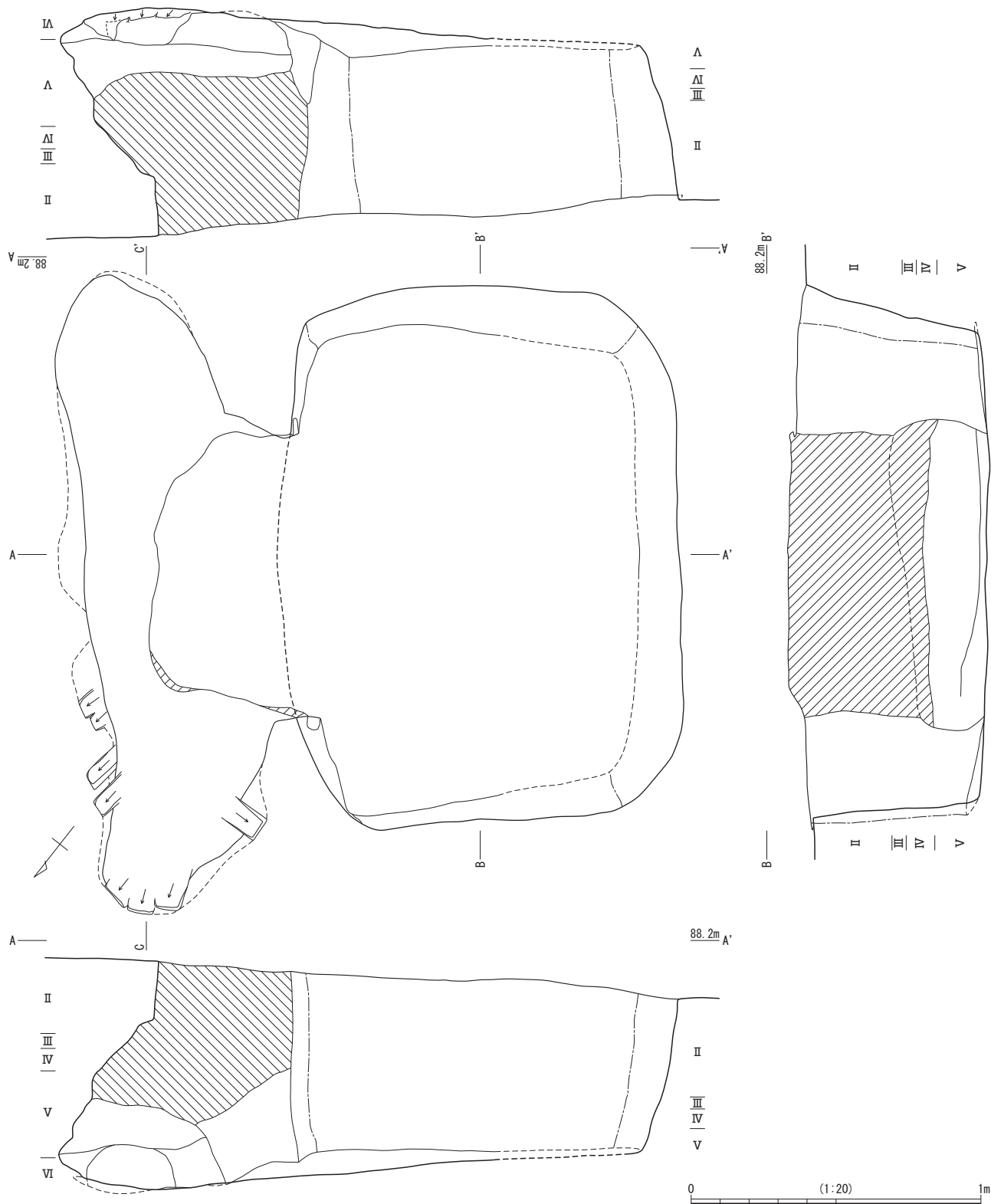
第254図 67号地下式横穴墓(2)・副葬品

①9 2-②-a類地下式横穴墓

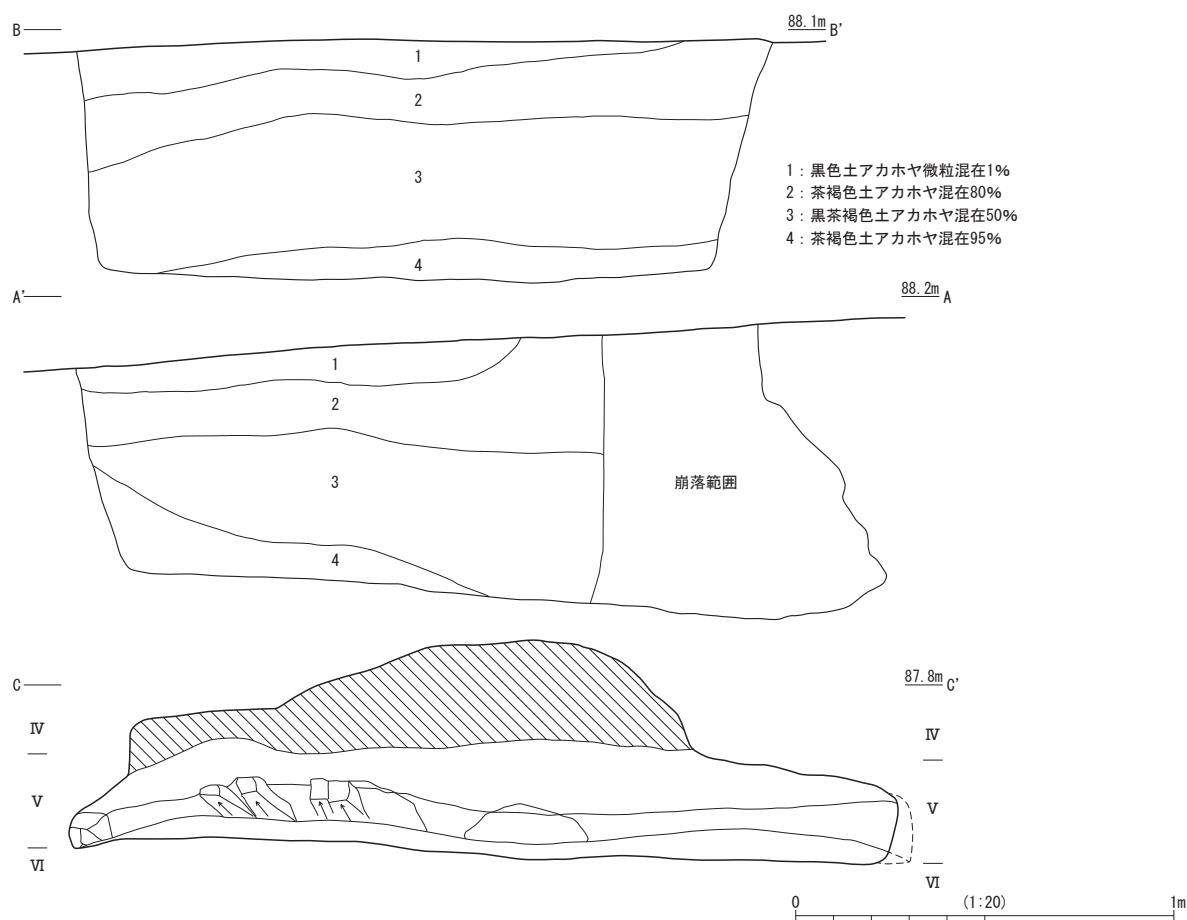
2-②-a類に分類される地下式横穴墓は68号～73号・75号・76号の8基である。74号は1-②-bに分類されるものであるが、73号と切り合い関係にあるものでここで記述するものとした。

68号地下式横穴墓（第255図・第256図）

H-16・17区において検出される。玄室は細長く不整形で奥行きは短いものである。



第255図 68号地下式横穴墓（1）



第256図 68号地下式横穴墓(2)

69号地下式横穴墓(第257図)

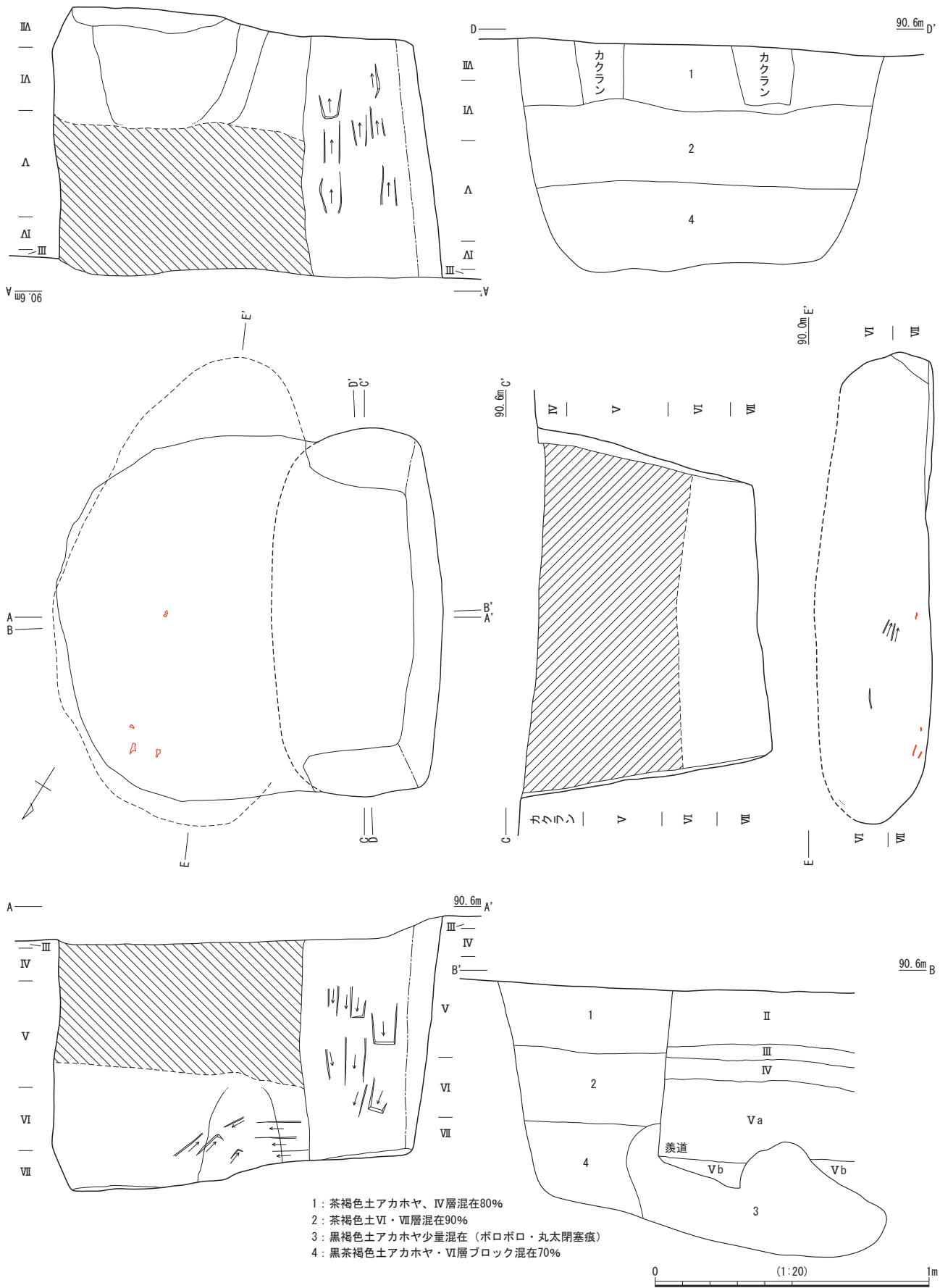
G-20区において検出される。竪坑は幅が狭く、玄室は右側が狭くなる不整形な形状を呈する。玄室内に赤色顔料(丹)がある。竪坑の側壁面には縦方向の工具痕が認められる。

70号地下式横穴墓(第258図～第262図)

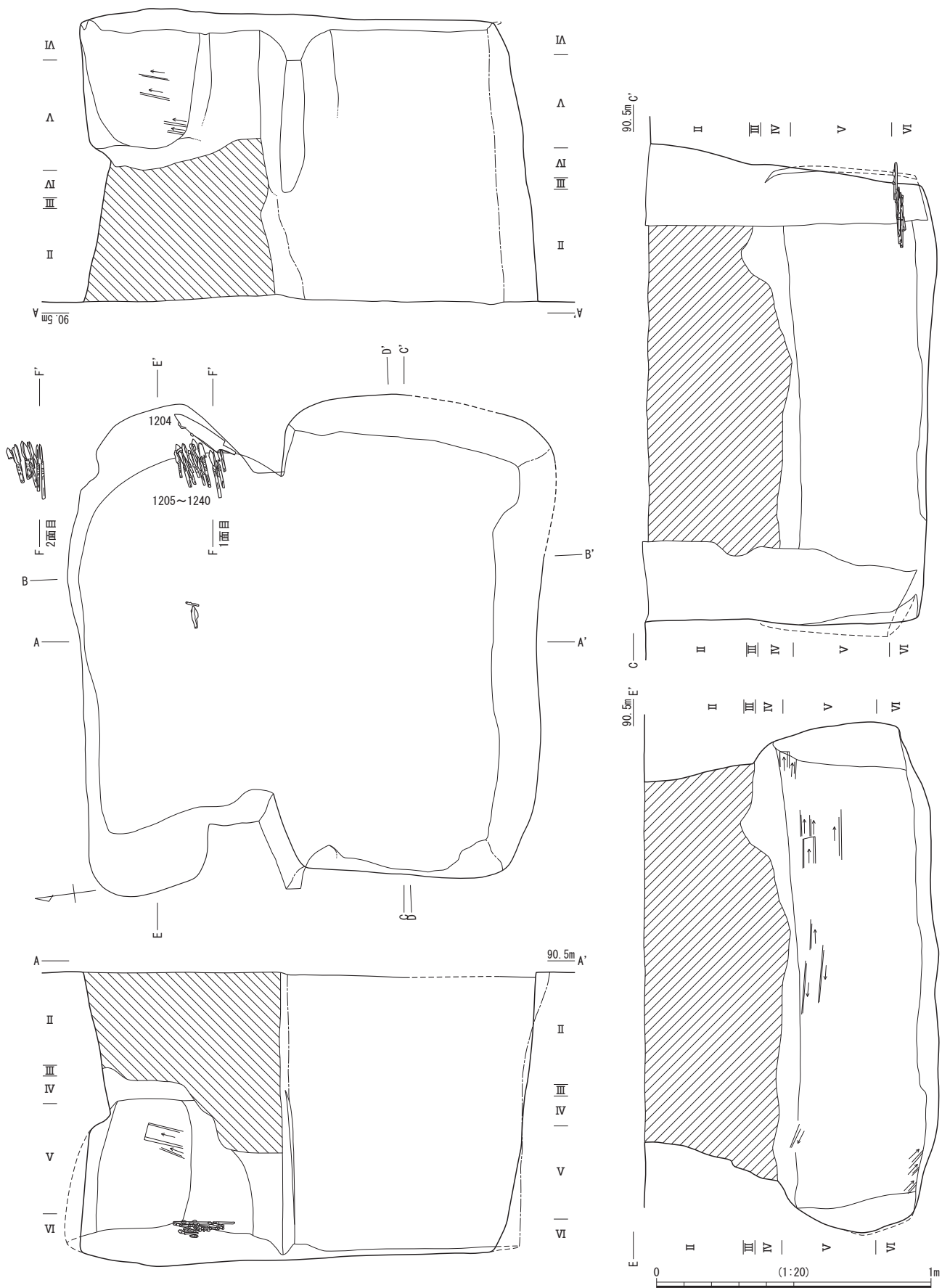
F-21区において検出される。羨道部は長さ約20cm、玄室は奥行き65cmである。玄室は不整形で、天井は60cmとやや高いものである。玄室のほぼ中央に鉄鏃1点、右奥に剣1点と鉄鏃35点が副葬されている。鉄器は、短剣1点、鉄鏃36点(柳葉鏃20点、二段腸挟柳葉鏃6点、腸挟柳葉鏃2点、茎部・矢柄のみ8点)である。一部の鉄鏃に幅0.2cmの植物繊維を太さ約0.1cmの糸によって束ねたものが付着しているが、これらは全て蓆と推定し取り扱う。1204は短剣である。全長26cm、刃部長20.9cm、茎部長5.1cmを測る。刃部の断面形は凸レンズ状を呈しており、厚さは0.5cmである。刃部の幅は関部で4.7cm、中位で3.35cm、先端部近くで1.2cmと関部から先端部へと細くなっている。刃部最大幅は関部の4.7cmである。刃部の一部に皮状の有機質が遺存しており、袋状の鞘、あるいは副葬時に巻かれていたものと考えられる。関部は左右対称で直角関を呈する。茎部の幅は

2.9～1.1cmで厚さ0.6～0.25cmである。目釘穴は1孔で関部から下方へ2.7cmの位置に径0.3cmの孔が穿たれる。茎部に有機質の痕跡はみられない。

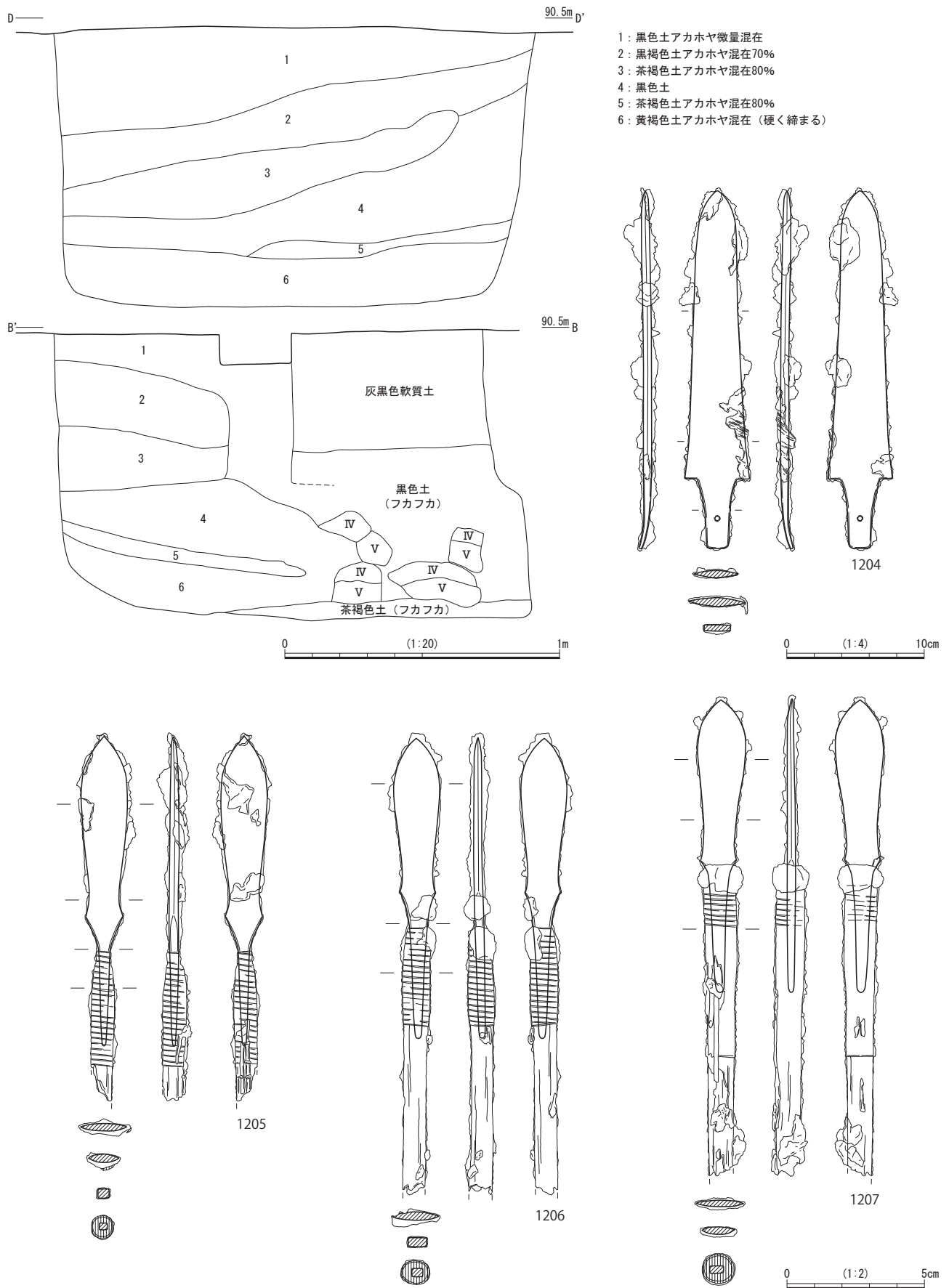
1205～1210は柳葉鏃である。1205は鏃身長6.5cmを測り、最も大型である。鏃身部最大幅からのくびれは強いが、山形突起から下のくびれは弱くやや直線的で矢柄付近が0.4cmと細い。鏃身部に布が付着した痕跡がみられる。矢柄が良好に残存しており、蓆の付着が確認された。1206は茎部と矢柄の先端部分が銹により一部膨張している。矢柄の残存状態が良く9.5cm残存しており、蓆の付着が確認された。1207は茎部と矢柄の先端部分が銹により一部膨張しており矢柄の始まりが不明であるが、確認できる部分でも矢柄が10.5cm残存する。樹皮巻きは確認できるものの、銹により単位は不明瞭である。矢柄に蓆と布の付着が確認された。矢柄の末端部分では、蓆の上に布が重なっているのが観察される。1208は全体的に銹化による膨張がみられ残存状態が悪い。矢柄が一部残存する。1209は鏃身部最大幅の一部が欠損する。矢柄の上部が銹により膨張する。矢柄の下部に蓆が付着する。1210は鏃身部のくびれが強く山形突起が発達している。矢柄が残存するものの、銹により状態が悪い。樹皮巻きは確認できるが、銹により巻きの単位は不明瞭である。



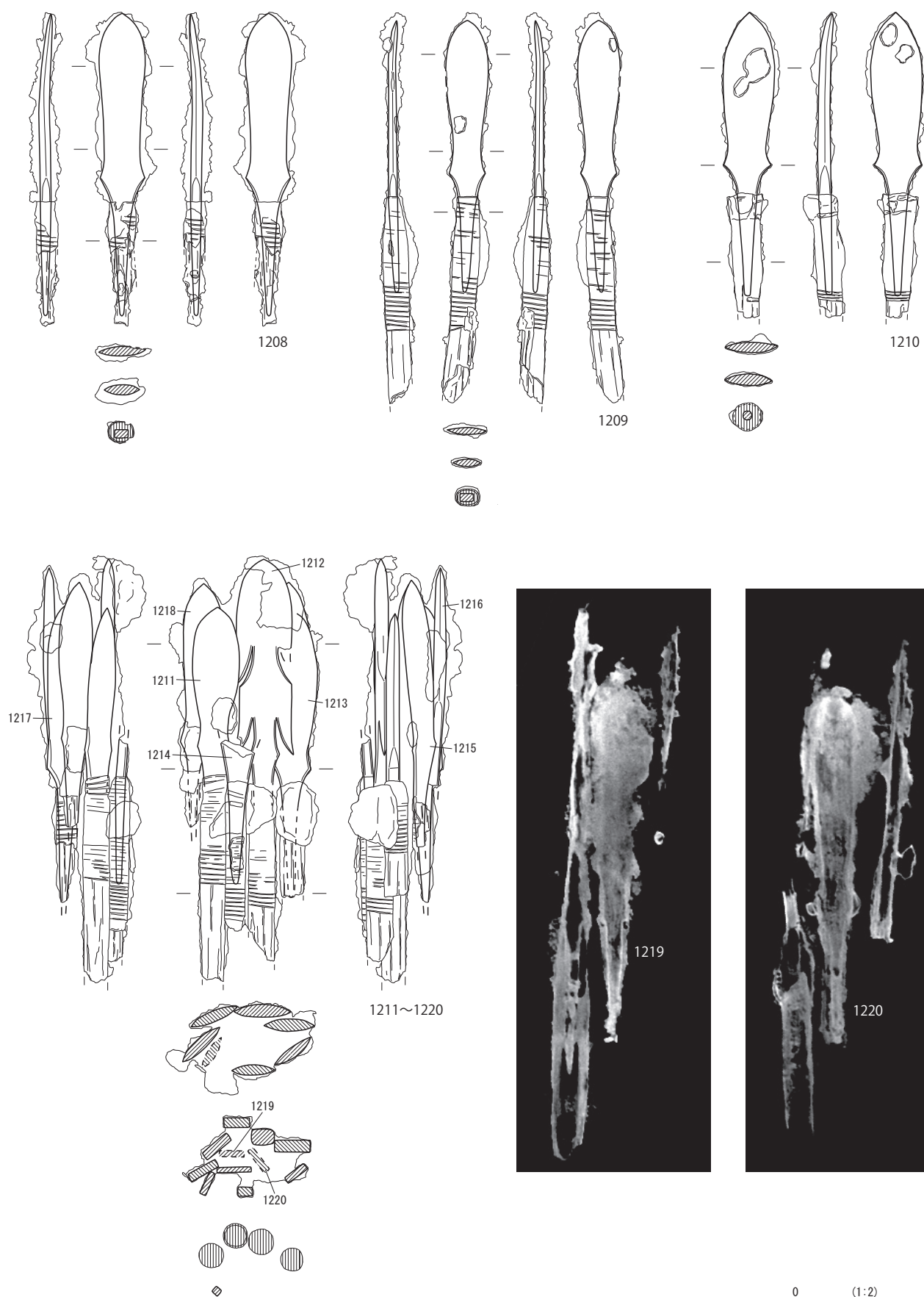
第257図 69号地下式横穴墓



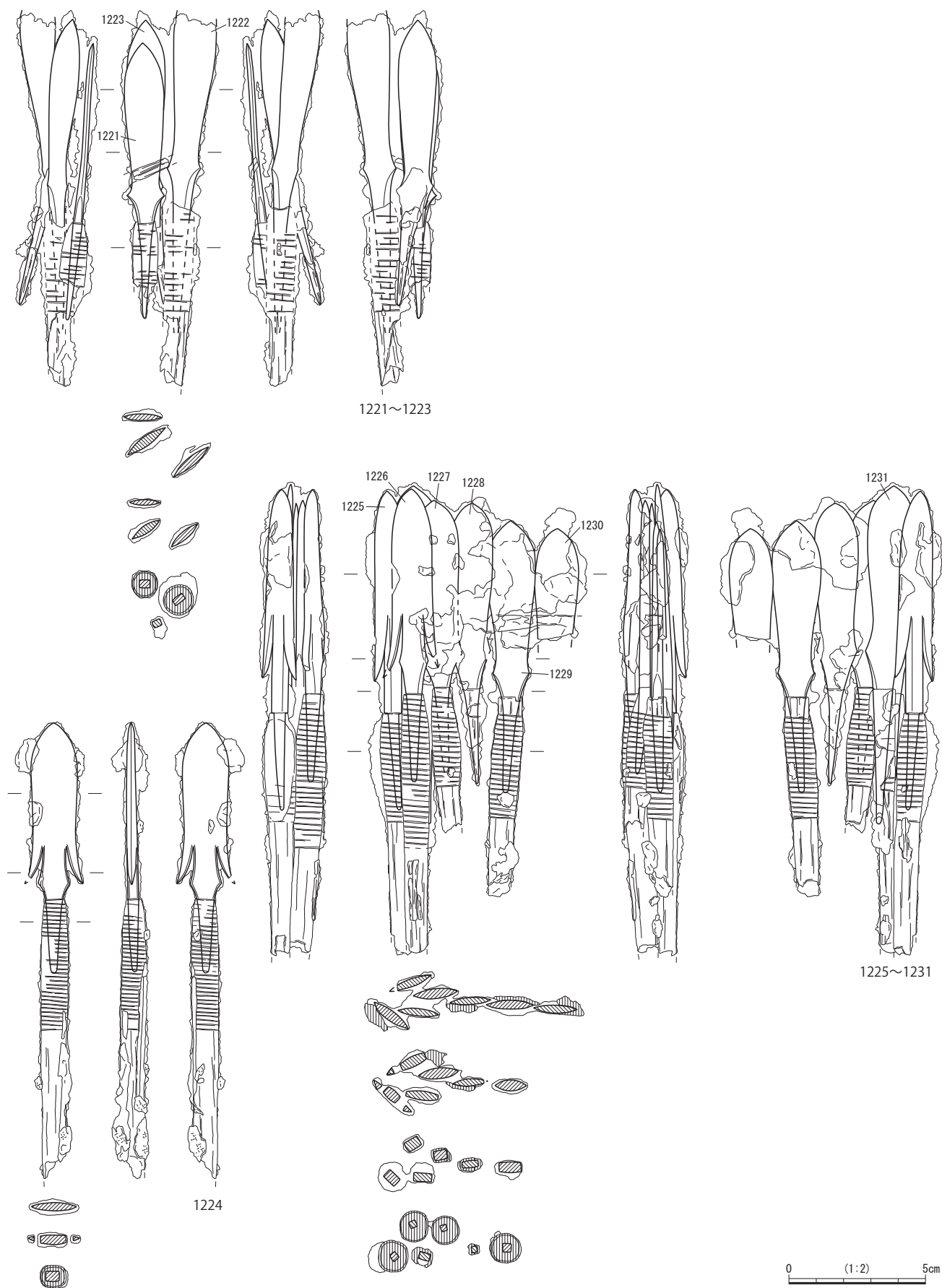
第258图 70号地下式横穴墓(1)



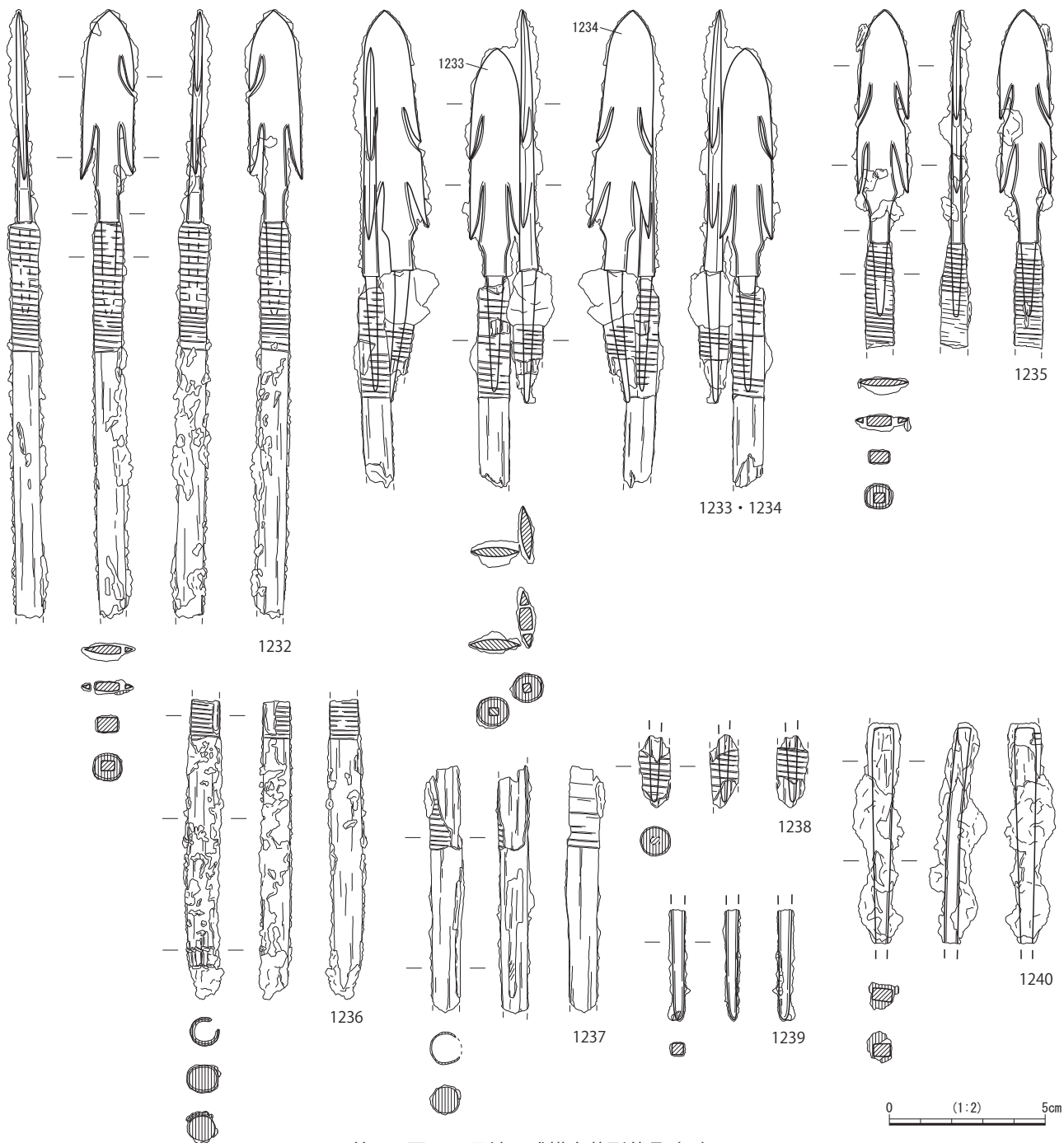
第259図 70号地下式横穴墓(2)・副葬品(1)



第260图 70号地下式横穴墓副葬品(2)



第261图 70号地下式横穴墓副葬品(3)



第262図 70号地下式横穴墓副葬品(4)

1211～1220は錆により癒着しておりそのまま実測した。1211, 1213, 1215～1218は柳葉鏃である。1211は鏃身長5.0cm, 最大幅1.7cmを測る。矢柄が7cm残存しており, 樹皮巻が確認できるものの錆により一部不明瞭である。矢竹の0.65cm上から樹皮巻きを施している。1213は鏃身長4.8cmを測り, 最も小型である。矢柄が残存するものの, 錆化により変形している。1215は鏃身長5.8cmを測る。鏃身部に皮革が付着する。1213は錆化により不明瞭だが, 山形突起を持つと推定した。1211は鏃身部の右側面に皮革が付着する。矢柄は1.8cm残存し

ており上部に樹皮巻の欠損がみられるものの, そこから矢柄装着時の切れ込みが確認できる。1218は矢柄は2.4cm残存するものの錆化により状態が悪い。樹皮巻は確認できるが, 錆により巻きの単位は不明瞭である。

1212は二段腸挟柳葉鏃である。錆化が進行しており先端部は錆塊が付着, 下段は1213にほとんど癒着している。上段の腸挟の先端が一部欠損する。腸挟の長さは上段1.25cm, 下段1.3cmを測りほぼ揃っている。山形突起を有する。矢柄は残存するものの錆によりやや状態が悪い。樹皮巻は確認できるが, 錆により巻きの単位はほ

とんど不明瞭である。

1214は鏃身部が欠損する。出土状況から1230と同一個体であるが、間が約1cm欠損しており、接合できない。残存部分が上に向かって広がっているため、山形突起を持つと推定される。矢柄が鏽により膨張している。樹皮巻は確認できるが、鏽により巻きの単位が一部不明瞭である。矢柄に厚さ0.02cmの木質が付着する。1219・1220はほぼ完形だが鏃束の中心に位置しており、形態が不明であったため、九州国立博物館に依頼し、X線CTスキャンを行った。その結果、どちらも柳葉鏃らしき形態が確認できたため、柳葉鏃とした。

1221～1223は柳葉鏃である。鏽により癒着しておりそのまま実測した。1221は鏃身部上部に皮革の痕跡と、くびれ部分に横方向に皮製と思われる紐の痕跡が2本みられる。1222は先端部分が欠損するが、残存部の最大幅は2.05cmを測りやや大型と推定される。矢柄が鏽により膨張している。樹皮巻は確認できるが、鏽により巻きの単位は不明瞭である。1223は鏽化が進行しており、山形突起周辺から変形している。矢柄の痕跡が一部残存しており、矢柄下の滑り止めの糸巻きの痕跡もみられる。

1224は腸挟柳葉鏃である。腸挟はやや外側に広がり、山形突起を有する。片方の腸挟の先端が欠損する。矢柄の残存状態は良好で、10.4cm残存する。縦方向に植物繊維が2本付着する。束ねる糸は確認できないものの、蓆と思われる。矢柄の端部に毛が観察され、科学分析の結果、大型哺乳類の毛と推定された。

1225～1231は鏽により癒着しておりそのまま実測した。ほぼ全体に皮革と思われる鏽化した有機質が付着する。1225は腸挟柳葉鏃である。鏃身部上部の最大幅は1.6cmと細身で、くびれない直線的な造りである。関部は角関である。矢柄は8.7cm残存するが、樹皮巻部分の一部が鏽化により膨張している。1226は上段が片腸挟の二段腸挟柳葉鏃である。腸挟の正確な長さはどちらも先端部が欠損しており不明だが、矢柄は9.4cm残存するが、樹皮巻部分の一部が鏽化により膨張している。矢柄の下部に蓆と思われる植物繊維が3本付着する。

1227～1231は柳葉鏃である。1227は他の鏃と重なり全形は不明である。矢柄が5.3cm残存する。1228は残りが悪いものの矢柄の痕跡が確認できる。1229と1230には横方向に皮製と思われる痕跡がみられる。1221と同様の皮製の紐の痕跡と思われる。1229は矢柄が7.4cm残存しており、樹皮巻が矢柄の0.65cm下から巻き始めている。1230は鏃身部のくびれから下部が欠損する。1214と同一個体である。残存部分の形態から柳葉鏃とした。1231は鏃身長6cmを測り、やや大型である。鏃身部のくびれが強く、山形突起が発達する。矢柄が残存するが欠損が多く状態は悪い。

1232～1235は二段腸挟柳葉鏃である。1232は上段が片腸挟である。腸挟の長さは上段1.1cm、下段1.7cmを測

り下段が深い。山形突起を有する。関部は角関である。矢柄の残存状態が良好で、12.6cm残存する。矢柄の一部に蓆の小片と鏽化した有機質が付着する。

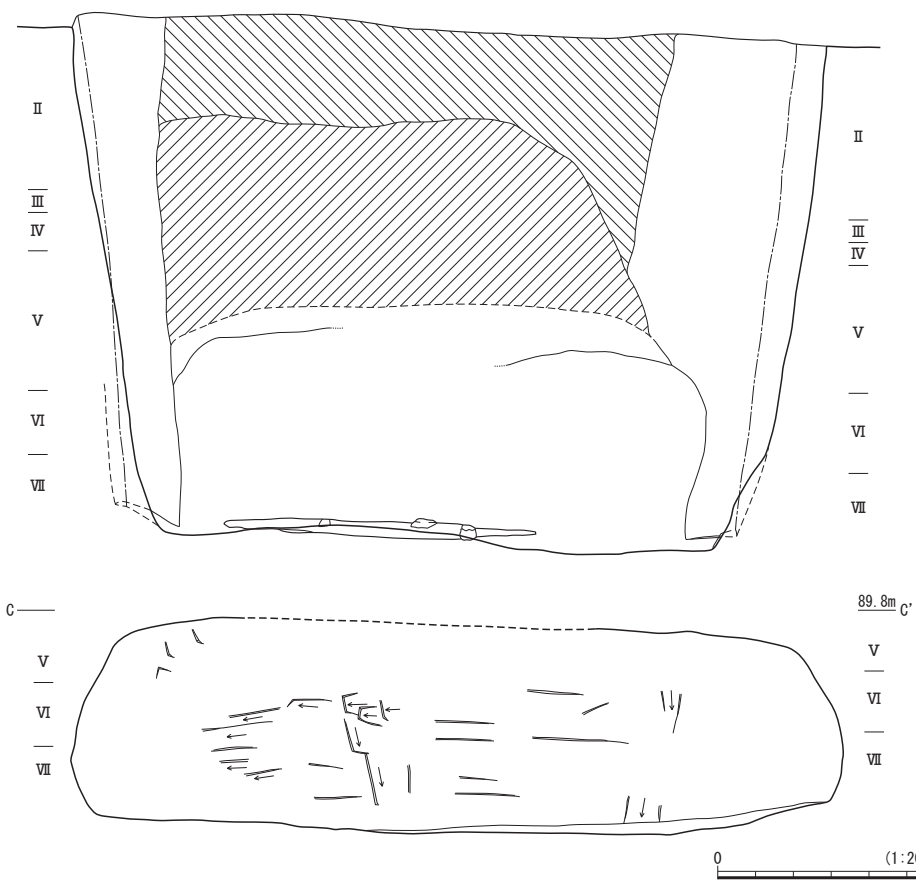
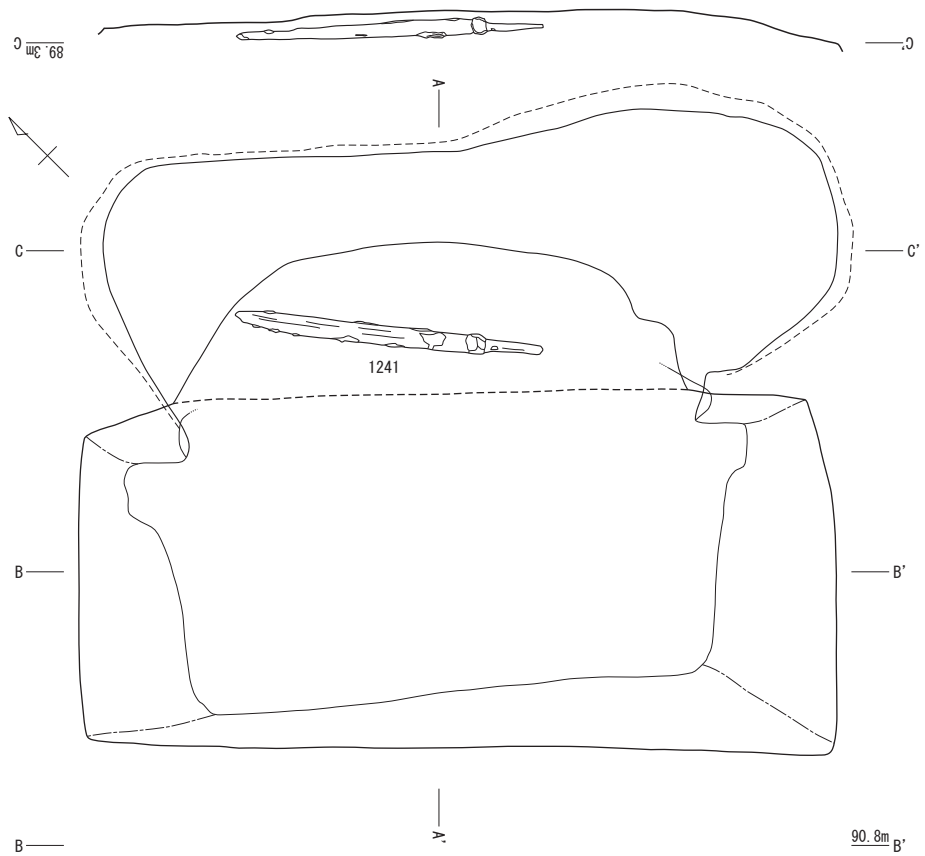
1233・1234は鏽により癒着しておりそのまま実測した。1233は上段が片腸挟である。腸挟の長さは上段1.4cm、下段1.7cmを測り下段が深い。山形突起を有する。関部は角関である。矢柄の残存状態は先端が欠損するものの6.7cm残存する。1234の腸挟の長さは上段1.1cm、下段1.4cmを測り下段が深い。山形突起を有する。関部は角関である。矢柄が残存するものの状態は悪く鏽化により一部膨張している。1235の腸挟の長さは上段1.05cm、下段1.6cmを測り下段が深い。山形突起を有する。関部は角関である。矢柄の残存状態が良好で、3.3cm残存し樹皮巻が明瞭である。上段の刃部に毛と皮革が付着する。科学分析の結果、小型哺乳類の毛や大型哺乳類の下毛と推定された。

1236・1237は矢柄の破片である。樹皮巻きが一部残存している。1236は全体に蓆の痕跡が観察される。中心部分や末端部分では蓆が良好に残存している。1237は樹皮巻の終わりが確認できる。

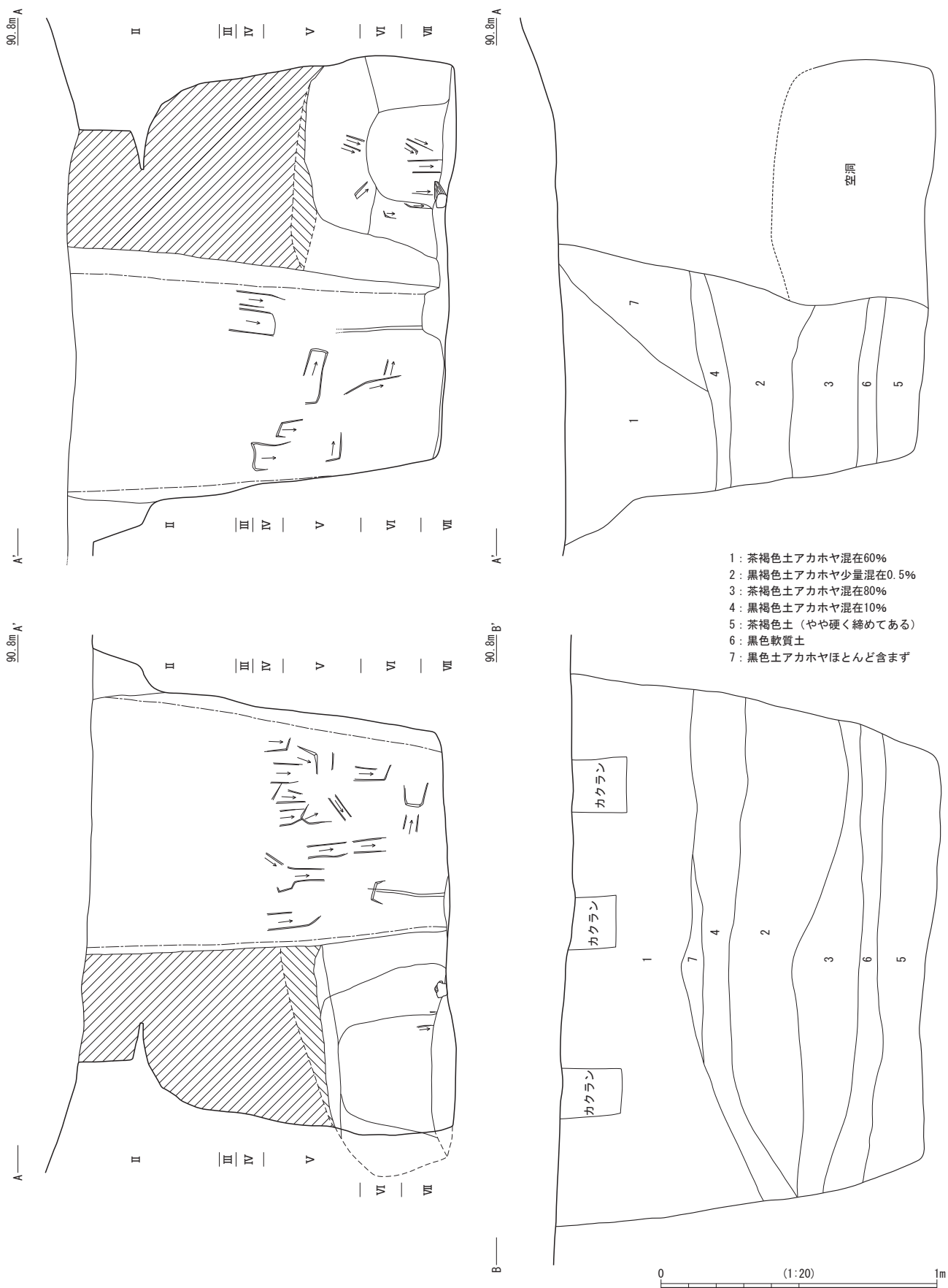
1238は鉄鏃の茎部片である。矢柄が残存する。1239・1240は接合できないものの、出土状況と欠損部の断面形態から同一個体と推定した。器種は不明である。1239は全長3.5cm、最大幅0.4cmを測り、断面形態は方形である。一部に木質が付着する。1240は全長7.2cm、最大幅0.6cmを測る。刃部は無く、断面形態は長方形である。全体的に木質の痕跡が見られるが、先端部は明瞭に残存している。先端部の木質は、コの字状に加工した木に板状の木を合わせ樹皮巻で固定されている。先端を覆うように木質痕が見られるため、おそらく欠損していない。

71号地下式横穴墓(第263図～第265図)

G-21区において検出される。羨道部は約15cmと短い。竪坑の羨道寄りに挟りが認められることより丸太閉塞の可能性が高い。また、竪坑の壁面には縦及び横方向の工具痕が認められる。玄室には空洞が残るが人骨は残っていない。玄室の羨門寄りに剣1点が副葬されている。剣は鞘の木質が良好に残っており、鞘まで含めた長さは78.5cmと長いものである。1241は鉄剣で鞘の木質が良好に残っており、鞘まで含めた長さは78.5cmと長いものである。刃部から茎部までの全長は77cm、刃部は61.2cm、茎部は15.8cmである。刃部断面は凸レンズ状を呈するが、鎬は認められない。刃部の最大幅は関部にあり4.2cmで先端部近くで3cmになり、切っ先はやや鋭くなる。刃部の厚さは4～5cmと大きさの割には薄い。関部は左右対称で直角関を呈する。茎部の幅は1.7～2.6cm、厚さは0.4cmである。目釘孔は3孔と珍しいもので関部より下方へ5.6cm・9.6cm・12.9cmの位置に径0.5cmの孔が



第263图 71号地下式横穴墓(1)





第265図 71号地下式横穴墓副葬品

穿たれる。刃部には鞆木と樹皮巻きが観察され、鞆尻は2.2cmである。樹皮巻きは錆のため単位は確認できないが、先端部によく残っている。また、部分的に布の痕跡も観察される。関部から上方へ2cmが鞆縁と思われ、鞆縁・柄縁部分には鹿角が確認できる。茎部には柄木と約0.2cm幅の紐巻きが一部残存する。一番上方の目釘孔には木製の目釘が観察される。科学分析では、柄巻きは植物繊維に絹を巻いたものと推定されている。また、鞆木から採取された木片はヒノキ亜科とされた。

72号地下式横穴墓 (第266図)

I-22区において検出される。玄室に比して竪坑が小さいものである。竪坑の羨門側に挟りが認められ、丸太閉塞の痕跡を残す。

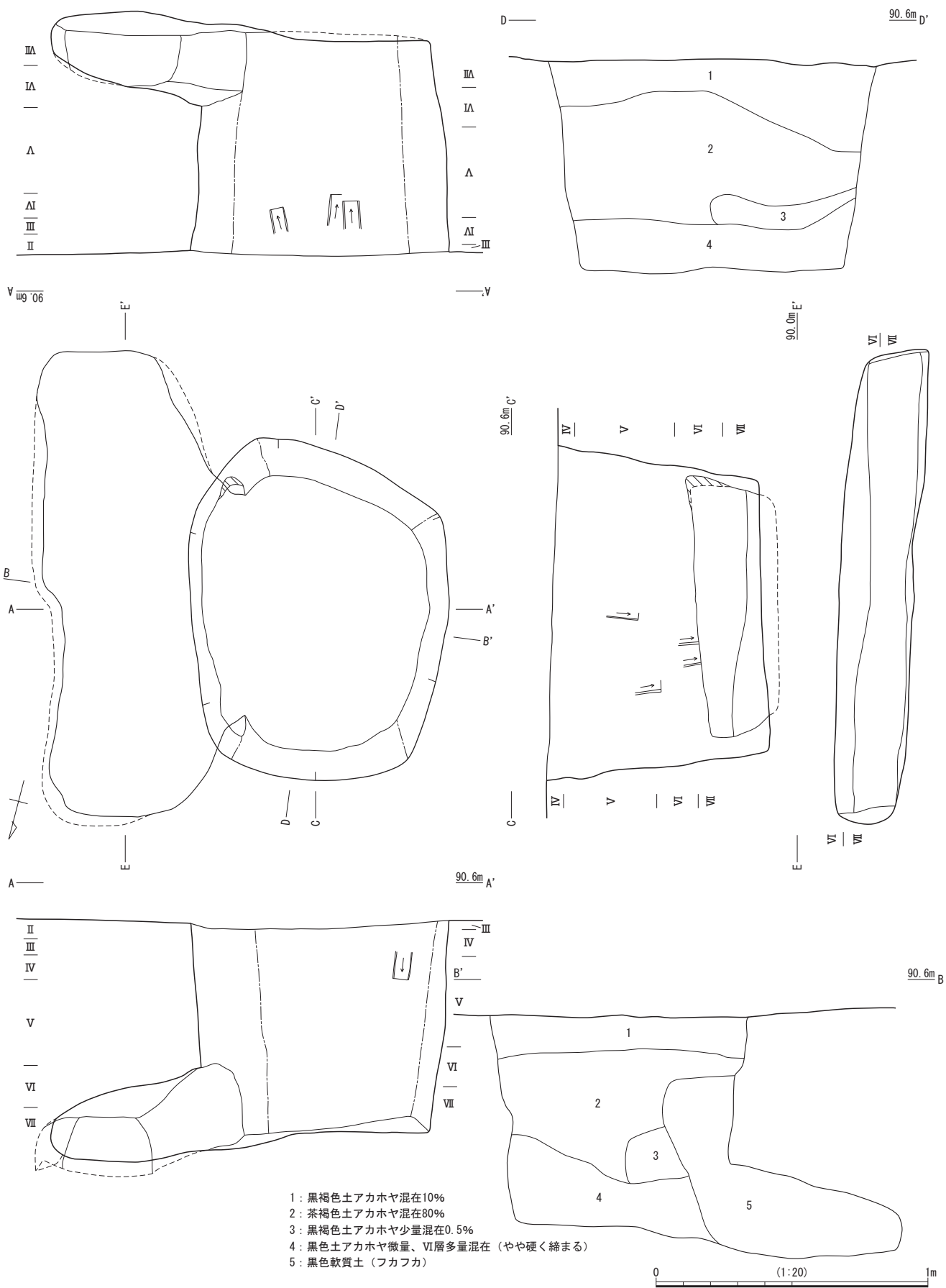
73号・74号地下式横穴墓 (第267図～第269図)

G-23区において検出される。竪坑の羨門側に挟りが認められ、竪坑の羨門側から玄室へかけて空洞であることから丸太閉塞と思われる。竪坑の壁面には縦方向の工具痕が明瞭に認められる。

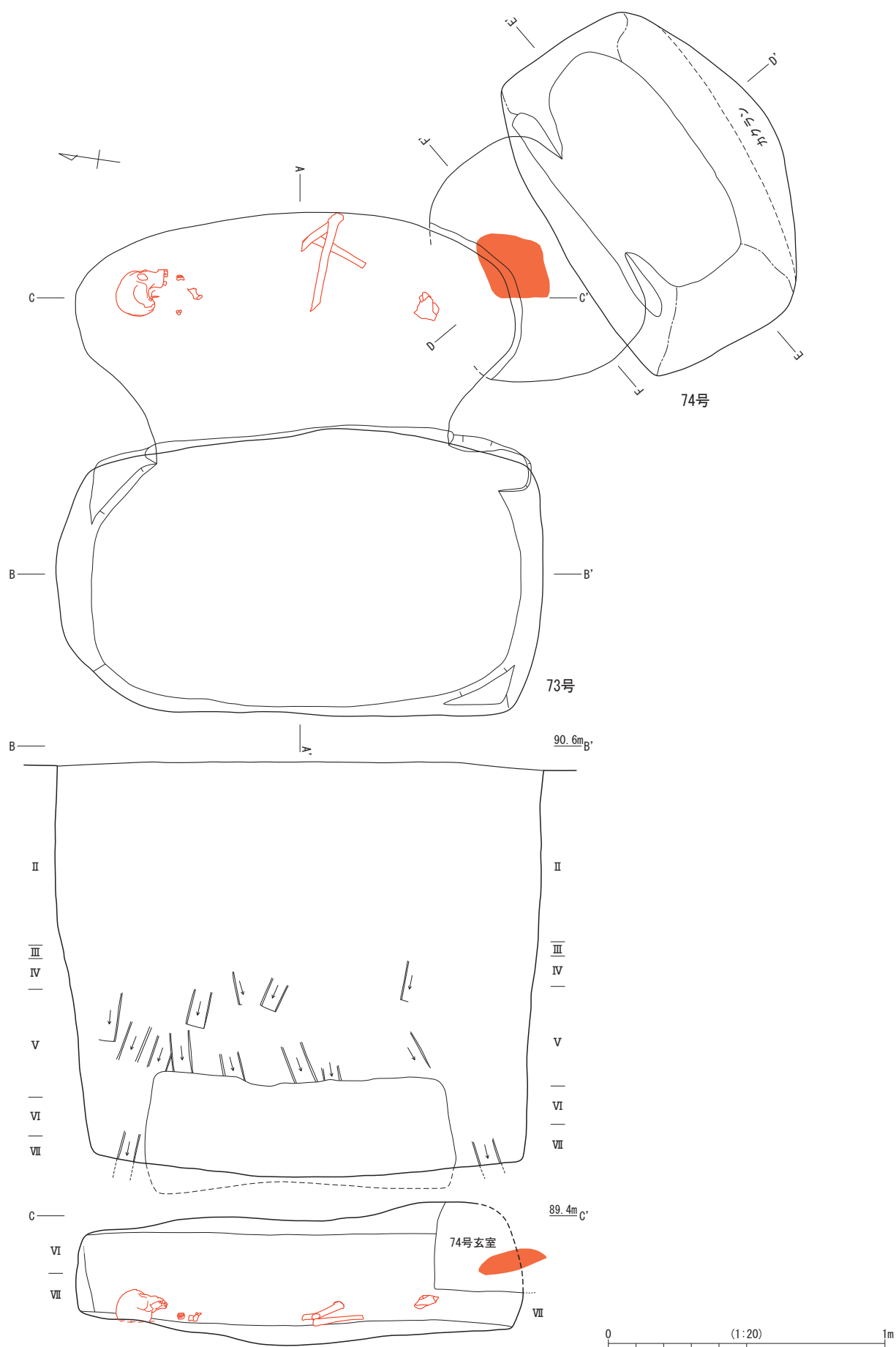
玄室の左奥(北側)に頭蓋、ほぼ中央に大腿骨が遺存する。人骨は良好に残っているが、大腿骨は横及び斜めに動かされている状況である。この人骨は熟年女性である。大腿骨のやや右側には小さめの頭蓋骨が見られる。この人骨は74号地下式横穴墓に帰属するものであるが、頭は73号地下式横穴墓の玄室内に置かれた状況である。

74号地下式横穴墓は、1-②-b類である。73号墓の東南方向に竪坑を設け、玄室は幅が狭いもので、73号墓の玄室まで掘り進めて合体させてある。竪坑の羨門寄りに挟りが認められ、竪坑の埋土も羨門側はフカフカした流入土で丸太閉塞と思われる。73号墓の玄室にある頭蓋は未成人骨と思われるもので、73号墓の人骨と母子関係にあるものと推察される。また、小児の腹か脚に当たる位置に1辺25cmで厚さ10cmの赤色顔料(丹)の塊を置いてある。

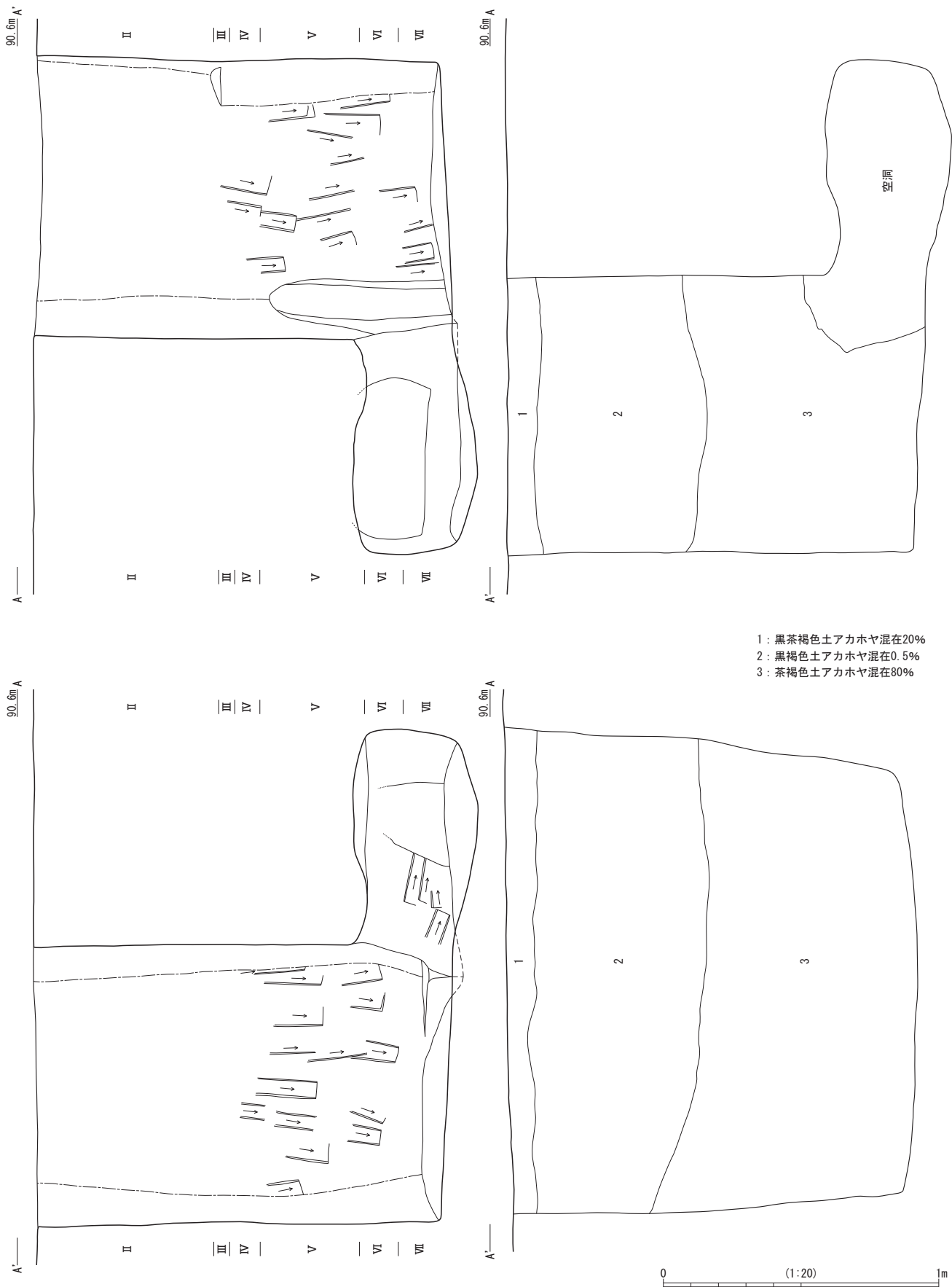
県内では地下式横穴墓の、このような切り合いは初めての例である。追葬を意識したものであらうと思われるが、小児を熟年女性の頭位に埋葬するのではなく、脚側に埋葬していることに意味があるものと考えられる。これまでの追葬の例は、竪坑を掘り直して同じ玄室に追葬するものであるが、74号墓は竪坑を別に掘り玄室を73号墓に合体させたことに意味があると思われる。町田堀遺跡においては、小児用と思われる小型の地下式横穴墓が存在し、小児の死についても新たに地下式横穴墓を造って埋葬しているようである。74号墓に埋葬されている小児も追葬ではあるが、他の小児用の墓と同じように新たに竪坑から掘って地下式横穴墓を造り、追葬したのではないだろうか。



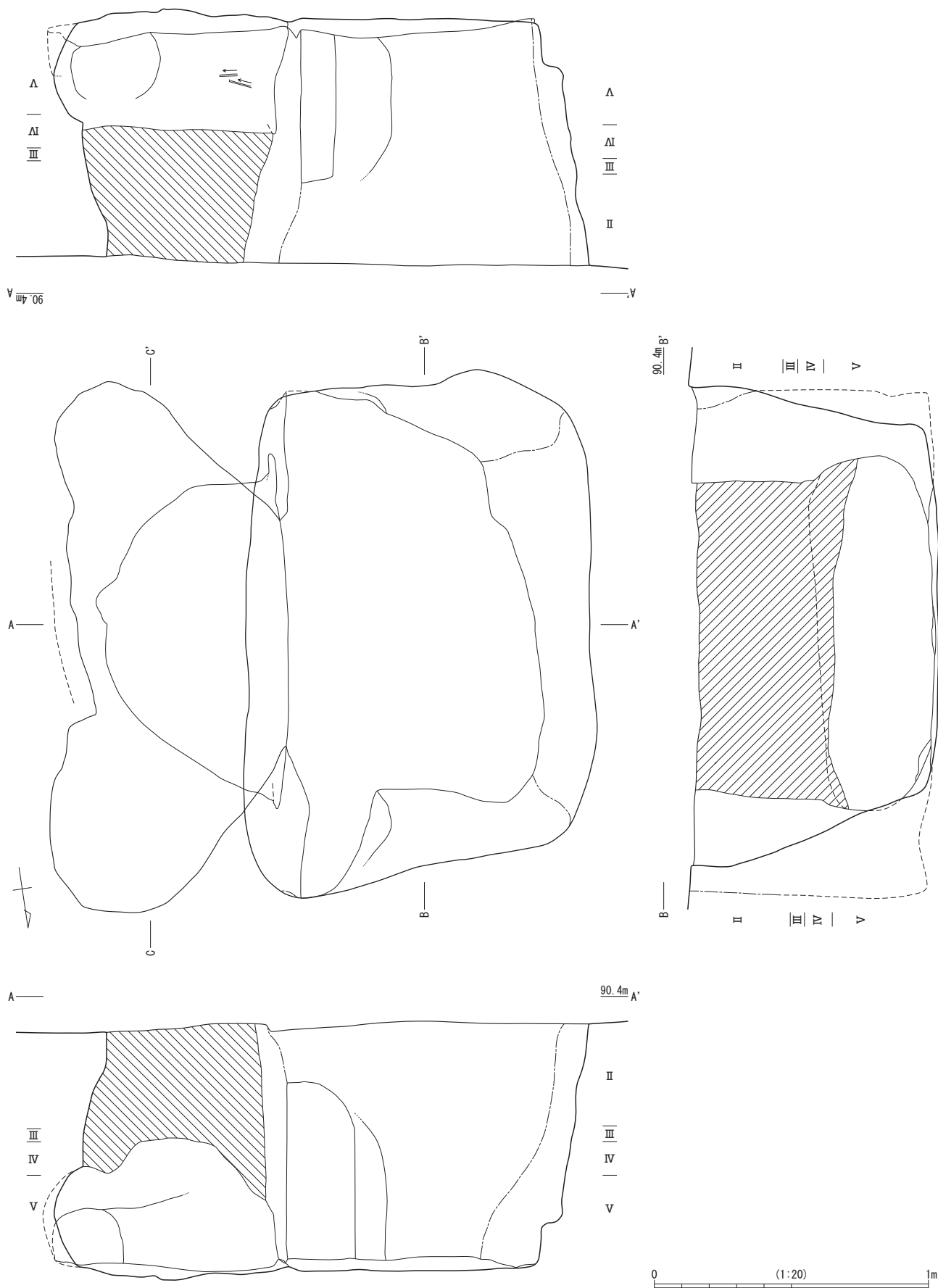
第266図 72号地下式横穴墓



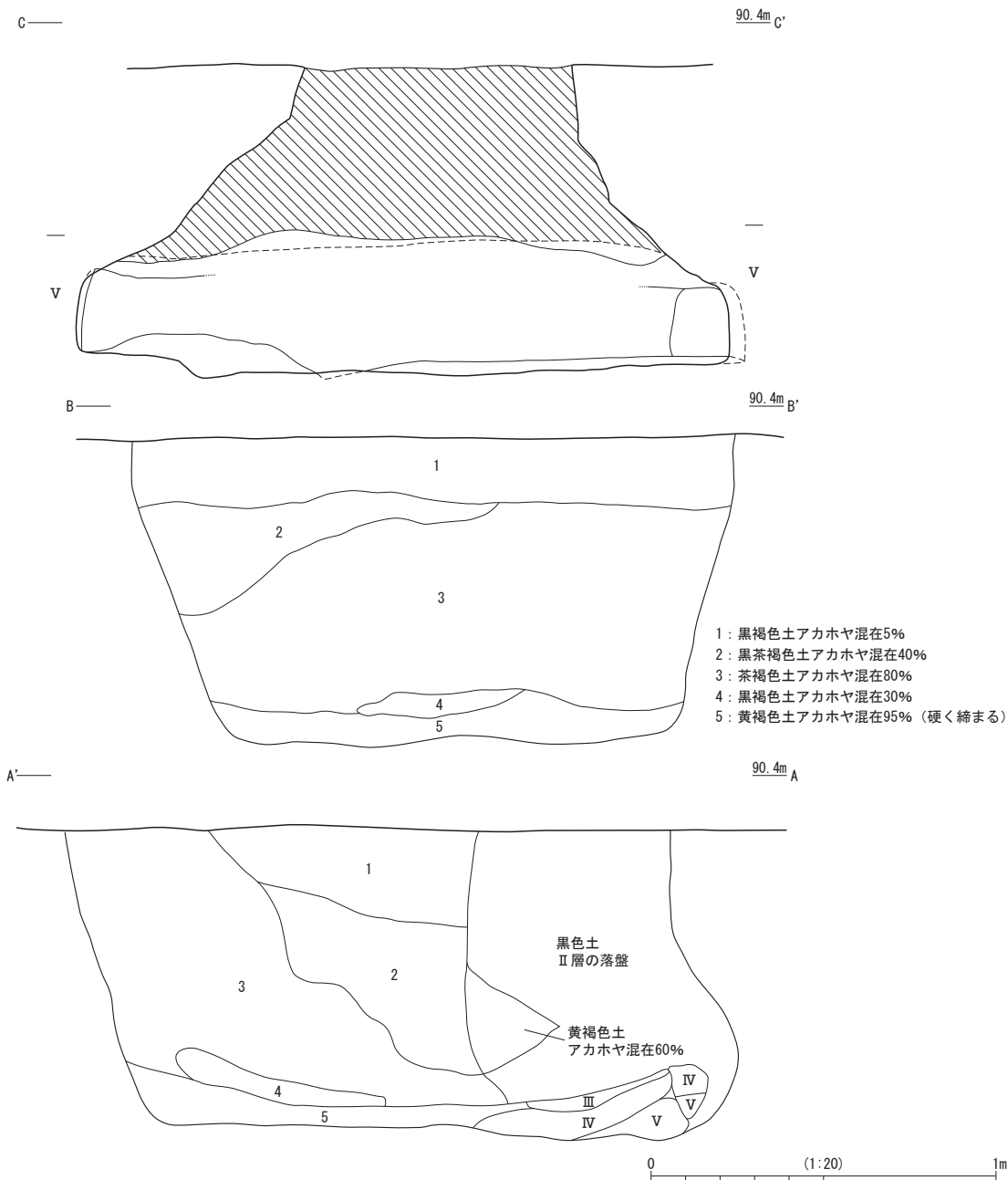
第267图 73号・74号地下式横穴墓(1)



第268図 73号地下式横穴墓(2)



第270图 75号地下式横穴墓(1)



第271図 75号地下式横穴墓（2）

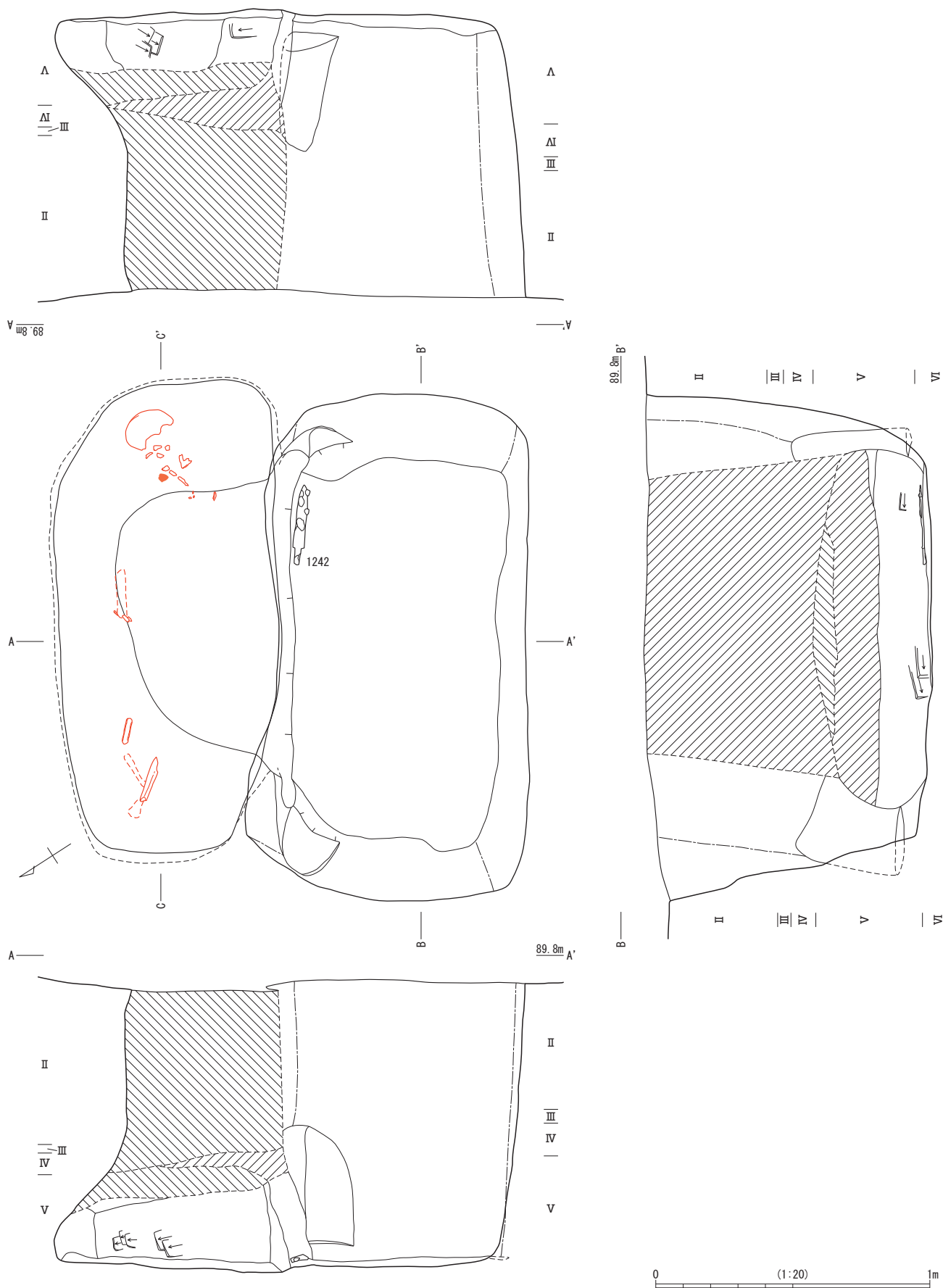
75号地下式横穴墓（第270図・第271図）

I－24区において検出される。玄室は羨門から八字状に広がるもので、形状は不整形である。特に玄室奥壁は不揃いである。

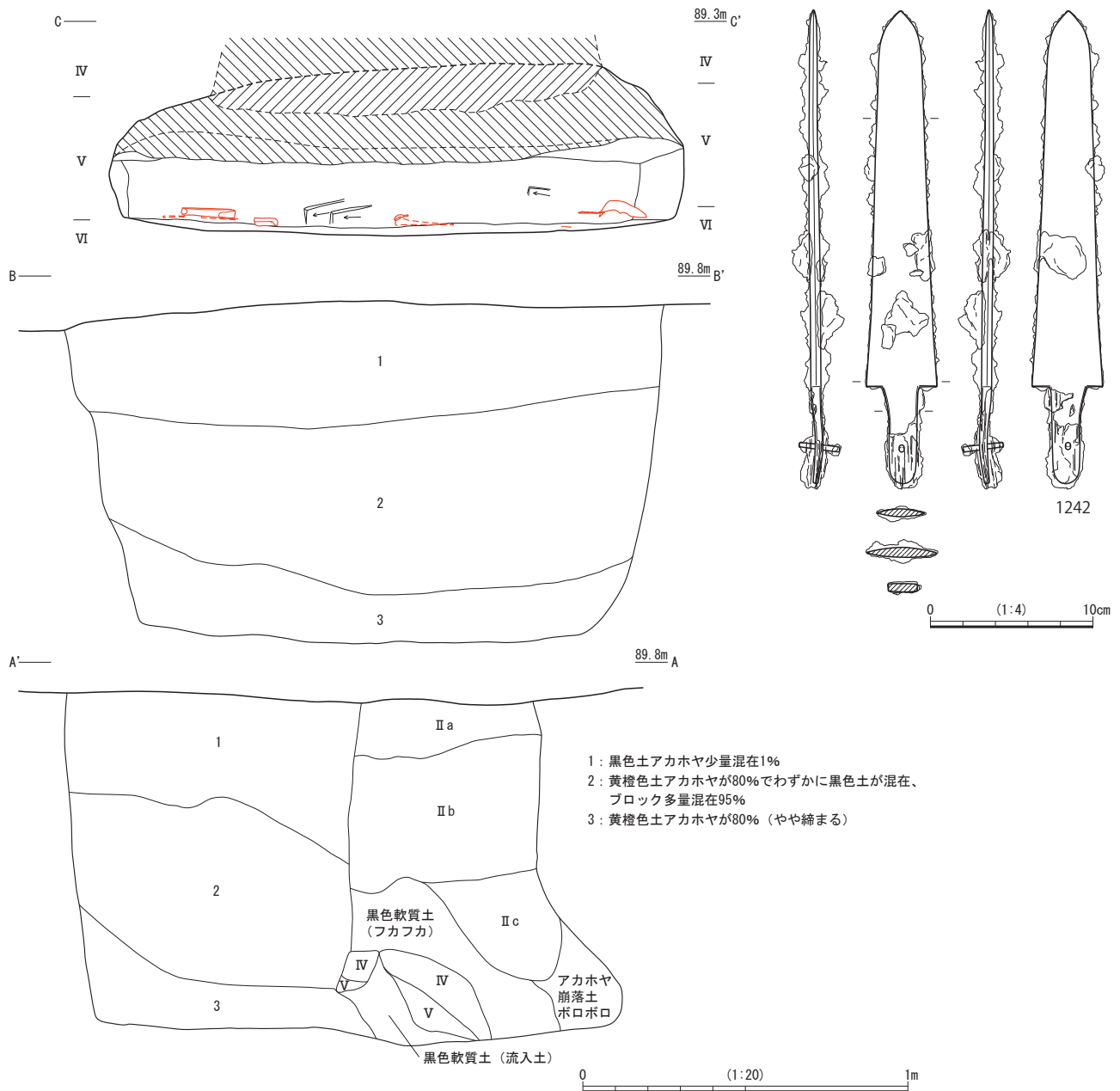
76号地下式横穴墓（第272図・第273図）

H－26区において検出される。竪坑と玄室の規模がほぼ同じである。竪坑の羨門側に挟りが見られ、丸太閉塞と思われる。竪坑の羨門直下に剣が副葬されている。玄室の右奥（南東側）に頭蓋、中央に大腿骨、左側に管骨が遺存する。また、玄室のほぼ中央の右前腕と思われる骨にイモ貝製の貝釧が装着された状況で出土してい

る。1242は全長29.1cmの鉄剣である。刃部23.1cm、茎部6cmである。刃部の断面は凸レンズ状を呈するが、鑄は明瞭ではない。厚さは0.5～0.7cmで、刃部の最大幅は関部にあり4.3cmで先端部近くで2.4cmと先細りで切っ先はやや鋭い。関部は左右対称で直角関を呈する。茎部の幅は1.8cmで末端部は丸みを帯びる。厚さは0.5cm。目釘孔は1孔で関部から下方へ3.6cmの位置に径0.4cmの孔が穿たれる。鉄製の目釘が残存するが、中央の断面図の左側の方が右側より太いため、左側から右側へ挿入したものと思われる。茎部の下部に柄木が残存するが2枚合わせが確認できる。貝釧は取り上げた時点でボロボロであり、実測及び計測は不可能であった。



第272图 76号地下式横穴墓(1)



第273図 76号地下式横穴墓(2)・副葬品

② 2-②-b類地下式横穴墓

2-②-b類に分類される地下式横穴墓は、77号と78号の2基である。

77号地下式横穴墓(第274図)

I-21区において検出される。玄室は左側が広く片袖気味である。竪坑は玄室に向かって傾斜しており、玄室もそのまま傾斜している。玄室の天井は、20cmと低いものである。

78号地下式横穴墓(第275図)

H-23区において検出される。竪坑は不整形で、玄

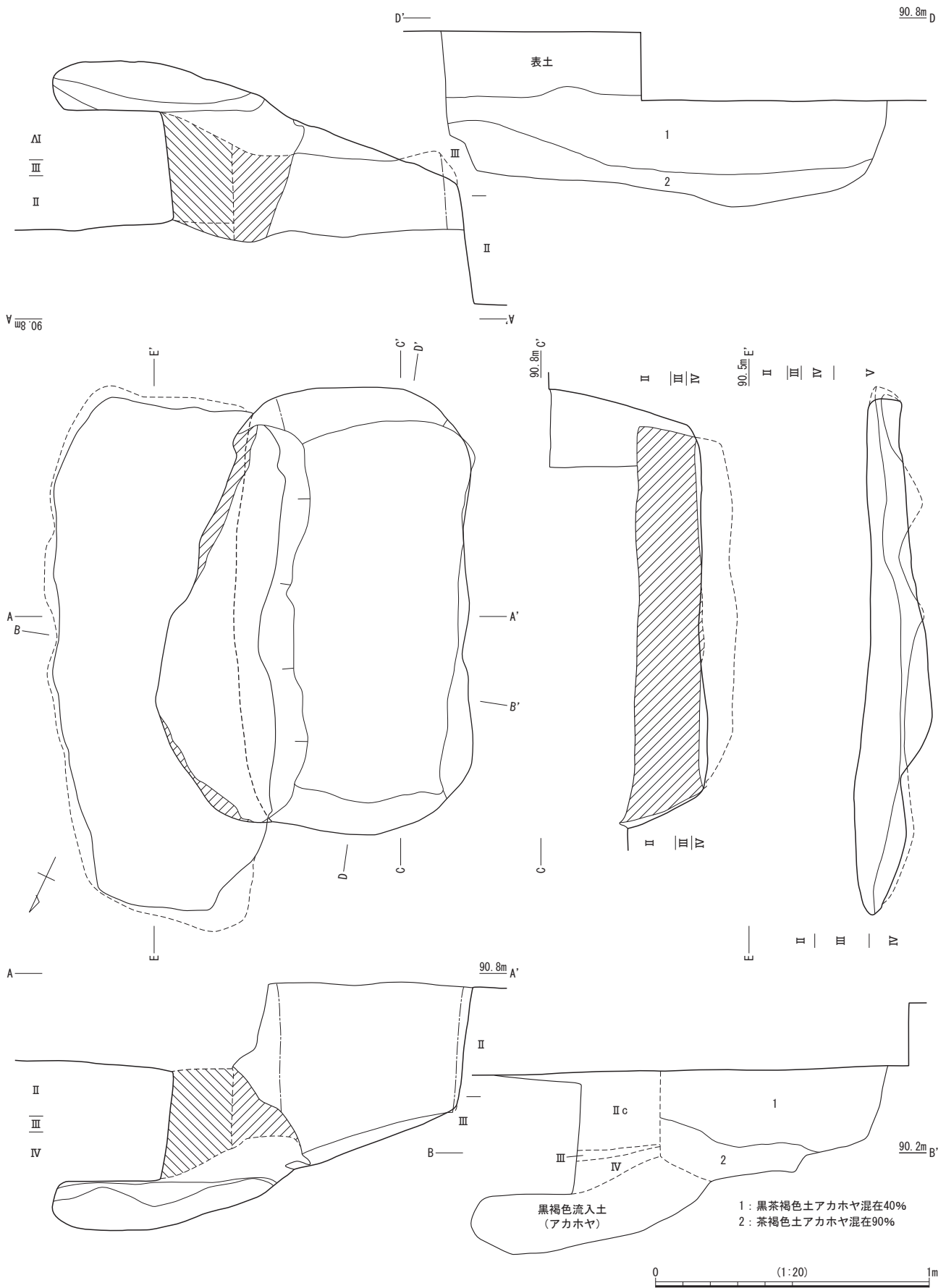
室は細い楕円形を呈する。竪坑の床面は平坦で、羨門寄りから玄室へと傾斜するものである。玄室の天井は25cmと低い。

② 2-②-c類地下式横穴墓

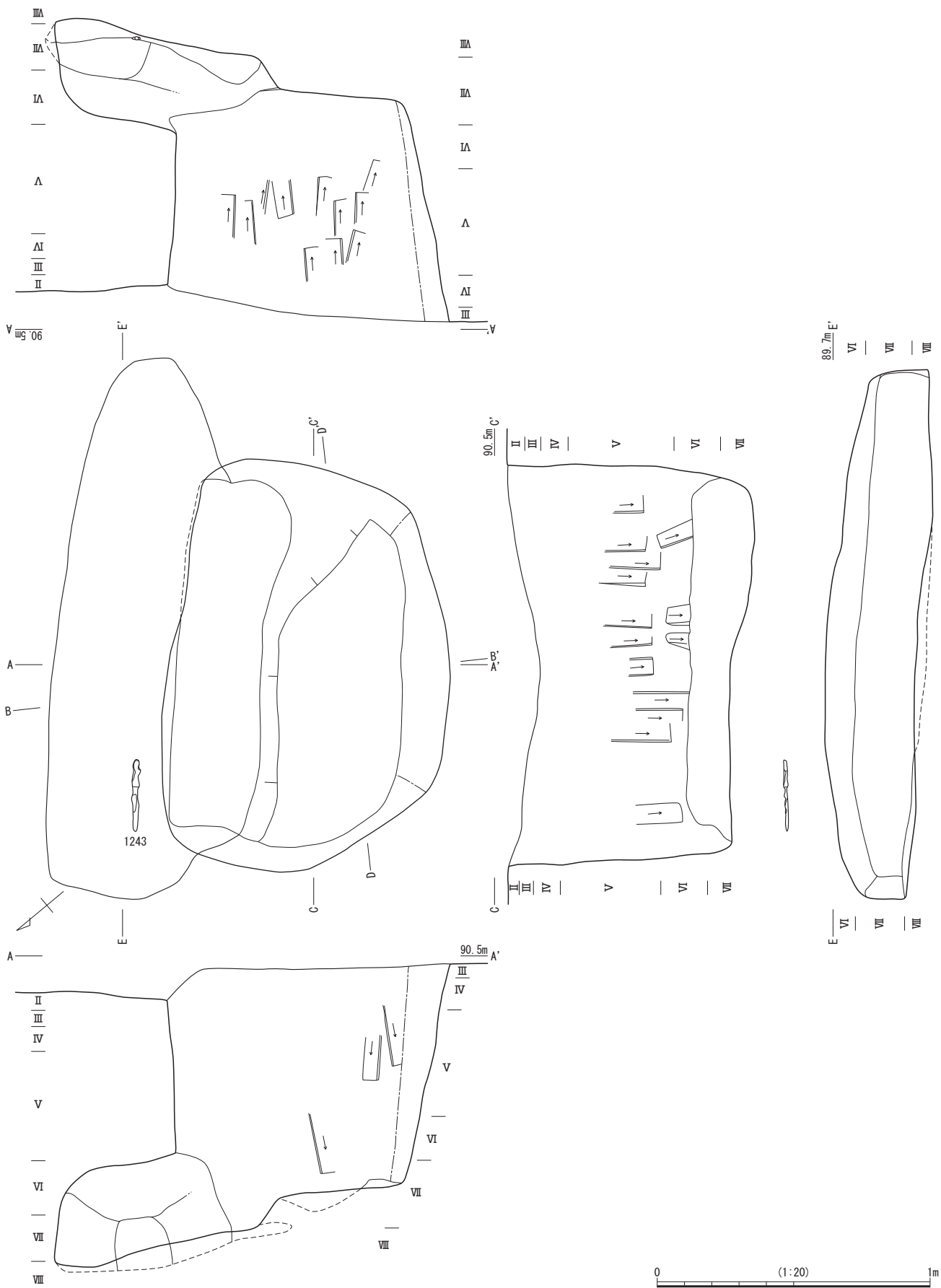
2-②-c類に分類される地下式横穴墓は79号と80号の2基である。

79号地下式横穴墓(第276図・第277図)

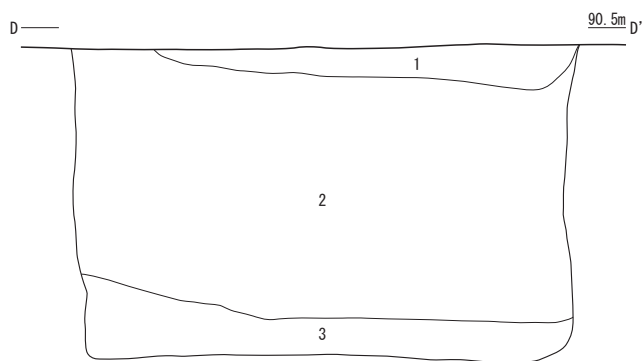
I-22区において検出される。玄室は竪坑の羨門寄りで段落ちする。段落ち部分からやや傾斜して奥部へ至るものである。玄室の左寄りにヤリ1点が副葬されてい



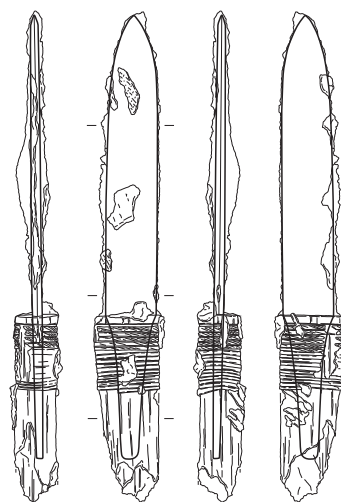
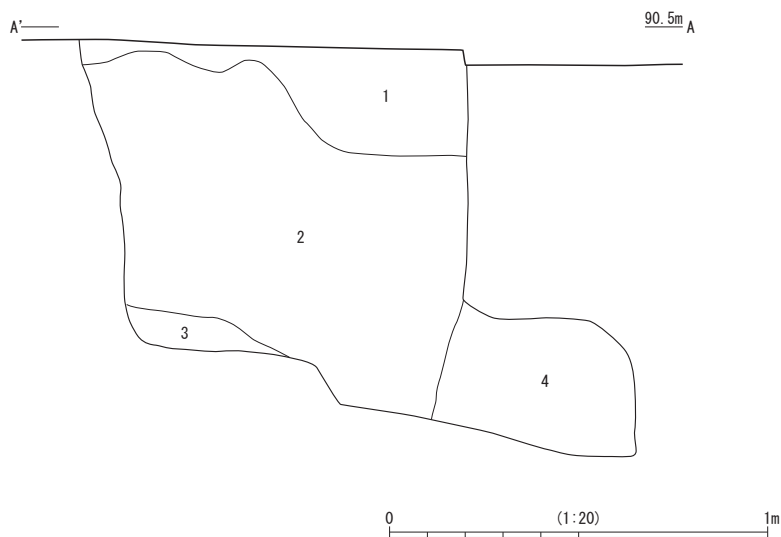
第274図 77号地下式横穴墓



第276图 79号地下式横穴墓(1)



- 1: 黒褐色土アカホヤ少量混在5%
- 2: 茶褐色土アカホヤ、VI層ブロック混在60% (ボロボロ)
- 3: 茶褐色硬質土 (締めて固めた状況)
- 4: 黒色流入土 (フカフカ)



1243



0 (1:4) 10cm

第277図 79号地下式横穴墓(2)・副葬品

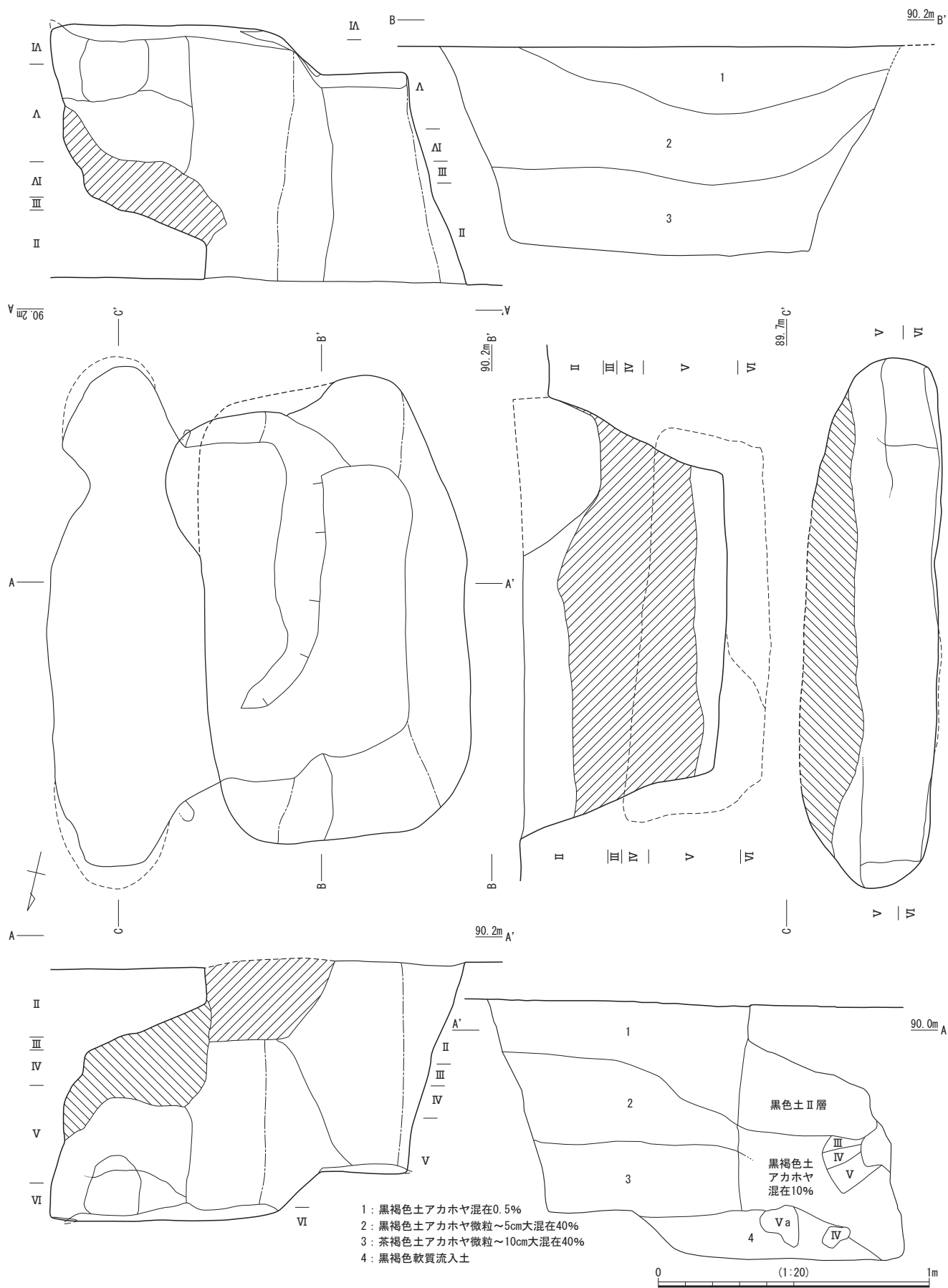
る。1243は全長23.4cmのやりである。槍先部は15.8cmで幅2.8cm、厚さ3～5cmで先端部は鋭い。茎部は7.6cm、最大幅が関部があり2.6cmで末端部は0.8cmと細くなる。関はナデ関である。柄部には柄木及び柄巻きが残存し、柄木は4枚の組み合わせか2枚合わせの可能性がある。槍先部には布の痕跡が認められ、布に包まれて副葬された可能性がある。科学分析の結果、槍先に平織の布が観

察され、柄巻きの撚糸及び柄巻きの上に布の痕跡が観察されている。

80号地下式横穴墓(第278図)

I-25区において検出される。竪坑のほぼ中央部で段落ちして玄室へ至るもので、玄室は平坦である。

玄室の平面形状は、不整形である。



第278図 80号地下式横穴墓

② 3類地下式横穴墓

3類に分類される地下式横穴墓は、81号～86号までの6基である。

81号地下式横穴墓（第279図）

3-①-a類に分類されるもので、G-19区において検出される。玄室は奥行き30cm、天井の高さ15cmと規模の小さなものである。

82号地下式横穴墓（第280図）

3-①-c類に分類されるもので、G-20・21区において検出される。竪坑の羨門寄りに挟りが見られ、丸

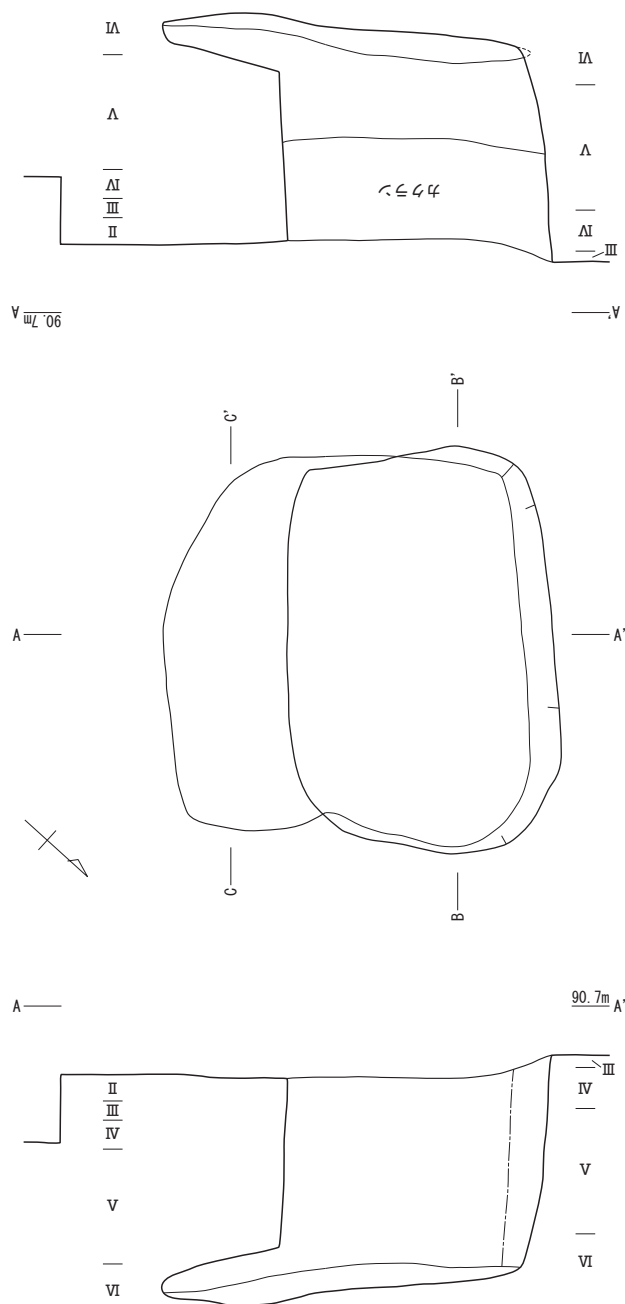
太閉塞と思われる。玄室は小型の楕円形で竪坑より小さい。竪坑の羨門の上に赤色顔料（丹）が7mm×6mmの範囲で塗布されている。また、玄室のほぼ中央に刀子1点が副葬されている。1244は残存長9.8cmの刀子である。茎部は銹のため明瞭ではないがX線写真によりかろうじて茎部がみえる。茎部は3.3cm、幅0.6cm～1.4cm。刃部はわずかに反り、刃渡り6.1cmで刃区を有し、幅1cm～1.6cm、背の厚さ1.5cm～2cmである。関はナデ関と思われる。

83号地下式横穴墓（第281図）

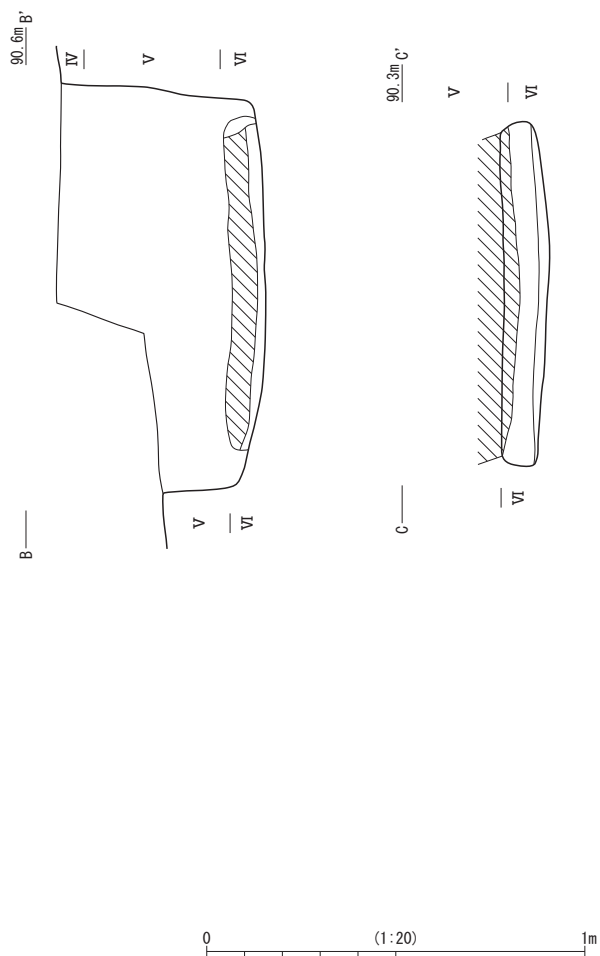
3-①-c類に分類されるもので、I-25区において検出される。玄室は竪坑の羨門寄りで段落ちしており、平面形は不整形である。竪坑の壁面には縦方向の工具痕が認められる。

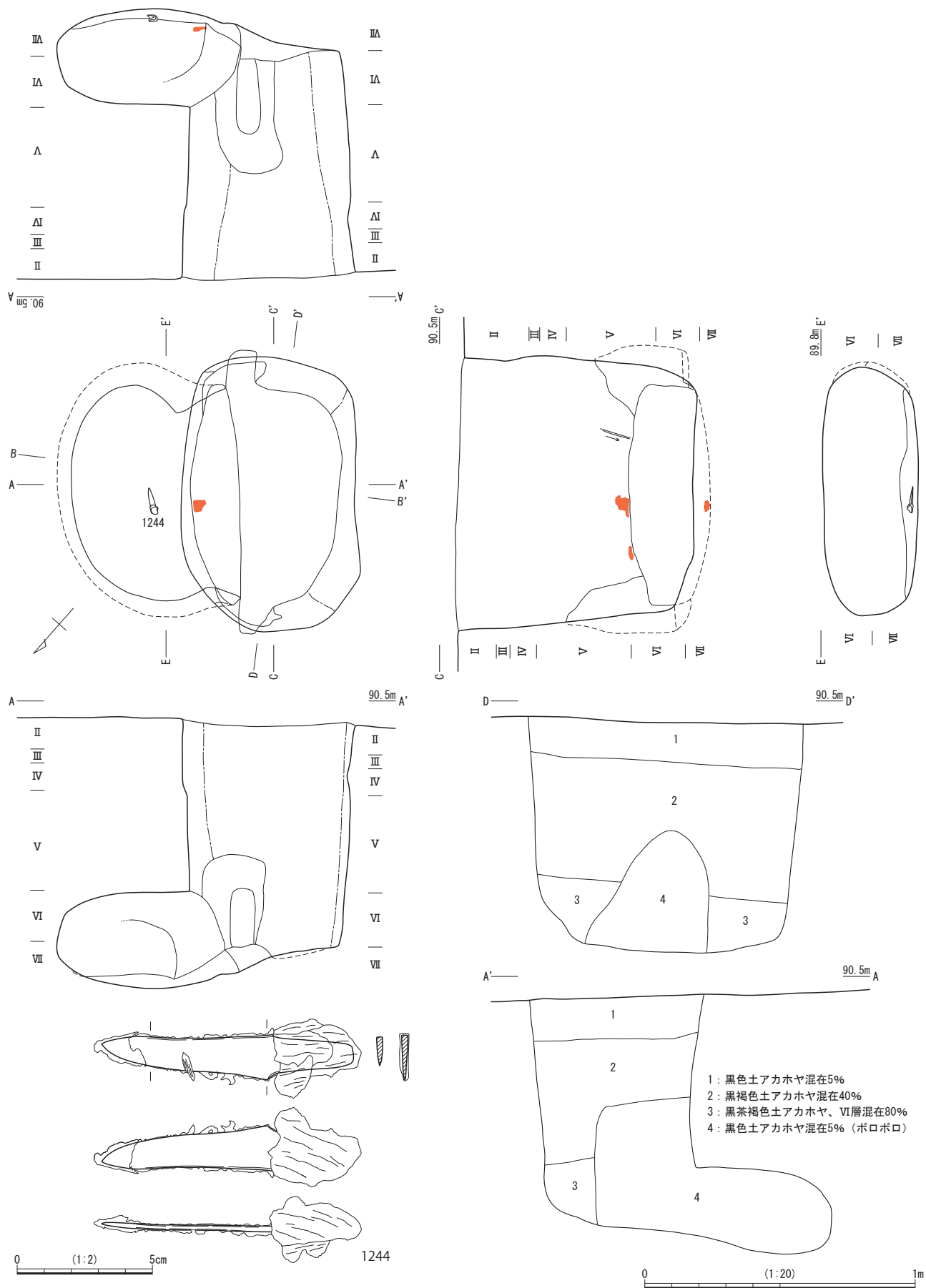
84号地下式横穴墓（第282図）

3-②-a類に分類されるもので、F-20区において検出される。竪坑の羨門側に挟りが見られ、竪坑の羨門側及び玄室は空洞である。丸太閉塞と思われる。玄室は幅約80cm、天井の高さ20cmと小型である。

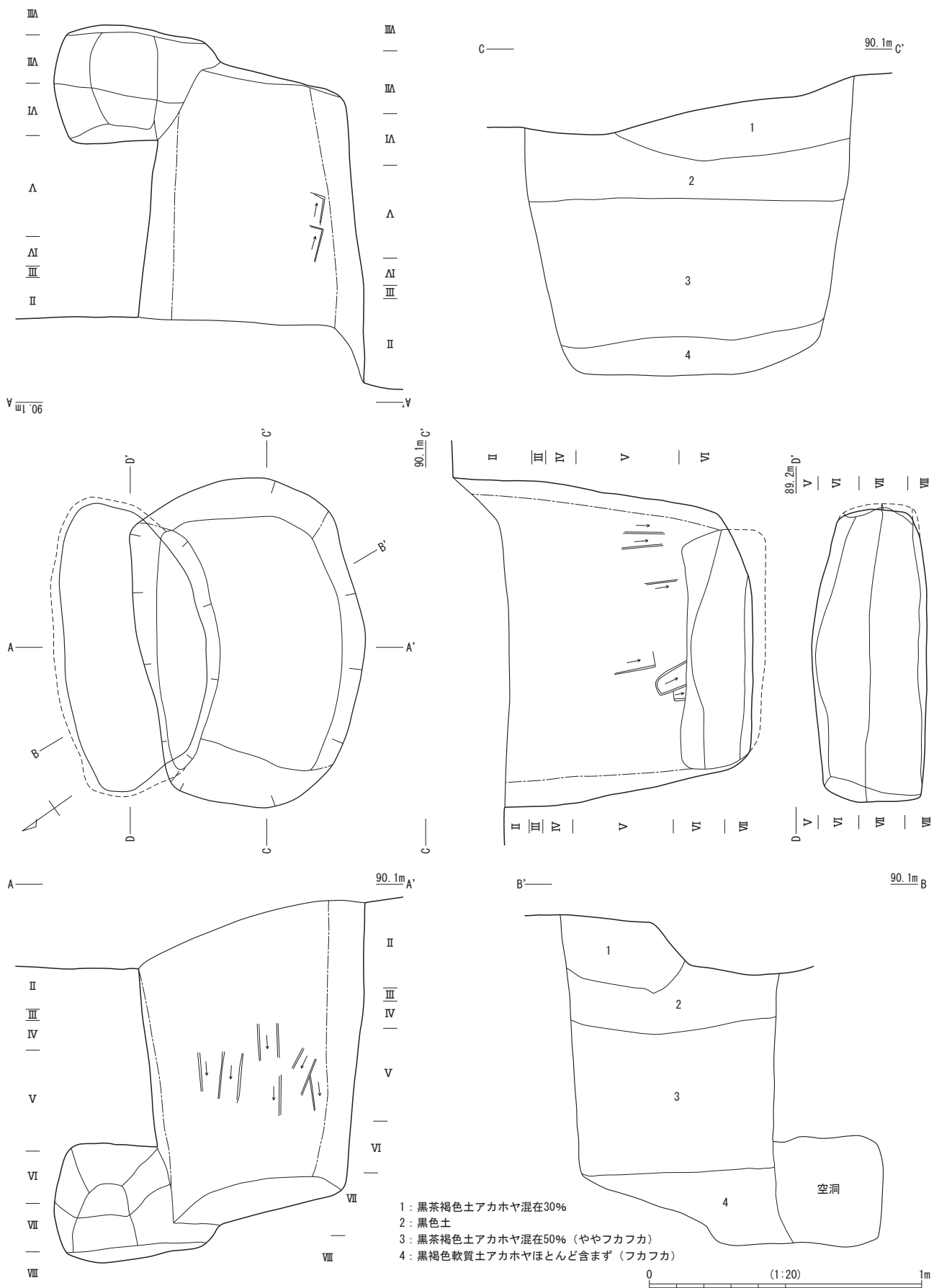


第279図 81号地下式横穴墓

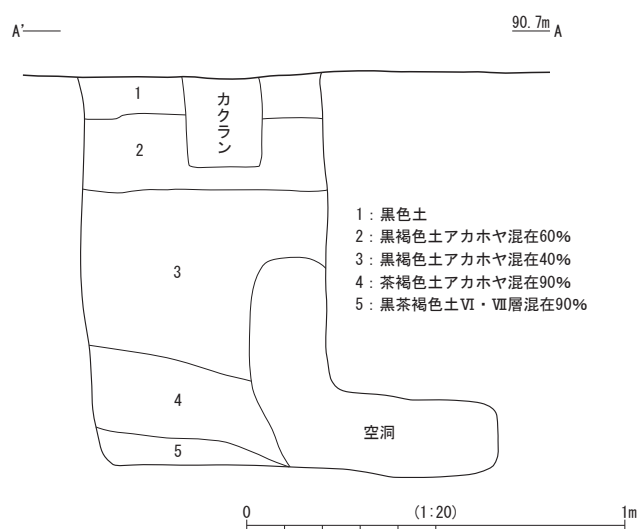
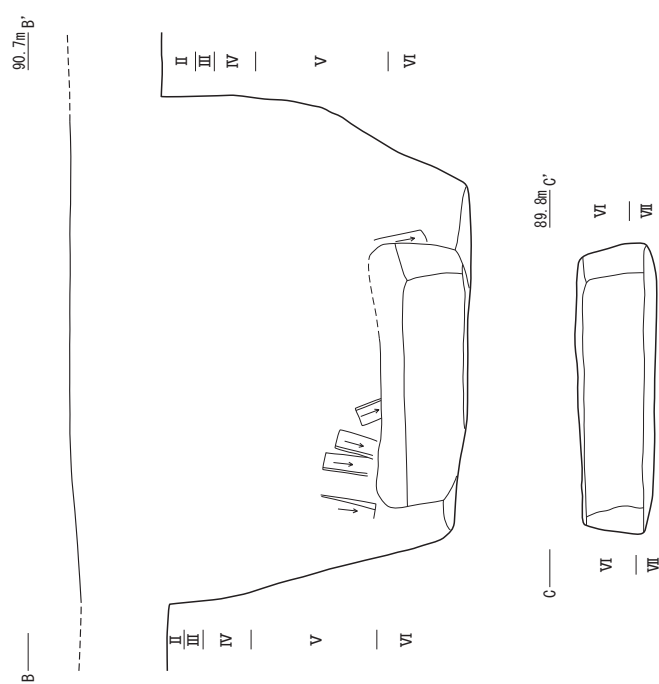
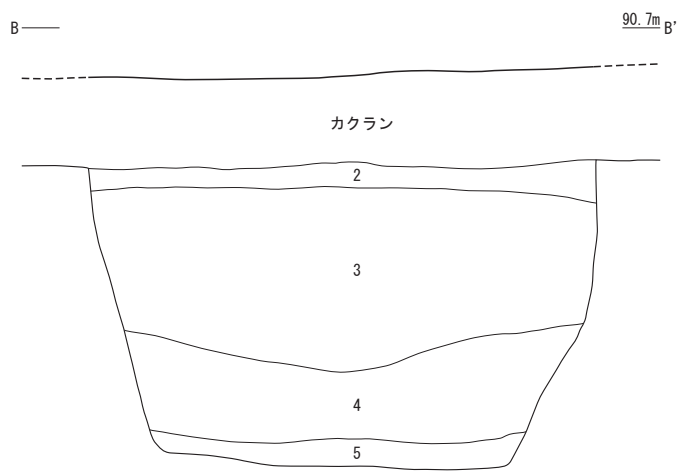




第280図 82号地下式横穴墓・副葬品



第281図 83号地下式横穴墓



85号地下式横穴墓（第283図・第284図）

3-②-c類に分類されるもので、F-20区において検出される。竪坑の羨門側に挟りが見られ、竪坑の羨門側及び玄室内はフカフカの流入土で丸太閉塞と思われる。玄室は、羨門の下で段落ちしている。

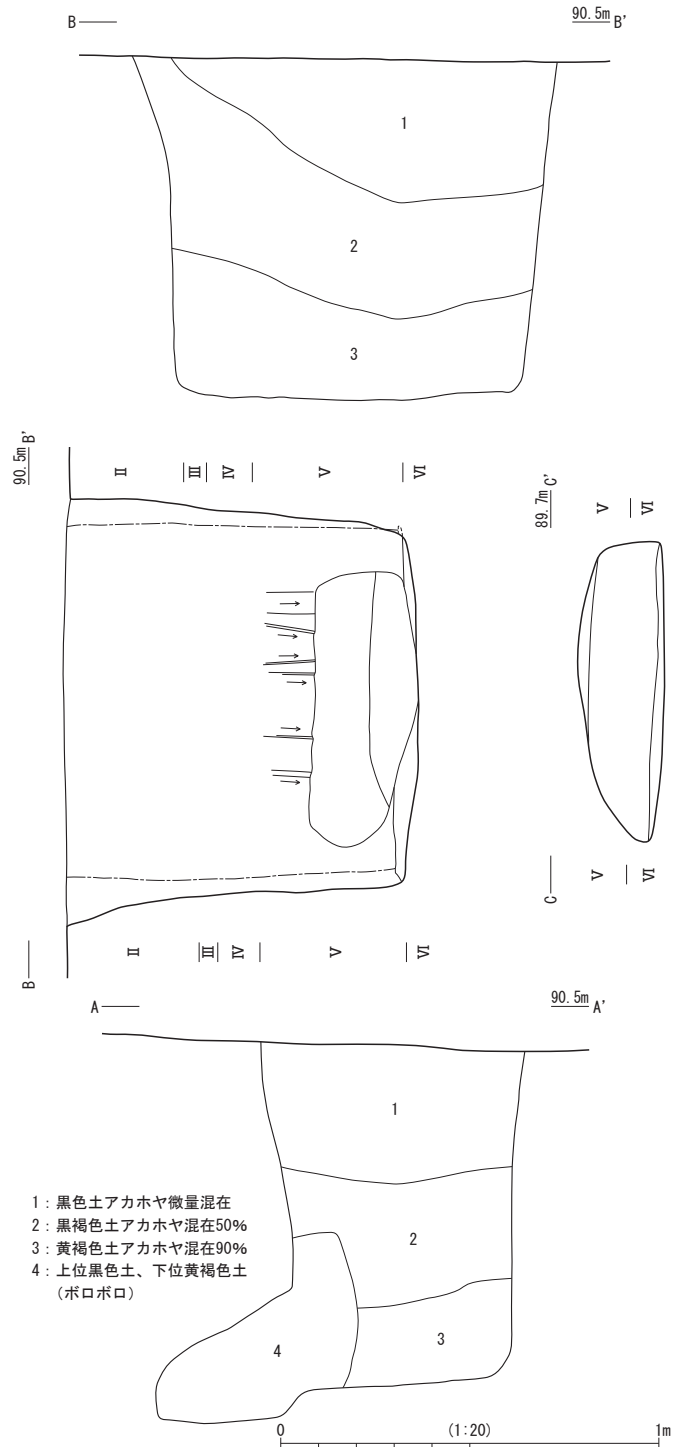
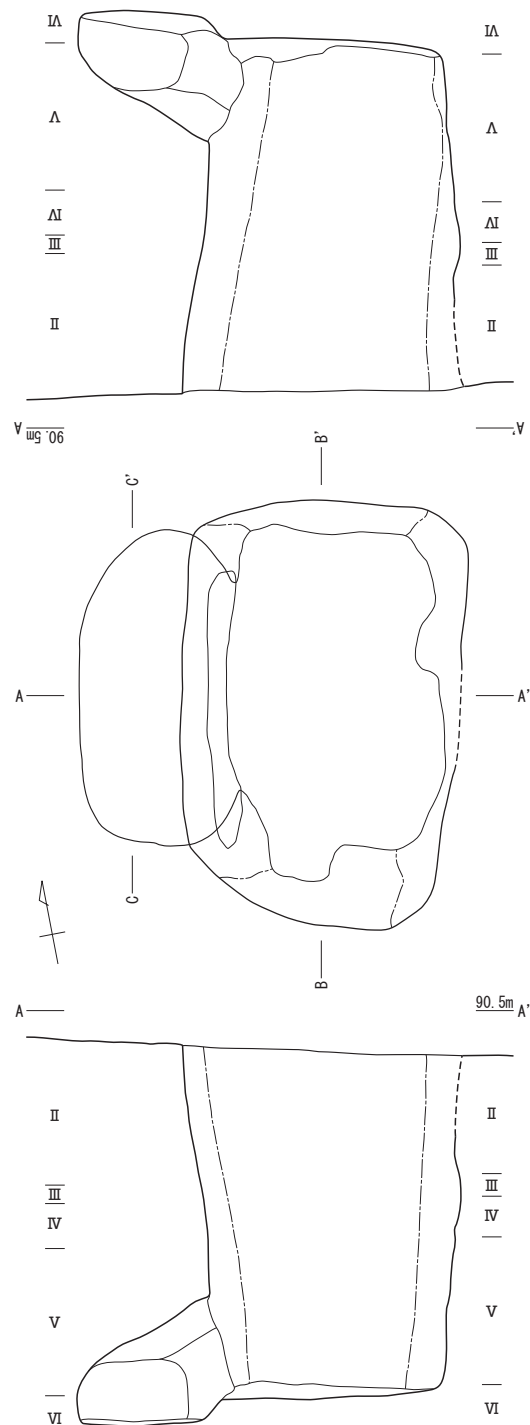
86号地下式横穴墓（第285図）

3-②-c類に分類されるもので、H-21区において

て検出される。竪坑の羨門側で浅い段落ちで玄室へ至るもので玄室の床面は平坦である。竪坑の羨門より及び玄室は空洞で有機質（丸太？）のものによる閉塞が考えられる。

㊦ 4類地下式横穴墓

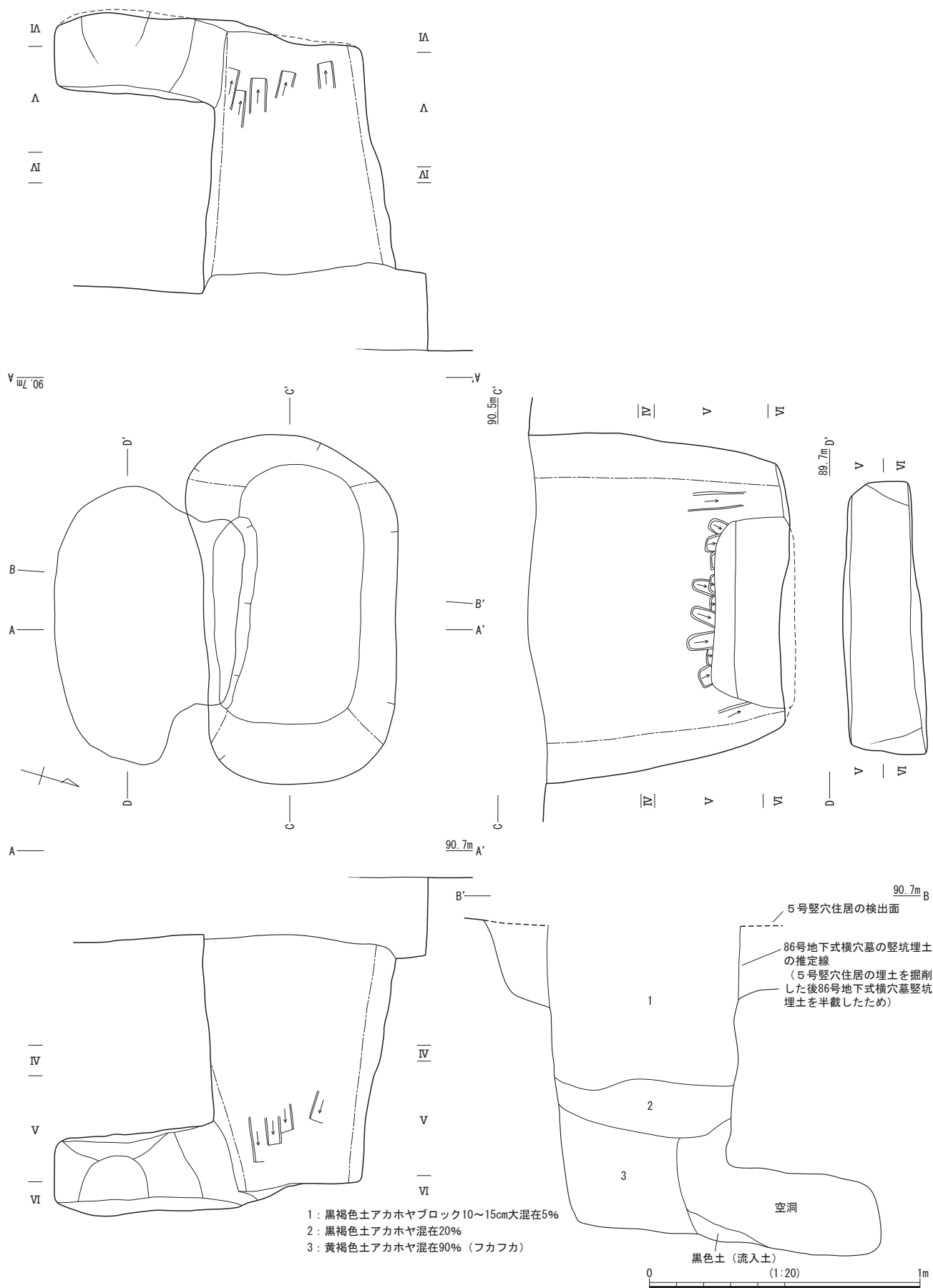
4類に分類される地下式横穴墓は、87号と88号の2基である。



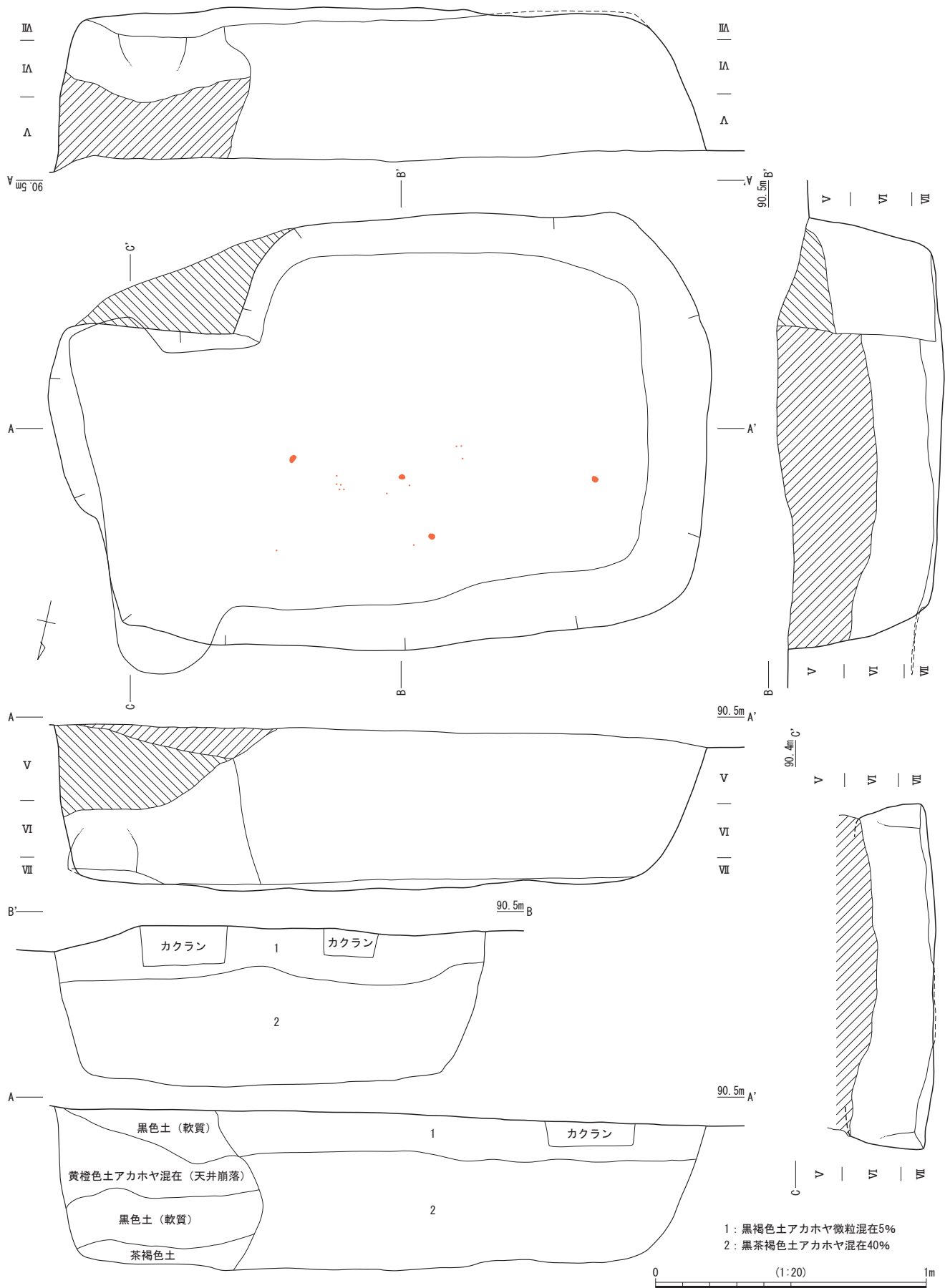
第283図 85号地下式横穴墓



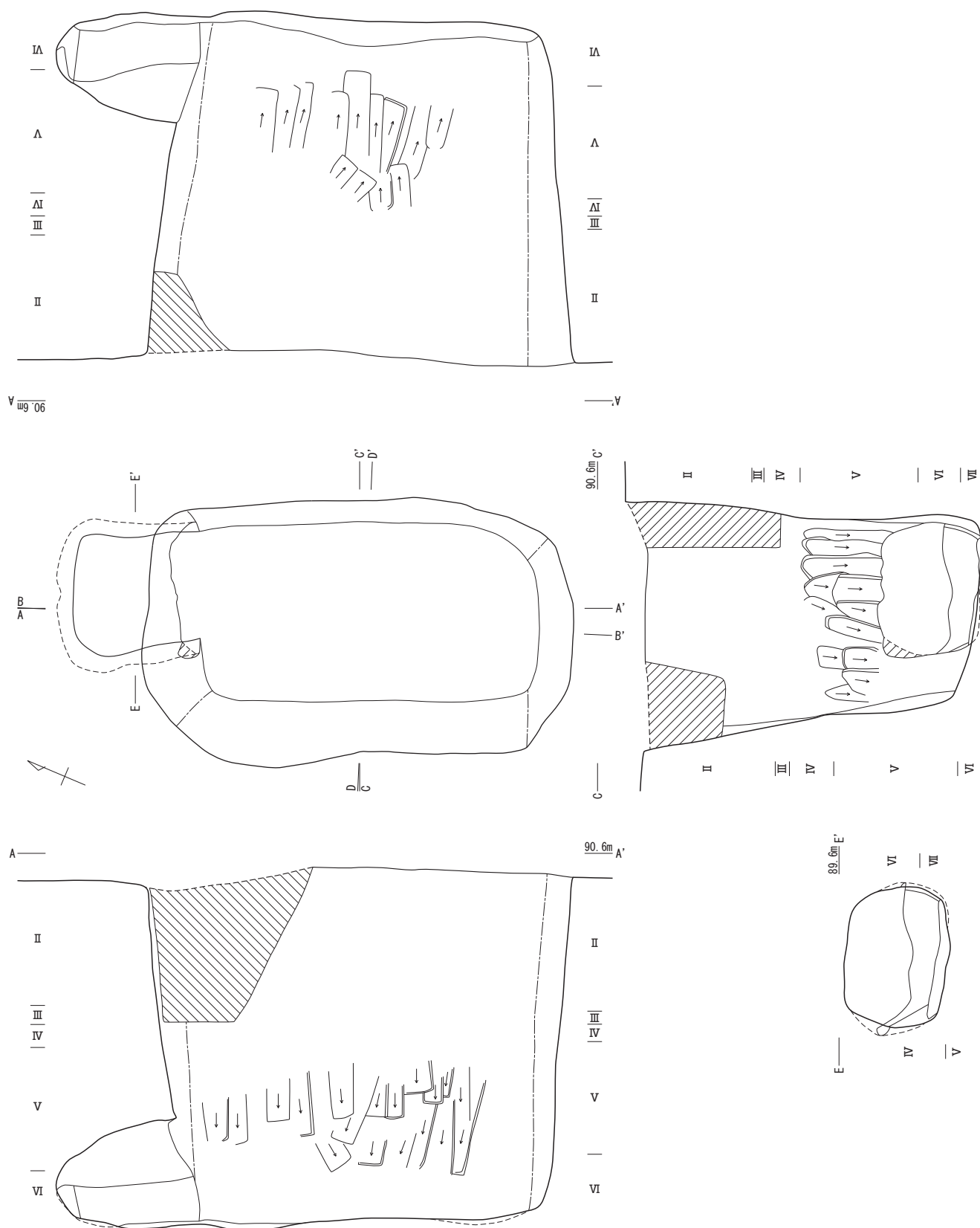
第284图 85号地下式横穴墓 羨道上部拓影(原寸)



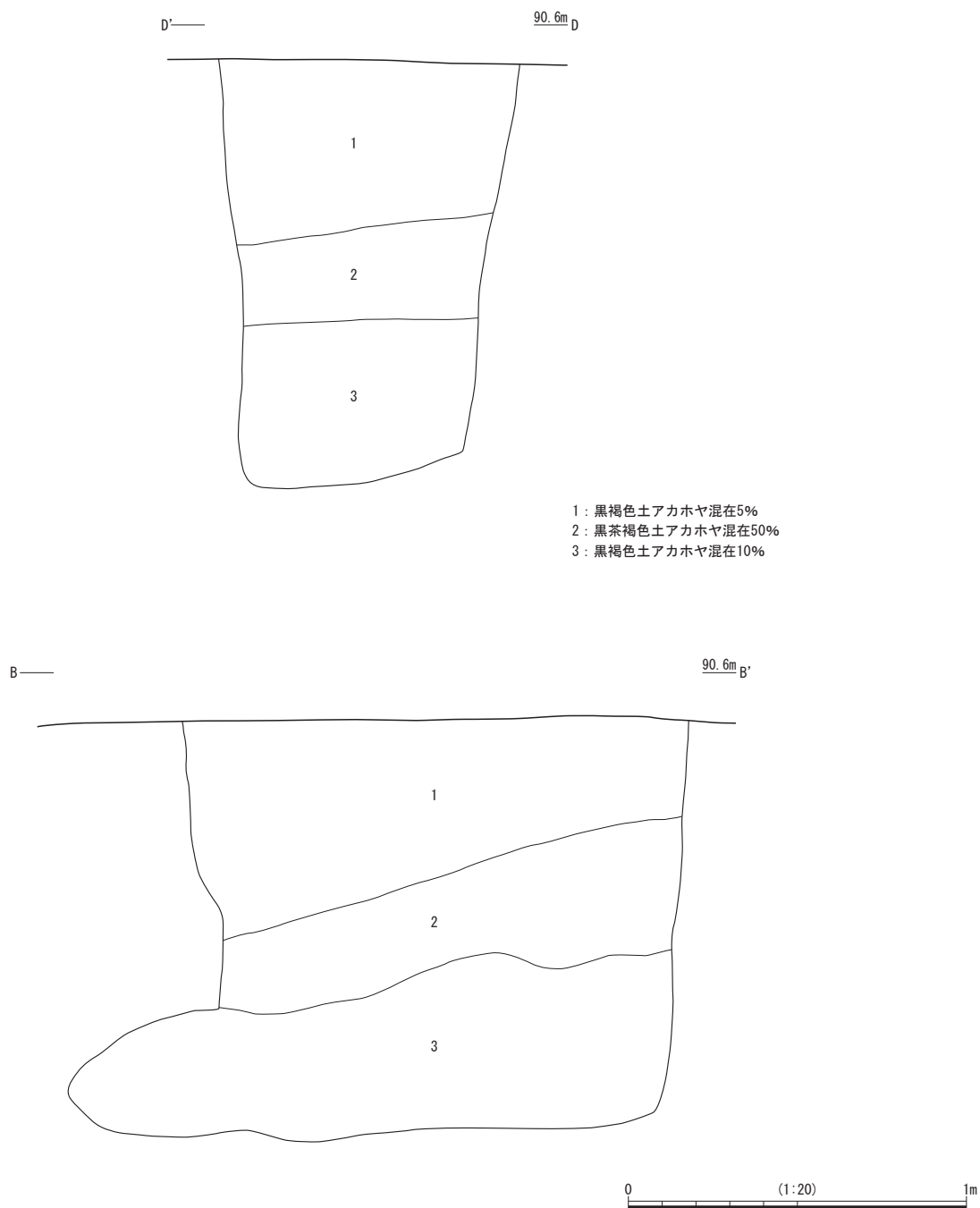
第285図 86号地下式横穴墓



第286図 87号地下式横穴墓



第287图 88号地下式横穴墓(1)



第288図 88号地下式横穴墓（2）

87号地下式横穴墓（第286図）

4-②-a類に分類されるもので、F-18区において検出される。竪坑は 1.75×1.6 mと方形に近い長方形である。竪坑には赤色顔料（丹）が点在している。玄室は短辺側に設けられ、羨門は95cmと狭くなる。右側は羨道が35cmと長い、左側は羨門から直接玄室へと広がるものである。玄室は 35×139 cmと細長い形状である。

88号地下式横穴墓（第287図・第288図）

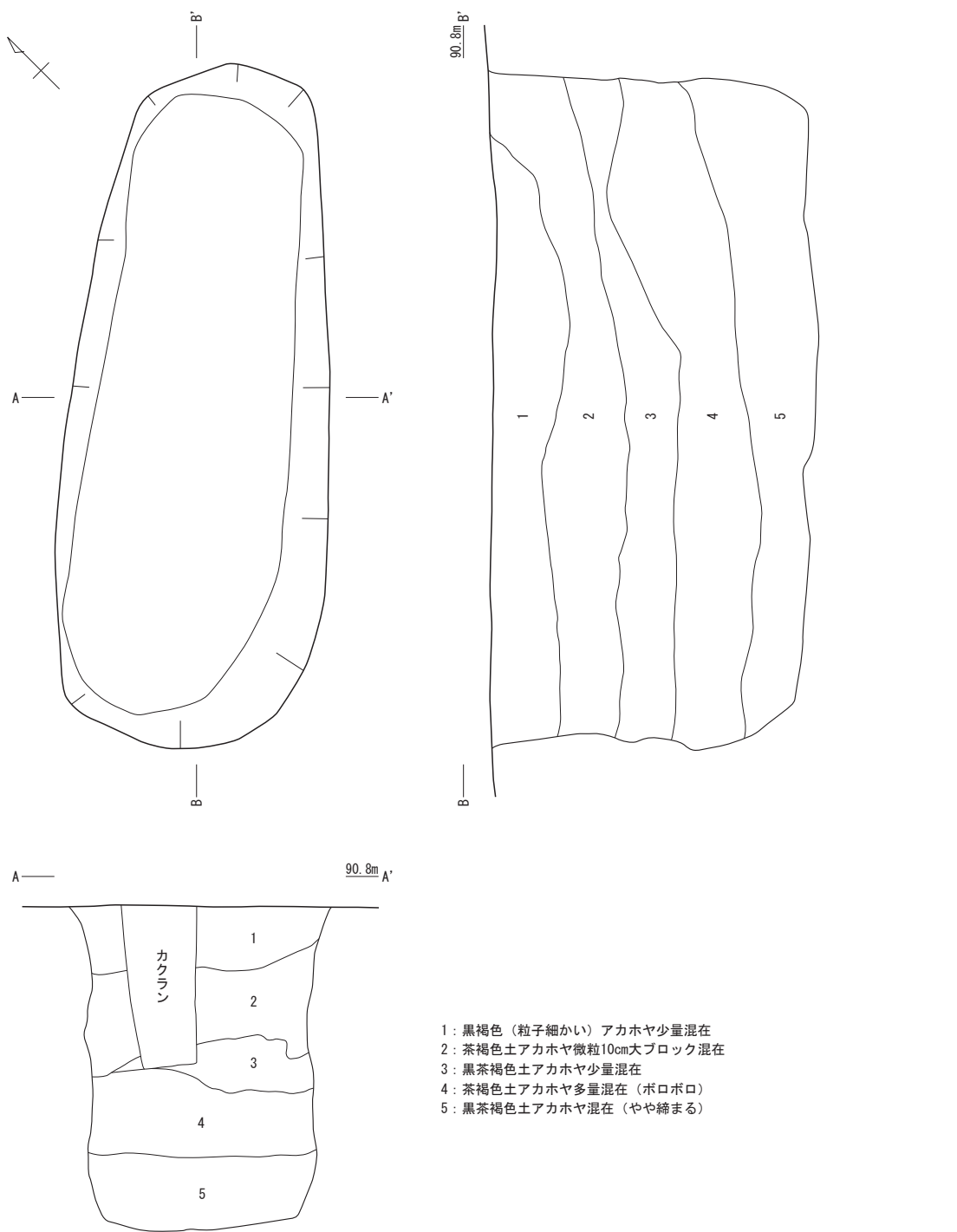
4-②-a類に分類されるもので、G-22・23区において検出される。竪坑は 1.5×0.9 mの長方形である。玄室は右側にかたよっており、片袖状を呈する。玄室は幅・奥行共に50cmと小型である。竪坑の壁面には縦方向の工具痕が明瞭に認められる。

オ 土坑墓

土坑墓は2基が検出された。G・H-20区及びG-22区において検出されている。時期を決定づける資料には欠けるが古墳時代に位置づけられるものと思われる。

1号土坑墓 (第289図)

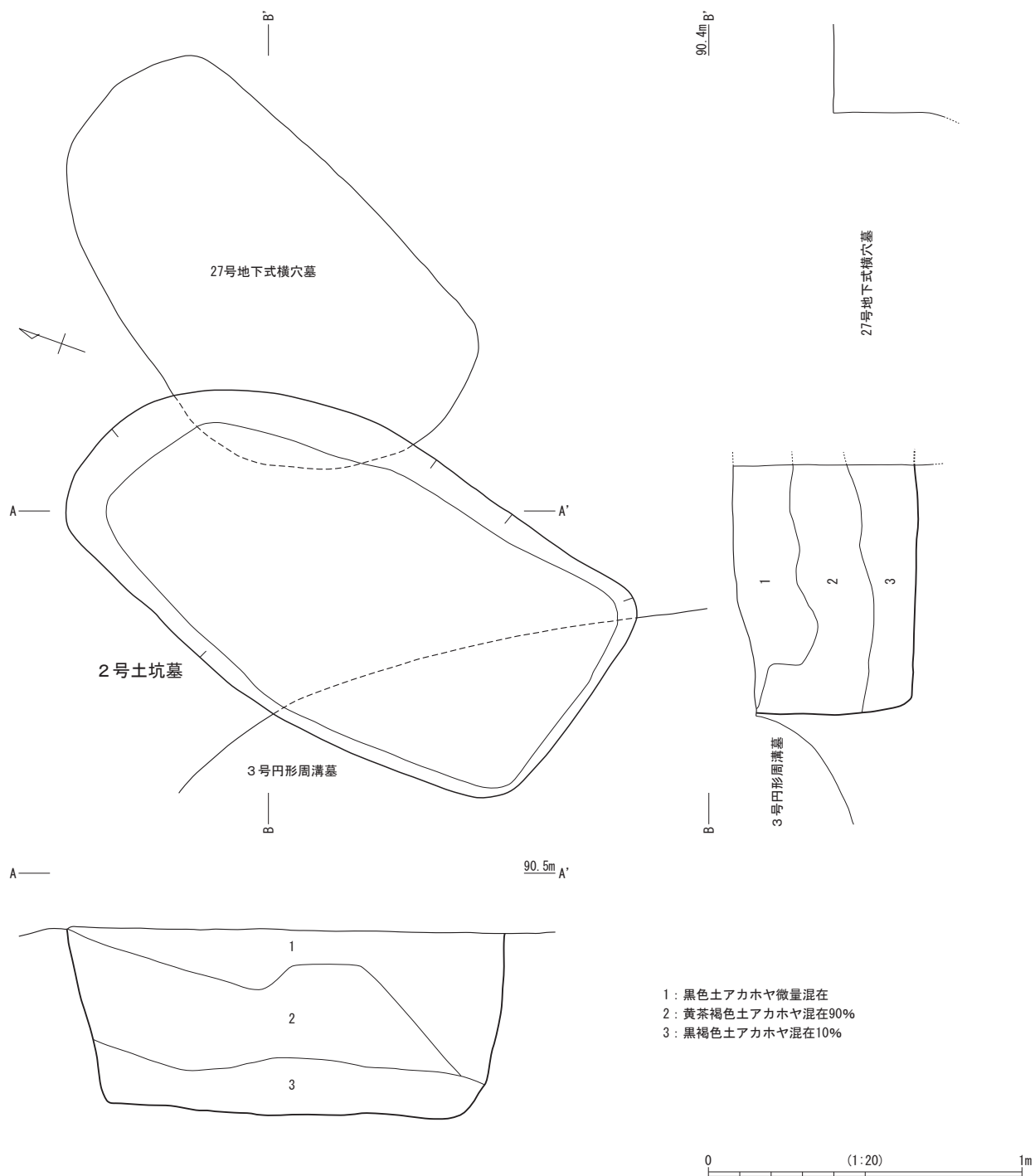
1号土坑墓は、G・H-20区Ⅱ層上面で検出された。長軸はほぼ東西方向で、長さ2.1m、短軸は0.6～0.82mのほぼ楕円形を呈し、深さは9.9mとやや深いものである。埋土は自然堆積と思われ5層に分層される。



第289図 1号土坑墓

2号土坑墓（第290図）

G-22区において検出される。3号円形周溝墓の溝と27号地下式横穴墓の竪坑を切った状態で検出される。長軸はほぼ南北方向で、長さ1.75m、短軸は0.87～0.97mで北側短辺がやや不整形である。深さは0.58mで埋土は3層に分層される。



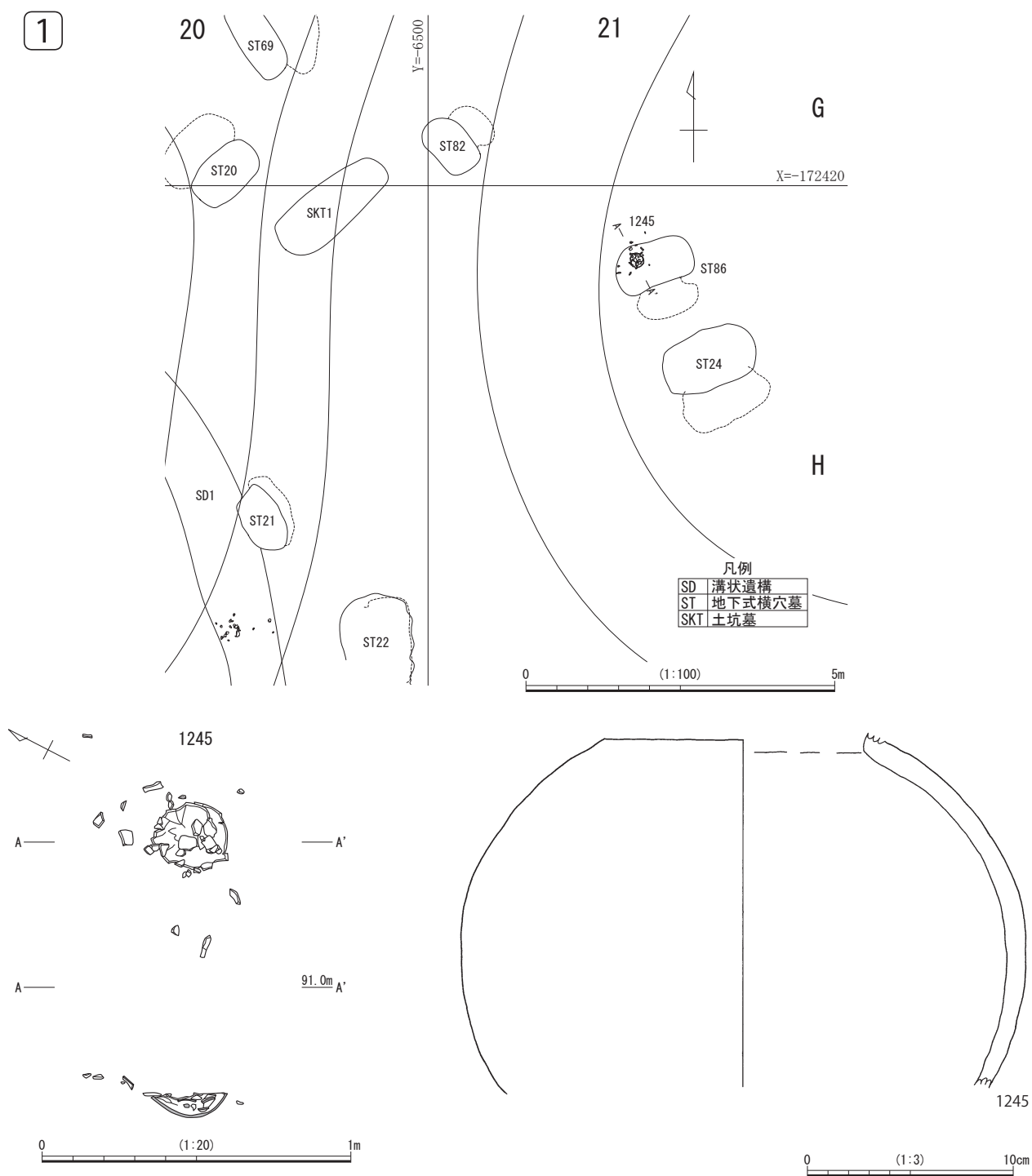
第290図 2号土坑墓

(3) 祭祀空間及び出土遺物

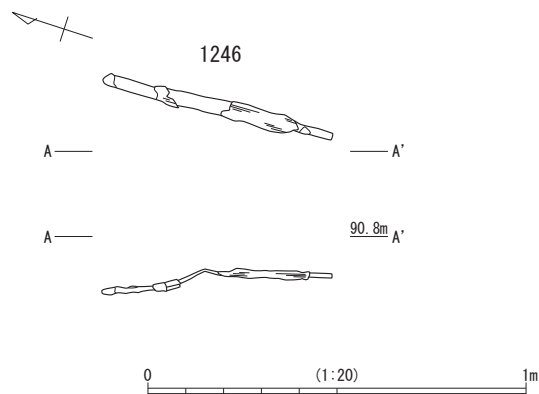
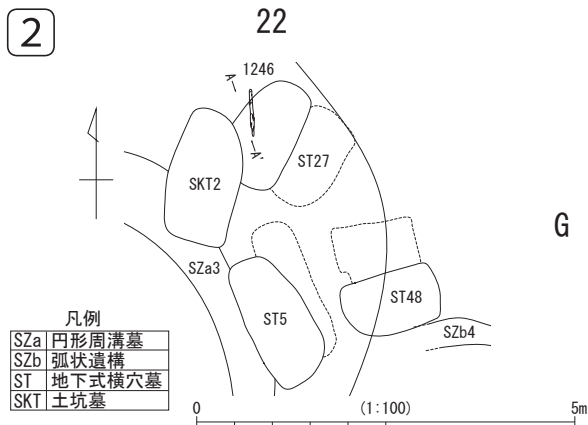
地下式横穴墓の竪坑上部に土器が破碎された状態で置かれていたり、地下式横穴墓が群集する中で、地下式横穴墓が存在せず、高坏や埴・鉄器等が配置されている空間と地下式横穴墓群の東端より東側に約3 m離れた位置に破碎された土器が集中する空間が見られる。これらは地下式横穴墓に関する祭祀に関わるものと思われる。

① H-21区86号地下式横穴墓竪坑上部(第291図)

86号地下式横穴墓の竪坑の北西隅に破碎された状態で壺形土器が置かれている。1245は口縁部と底部及び胴部の一部を欠損する壺形土器である。胴部は球形状に膨らみ最大径は27.2cmを測る。

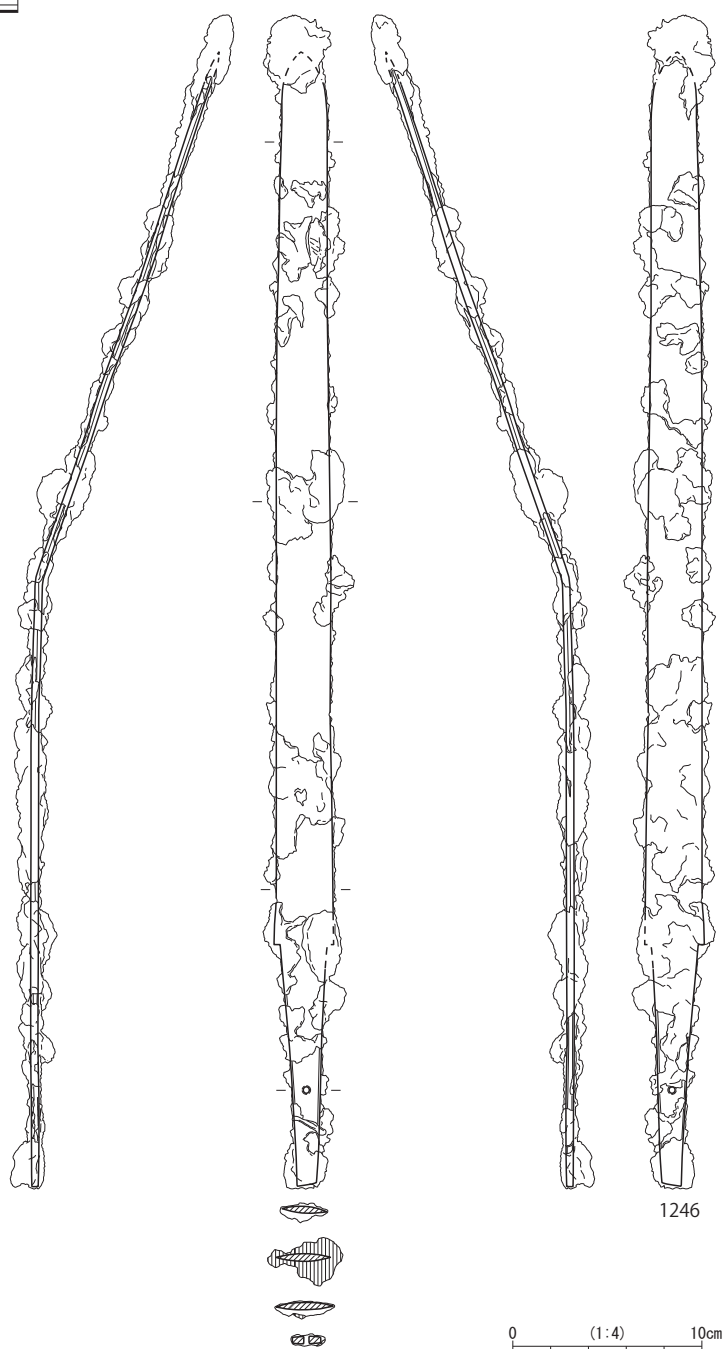


第291図 H-21区86号地下式横穴墓竪坑上部



② G-22区折り曲げられた剣 (第292図)

27号地下式横穴墓の竪坑上部に剣1点が置かれてある。1246は折れ曲がった状態で全長59.9cmを測る鉄剣である。刃部47.5cm、茎部12.4cmである。刃部の断面は凸レンズ状であるが、鎬は認められない。刃部の厚さは0.2～0.4cm、幅は2.5～3cmである。関は左右対称で直角関である。茎部の厚さは0.4cm。目釘孔は1孔で関部より下方に7.3cmの位置に径0.3cmの孔が穿ってある。刃部のほぼ中央で折れ曲がっているが、土器破碎と同様の意味合いで意識的に折り曲げたものと考えられる。



第292図 G-22区折り曲げられた剣

③ H・I - 24 区の祭祀空間 (第 293 図～第 295 図)

41 号・51 号・56 号・66 号・76 号地下式横穴墓に囲まれた空間に鉄鏃と埴、埴と高坏、剣と埴と壺が置かれている。1247 は全長 43.4cm の鉄剣である。刃部 34cm, 茎部 9.4cm である。刃部の断面はレンズ状であるが、鏃は認められない。刃部の幅は 2 ～ 3 cm, 厚さは 0.4cm である。関は左右対称で直角関である。茎部の厚さは 0.3cm, 幅は 1.1 ～ 2 cm。目釘孔は 1 孔で関部より下方に 3.1cm の位置に 0.1cm の孔が穿ってある。切っ先は鋭角である。1248 と 1249 は近接して出土するものである。1248 は全長が 15.7cm の圭頭鏃である。鏃全長 11.3cm, 刃部幅 4.5cm である。関は緩やかにすばまるナデ関である。厚さは刃部で 0.25 ～ 0.4cm, 茎部で 0.55cm である。茎部には矢柄と柄巻と思われる有機質が残存している。1249 は埴で口縁径 7.4cm, 器高 9.5cm を測る。体部最大径は、体部のほぼ中央部にあり 8.2cm である。底部は平底で体部は球形形状に膨らみ頸部へとしまる。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり端部近くでわずかにすばまる。底部には約 2 cm の焼成後の穿孔が認められる。穿孔は外側からの打撃により穿たれている。体部外面には横方向のヘラミガキが施される。1250 と 1251 は同位置において出土するものである。1250 は埴で口縁部径 7.1cm, 器高 8.5cm を測る。体部最大径は体部の中央よりやや下方にあり 8.2cm である。底部は平底で体部はソロバン玉状であるが、稜線は明瞭ではない。口縁部は内湾気味に立ち上がり端部はすばまる。底部には 2 × 3 cm の焼成後の穿孔が認められる。穿孔は外側からの打撃によるものである。外面は体部で横方向のヘラミガキ, 口縁部はヘラミガキ後ナデである。1251 は壺形土器で口縁部径 12.6cm, 器高 33.2cm を測る。底部は平底状で胴部はあまり膨らまず立ち上がり, 頸部へとすばまる。口縁部は頸部から直行気味ののびるが二重口縁を意識してかわずかな段を有する。底部には約 5 cm の焼成後の穿孔が認められる。穿孔は外側からの打撃によるものである。同部から口縁部下位にかけては斜位及び縦位の丁寧なヘラミガキ調整である。1252 と 1253 は近接した状態で出土している。1252 は高坏で, 口縁部径 14.5cm, 底部径 12.6cm, 器高 12.1cm を測る。脚部は脚柱部が筒状を呈し, 屈曲して底部へと広がるもので, 坏部は直線的に立ち上がり, 接合部では明瞭な稜線を有せず, やや外開き気味に口縁部へと至るものであ

る。外面は脚部, 坏部共にヘラミガキが施される。1253 は底部から頸部まで残存している。体部のほぼ中位に最大径があり, 8.3cm を測る。外面は横方向のヘラミガキである。

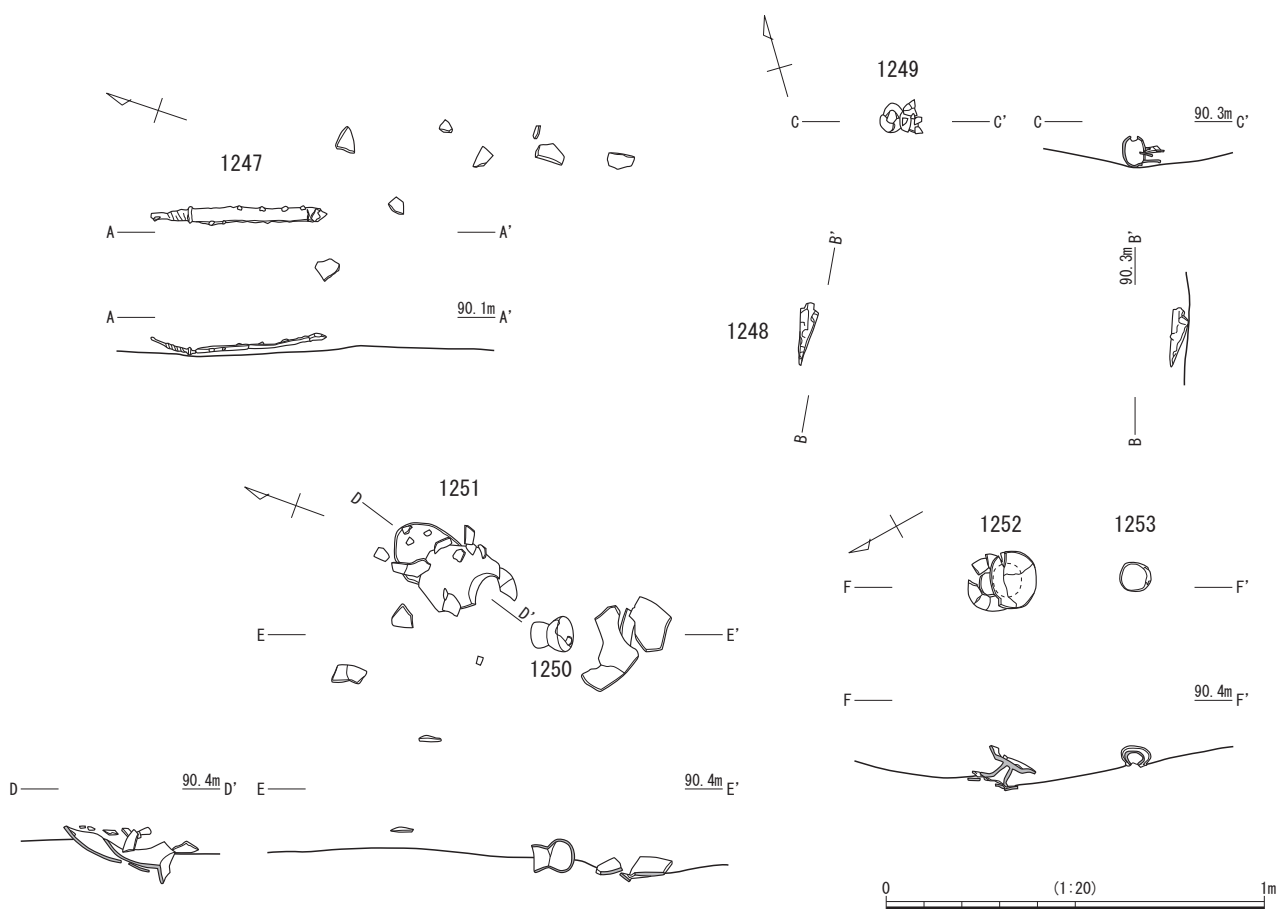
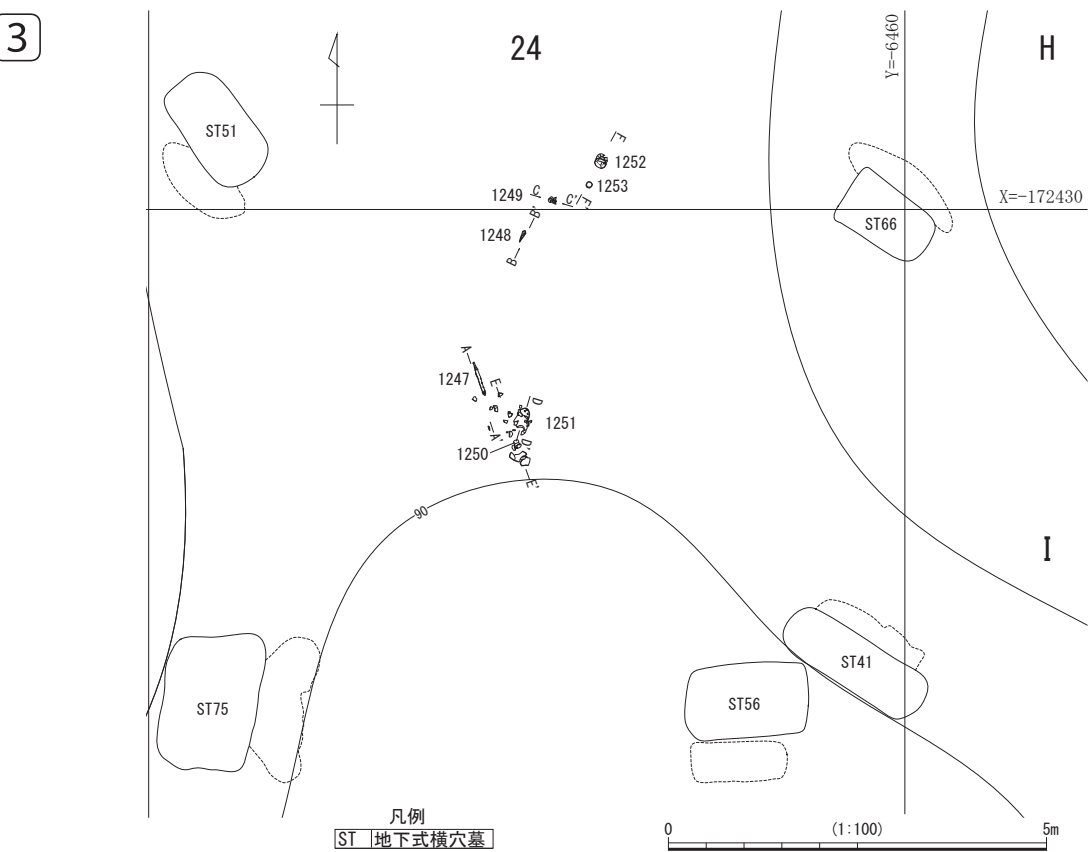
④ F - 21 区の祭祀空間 (第 296 図)

F - 21 区の西側で, 地下式横穴墓 9 号・43 号・46 号の間でやや 46 号の竪坑に近い位置に土器の破片が集中している範囲と高坏と埴の完形品が配置されている部分がある。土器破片の集中では小破片が 1 × 1.5 m の範囲に広がり, 土器破碎祭祀の可能性がある。また, 土器破碎祭祀と高坏・埴の出土状況では土器破碎祭祀の方が約 10cm 上位から出土し, 時期差があるものと思われる。土器破碎祭祀の土器は小破片のため, 図化できたのは 2 点である。1254 は口縁部径 18cm の壺形土器の口縁部である。頸部と口縁部の間に屈曲部を有するいわゆる二重口縁壺である。屈曲部はわずかに肥厚し, 格子文が刻まれる。1255 は壺形土器の胴部上位である。沈線による鋸歯文が刻まれる幅広突帯が巡らされる。1256 と 1257 は 2 点一緒に置かれたもので, 高坏は南側にあり横に倒れているが, 埴は口縁部を欠くものの正位置で一部高坏の口縁部にかかっている。高坏が器台の役割で埴が収まっていたものが倒れた可能性も考えられる。1256 は埴で口縁部径 12.5cm, 器高 13cm を測る。体部最大径は, 体部のやや下方にあり 12.2cm である。底部は平に近い丸底で体部は最大径の位置で稜を有し頸部へとしまる。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり外方へと広がり端部はすばまる。体部の屈曲部に一部ヘラミガキが観察される。1257 は高坏で口縁部径 13.9cm, 底部径 10cm, 器高 12cm を測る。脚部は脚柱部が筒状を呈し, 屈曲して裾部へと広がるもので, 坏部はやや内湾気味に立ち上がり接合部に明瞭な稜を有して反り気味に口縁部へ至るものである。坏部は 4.8cm と深いもので, 坏部と脚部の接合はコマ状の塊で栓をするものと思われる。外面調整は, 口縁端部近くでナデ整形で, ほぼ全面に丁寧なヘラミガキが施される。ヘラミガキは, 接合部から口縁部へ斜方向, 坏部下位は縦方向, 脚柱部は上位で縦方向, 下位で斜め方向, 裾部は斜め方向である。坏部の内面調整は, ナデの後横及び斜め方向のヘラミガキである。

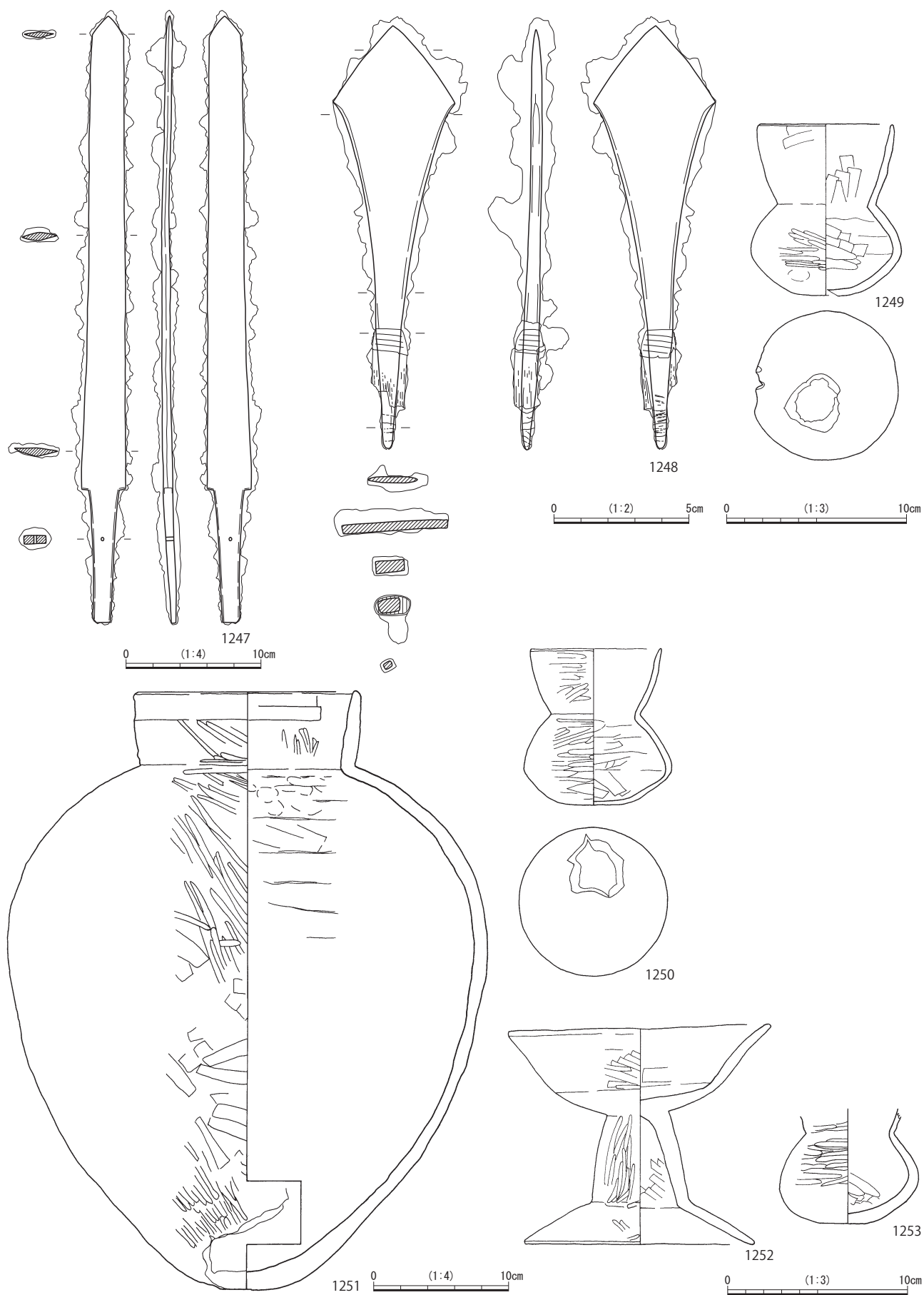


第293図 H・I-24区の祭祀空間(1)

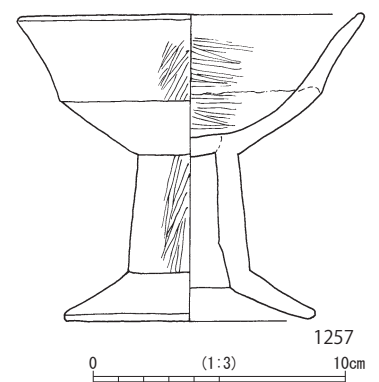
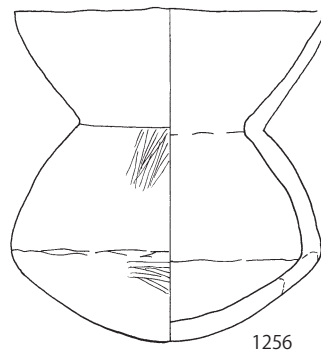
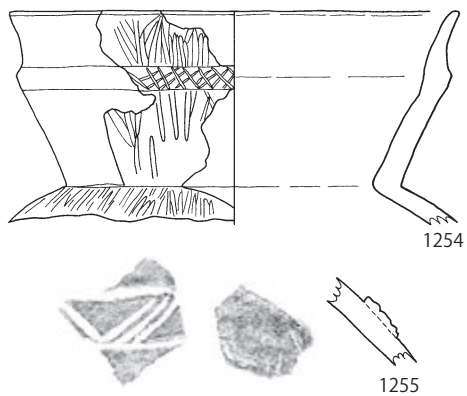
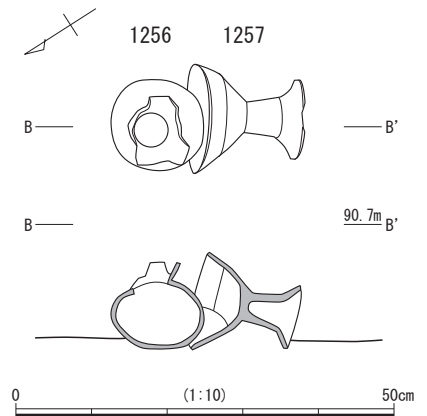
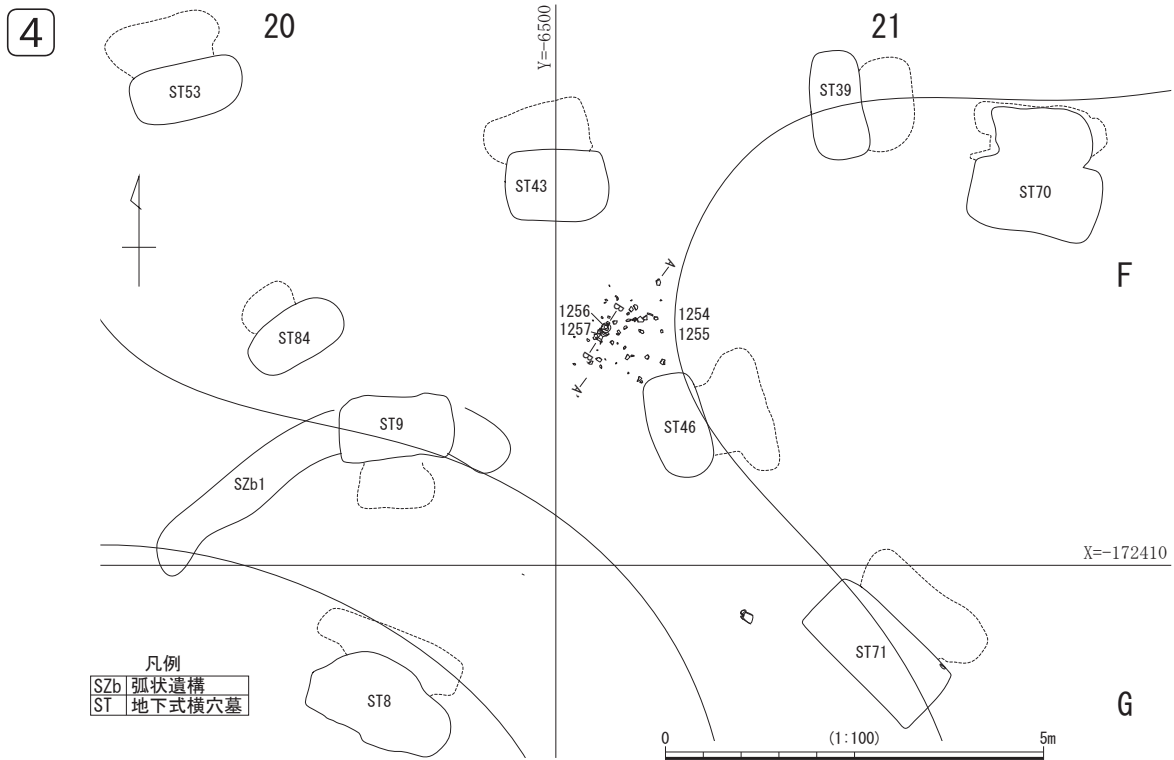
3



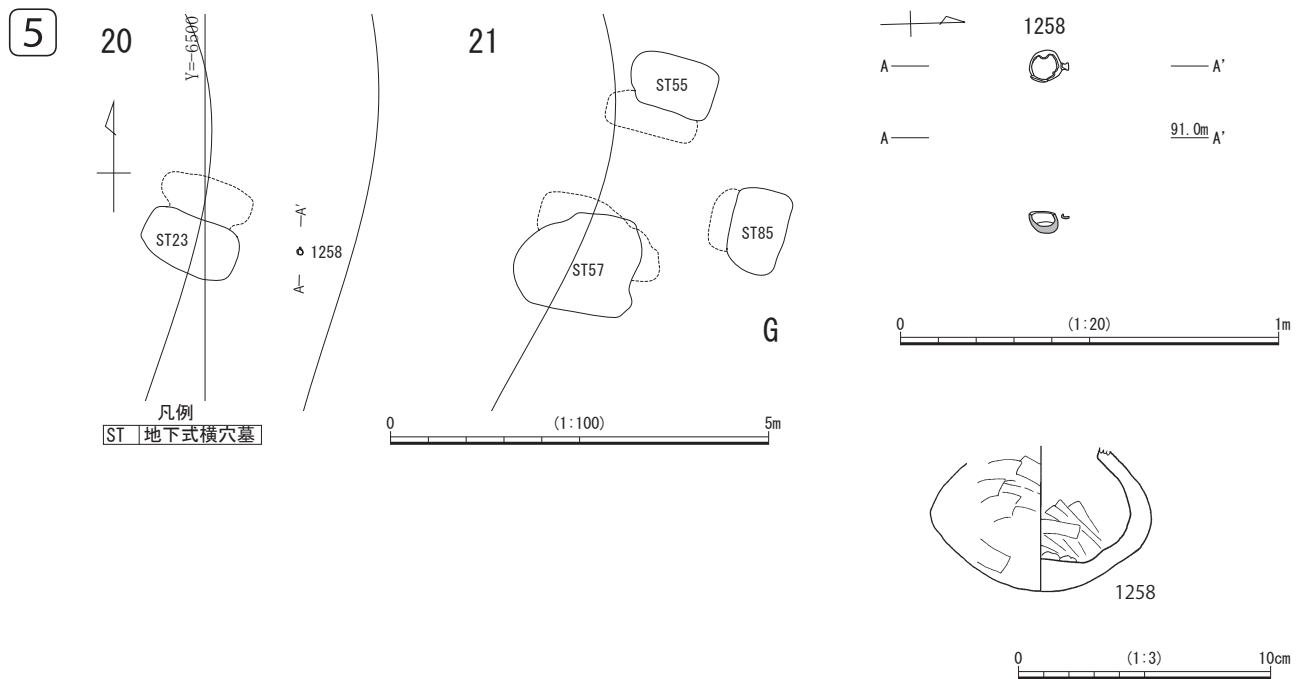
第294図 H・I-24区の祭祀空間(2)



第295図 H・I-24区の祭祀空間(3)



第296図 F-21区の祭祀空間



第297図 G-21区の祭祀空間

⑤ G-21区の祭祀空間 (第297図)

23号・57号・55号地下式横穴墓の間でやや23号寄りの位置に口縁部を欠損する埴が置かれている。1258は口縁部を欠損する埴で体部の最大径中位に有り8.6cmを測る。体部はほぼ球形状を呈している。調整は内外面共にナデである。内部底面には指頭による圧痕の痕跡が認められる。

⑥ H-23区の祭祀空間 (第298図)

29号と78号地下式横穴墓の西側に土器片が集中する範囲がある。範囲は約1.3m四方で小破片辺が多い。可能な限りの復元を試みたが小破片のため図化できるものはなかった。

⑦ 土器破碎祭祀空間 (1) (第299図～第301図)

H-26区の東寄りの位置に1×4mの範囲に土器片が散乱している。76号地下式横穴墓の東側に位置するが、これより東側には墓は無く、墓域及び祭祀の東端に当たるものと思われる。土器片は大型の壺形土器を意図的に破碎したものと思われる状況で出土した。これらは2箇所に集中が見られ2個体の壺形土器が破碎されたものと思われる。1259は口縁径22.2cm、推定器高61cmを測る。底部は平底で、胴部は最大径41.1cmと膨らむ。頸部と口縁部の中間に屈曲部を有する二重口縁で屈曲部には細かい刻み目が施される。胴部上位には幅3cmの突帯を巡らす。突帯は沈線により2分され、上下共にそれぞれ沈線による格子目を施すが、上は右下がり、下は左下

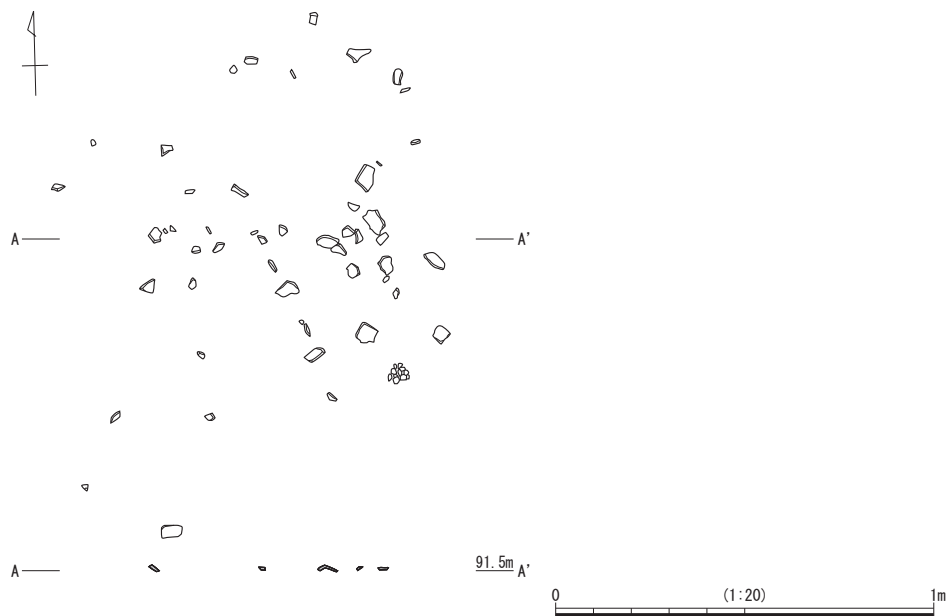
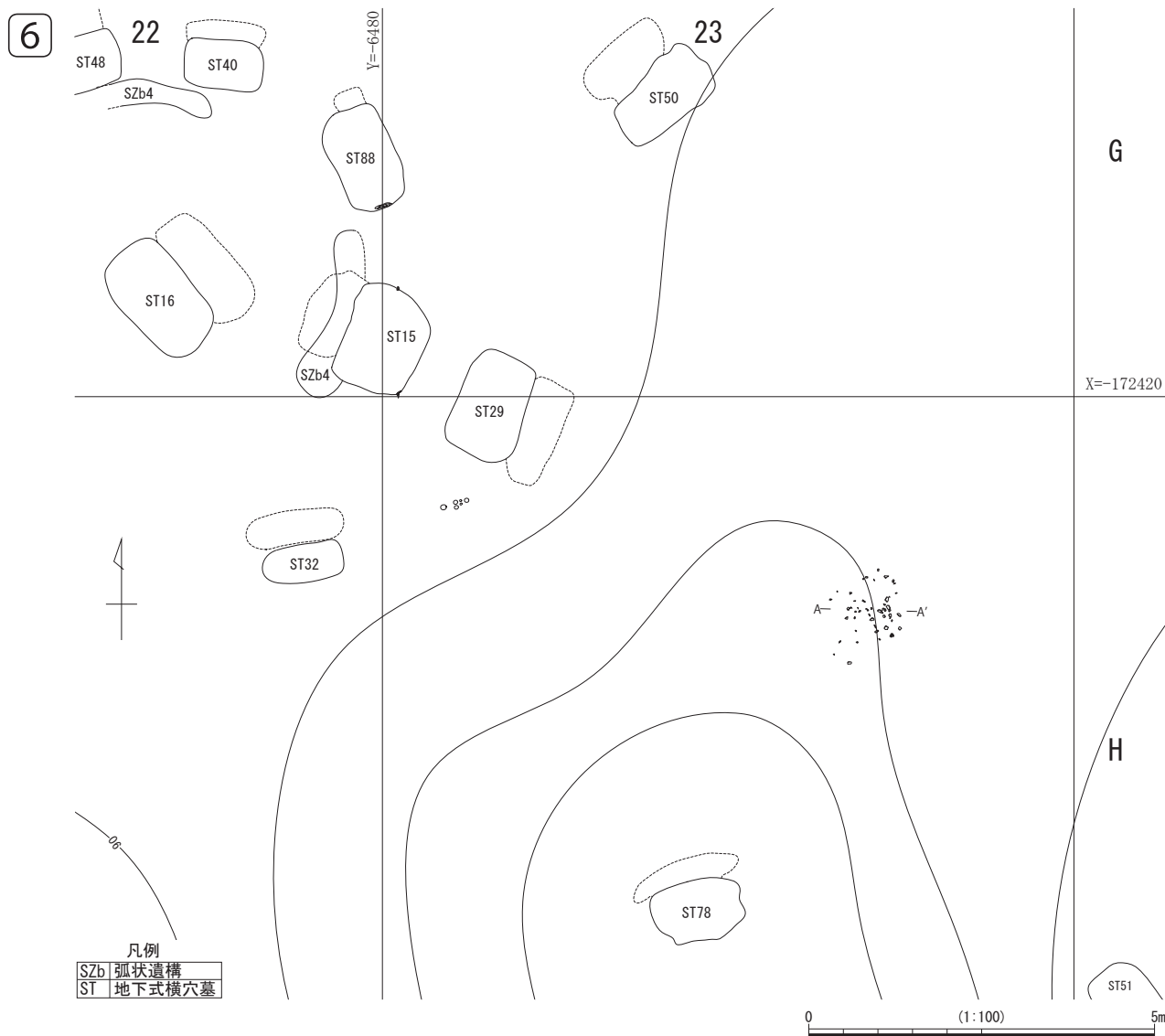
がりの沈線が後で施されているため「逆く」の字状に見える。器面調整は口縁部及び胴部上位はヘラミガキで胴部下位はナデである。1260は底部を欠損する壺形土器である。口縁部径は16cmを測る。頸部と口縁部の中間に屈曲部を有する二重口縁であるが、口縁部の歪みのため部分的に屈曲が弱く口縁も直行気味の部分が見られる。胴部は球形状に膨らむ。頸部には刻み目を施す突帯が巡らされる。胴部外面に一部ヘラミガキが認められる。

⑧ 土器破碎祭祀空間 (2) (第302図)

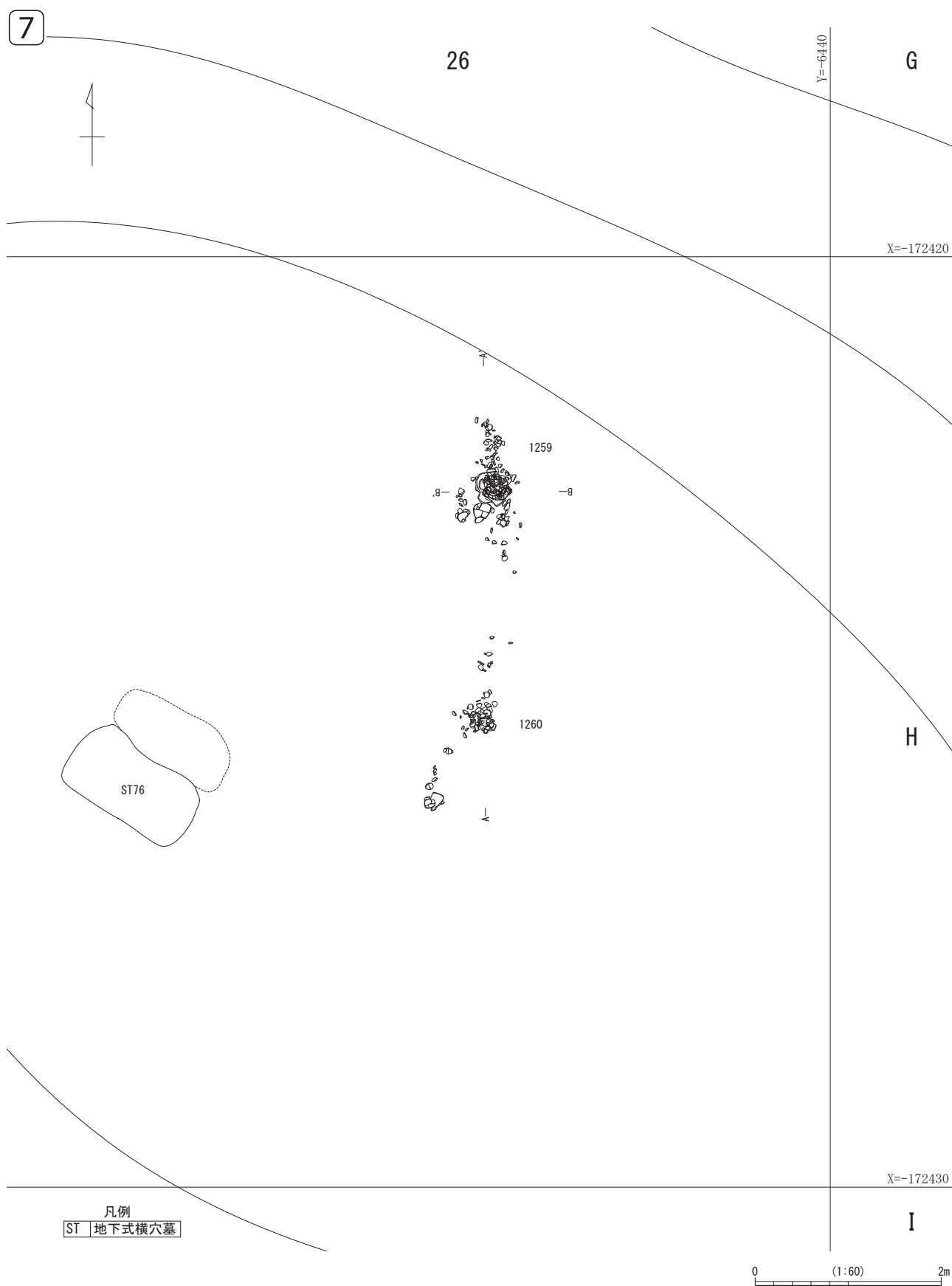
G-22区で2号円形周溝の上位において土器片の集中が見られる。土器片は同一個体と思われるものの小破片が多く図化できたものは1点だけである。1621は壺形土器の胴部である。突帯の下位の胴部径は53cmである。突帯は幅3cmで板状工具によると思われる格子目が施される。

⑨ 土器破碎祭祀空間 (3) (第303図・第304図)

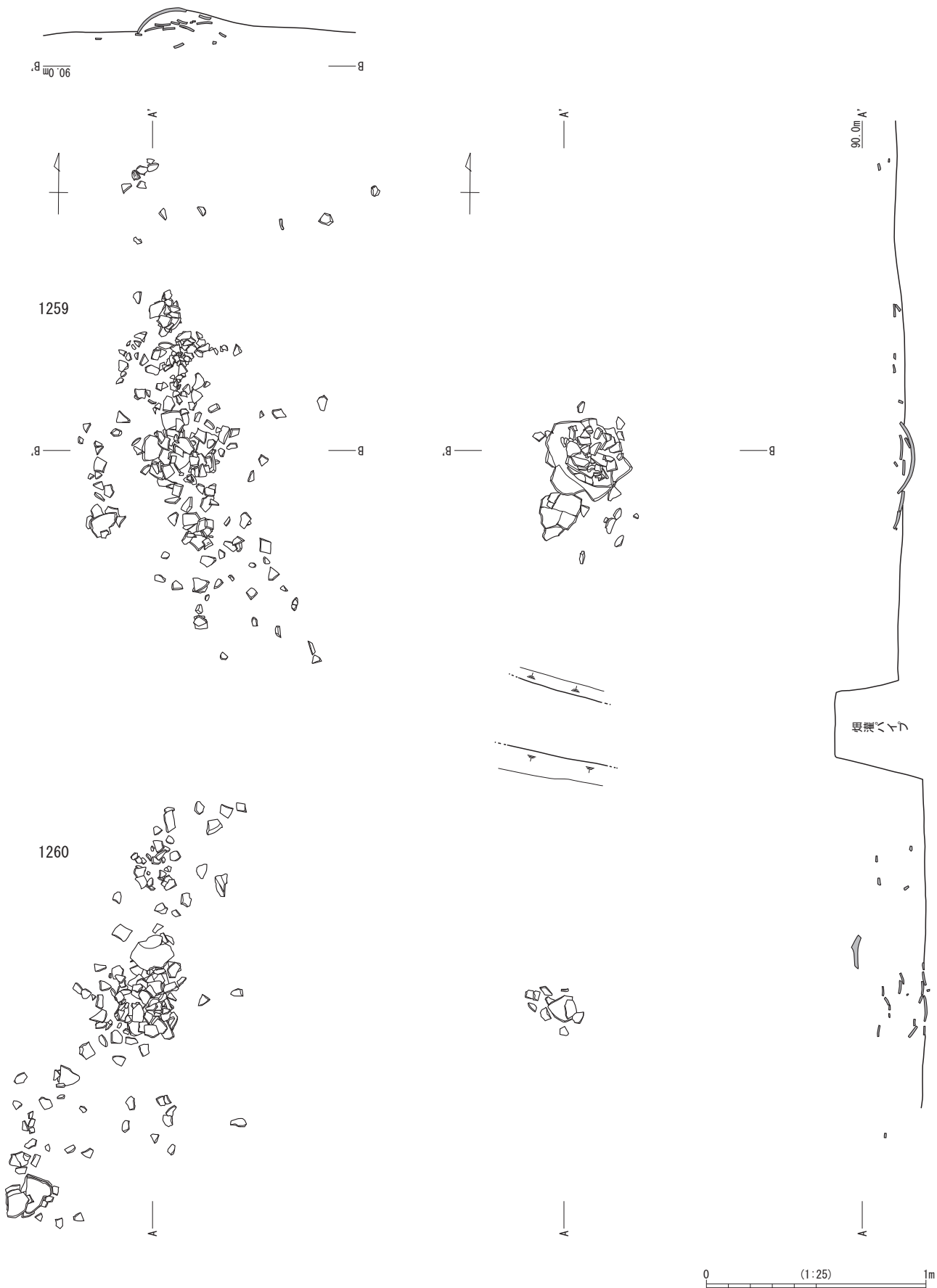
H・I-16・17区で62号地下式横穴墓の南側に広がる。土器片の集中が弱く点在するためドット取り上げで処理したもので整理段階で土器破碎祭祀の可能性が高いものと判断した。1262は口縁部径23cm、器高は胴部を欠損しているものの推定で72cmと大型の壺形土器である。底部は平底で胴部は膨らんで幅3.5cmの突帯を巡らす。突帯には沈線による刻み目が施される。頸部と口縁部の中間にはわずかな屈曲部を有し二重口縁を意識している。器面調整はナデである。



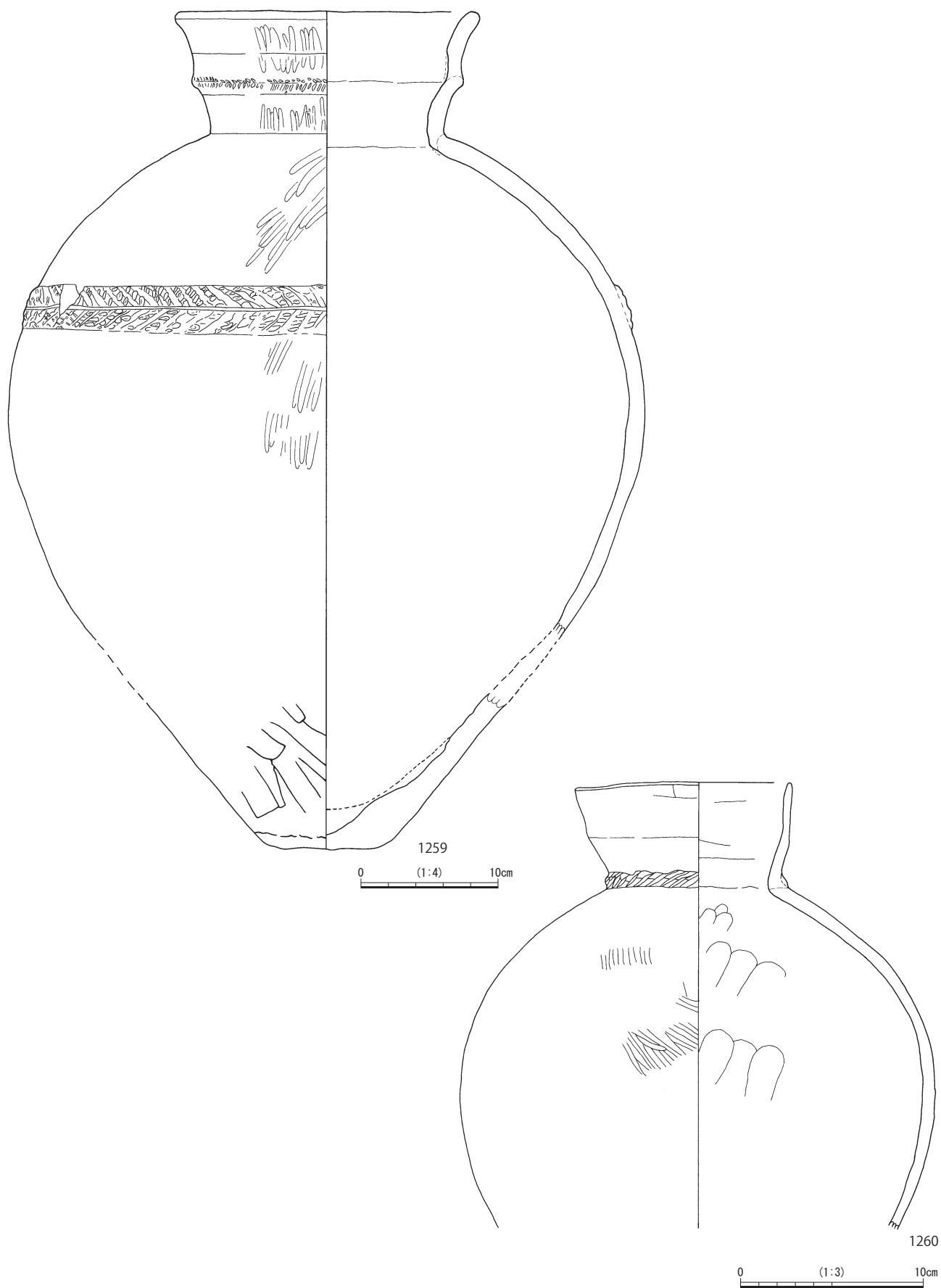
第298図 H-23区の祭祀空間



第299図 土器破碎祭祀空間①(1)

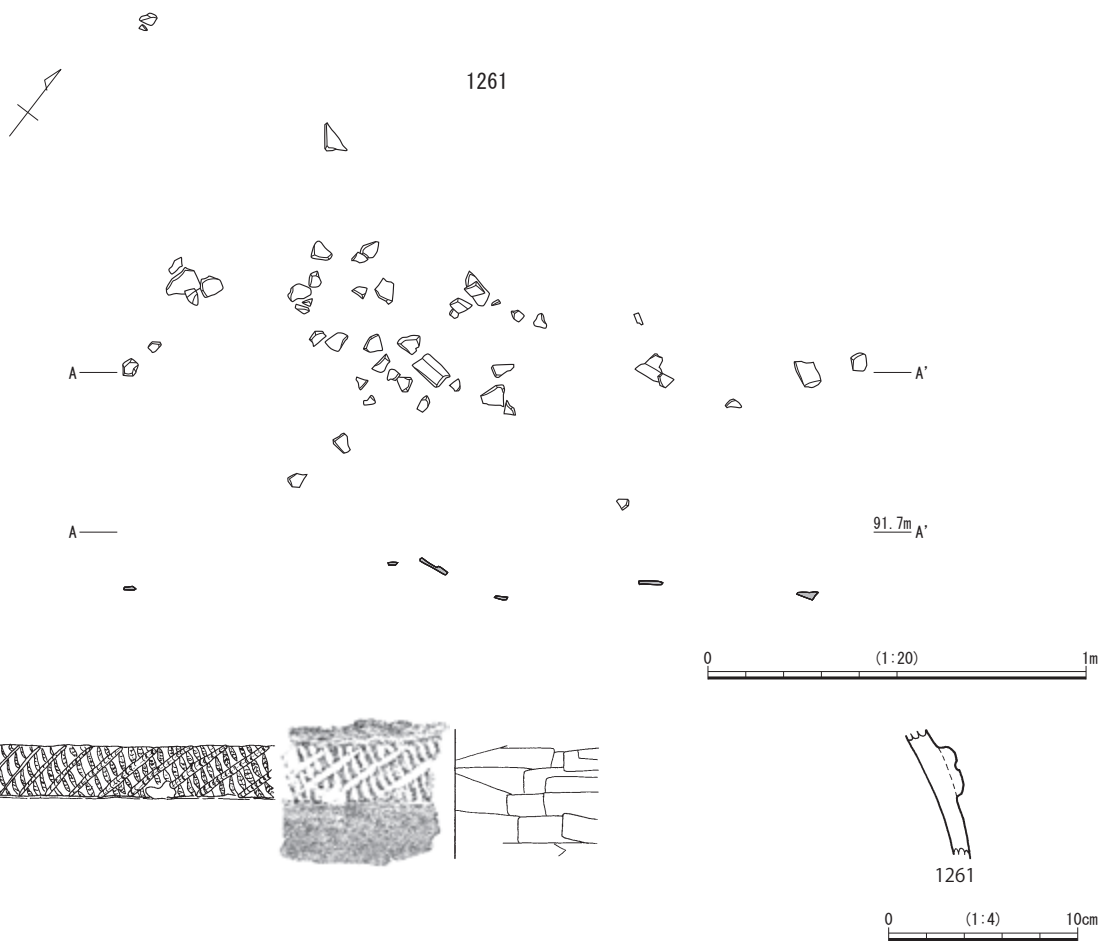
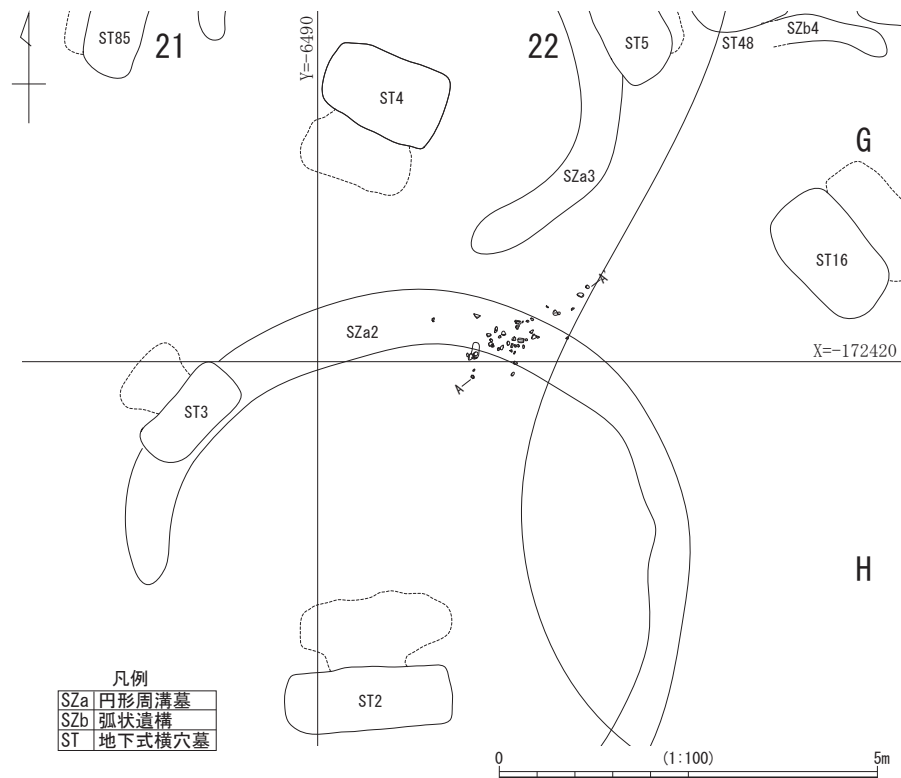


第300図 土器破碎祭祀空間①(2)



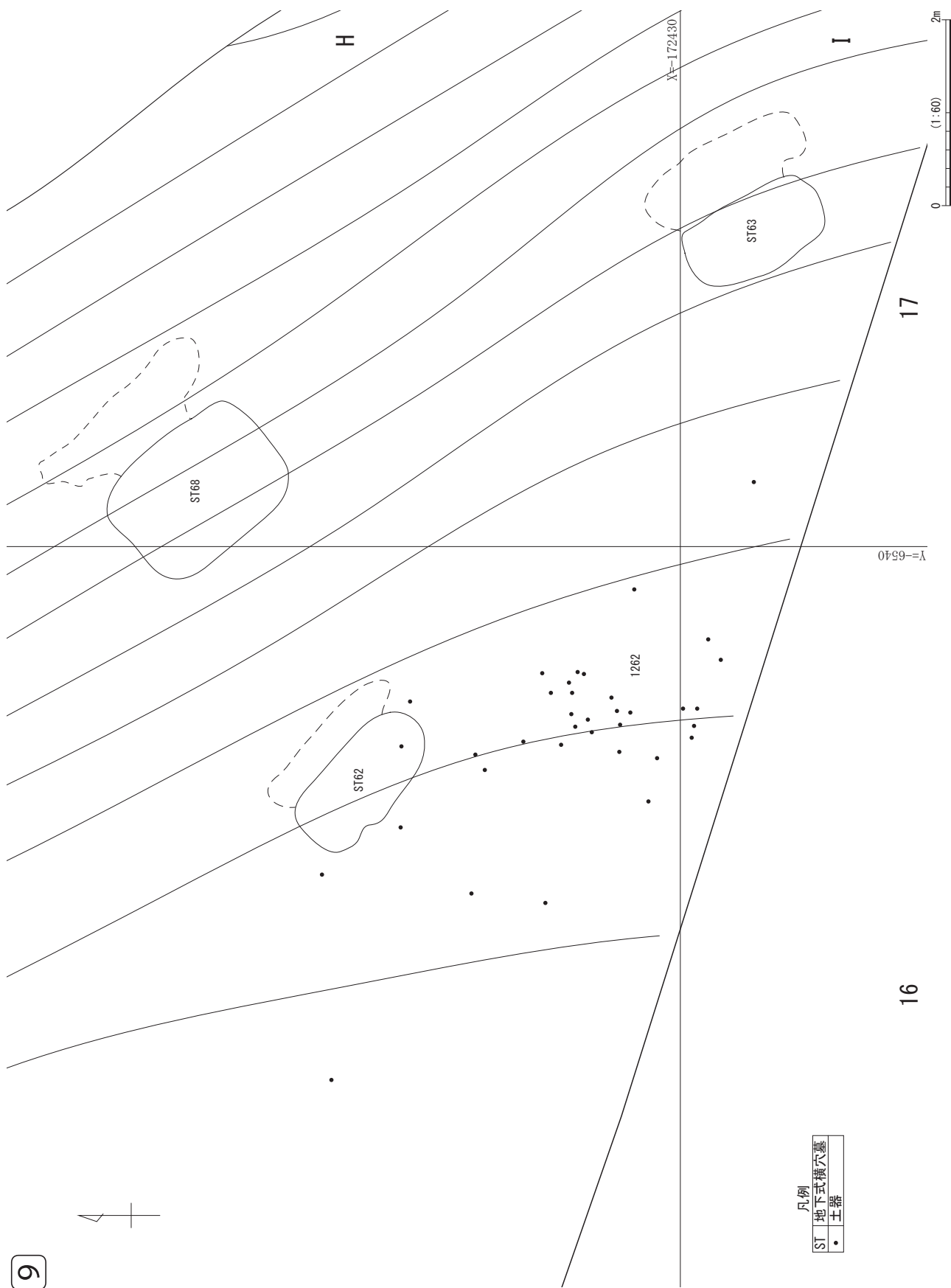
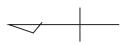
第301図 土器破碎祭祀空間①(3)

8



第302図 土器破碎祭祀空間②

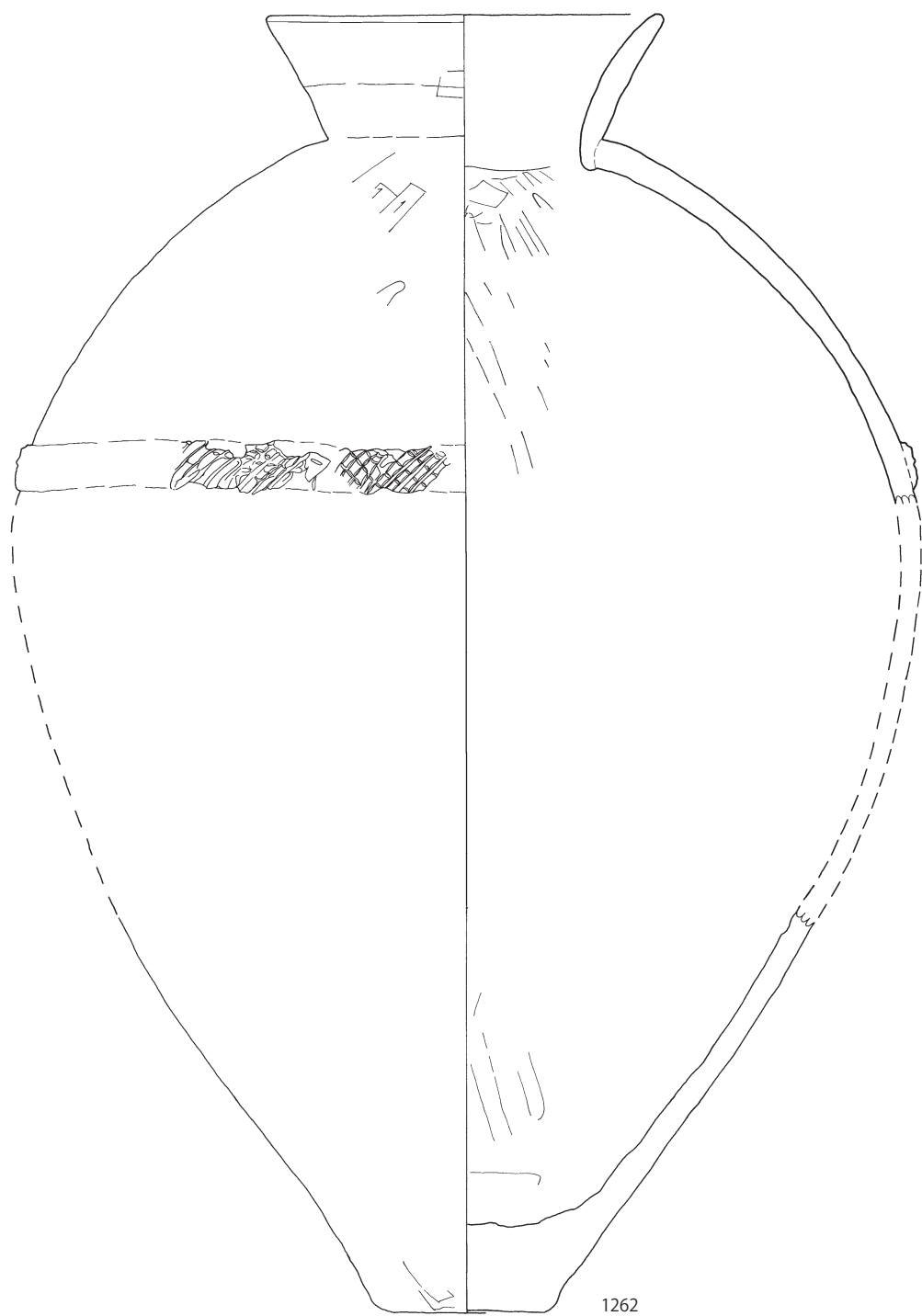
9



凡例

ST	地下式横穴墓
•	土器

第303図 土器破碎祭祀空間③(1)



0 (1:4) 10cm

第304図 土器破碎祭祀空間③(2)

(4) 遺構外出土遺物

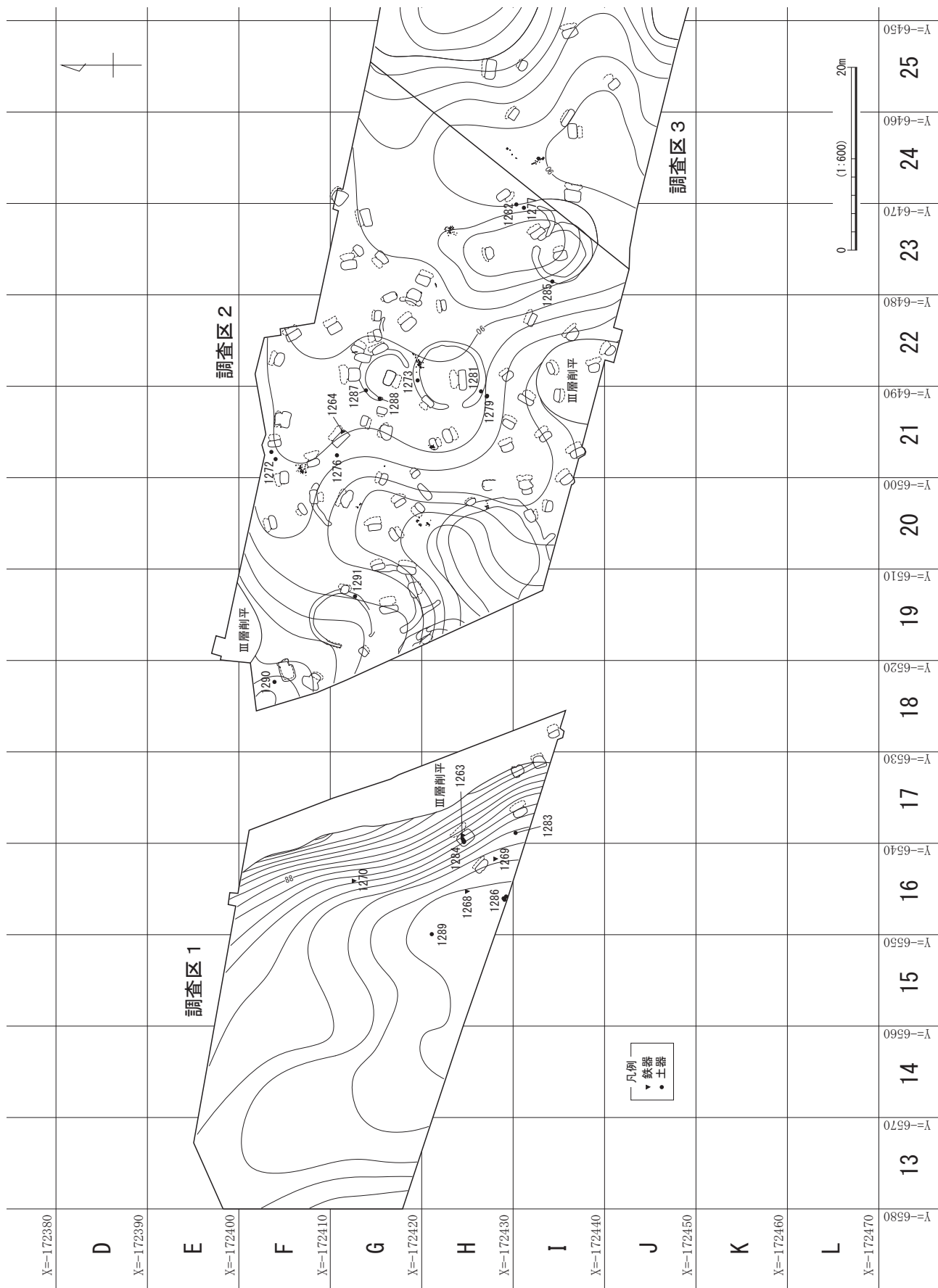
ア 鉄器 (第307図)

1263はH-17区Ⅱb層出土の鉄剣の刃部で関部・茎部は欠損している。残存長は16cm。刃部は凸レンズ状を呈するが鑄は認められない。刃部は幅1～2.2cm, 厚さは0.2～0.4cmと薄い作りである。1264はG-21区Ⅱb層出土の鉄剣で切っ先部・関部・茎部を欠損する。残存長は9.1cm, 刃部は凸レンズ状を呈せず, 板状である。幅は2cm, 厚さ0.2cmである。1265はH-18区Ⅰ層出土の鉄剣で切っ先部を欠損する。残存長26.5cm。刃部は凸レンズ状を呈するが, 鑄は認められない。刃部の幅は3.45cm, 厚さは0.6cmである。関は直角関である。茎部は10cm前後と思われる。目釘孔は1孔で茎尻より上方へ2.2cmの位置に0.3cmの孔が穿たれる。1266はH-23区Ⅱ層出土の圭頭鏃で全長16cm, 茎部を含めて鏃身長10.7cmを測る。刃部の幅は3.2cm, 厚さは0.2cmである。関はナデ関で, 茎部の厚さは0.6cm。矢柄が残存し, 口巻きも明瞭に残されている。1267はI-28区Ⅱb層出土の圭頭鏃であるが茎部と鏃身部の一部を欠損するものである。残存長8.4cmで, 刃部の残存幅2.5cm, 厚さ0.2cmである。関はナデ関と思われる。1268はH-16区Ⅱb層出土の圭頭鏃であるが, 刃部のみ残存する。一部錆のため明瞭でない。残存長6cmで, 刃部の幅2.5cm, 厚さ0.2cmである。圭頭の部分が鋭角でない特徴を有する。1269はH-16区Ⅱb層出土の短頸鏃である。残存長8.9cmである。鏃身部は錆のため明瞭ではないが長さ2.5cm, 幅1.1cm, 厚さ0.2cmを測る。頸部長は4.1cmで関は左右対称でナデ関である。茎部は残存長2.2cm, 幅0.5cmである。1270はG-16区Ⅱa層出土の刀子で, 現存長8.9cm。刃部は現存長5.5cm, 幅0.9cmで厚さは背部で0.4cmである。関は背部側が直角関で刃部側ではナデ関という特徴を持つ。茎部は現存長3.6cm, 幅0.9cm, 厚さ0.4cmである。

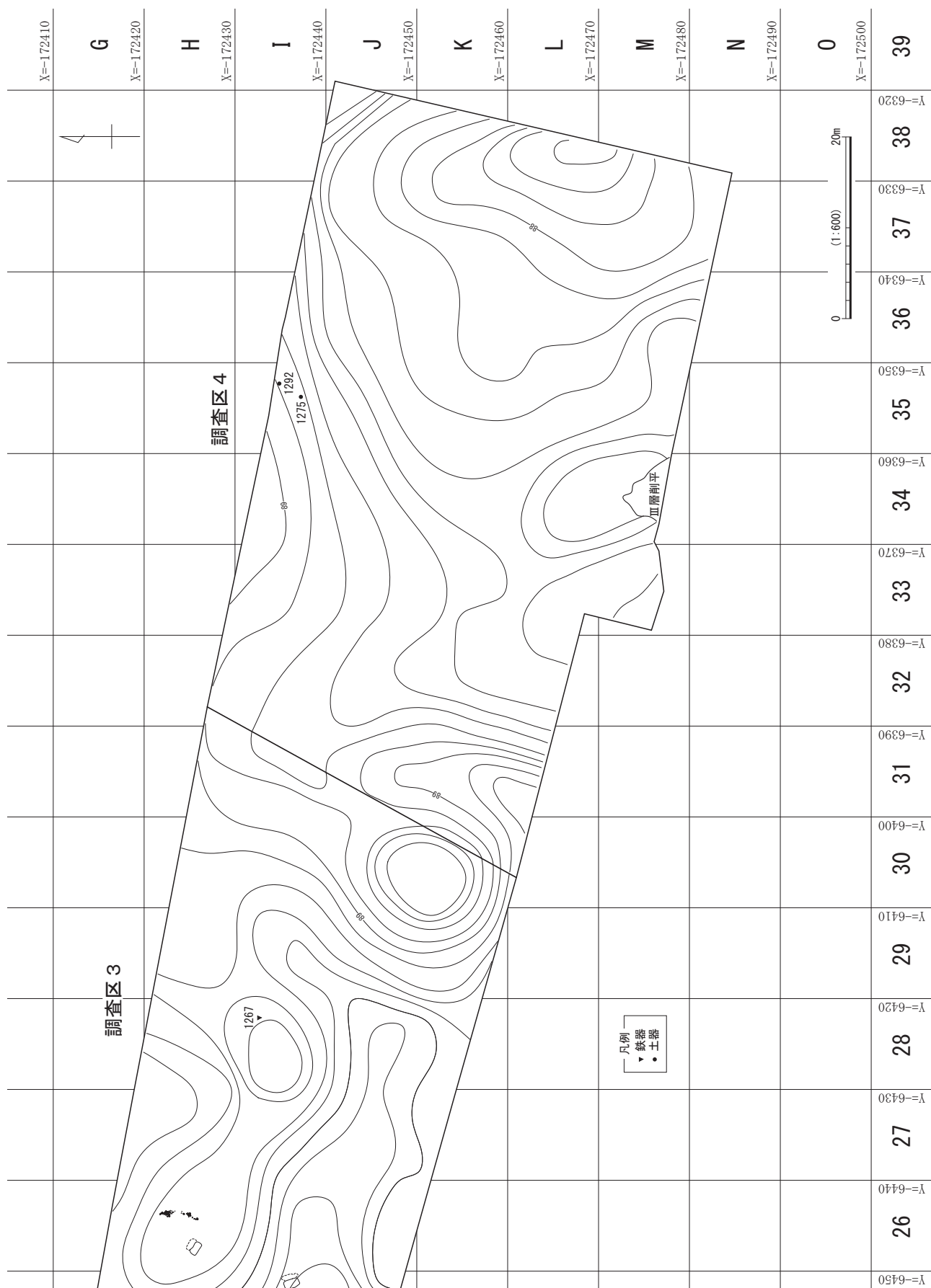
イ 土器 (第308図・第308図)

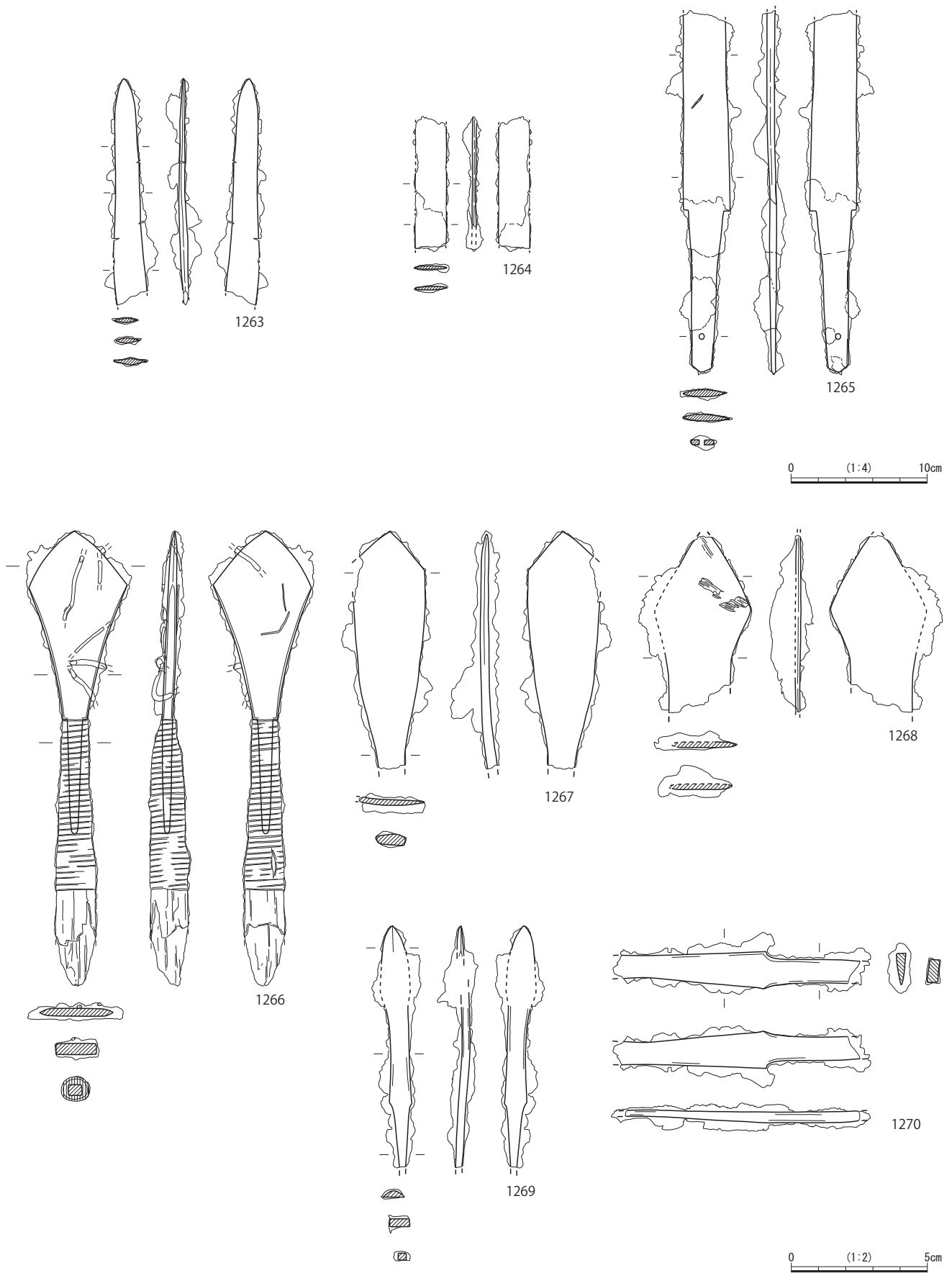
土器は甕形土器・壺形土器・埴・高坏・手捏土器等22点である。1271は口縁部径26cmの甕形土器である。口縁部は短く「く」の字状に外反し内面には稜を有する。内外面共にナデ調整である。1272は頸部に刻目突帯を巡らす壺形土器である。外面調整はヘラミガキである。1273は壺形土器の頸部である。口縁内面はヘラミガキである。1274は壺形土器の肩部で鋸歯状の刻目突帯を巡らすものである。1275は底部径6.8cmの壺形土器で口縁部を欠損するものである。底部はわずかな上底で端部は踏ん張る。胴部はあまり膨らまず最大径は上位にあり17cmを測る。外面は縦方向及び斜め方向のヘラミガキ, 内面はナデ整形である。1276は壺形土器の底部である。1291は口縁部径21.4cmを測るもので, 頸部と口縁部の中

間に屈曲部を有する二重口縁壺である。胴部は球形状に膨らみ最大径は38cmである。頸部には刻目突帯を巡らす。1277～1282は埴。1277は口縁部がわずかに内湾するもので, 口縁部径は7.2cmである。外面は頸部から口縁部へ縦方向のヘラミガキが施され, 上位は横方向のナデである。1278は口縁部がわずかに内湾するもので, 口縁部径は8.2cmである。1279は体部のみ残存している。体部は球形状に膨らみ, 最大径は体部のほぼ中位にあり8.7cmを測る。外面は工具ナデ, 内面はナデと指頭圧痕である。1280は体部の下半のみ残存する。体部は球形状で外面は横方向の丁寧なヘラミガキである。1281と1282は体部の最大径が下半部にあるものである。0984は帯美の最大径が8.8cmで, ナデ整形である。0986は底部が平底で, 体部の底部近くに最大径があり12.6cmを測る。外面は横方向の丁寧なヘラミガキ, 内面は指頭による押圧とナデ整形である。また, 外面には底面及び体部に赤色顔料の塗布が観察される。1283～1288は高坏である。1283は口縁部を欠損するものである。底部径12.6cmで, 脚部は直線的に裾部へと広がり裾は反り返る。坏部と脚部の接合はコマ状の塊で栓をするものである。1284は坏部及び底部を欠損するものである。脚部が直線的に広がるタイプである。脚部外面は縦方向の丁寧なヘラミガキである。坏部と脚部の接合はコマ状の塊で栓をするものと思われる。1285は脚部が膨らみを持つもので裾部は屈曲して底部へと至るものと思われる。脚部外面は斜め方向のヘラミガキである。1286は坏部を欠損するものである。底部径10cmを測る。脚部は緩やかに反りながら裾部へと至るものである。1287と1288は坏部及び裾部が欠損している。いずれも脚部が細く棒状を呈するものである。棒状の裾部が欠損しているが, 脚柱部から屈曲して裾部へ至るものと思われる。1288は縦方向の丁寧なヘラミガキが施される。1289と1290は手捏ね土器である。1289は口縁部径5.6cm, 器高7.3cmを測る。底部は厚く, 器形は筒状に近いがわずかに外反する。外面はヘラケズリが見られる。1290は口縁部径5.6cm, 器高5.7cmを測る。上底の底部から直線的に口縁部へ立ち上がる。内外面共に指頭押圧の痕跡が著しい。1291は口縁部径24cmを測り, 頸部と口縁部の中間に屈曲部を有する二重口縁壺である。胴部は球形状を呈し, 最大径はほぼ中位で36.3cmである。頸部に刻目突帯を巡らす。内外面共にハケ目調整が認められる。1292は口縁部径38.5cm, 底部径10.4cm, 推定器高44.4cmを測る甕形土器である。平底の底部から直線的に外反し, 胴部上位から内湾して口縁部へ至る。口縁部下位に刻目突帯を巡らすものであるが, 突帯はすれ違い突帯である。突部下位にヘラミガキが見られるが大半はナデである。底部外面には指頭押圧の痕跡が明瞭に見られる。

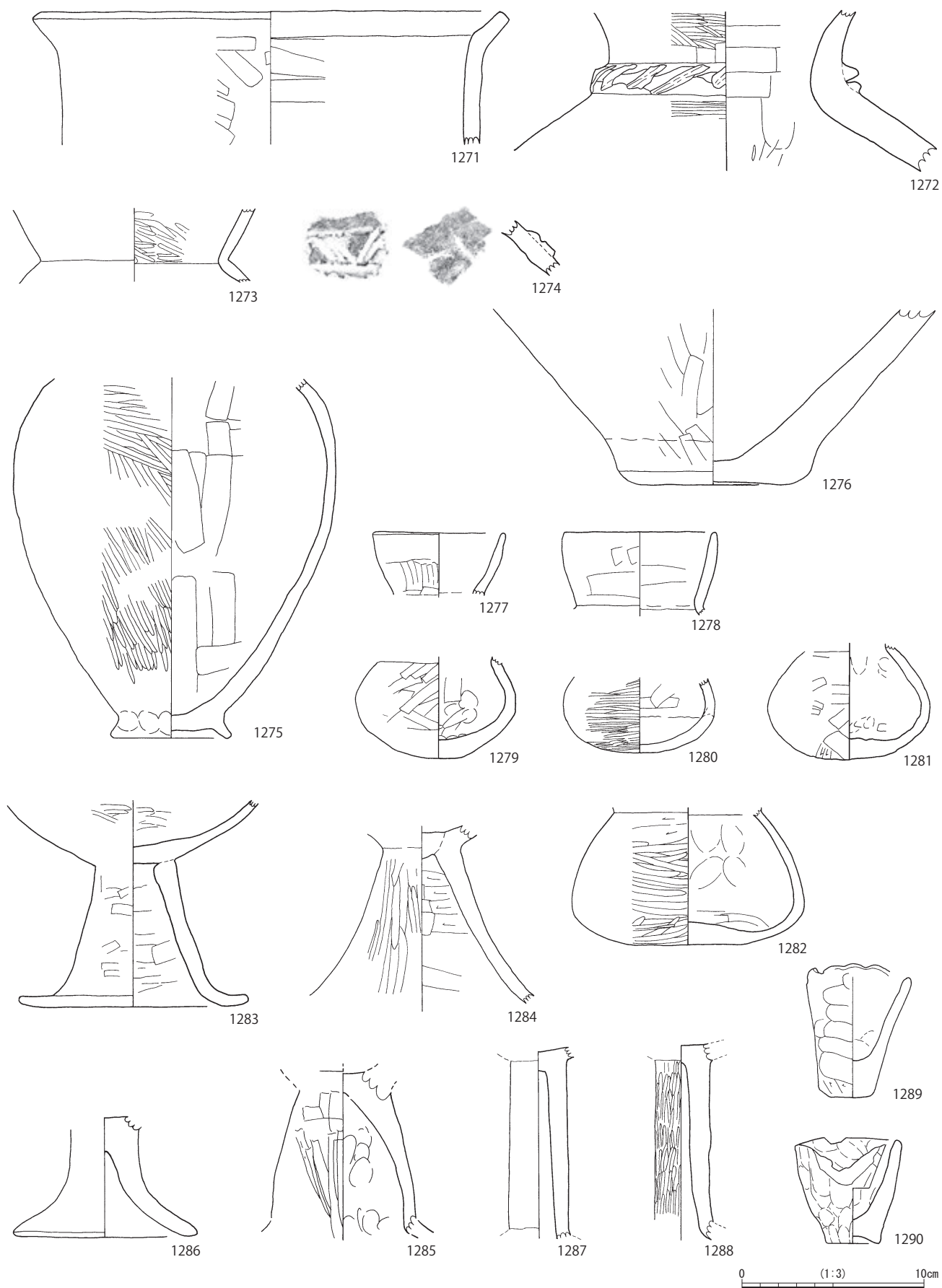


第305図 古墳時代遺物出土状況（1）

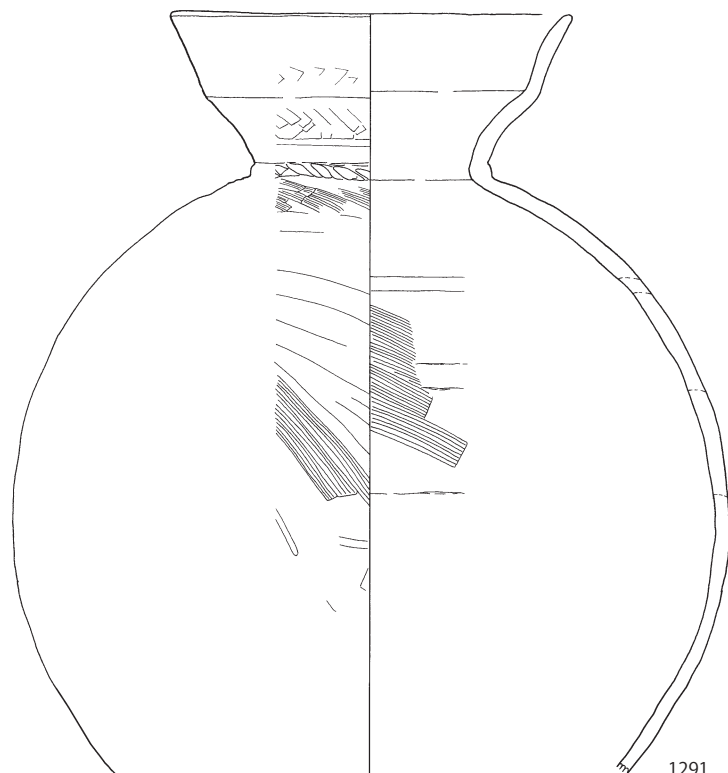




第307図 古墳時代の鉄器

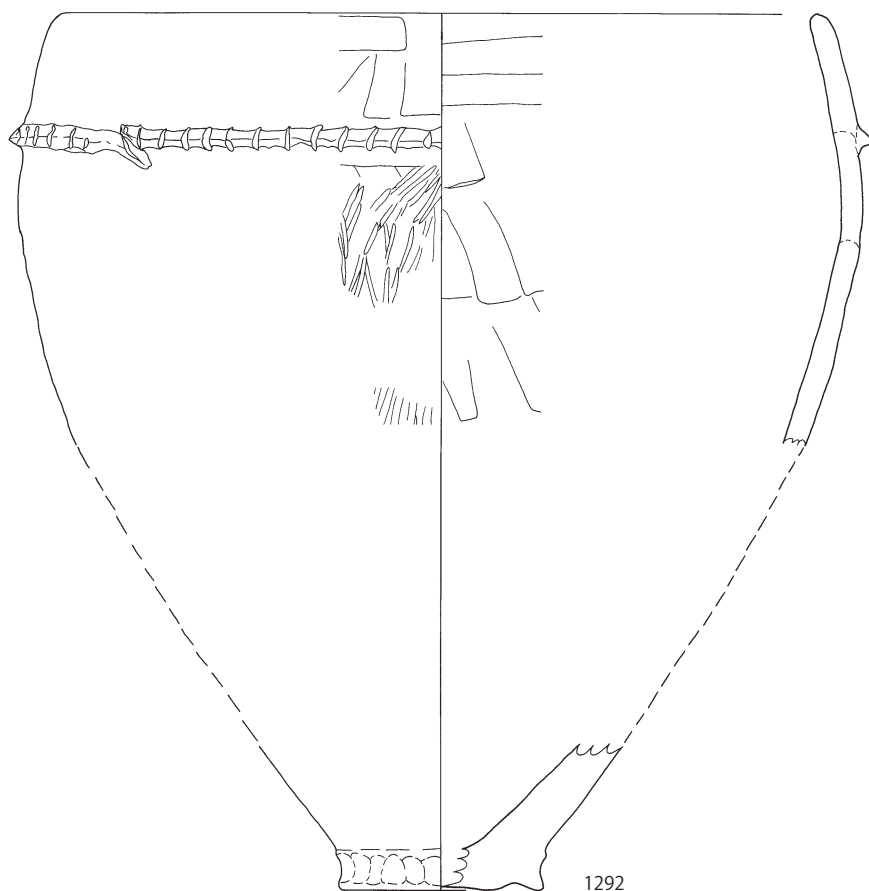


第308図 古墳時代の土器（1）



1291

0 (1:4) 10cm



1292

0 (1:3) 10cm

第309図 古墳時代の土器(2)

(5) 遺物観察表

第40表 古墳時代鉄器観察表(1)

挿図 番号	掲載 番号	出土地点	遺構 層位	取上番号	器種	部位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備 考
135	1122	H-21・22	ST2	-	鉄剣	刃部～茎部	42.4	3.0	0.5	
	1123	H-21・22	ST2	-	刀子	刃部～茎部	11.4	1.8	0.5	
	1124	H-21・22	ST2	-	両頭金具	-	(4.2)	1.4	0.3	
	1125	H-21・22	ST2	-	鐏子	-	5.0	1.0	0.6	
	1126	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(14.2)	4.6	0.4	圭頭鏃, 無関
136	1127	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	6.1	1.3	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1128	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	5.8	1.5	0.4	柳葉鏃, 山形関
	1129	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	8.0	1.4	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1130	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	8.7	1.8	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1131	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(7.1)	1.4	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1132	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	7.3	1.1	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1133	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(6.8)	1.5	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1134	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	8.2	1.6	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1135	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部	5.6	1.3	0.2	柳葉鏃, 山形関
137	1136	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部	(5.5)	1.7	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1137	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	8.8	1.1	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1138	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(7.9)	1.2	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1139	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	7.9	1.2	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1140	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	9.5	1.4	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1141	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	7.6	0.9	0.3	短頸鏃, 山形関
	1142	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	茎部	(3.2)	(0.4)	0.4	
	1143	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	茎部	(3.8)	(0.8)	0.4	
	1144	H-21・22	ST2	-	鉄鏃	柄	(5.7)	0.9	0.9	
154	1147	F-20	ST9	ST9-1 玄室	刀子	刃部～茎部	10.95	1.0	0.2	
161	1148	G-19・20	ST12	-	鉄剣	刃部～茎部	38.2	3.4	0.6	
	1149	G-19・20	ST12	ST12-2	鉄鏃	鏃身部～茎部	15.8	4.5	0.4	圭頭鏃, 無関
	1150	G-19・20	ST12	-	異形鉄器	刃部～茎部	16.0	7.1	0.5	
166	1151	I-23	ST14	-	鉄剣	刃部～茎部	(48.0)	3.3	0.5	
169	1152	H-23	ST15	1801	鉄鏃	鏃身部～茎部	8.5	2.55	0.5	圭頭鏃, 無関
	1153	G-22・23	ST15	1800	鉄剣	刃部～茎部	(24.75)	4.25	0.65	
181	1162	G・H-19	ST18	ST18 竪坑-1	異形鉄器	茎部	(11.15)	(3.6)	0.3	
189	1163	H-21	ST24	-	刀子	刃部～茎部	(12.5)	1.8	0.3	
192	1164	F・G-22	ST26	-	鉄剣	刃部～茎部	59.9	2.9	0.4	
193	1165	F-22	ST26	ST26-3 玄室	鉄鏃	鏃身部～茎部	14.75	4.1	0.35	圭頭鏃, 無関
	1166	F・G-22	ST26	-	異形鉄器	刃部～茎部	21.0	4.0	0.8	
	1167	F-22	ST26	ST26-2 玄室	異形鉄器	刃部～茎部	15.45	6.55	0.2	
200	1168	G-23・24	ST30	-	ヤリ	刃部～茎部	29.6	4.5	0.7	
202	1169	H-22	ST32	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	9.8	3.1	0.4	一段腸剣
	1170	H-22	ST32	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	8.9	2.0	0.4	一段腸剣
	1171	H-22	ST32	ST32-1	鉄鏃	鏃身部～茎部	10.3	2.35	0.35	一段腸剣
216	1172	I-20	ST45	ST45-1	鉄鏃	鏃身部～茎部	13.2	3.0	0.3	圭頭鏃, 無関
	1173	I-20	ST45	ST45-1	鉄鏃	鏃身部～茎部	15.45	2.1	0.4	柳葉鏃, 山形関
221	1174	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	12.3	1.4	0.4	柳葉鏃, 山形関
	1175	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	11.8	1.4	0.4	柳葉鏃, 山形関
	1176	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(10.4)	1.6	0.4	柳葉鏃, 山形関
	1177	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(9.9)	1.4	0.4	柳葉鏃, 山形関
	1178	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	11.8	1.6	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1179	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	11.2	1.5	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1180	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	11.0	0.8	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1181	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	11.2	1.3	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1182	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	10.5	1.5	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1183	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	10.9	1.3	0.3	柳葉鏃, 山形関
222	1184	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	13.4	1.7	0.4	柳葉鏃, 山形関
	1185	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(9.0)	1.8	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1186	F-22	ST47	ST47 玄室-9	鉄鏃	鏃身部～茎部	(9.7)	1.65	0.4	柳葉鏃, 山形関
	1187	F-22	ST47	ST47 玄室-4	鉄鏃	鏃身部～茎部	(12.5)	1.85	0.4	短頸鏃
	1188	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	11.2	2.0	0.4	柳葉鏃, 山形関
	1189	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(10.9)	(1.5)	0.4	一段腸剣
	1190	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	14.3	(2.6)	0.4	一段腸剣
223	1191	F-22	ST47	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	15.0	(1.6)	0.4	一段腸剣
	1192	F-22	ST47	-	鉄鏃	茎部	(2.0)	0.3	0.3	
	1193	F-22	ST47	-	鉄鏃	柄	(4.2)	0.9	0.9	
230	1194	H-24	ST51	-	鉄剣	刃部～茎部	57.2	3.1	0.6	
	1195	H-24	ST51	-	鉄剣	刃部～茎部	40.0	2.4	0.5	
	1196	H-24	ST51	ST51 玄室-3	鉄鏃	鏃身部～茎部	15.0	3.5	0.4	圭頭鏃, 無関
	1197	H-24	ST51	ST51 玄室-4	鉄鏃	鏃身部～茎部	(10.5)	3.0	0.4	圭頭鏃, 無関
239	1198	G-21	ST57	-	短剣	刃部～茎部	23.6	3.5	0.6	
241	1199	I-20・21	ST58	-	異形鉄器	刃部～茎部	21.8	6.6	0.3	鏃身部逆刺
	1200	I-20・21	ST58	-	異形鉄器	刃部～茎部	14.0	5.3	0.2	鏃身部ナテ関
248	1201	H-16	ST62	-	鉈	刃部～茎部	17.8	1.1	0.4	
254	1202	H-25	ST67	-	鉄剣	刃部～茎部	39.8	2.1	0.4	
	1203	H-25	ST67	-	短剣	刃部～茎部	28.3	3.9	0.5	

第41表 古墳時代鉄器観察表（2）

挿図 番号	掲載 番号	出土地点	遺構 層位	取上番号	器種	部位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備 考
259	1204	F-21	ST70	-	短剣	刃部～茎部	26.0	4.7	0.6	
	1205	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	11.2	1.7	0.4	柳葉鏃, 山形関
	1206	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	11.0	1.7	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1207	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	10.7	0.8	0.3	柳葉鏃, 山形関
260	1208	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	10.9	1.6	0.4	柳葉鏃, 山形関
	1209	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	9.8	1.5	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1210	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	10.2	1.9	0.5	柳葉鏃, 山形関
	1211	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(6.3)	1.6	0.35	柳葉鏃, 山形関
	1212	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(8.4)	(2.0)	0.5	二段腸剣, 山形関
	1213	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(9.6)	(1.4)	0.45	柳葉鏃, 山形関
	1214	F-21	ST70	-	鉄鏃	茎部	(4.9)	(1.1)	0.4	1229と同一個体
	1215	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(9.2)	1.6	0.35	柳葉鏃, 山形関
	1216	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(7.4)	(1.5)	0.35	柳葉鏃, 山形関
	1217	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(10.2)	(1.2)	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1218	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(6.6)	1.8	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1219	F-21	ST70	-	鉄鏃	茎部	-	(1.2)	0.2	
261	1220	F-21	ST70	-	鉄鏃	茎部	-	(0.9)	0.25	
	1221	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	9.6	1.4	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1222	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	(11.0)	1.5	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1223	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	10.0	1.35	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1224	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	9.1	2.0	0.5	一段腸剣, 山形関
	1225	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	11.2	1.8	0.35	一段腸剣
	1226	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	10.3	(1.5)	0.35	二段腸剣, 山形関
	1227	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	9.5	1.4	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1228	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	9.8	1.5	0.3	柳葉鏃, 山形関
	1229	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	9.5	1.6	0.4	柳葉鏃, 山形関
	1230	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部	(3.9)	1.6	0.3	柳葉鏃, 1217と同一個体
	1231	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	11.9	1.4	0.3	柳葉鏃, 山形関
262	1232	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	9.8	1.7	0.5	二段腸剣
	1233	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	10.6	1.5	0.35	二段腸剣, 山形関
	1234	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	12.0	1.9	0.35	二段腸剣, 山形関
	1235	F-21	ST70	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	9.8	1.6	0.35	二段腸剣, 山形関
	1236	F-21	ST70	-	鉄鏃	柄	(9.3)	0.8	0.8	
	1237	F-21	ST70	-	鉄鏃	柄	(7.8)	1.0	1.0	
	1238	F-21	ST70	-	鉄鏃	茎部	(2.1)	0.3	0.3	
	1239	F-21	ST70	-	鉄鏃	茎部	(3.5)	0.4	0.4	1240と同一個体
	1240	F-21	ST70	-	鉄鏃	茎部	(7.1)	0.7	0.4	1239と同一個体
	1241	F・G-21	ST71	-	鉄剣	刃部～茎部	78.0	4.3	0.5	
273	1242	H-26	ST76	-	鉄剣	刃部～茎部	29.0	4.4	0.6	
277	1243	I-22	ST79	-	ヤリ	刃部～茎部	23.4	2.7	0.5	
280	1244	G-20・21	ST82	ST82-1	刀子	刃部	(7.9)	1.5	0.2	
292	1246	G-22	-	-	鉄剣	刃部～茎部	59.8	3.1	0.4	
295	1247	I-24	II b	15353	鉄剣	刃部～茎部	44.4	3.25	0.7	
	1248	I-24	II b	15642	鉄鏃	鏃身部～茎部	15.7	4.5	0.55	圭頭鏃, 無関
307	1263	H-17	II b	4805	鉄剣	刃部	(17.15)	2.3	0.55	
	1264	G-21	II b	7606	鉄剣	刃部	(9.95)	2.3	0.2	
	1265	H-18	I	-	鉄剣	刃部～茎部	(26.6)	3.45	0.55	
	1266	H-23	II	-	鉄鏃	鏃身部～茎部	11.1	3.6	0.4	圭頭鏃
	1267	I-28	II b	18223	鉄鏃	鏃身部	(8.6)	(2.4)	0.3	圭頭鏃
	1268	H-16	II b	3637	鉄鏃	鏃身部～茎部	(6.5)	3.55	0.2	圭頭鏃
	1269	H-16	II b	7994	鉄鏃	鏃身部～茎部	(8.9)	1.1	0.33	短頭鏃
	1270	G-16	II a	5847	刀子	刃部～茎部	8.9	1.4	0.4	

第42表 古墳時代土器観察表（1）

挿図 番号	掲載 番号	出土 地点	遺構 層位	取上 番号	分類	器種	部位	器面調整		色 調		胎 土					備 考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
140	1145	G-22	Sza3	Sza3-1	古墳	器台	口縁部 ～底部	ミガキ, ナデ, 指頭圧痕	ミガキ, ナデ	黄褐色	赤褐色	○	○	-	○	-	
152	1146	G-20	ST8	1916	古墳	埴	胴部～ 底部	ミガキ	ナデ	橙色	にぶい 橙色	○	○	-	-	-	
175	1154	H-19	SD1	SD1-B	古墳	小型 丸底壺	口縁部 ～底部	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	黄褐色	茶褐色	○	○	○	-	-	
	1155	I-19	SD1	SD1-5	古墳	壺	口縁部	ナデ, ミガキ	ナデ	橙色	浅黄褐色	○	○	-	-	-	
	1156	H-20	SD1	-	古墳	高坏	脚部	ナデ後 ミガキ	ナデ	にぶい 橙色	灰黄褐色	○	○	○	-	-	
	1157	SD1-2	SD1	SD1-2	成川	壺	口縁部 ～胴部	ナデ後 ミガキ	剥落	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	○	○	-	-	○	輝石
	1158	H-19	SD1	SD1-1 -A12441	成川	壺	胴部～ 底部	ナデ	ケズリ, ナデ, 指頭圧痕	黄褐色	黄褐色	○	○	○	○	-	
	1159	SD1-3	SD1	SD1-3	成川	壺	胴部～ 底部	ナデ後 ミガキ	ミガキ	浅黄褐色	明黄褐色	○	○	-	-	○	輝石, 底部穿孔
291	1245	H-21	II b	2122	成川 (古墳)	壺	頸部～ 胴部	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	黄褐色	○	○	-	-	-	

第43表 古墳時代土器観察表（2）

挿図 番号	掲載 番号	出土 地点	遺構 層位	取上 番号	分類	器種	部位	器面調整		色 調		胎 土					備 考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
295	1249	H-24	II b	14749	古墳	埴	口縁部 ～底部	ナデ, ミガキ	ナデ, 工具ナデ	褐色	灰褐色	○	○	-	-	-	
	1250	I-24	II b	12938	古墳	埴	口縁部 ～底部	ミガキ	ナデ, 指頭圧痕	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	
	1251	I-24	II b	12888・ 15355 他	成川	壺	口縁部 ～底部	ミガキ, ナデ後 ミガキ	ミガキ, ケズリ, ナデ (剥落), 指頭圧痕	明褐色～ 褐色	明赤褐色～ 赤褐色	○	○	○	-	-	
	1252	H-24	II b	12887	古墳	高坏	ほぼ完形	ミガキ, ナデ	ナデ	赤褐色	黄褐色	○	○	-	-	-	
	1253	H-24	II b	12937	古墳	埴	口縁部 ～底部	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	茶褐色	黄褐色	○	○	-	-	-	
296	1254	F-21	II b	1918	成川 (古墳)	壺	口縁部 ～胴部	ミガキ	ナデ	にぶい 赤褐色	赤褐色	○	○	-	-	-	突帯, 二重口縁
	1255	F-21	II b	1918	成川	壺	肩部	ミガキ	ナデ	にぶい 橙色	橙色	○	○	-	-	-	突帯
	1256	F-21	II b	14720	古墳	壺	完形	ミガキ	ミガキ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	
	1257	F-21	II b	14721	古墳	高坏	完形	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	
297	1258	G-21	II b	1920	古墳	埴	ほぼ完形	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	黄褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	
301	1259	H-26	II b	9500	成川	壺	口縁部 ～底部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	
	1260	Na 9500	-	9500	成川	壺	口縁部 ～胴部	ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	○	○	-	-	○	輝石
302	1261	G-22	II b	2440	古墳	壺	胴部	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○	○	-	-	
304	1262	H-16 I-16 ・17	II b	3113・ 3116他	成川	壺	口縁部 ～底部	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ	ナデ	赤褐色	にぶい褐色 ～赤褐色	○	○	-	-	-	
308	1271	G-22	SI4	SI4-93	古墳	壺	口縁部	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	○	○	-	-	-	
	1272	F-21	II b	6787・ 10573	古墳	壺	胴部	ナデ, ミガキ	ナデ後 ミガキ	赤褐色	橙色	○	○	○	-	-	刻目突帯文
	1273	G-22	II b	16552	古墳	壺	口縁部	ナデ	ミガキ	黄褐色	黄褐色	○	○	-	-	-	輝石
	1274	F-20	II b	-	成川	壺	肩部	ミガキ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	-	-	-	突帯
	1275	3529 他	-	-	古墳	壺	胴部～ 底部	ミガキ, 指頭圧痕	ナデ	褐灰色	にぶい 橙色	○	○	-	-	○	輝石
	1276	G-21	II b	7607	古墳	壺	胴部～ 底部	ナデ	剥落	橙色	橙色	○	○	-	-	○	輝石, 繊維?
	1277	I-23	II b	2290	古墳	埴	口縁部	ミガキ,ナデ	ナデ	赤褐色	淡褐色	○	○	○	-	-	
	1278	3T	-	-	古墳	埴	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	
	1279	H-21	II b	2107・ 2899	古墳	埴	頸部～ 底部	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	灰褐色	灰褐色	○	○	-	-	-	
	1280	J-24	I	24	古墳	埴	胴部～ 底部	ミガキ	ナデ	にぶい 黄橙色	明黄褐色	○	○	-	-	○	輝石
	1281	H-21	II b	14043	古墳	埴	口縁部 ～底部	ケズリ, ナデ	ナデ, 指頭圧痕	赤褐色	淡褐色	○	○	-	-	-	
	1282	I-23	II b	2281	古墳	埴	口縁部 ～底部	ミガキ, ナデ	ナデ, 指頭圧痕	茶褐色	茶褐色	○	○	-	-	-	
	1283	I-17	II b	8863	古墳	高坏	胴部～ 底部	ミガキ, ナデ	ナデ, ミガキ	黄褐色	灰褐色	○	○	-	-	-	
	1284	H-15 ・17	II b	4794・ 4799他	古墳	高坏	脚部	ミガキ	ナデ, ケズリ	橙色	橙色	○	○	○	-	-	
	1285	I-23	II b	2333	古墳	高坏	胴部	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	赤褐色	黒褐色	○	○	-	-	-	
	1286	H-16	II b	4880・ 4881他	古墳	高坏	脚部	ナデ	ナデ	橙色	橙色	○	○	○	-	-	
	1287	G-21	II b	16730・ 16731	古墳	高坏	脚部	ナデ	棒状工具 による ケズリ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○	-	-	
	1288	G-24	II b	2469	古墳	高坏	脚部	ミガキ	棒状工具 による ケズリ	橙色	橙色	○	○	-	-	-	
	1289	H-16	II b	6358	成川 (古墳)	手捏 土器 (小鉢)	口縁部 ～底部	ナデ, ケズリ	ナデ	橙色	橙色	○	○	-	○	-	指頭圧痕
	1290	F-18	II b	12940	古墳	手捏土器	完形	手捏	手捏	茶褐色	褐色	○	○	-	-	-	
309	1291	G-19	II b	12539	成川	二重口縁 壺	口縁部 ～胴部	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○	-	-	-	
	1292	I-35	II b	3516	古墳 (笹貴)	壺 (広口)	口縁部 ～底部	ナデ後 ミガキ, ナデ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	○	○	-	-	○	輝石,貼付突帯

第44表 古墳時代石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	出土 地点	遺構 層位	取上 番号	分類	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
176	1160	-	SD1	-	-	砥石	37.8	10.3	14.9	8700.0	安山岩	
	1161	I-19	SD1	-	-	砥石	(8.6)	(6.0)	(0.8)	(93.0)	粘板岩	下半欠損

(6) 小結

町田堀遺跡の古墳時代で特筆されるのは、88基の地下式横穴墓である。これらのほとんどは羨道の取り付けが竪坑の長辺にある平入りタイプである。また、玄室の天井形態もドーム状である。

これらは規模及び形態で以下のように細分される。

大分類

- 1 類：玄室が中規模 (1.5m 前後)
- 2 類：玄室が大規模 (1.7m 以上)
- 3 類：玄室が 1 m 以下の極小
- 4 類：玄室が極小で羨道部の取り付けが竪坑の短辺に付く

小分類

- ①：羨門が竪坑とほぼ同じ幅
- ②：羨門が竪坑より幅が狭い

細分類

- A：玄室床面が竪坑床面と平坦
- B：玄室床面が竪坑床面から傾斜する
- C：玄室が竪坑の一部から段落ちする

また、それぞれの組み合わせで分類すると17類に細分される

- 1-①-A 類：13 基
- 1-①-B 類：11 基
- 1-①-C 類：1 基
- 1-②-A 類：14 基
- 1-②-B 類：4 基
- 1-②-C 類：5 基
- 2-①-A 類：7 基
- 2-①-B 類：1 基
- 2-①-C 類：6 基
- 2-②-A 類：12 基
- 2-②-B 類：2 基
- 2-②-C 類：3 基
- 3-①-A 類：1 基
- 3-①-C 類：2 基
- 3-②-A 類：2 基
- 3-②-C 類：2 基
- 4-②-A 類：2 基

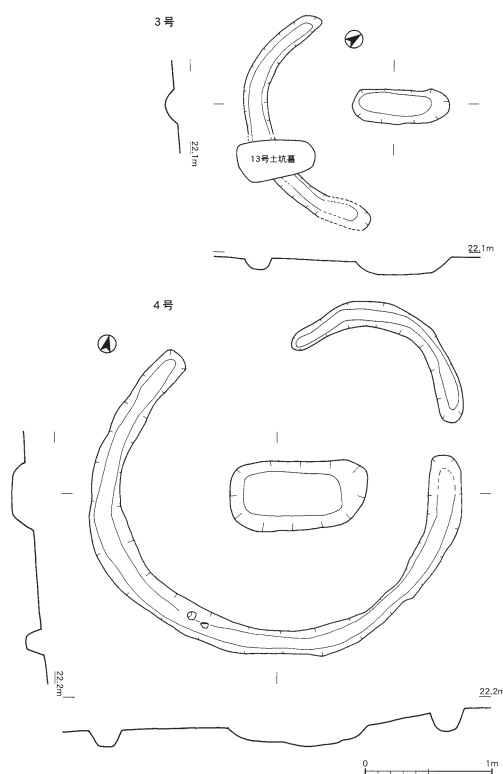
1 類は半数以上の48基、2 類は31基、3 類は7基、4 類は2基である。また、羨門の幅が竪坑と同じか狭くなるかについては、ほぼ同数に近い。しかしながら、他の地域の地下式横穴墓群に比べると、羨門と竪坑の幅が同じ地下式横穴墓の割合が高い傾向にある。このような傾向は鹿屋市串良町立小野堀地下式横穴墓群、鹿屋市西祓川町祓川地下式横穴墓群、大崎町下堀地下式横穴墓群等に見られる。いずれも高塚古墳が存在しない内陸部に位置することも一致している。これらは竪坑から玄室へ入る羨門部が竪坑とほぼ同じ幅で羨道部もほとんど無い

タイプで、橋本達也氏による土坑墓系と考えられ、地下式横穴墓の起源では無いかと考えられている宮崎県えびの市の蔵遺跡の木蓋土坑墓につながるものではないだろうか。また、羨門閉塞が丸太材を横積みにする特徴は古式の地下式横穴墓と考えられている生目古墳群中の地下式横穴墓と類似している。

町田堀遺跡の地下式横穴墓群における特徴は以下のとおりである。

円形周溝及び弧状遺構に伴う地下式横穴墓

円形周溝は4基確認されているが、1～3号円形周溝では、周溝の中央及びやや端に地下式横穴墓が造られている。また、2号円形周溝では周溝を切った状態で1基、3号円形周溝では周溝を切った状態で3基の地下式横穴墓が造られている。4号円形周溝では周溝の二部に地下式横穴墓は造られていないが、周溝を切った状態で地下式横穴墓1基が造られている。弧状遺構についても1・2・4号は弧のほぼ中心部に、3号はやや中心からずれた位置に地下式横穴墓が造られている。また、1号は1基、2号は3基、4号は1基の地下式横穴墓が溝を切った状態で造られている。3号弧状遺構及び14号地下式横穴墓はいずれも1号円形周溝を切った状態で造られている。円形周溝及び弧状遺構を伴う地下式横穴墓はこれまでに宮崎県都城市築池遺跡で確認されているが本県では検出例はなく、弧状遺構も立小野堀遺跡で2例あ



第310図 南摺ヶ浜遺跡3号・4号円形周溝墓

るのみである。本県における円形周溝は弥生時代中期の集落内で発見されているが、約500年の時間差があり関連があるかどうかについては不明である。指宿市の南摺ヶ浜遺跡は壺棺が数多く出土している遺跡であるが、その中に土坑墓を伴う円形周溝墓が12基検出されているが、中には弧状遺構に近いものもあり、溝を切った土坑墓もあり類似性が認められる。

切り合いのある地下式横穴墓

地下式横穴墓においては切り合う事例は非常に少なく、玄室同士が切り合う例はこれまでに都城市築池遺跡と立小野堀遺跡の2例しかない。このことは、現在は地表面に何も無いが、当時は小さな盛り土等の標識か何らかの約束事があり、墓の場所を特定できたものと考えられる。町田堀遺跡では44号墓と45号墓の切り合いと73号墓と74号墓の2箇所の切り合いが確認された。44号墓の玄室の直上から45号墓の竪坑が掘り込まれている。前後関係は44号墓が45号墓より先行するものである。副葬品は共に玄室内に鉄鏃が1点ずつであるが、44号墓は柳葉鏃で45号墓は圭頭鏃であり、時間差はあまりないものと思われる。つまり、そこに玄室があることを十分に理解した上で45号墓が造られたものと思われる。一種の追葬と考えられるのではないだろうか。

73号墓と74号墓では73号墓に成人女性が埋葬された後でその足下に小児が埋葬された痕跡が確認された。

これも追葬と思われるが、地下式横穴墓における追葬は竪坑を掘り直して先に葬られた人の横に葬るなり、骨を片付けてスペースを作って葬るのが通例であるが、74号墓のように新たに竪坑を掘り、同じ玄室に葬る例はこれまでに見られなかったものである。おそらく母子の関

係にあるものと想像させられるが、初葬の母の埋葬された位置、さらに頭位及び足の位置までも十分に理解した上で子供を足下に葬ったものと思われる。

都城市築池遺跡では2箇所において地下式横穴墓の切り合いが確認されている。中でも1号墓と5号墓の切り合いは73号墓と74号墓の切り合いと類似している。1号墓が5号墓の玄室を再利用したものとされているが、近親関係にある人の追葬では無いかと考えられる。

この2例の切り合いにおいて、地下式横穴墓において盛り土・標柱等の目印があったであろうことは明白である。大崎町下堀遺跡7号地下式横穴墓では盛り土が確認されていることから立証される。

小児の墓と思われる地下式横穴墓の存在

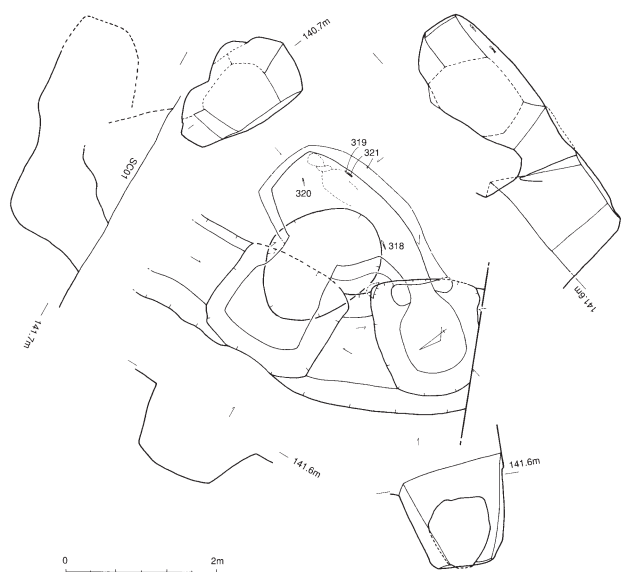
町田堀遺跡においては、74号墓の様に小児の人骨が残されている例をはじめとして規模が小さく小児でないと埋葬できないような地下式横穴墓が9基存在する。3類及び4類に分類したもので、玄室の規模が1m以下のものである。これまで小児人骨は、ほとんどが追葬で大人の人骨と一緒に埋葬されている。本遺跡の82号墓では刀子を副葬する事例があり、小児に対しても手厚い埋葬をしていたことが窺える。

4類に分類したものは竪坑が長方形で短辺に羨門が付くタイプで2基だけしかない。このような小児の墓と思われる地下式横穴墓は立小野堀遺跡でも検出されており、内陸部における特徴なのか、調査面積が広く群規模での調査のために見られる事例なのか今後の課題である。

祭祀空間等葬送儀礼について

地下式横穴墓が群集する中において、地下式横穴墓が存在しない空間を設け、そこに、鉄器や埴や高坏等の祭祀土器を置き祀りを行ったと思われる場所が存在する。古墳時代における祭祀広場はこれまで曾於郡大崎町神領10号墳の周溝内において数多くの土師器・須恵器が置かれた祭祀広場。鹿屋市串良町岡崎18号墳の東側に土師器・須恵器が置かれた祭祀広場。鹿屋市吾平町の中尾地下式横穴墓群では円形状に存在する地下式横穴墓の中央部に須恵器の破片が集中している広場（土器破碎祭祀の可能性もある）。曾於郡大崎町下堀遺跡では2基の地下式横穴墓の南側にある土坑から完形の埴・高坏が出土しており、何らかの祭祀が行われたことが想定される等数箇所が知られている。

本遺跡では、H・I-24区、F-21区、G-21区、H-23区において、土器や鉄器が置かれた祭祀空間が見られる。（F-21及びH-23区は土器破碎祭祀と思われる）壺型土器・埴・高坏と鉄器であるが、単一の地下式横穴墓のための祭祀か周りにある地下式横穴墓複数のための祭祀かは明らかではない。ただH・I-24区に



第311図 築池1号・5号地下式横穴墓

おいては、5基の地下式横穴墓に囲まれた空間に剣1点、埴と鉄鏃、壺と埴、埴と高坏が置かれており、4箇所グループに分けられる。埴が3点出土しているが、あまり時間差がないものと考えられるものである。周辺の地下式横穴墓における共通の祭祀の可能性を考えたい。F-21区においては土器破碎祭祀と思われる土器片の散布の下位に埴と高坏がセットで出土しており、2時期の祭祀が考えられる。

H-21区86号地下式横穴墓の竪坑上部では壺型土器が置かれている。また、G-22区27号地下式横穴墓の玄室上位には意識的に折り曲げられた剣が置かれている。これらは単一の地下式横穴墓のための祭祀と考えられる。

H-26区においては地下式横穴墓群で東端に位置する76号墓の東側で土器破碎祭祀が行われた痕跡が認められる。壺型土器2個帯が破碎された状態で出土しているが、同時期なのか時期差があるかについては不明である。

H・I-16・17区においては62号墓及び63号墓の東側に小破片が散乱している状況が見られる。調査時には確認できなかったものの、整理段階で復元された土器の出土状況を抽出したら、集中していたので土器破碎祭祀とした。

以上の様な祭祀が認められるが祭祀に使用された土器は、供献されたと思われる1320・1321の埴と高坏を除いてはいずれも破損した状況で出土している。

埴についてみると、底部を穿孔するか、口縁部を打ち欠く行為が認められる。剣も意識的に折り曲げるという破損行為を行っている。また、土器破碎祭祀においては、いずれも二重口縁の壺型土器である。これまで、地下式横穴墓には二重口縁の壺型土器が伴って出土する傾向があり、近接する立小野堀遺跡でも土器破碎祭祀に多くの二重口縁の壺型土器が用いられており、町田堀遺跡においても例外ではない。

羨道部及び羨門部における封印

地下式横穴墓においては羨道部及び羨門部の付近で死者を恐れたためか、何らかの封印をしている例が見られる。鹿屋市串良町岡崎4号墳の周溝に竪坑を掘って造られた1号地下式横穴墓では羨門閉塞の粘土塊の上に赤色顔料(丹)の円盤を貼り付けた封印を行っている。鹿屋市吾平町名主原6号地下式横穴墓及び同町宮ノ上14号地下式横穴墓では、竪坑の羨門側の一面に赤色顔料が塗布されている。また、名主原1号地下式横穴墓では羨門の上位に直刀を差し掛けてある。これらは玄室からの出入り口に封印をしたものと考えられる。本遺跡の67号地下式横穴墓でも羨門の上位に剣2点が差し掛けてある。また、羨門床面には赤色顔料も置かれている。この赤色顔料は他の赤色顔料と異なり唯一の水銀朱であり、

67号地下式横穴墓は、特殊な位置付けであると思われる。82号地下式横穴墓では羨門部の上位に径5cmの範囲に赤色顔料を塗布した封印が確認されている。

土器について

土器は甕形土器1点と壺型土器・埴・高坏・器台

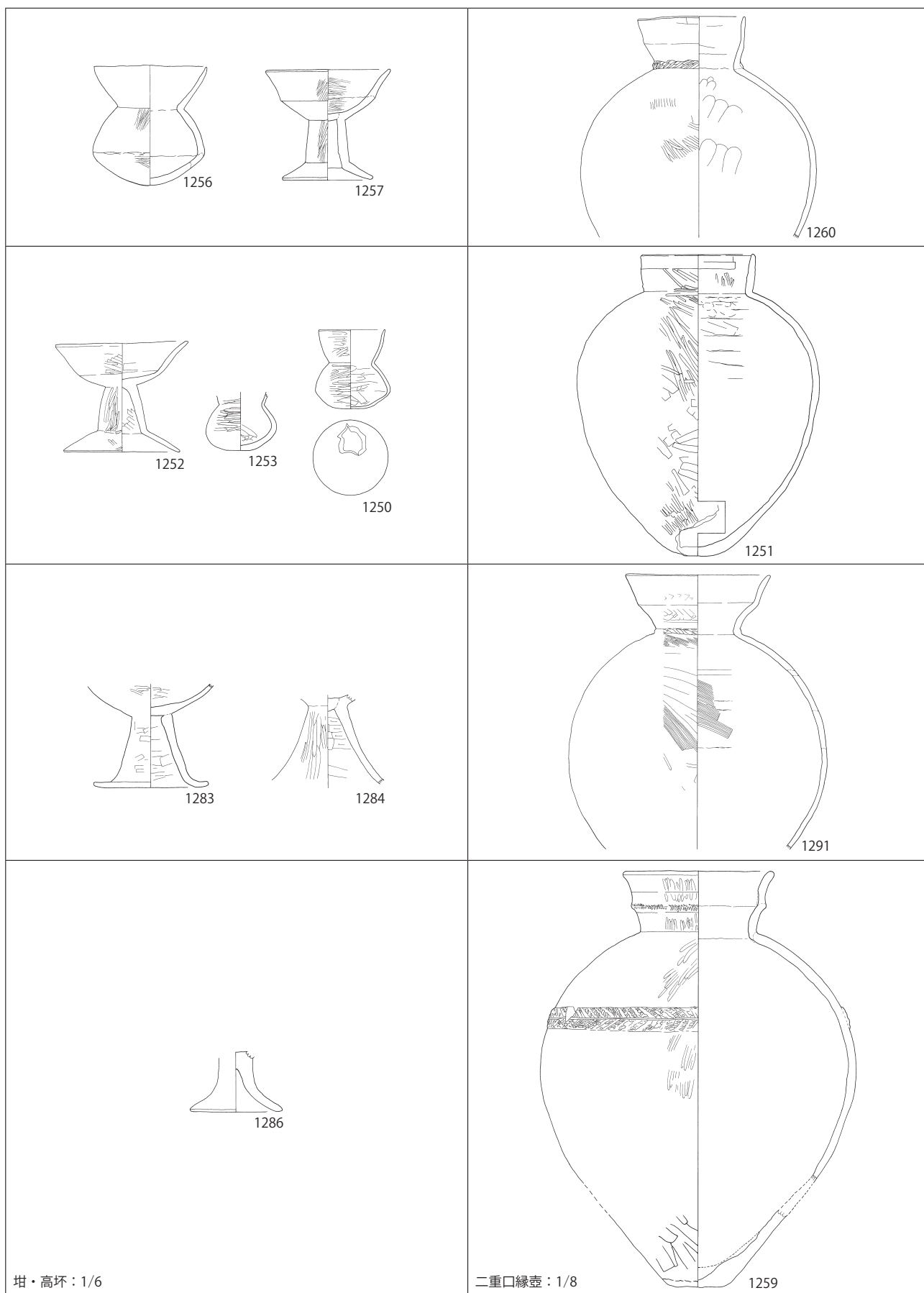
手捏ね土器が出土している。ただし甕形土器(1292)は出土地点が調査区4のI-35区で地下式横穴墓群とはかけ離れているため墓群とは関係ないものとする。口縁部が内湾する形態で成川式でも新しい時期の篋貫式と考えられる。二重口縁の壺型土器についてみると、口縁部と茎部の中間の屈曲部が弱いものと強いものに分けられる。1252は屈曲部が弱く口縁部が直行気味に見えるものである。1261は器壁が薄く、シャープな作りであり屈曲部が弱いものである。255は屈曲部が強く、屈曲部に刻み目を施すものである。また、1257・1258の上位にあることから、それらより新しいものと考えられる。これらのことから類推すると、屈曲部が弱く口縁部が直行気味なものが古く、屈曲部が強いものへと移行すると考えられる。

埴及び高坏についてみると、埴は口縁部が打ち欠かれているか、底部に穿孔を穿つかするものがほとんどである。高坏も欠損したものが多く。1287と1288は脚柱部のみ残存しているものであるが、口縁部及び裾部は意識的に打ち欠かれたものと思われる。また、棒状の脚柱という特徴を有し、地下式横穴墓という埋葬に関連のあるものと思われる。1257・1258は成川様式の中で古手の東原式と思われる。1253・1254も東原式の範疇に入ると考えられるが、1257・1258より後出するものと思われる。また、1283・1284・1286は脚部だけであるが、脚柱部がラッパ状に広がるものでやや後出する辻堂原式と考えられる。

第312図において、埴・高坏・二重口縁壺の編年試案を提示したが二重口縁壺の類例が少ない中での試案であり、今後検討・変更の課題としたい。

地下式横穴墓の年代観

町田堀遺跡においては、土器は出土しているものの特定の地下式横穴墓に伴うと考えられる出土状況ではない。土器の年代観でみると東原式から辻堂原式に比定できるもので5世紀前半代が考えられる。鉄器についても、柳葉鏃・腸剣柳葉鏃・圭頭鏃に限られ、同年代と考えられる。土器についても鉄器についても、5世紀前半代でおさまるものと考えられる。



第312図 町田堀遺跡における埴・高坏・二重口縁壺の編年試案

副葬鉄器について

町田堀遺跡の地下式横穴墓から出土した副葬鉄器は、

鉄剣：8点

短剣（ヤリの可能性のあるものを含む）：3点

ヤリ：2点

鉋：1点

刀子：4点

鉄鏃：73点

圭頭鏃：6点

柳葉鏃：51点

柳葉腸挟鏃：8点

二段腸挟柳葉鏃：6点

短頸鏃：2点

異形鉄器：6点

鐻子状鉄器：1点

両頭金具：1点

不明：1点

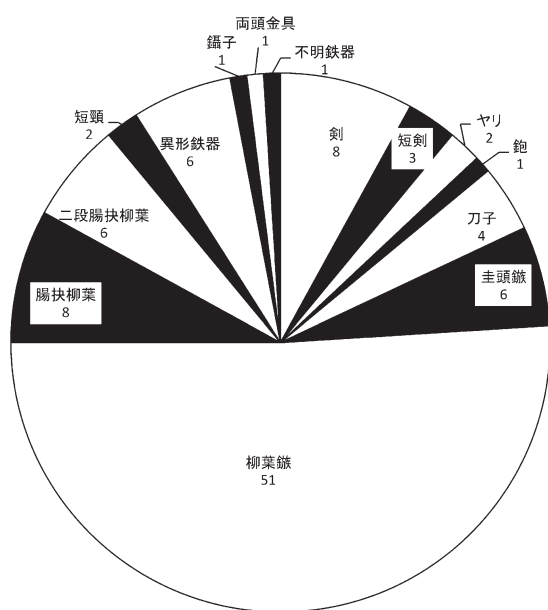
合計：100点（接合できない矢柄片を除く等して
個体数を算出したため、本文中の
点数と異なる場合がある）

である（第315図）。今回検出された88基の地下式横穴墓
の中の22基から出土した。その7割が鉄鏃であり、鉄器
全体の半数を柳葉鏃が占めている（図313）。出土遺構ご
との鉄器の割合を見ると、全体の約7割が2・47・70号
墓から出土している。70号墓が最も多く32点、次いで
2号墓が20点、47号墓が18点である（図314）。その他
の墓は多くても4点の出土のため、2・47・70号墓と他
の墓との差は明確であることから、この3基が町田堀遺
跡の被葬者のなかで高い地位にいたと考えられる。

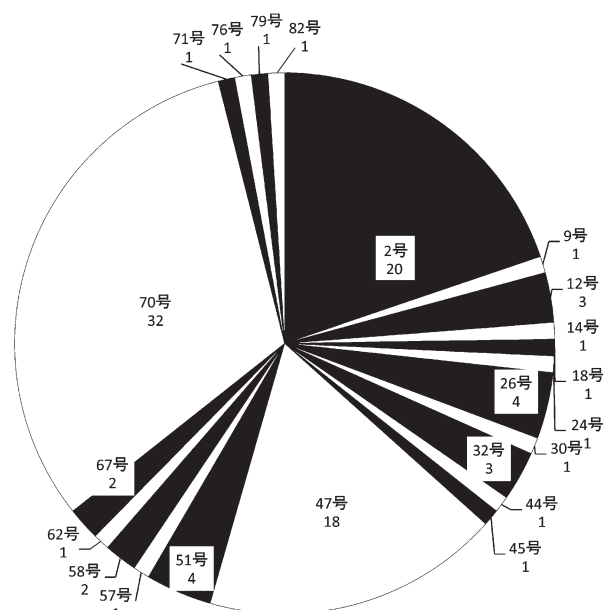
鉄器の出土数の差異を遺構配置から検討したが、一見

したところ明確な傾向は見られなかった。2号墓が遺跡
のほぼ中心に位置し、円形周溝をとまうことが注目さ
れるが、円形周溝をとまう地下式横穴墓が3基検出し
ているなか、副葬鉄器が出土したのは2号墓のみで他の
1・4号墓には副葬品がないことから、多量副葬と円形
周溝との関連は現在のところ見られない。また、同じく
多量副葬された47・70号墓が北端に位置している。後
述するが、2号墓と47・70号墓にはわずかに時期差が
あるため時期的な条件を無視することはできないが、現
状で言えば、副葬品をもつ墓がある場所に集中する等と
いう傾向は見られなかった。

また、多量副葬された2・47・70号墓には、多くの
有機質が付着していた。鹿児島大学の橋本達也准教授か
ら大量の鏃を運搬するための鞆等の容器の痕跡の可能性
があるとの指摘を受けたため、形状の復元を試みたが、
2・47号墓は痕跡が少なく復元することができなかった。
70号墓でも形状の復元はできなかったが、鏃身部
には皮革、矢柄には蓆状の植物繊維が付着するという傾
向が見られた。これは、出土状態を復元した際に鏃束の
外面を覆うようにして見られたため、敷物等によるもの
である可能性は低い。また、1箇所に小片ではあるが鏃
に対して垂直方向の木目をもつ木質も付着している。蓆
状のものと木質の付着状況に前後関係がある箇所はな
く、それぞれ個別に付着しているため容器としての構造
は不明だが、おそらく、矢柄まで収納できる部分を蓆状
のものと木材で製作し、その蓋として皮革を使用してい
たと考えられる。蓆状の植物繊維は47号墓の矢柄にも付
着しているが、鏃身部から矢柄にかけて皮革の付着が
見られるため、70号墓とは異なる形状の容器と考えら
れる。



第313図 副葬鉄器器種別内訳



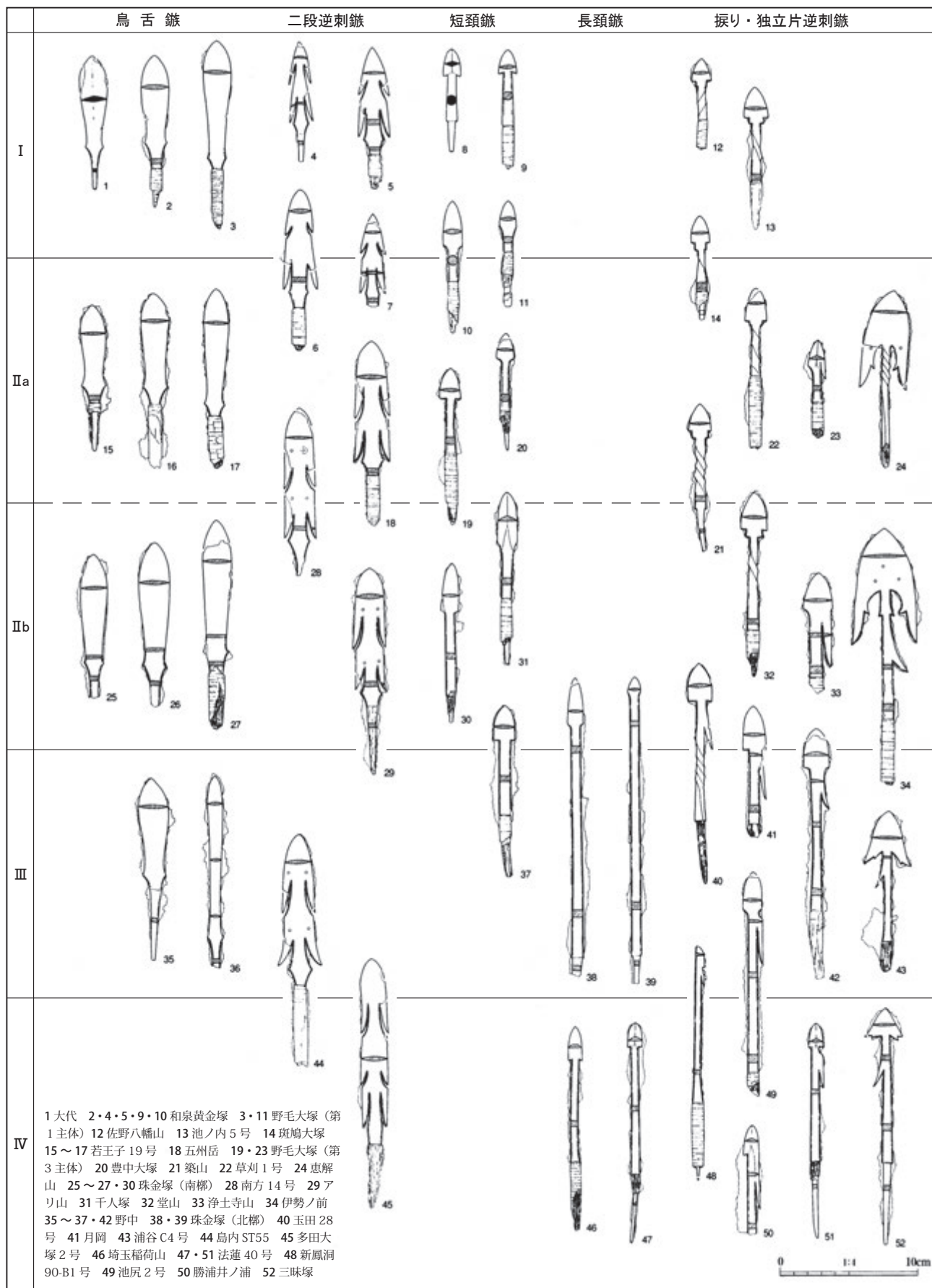
第314図 墓ごとの出土数

遺構番号	9号		12号		14号	18号	24号		26号			30号		32号	
出土鉄器															
遺構番号	44号		45号	51号		57号	58号		62号	67号	71号	76号	79号	82号	
出土鉄器															
遺構番号	2号								47号						
出土鉄器															
遺構番号	70号														
出土鉄器															

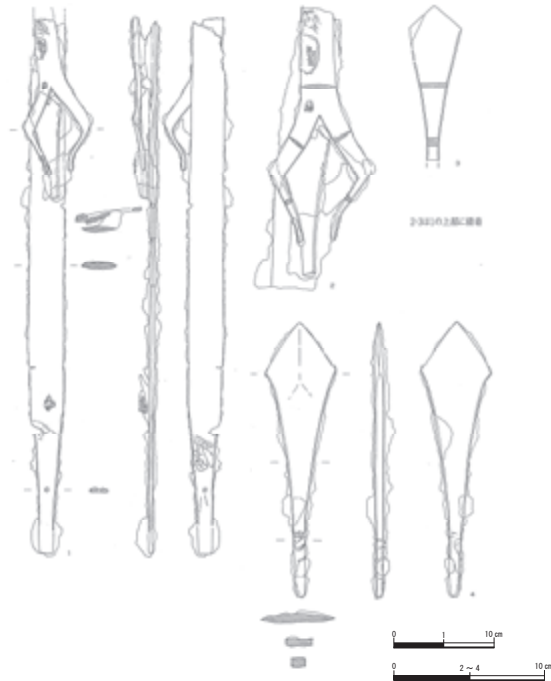
※鉄剣・短剣・ヤリはS=1/16、鉄鏃その他はS=1/8

※鉄剣・短剣・ヤリは S=1/16、鉄鏃その他は S=1/8

第315図 町田堀遺跡地下式横穴墓出土鉄器一覧



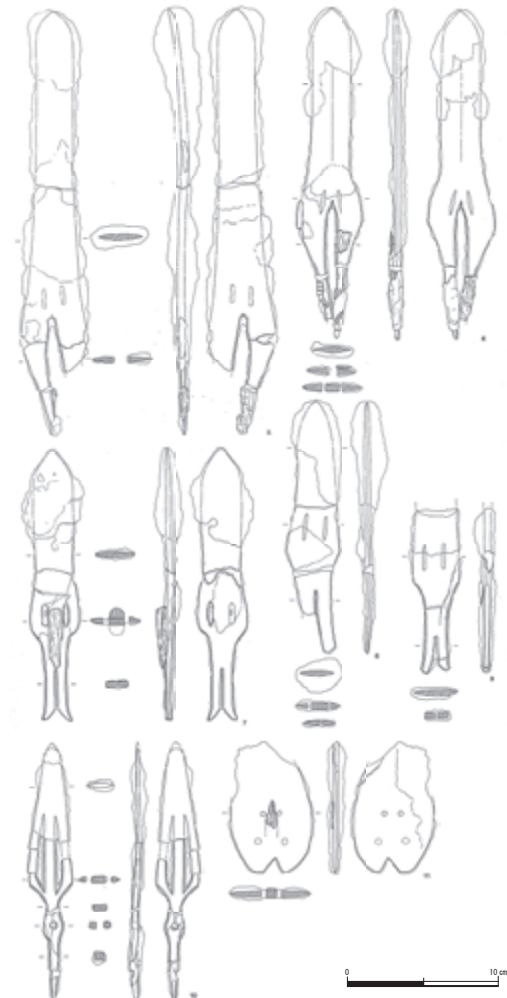
第316図 古墳時代中期における細根系鉄鏃の編年（鈴木2003より）



下掘遺跡出土異形鉄器と共伴遺物（大崎町教育委員会 2005 より）



松ノ元地下式横穴墓遺跡出土異形鉄器と共伴遺物（乙益 1974 より）



成川遺跡出土異形鉄器（橋本・藤井 2007 より）

第317図 南九州出土異形鉄器と共伴遺物（新屋敷2015より）

年代観

町田堀遺跡の年代観を語るにあたって重要なのは、最も多く出土した柳葉鍔である。明確な茎鬘がなく、鍔身部のくびれが強く山形突起が発達する形状は鳥舌鍔とも呼ばれる。鳥舌鍔は、中期初頭に誕生した鍔で、中期前半の有力な古墳から出土する。時期が新しくなるにつれて鍔身部が長身化するものの同一時期における個体差も大きい。これは古墳副葬品に多く見られる傾向であり、意図して異なる大きさを製作されていると考えられている（鈴木2003）。町田堀遺跡で鍔束が出土したのは2・47・70号墓であるが、その中で柳葉鍔の鍔身部長は2号墓3.5～5.2cm、47号墓5.0～6.7cm、70号墓4.8～6.5cmとややばらつきがあり、同様の傾向がみられる。47・70号墓と比べて2号墓の柳葉鍔は一回り小型であり、2号墓が47・70号墓より古い段階であることは明確である。柳葉鍔は鈴木一有の編年におけるⅡ期に相当し、2号墓はその中でも古相のⅡa期にあたる（第316図）。2号墓の柳葉鍔は中期前半のもので、地下式横穴墓でも最古段階の鉄鍔といえる。

また、同じく年代の指標となる圭頭鍔は、刃部鬘をもたず、刃部幅が4cm前後の大型鍔で、和田理啓の分類による2類にあたり、長頸鍔が共伴しておらず腸挟柳葉鍔と共伴することからⅢ様式（TK73～TK216段階）といえる（和田2001・2002）。二段腸挟柳葉鍔（和田分類による腸挟柳葉鍔2類）は大阪府和泉黄金塚東郭が最古例であり、TK73段階に盛行することから（和田2001）、おおむね柳葉鍔の時期とも一致する。二段腸挟柳葉鍔は南九州での出土は多いものの、これまで宮崎平野や肝属平野等の前方後円墳築造域ではほとんど出土していないことも注目される（橋本2003）。

また、町田堀遺跡で出土した二段腸挟柳葉鍔は、南九州で見られる在地生産品ではなく、形態的に広域流通品である。柳葉鍔もほとんどが広域流通品であることから、町田堀遺跡に広域流通品を入手することのできる交流があったことがうかがえる。

在地産鉄器

在地産鉄器としては、刃部最大幅が広い短剣、大型圭

頭鏃、一部の柳葉鏃・短頸鏃、異形鉄器等があげられる。

大型圭頭鏃は、宮崎県都城市の高取原地下式横穴墓に類例がみられる。この大型圭頭鏃は古墳時代中期の南九州において集中して出土しており、その分布の中心は宮崎県西諸県地域である(和田2002)。つまり、西諸県地域に生産地があり、それが南九州内で流通していたとされている(橋本・藤井2005)。古墳時代中期という時代は、全国的に広域流通する鉄器を副葬する斉一性が目立つ時代で、ほとんど地域性はみられないものだが、南九州においては例外であり、明らかな地域性を持つことから注目されている。広域流通品である柳葉鏃を多く持つ2・47・70号墓でも、多量の柳葉鏃のなかに、在地性の強い短剣や圭頭鏃等少量の在地産鉄器を副葬している。こうした多量の同一型式の鉄鏃のなかに1~2本ずつ数種類の鏃を組み込むという組成は、日本列島の広域でおこなわれている(橋本・藤井2005)。広域流通品の鉄器を持ち、副葬組成は広域の手法であることから、南九州においてそうした列島の斉一的な情報や鉄器が入ってきていることは明確である。しかし、そもそも地域性の強い地下式横穴墓を築造し、広域流通品と製作技法や形態が異なる在地産の鉄器を副葬する等、全国の斉一的なルールと地域的なルールを交えた様相が見られる。この状態は南九州内の他遺跡でも見られ、当時の南九州が全国的な鉄器製作のネットワークに組み込まれておらず技術的に差があったこと、在地内での交流を基本にしてしたこと等が言われている(橋本2003)。こうした南九州の当時の状況を町田堀遺跡も表している。

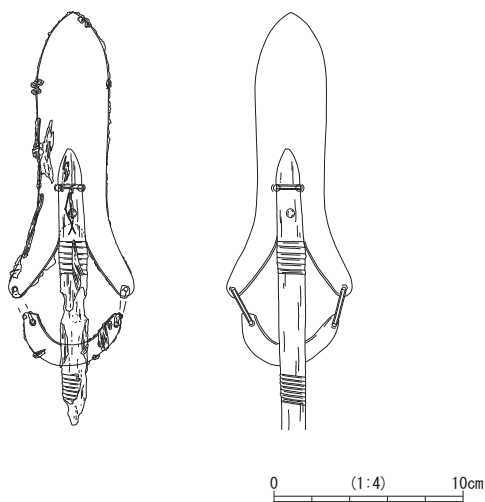
在地産鉄器の最たるものとして、異形鉄器があげられる。異形鉄器は投槍や漁労具とする説(乙益1974)と、儀仗的に使用されていたとする説(橋口2003)がある。異形「鉄鏃」といわれることもあるが、現状での出土事例は多いとは言えず実態が明らかでないため、本報告書

では異形鉄器として取り扱った。異形鉄器がこれまで出土したのは鹿児島県山川町の成川遺跡で7点、鹿屋市大崎町の下堀遺跡で1点、宮崎県小林市の松ノ元地下式横穴で1点である(第317図)。ただし、大隅半島においては墓域全体を発掘するような調査が少ないため、今後の調査によっては事例が増える可能性もある。町田堀遺跡では6点という成川遺跡に次ぐ量の異形鉄器が出土した。異形鉄器の分類は、成川遺跡出土の異形鉄器を剣タイプと鏃タイプに分類しているのみで(橋本・藤井2007)、出土量の少なさとバリエーションの多さから詳細な分類はなされていない。大きな時期差のない町田堀遺跡の異形鉄器においても、大きさ、足部の有無、先端のふくらの有無等同一形態と言えるものはないと言ってもよい。しかし、その造りにおいてはほとんど同一で、全体的に薄手であり厚さの違いはほとんどない。一方、町田堀遺跡と時期的にも地理的にも近い下堀遺跡の異形鉄器は、身部が両丸造りで足部は内側に屈曲し厚みがあり下部にかけて細くなる造りである。この両者の違いは製作技法による違いであることから、それぞれ生産した場所が異なる可能性が考えられる。異形鉄器においては、同一遺跡出土で時期差が大きいものでも平面形の個体差が大きい。そのため、断面形等の製作技法にかかわる要素での比較検討が重要であると考えられる。

異形鉄器の副葬組成は、異形鉄器のみ副葬するものと、鉄剣・圭頭鏃と副葬するものに分けられる。また、12号墓と26号墓は鉄剣・圭頭鏃と相伴しているが、12号墓が全てまとめて副葬されているのに対し、26号墓は鉄剣・圭頭鏃と異形鉄器を両側に分けて副葬している。松之元地下式横穴は出土状況が不明だが、下堀遺跡でも同じように鉄剣・圭頭鏃と相伴しており(図317)、出土状況は12号墓と同じですべてまとめて副葬している。異形鉄器の相伴遺物との出土例は3例と少ない状況であるものの、現状では共通して圭頭鏃と相伴していることから、在地産であることが意識されていたことは言えるであろう。

また、今回初めて出土したのがU字形鉄器を装着した異形鉄器である。異形鉄器の足部両端とU字形鉄器の両端に穿孔が施されており、互いにひもを通した痕跡があることから、足部とU字状鉄器をひもで繋いでいたと考えられる(第318図)。26号墓の1167の足部にも同様の穿孔があることから、有機質で同様のものを装着していた可能性がある。このU字形鉄器に関しては、実用的なものとしての役割は考えにくくおそらくは装飾と思われる。

異形鉄器は町田堀遺跡に地理的にも時期的にも近い立小野堀遺跡からも出土しているとの報告もあり、今後の資料の増加によってより実態に近づくことができるであろう。



第318図 異形鉄器(1199)と復元図

大隅地方の古墳文化（第319図・第45表）

大隅地方には、国指定史跡となっている唐仁古墳群・横瀬古墳・塚崎古墳群をはじめ前方後円墳17基、円墳304基が知られている。また、地下式横穴墓も高塚墳と共存したり地下式横穴墓だけで群をなしている。

海岸部に近い地域には、前方後円墳が存在する古墳群が分布し、当地方ひいては九州一円をも統べる階級の盟主がいたことを想像させられる。また、内陸部にはいると小型の円墳を中心とした群集になる。地下式横穴墓は、内陸部の高塚墳が造られない地域では地下式横穴墓だけで群集する。唐仁古墳群及び横瀬古墳は、砂層の上に造られているため、地下式横穴墓は造ることができなかったものと思われる。

主な古墳についてみると東串良町唐仁古墳群1号墳（大塚）は全長154m、後円部のみに周壕が確認される。主体部は竪穴式石室で内部に刳拔式舟型石棺を納める。石棺外には短甲が副葬されている。5世紀前半代と思われる。大崎町横瀬古墳は全長140mで周壕が全周するが、近年の調査で一部2重になっている部分も認められている。主体部は竪穴式石室が明治時代に盗掘にあっている。その際、刀・甲冑・勾玉等があったといわれている。また、県内で数少ない埴輪を有する古墳でこれまで円筒埴輪の破片が多く採集されている、周壕の確認調査等で初期須恵器も出土している。5世紀前半代と思われる。志布志市飯盛山古墳は全長80mで周壕は確認されてい

ない。竪穴式石室で、ガラス製の勾玉・丸玉等が出土している。埴輪裾部の調査等で壺型埴輪が確認されている。5世紀前半代と思われる。肝付町塚崎古墳群は前方後円墳5基、円墳38基が在り、地下式横穴墓も同一台地に共存する。近年の肝付町による史跡整備のための確認調査により新知見が明らかになった。18号墳からは、飯盛山古墳の埴輪と類似した壺型埴輪が出土している。また27号墳の周溝からは古式の小型丸底壺が出土し、塚崎古墳群中の前方後円墳が4世紀代から造られるようになったことが明らかになった。このことにより、大隅半島の首長墓の系譜が塚崎古墳群から飯盛山古墳・唐仁古墳群そして横瀬古墳へと移って行ったことがうかがえる。それは、日向の国の一環として宮崎県の生目古墳群や西都原古墳群等とも連動していたものと思われる。

大隅地方の高塚墳は5世紀代を中心に造られ、6世紀になると高塚墳は造られなくなる傾向が見られる。ただし、地下式横穴墓は、6世紀後半から7世紀初頭まで依然として造られている。このような現象は、当地方が、中央勢力とのつながりが希薄になったとか、中央勢力から必要性がないとされたのかと考えられないこともないが、鹿屋市吾平町の中尾地下式横穴墓は6世紀末から7世紀初等と考えられるが、全国で16例しかない銀象嵌太刀を副葬する等依然として相当の権力者が存在したことが明らかであり、首長層がやや内陸部へと移動した可能性も考えられる。



第319図 大隅半島の主な古墳分布図

第45表 大隅半島の主な古墳地名表（遺跡番号は第319図の番号と一致する）

番号	遺 跡	所 在 地	遺 跡 の 概 要
1	飯盛山古墳	志布志市夏井	前方後円墳・竪穴式石室・壺型埴輪・玉類
2	京ノ峰遺跡	志布志市松山町泰野	地下式横穴墓 9 基
3	原田古墳群	志布志市有明町原田	高塚墳・地下式横穴墓
4	下堀遺跡	曾於郡大崎町持留	地下式横穴墓 7 基・異形鉄器・祭祀空間
5	飯隈古墳群	曾於郡大崎町飯隈	円墳 9 基・地下式横穴墓 23 基
6	神領古墳群	曾於郡大崎町神領	前方後円墳 4 基・円墳 9 基・地下式横穴墓 7 基・銅鏡・イモ貝製釧
7	横瀬古墳	曾於郡大崎町横瀬	前方後円墳・竪穴式石室・剣・短甲・玉類
8	鷺塚古墳	曾於郡大崎町鷺塚	地下式横穴墓
9	祓川古墳群	鹿屋市西祓川町	地下式横穴墓 34 基・短甲・衝角付冑・剣・鉄鏃・祭祀空間
10	立小野堀遺跡	鹿屋市串良町細山田	地下式横穴墓 199 基
11	町田堀遺跡	鹿屋市串良町細山田	地下式横穴墓 88 基
12	岡崎古墳群	鹿屋市串良町岡崎	前方後円墳 2 基・円墳 16 基・地下式横穴墓 10 基
13	上小原古墳群	鹿屋市串良町上小原	前方後円墳 1 基・円墳 20 基・地下式横穴墓数基・樽形埴輪・埴輪・鉄器
14	名主原遺跡	鹿屋市吾平町下名	地下式横穴墓 6 基
15	天神原古墳群	鹿屋市吾平町下名	地下式横穴墓 3 基
16	堀木田原古墳	鹿屋市吾平町麓	地下式横穴墓 2 基
17	宮ノ上古墳群	鹿屋市吾平町麓	地下式横穴墓 15 基・軽石石棺・鉄器・鉾
18	中尾遺跡	鹿屋市吾平町上名	地下式横穴墓 7 基・銀象嵌荘太刀・円頭太刀・直刀
19	北後田古墳群	肝属郡肝付町後田	円墳 4 基・地下式横穴墓 2 基・軽石石棺・直刀・鋤先
20	白坂古墳群	肝属郡肝付町後田	地下式横穴墓 4 基
21	上西方古墳	肝属郡肝付町後田	地下式横穴墓 1 基
22	軍原古墳群	肝属郡肝付町後田	円墳 10 基
23	上之原古墳群	肝属郡肝付町前田	地下式横穴墓 15 基・軽石石棺・蛇行剣
24	横間古墳群	肝属郡肝付町新富	円墳 8 基・地下式横穴墓数基・軽石石棺・蕨手刀・須恵器
25	塚崎古墳群	肝属郡肝付町野崎	前方後円墳 5 基・円墳 38 基・地下式横穴墓 14 基・須恵器・小型丸底壺・壺型埴輪
26	唐仁古墳群	肝属郡東串良町唐仁	前方後円墳 4 基・円墳 139 基・舟型石棺・短甲

第46表 地下式横穴墓一覧表（鹿児島県内高塚古墳と共存しない）

Aタイプ（玄室が長方形で妻入り）

Bタイプ（玄室は方形・楕円形で平入り）

	遺跡名	所在地	基数	備 考
1	立小野堀	鹿屋市串良町	190	内陸部にあり調査区外まで含めるとかなりの群集墓である。土坑墓5基共存。素環頭太刀・鈴・市場南組窯産須恵器出土。5C前半～6C前半。
2	祓川	鹿屋市西祓川町	33	以前短甲と衝角付冑が出土している。小型で立小野堀遺跡と類似するものが多い。祭祀場と考えられる壺や高坏の散乱がある。
3	堀木田原	鹿屋市吾平町	2	Aタイプで直刀を副葬する。屍床の頭部と足部に軽石板を配する。
4	天神原	鹿屋市吾平町	3	AタイプとBタイプがある。屍床の頭部と足部に軽石板を配する。
5	宮ノ上	鹿屋市吾平町	15	A・B両タイプありAタイプには軽石石棺有するものもある。
6	名主原	鹿屋市吾平町	6	Bタイプのみ。竪坑の羨道上部に直刀を副葬するもの、竪坑の羨道部側に赤色顔料を塗布したものもある。
7	中尾	鹿屋市吾平町	9	副葬品に心葉文を象眼した太刀や円筒太刀・鈴等が見られ最終段階（6世紀末～7世紀初頭）の様相を呈する。
8	フゾ山	鹿屋市串良町	1	Aタイプ。石棺を有し直刀を副葬。
9	白坂	肝属郡肝付町	4	A・B両タイプあり。
10	上ノ原	肝属郡肝付町	11	A・B両タイプあり。軽石石棺を有するものもある。9号墓は精巧な軽石石棺を有し、蛇行剣・刀子・イモ貝製貝輪等を副葬する。11号墓は土師器碗を副葬。
11	下堀	曾於郡大崎町	5	Bタイプのみ。盛り土の痕跡が明瞭に認められた。高坏や埴が意図的に置かれた祭祀場と思われる範囲がある。
12	鷺塚	曾於郡大崎町	3	Bタイプ。玄室の床面は軽石礫が敷き詰められている。
13	京ノ峯	志布志市松山	1	弥生時代の周溝墓もある。大隅半島で北端である。
14	馬場蓬原	志布志市有明町	3	Bタイプ。複数埋葬あり。1体は顔に赤色顔料が塗布されている。
15	前目灰塚	伊佐市菱刈町	3	地下式板石積石室と共存。Bタイプであるが1号墓の玄室は家型を呈する。3号墓には蛇行剣が見られる。
16	塞ノ神	伊佐市菱刈町	1	Bタイプ。地下式板石積石室と共存。直刀・鉄鏃を副葬。
17	諏訪野	伊佐市大口	5	Bタイプのみ。羨道部閉塞であるが痕跡が無いため木によるものと思われる。
18	陣ノ尾	伊佐市大口	1	Bタイプ。竪坑上部を板石で閉塞。
19	瀬ノ上	伊佐市大口	10	地下式板石積石室と共存。鉄器に基部から中程までは刀で切っ先の方は剣という特殊な鉄器や蛇行剣2点等も出土している。
20	北方	湧水町栗野	2	Bタイプで板石閉塞。複数埋葬で1体は小児骨である。
21	堂ノ上	湧水町栗野	数基	地下式板石積石室と共存。詳細は不明。
22	馬場	湧水町吉松	8	Bタイプのみ。眼疾までの調査は2基。羨道部の閉塞は板石。複数埋葬で、1号墓のB人骨は羨道に頭部を残し押し込んですぐに閉塞した状況が窺える。
23	堂迫	湧水町吉松	1	鉄剣・鉄刀・鉄鏃を副葬。

第47表 地下式横穴墓（鹿児島県内高塚古墳と共存する）（1）

	遺跡名	所在地	基数	備 考
24	岡崎	鹿屋市串良町	10	前方後円墳2基と円墳15基が共存する。高塚古墳の周溝部に竪坑を設ける例が多い。須恵器や土師器を供献する例や、須恵器・土師器を破碎した葬送儀礼の行われた痕跡も認められる。
25	上小原	鹿屋市串良町	4	前方後円墳1基、円墳20基が共存する。1号地下式横穴墓はAタイプで竪坑の羨道寄りに土師器碗を供献している。

第48表 地下式横穴墓（鹿児島県内高塚古墳と共存する）（2）

	遺跡名	所在地	基数	備 考
26	北田ノ上	鹿屋市串良町	2	Aタイプあり，軽石石棺を有する。
27	白寒水	鹿屋市串良町	1	円墳1基と共存。
28	大塚原	鹿屋市串良町	1	円墳10基と共存，立小野堀遺跡に一番近い地下式横穴墓。
29	北後田	肝属郡肝付町	2	両タイプありAタイプは軽石石棺を有し豊富な鉄器を副葬する。またAタイプでは珍しい追葬も見られる。
30	横間	肝属郡肝付町	12	円墳8基と共存，蕨手刀や須恵器や土師器を副葬しており，最終段階の地下式横穴墓群と考えられる。円墳にも軽石石棺が見られる。
31	上西方	肝属郡肝付町	2	円墳5基と共存。Aタイプで1号は軽石石棺を有する。
32	塚崎	肝属郡肝付町	20	国指定の古墳群で前方後円墳5基，円墳38基がある。近年の調査で4世紀まさかのぼる可能性もある。地下式横穴墓はBタイプが多く竪坑に須恵器の大甕2個が供献された例がありそのうち1個は愛媛県の市場南組窯産といわれる。
33	神領	曾於郡大崎町	7	前方後円墳4基と円墳9基がある。6号墳からは日光鏡・獣帯鏡・剣・刀等が副葬され，近年調査された10号墳からは舟形石棺が発見され鉄器も多数副葬されている。また，周溝からは武人埴輪や，多くの土師器・須恵器が出土している。ここでも市場南組窯産の須恵器が多く見られる。1号地下式横穴墓には内向花文鏡・骨製筭・イモ貝製貝輪・剣・刀が副葬されている。
34	飯隈	曾於郡大崎町	25	ほ場整備により発見されており，軽石石棺や状態の良い人骨が見つかる。また，平成22年度の確認調査でも多くの地下式横穴墓が発見され，竪坑や周辺に盛り土の痕跡が確認され，土師器の供献も発見されている。
35	原田	志布志市有明町	1	A・B両タイプあり，軽石石棺を有するものもある。Aタイプで軽石石棺を有する。成人女性が頭部を原田古墳に向けて埋葬される。

第49表 地下式横穴墓一覧表（宮崎県内高塚古墳と共存しない）（1）

	遺跡名	所在地	基数	備 考
1	蔵園	新富町	3	地下式横穴墓の北限。6世紀中～6世紀後半。
2	三財	西都市	2	須恵器や鉄器等豊富な副葬品を有する。6世紀中から後半。
3	元地原	西都市	7	A・B両タイプあり。玄室構造が変化に富んでいる。
4	灰ヶ野	田野町	2	Bタイプで，1号墓には蛇行剣等が副葬されている。
5	高野原	田野町	1	Bタイプである。6世紀初頭。
6	栗巢	国富町	2	3体が埋葬されている。竪坑の羨道部側に高坏が供献される。
7	大坪・権現堀	国富町	2	Aタイプ。鏡・イモ貝製貝輪や多くの鉄器を副葬。
8	市の瀬	国富町	7	大きめの河原石を満ちて屍床とする。家型で棟木や軒先を表現するものもある。特筆すべきはアワビの入った高坏が副葬されており，食物供献を具体的に示したものである。
9	井水	国富町	2	Bタイプ。竪坑の埋土中から須恵器片・土師器片が出土。
10	中迫	綾町	3	A・B両タイプあり，竪坑の切り合いが認められる。
11	久木野	綾町	3	Aタイプのみ。鉄器や玉類が副葬されている。
12	切畑	野尻町	4	Bタイプ。複数体埋葬が認められる。圭頭鍬が見られる。
13	立切	高原町	72	Bタイプのみであるが，玄室の構造上8類に分類。大半が複数埋葬。顔面に赤色顔料が塗布された人骨は77例中38例もある。72基は7つの支群に分けられ，墓道も復元できる。周辺に土器が見られるものや土器が集中している祭司場と思われる場所もある。5世紀後半から6世紀代に造営されたと考えられている。

第50表 地下式横穴墓一覧表（宮崎県内高塚古墳と共存しない）（2）

	遺跡名	所在地	基数	備 考
14	日守・仮屋尾	高原町	29	Bタイプのみ。板石閉塞が多い。玄室は寄棟屋根型である。
15	旭台	高原町	13	Bタイプであるが玄室は家型を呈する。朱塗りで家型を表現しているものもある。9号墓ではイモ貝製貝釧が8個見られる。
16	湯ノ崎	高原町	1	Bタイプで石閉塞。4体埋葬（小児骨も確認）。
17	下ノ平	小林市	3	Bタイプで石による閉塞。6世紀前半。
18	新田場	小林市	9	Bタイプであるが、両袖・片袖がある。玄室は家型で棟木等のレリーフが描かれる。
19	尾中原	小林市	1	Bタイプで竪坑上部を石で閉塞。玄室は家型で棚状施設あり。
20	上ノ原	須木村	10	Bタイプで石・板石による閉塞。玄室は家型。9号墓の人骨は3体であるが大型の竹製櫛を前頭部に装着した例と9個の小型の櫛を装着した例がある。
21	建山	えびの市	12	Bタイプで竪坑上部を板石で閉塞。6世紀前半。
22	広畑	えびの市	19	地下式板石積石室と共存。Bタイプで竪坑上部閉塞と羨道部閉塞がある、羨道部閉塞は板石と木板とがある。複数埋葬が多く顔面に赤色顔料を塗布する例等がある。
23	蕨	えびの市	約90	地下式板石積石室・木棺墓・木蓋土坑墓等と共存。Bタイプで、竪坑閉塞・羨道部閉塞が見られる。土坑墓・板石積石室が先行し、地下式横穴墓は5世紀後半から6世紀代。
24	久見崎	えびの市	23	土坑墓と共存。Bタイプで土塊閉塞である。複数埋葬。
25	馬頭	えびの市	13	土坑墓と共存。Bタイプで土塊閉塞である。馬具や馬鐙が多く見られる。蛇行剣もあり。
26	灰塚	えびの市	19	地下式板石積石室と共存。1基を除き竪坑上部閉塞。蓋石と竪坑流入土から1個体の高坏が出土。
27	島内	えびの市	163	竪坑上部閉塞と羨道部閉塞がある。Bタイプのみ。甲冑が多く副葬されている特徴がある。複数埋葬も見られる。1基は高塚墳の主体部と考えられている。象眼装太刀も出土する。
28	雀ヶ野	高城町	1	Aタイプで鉄剣・刀子・鉄鏃・鉄斧が副葬されている。
29	香禅寺	高城町	1	地下式板石積石室と共存。Bタイプで羨道部板石閉塞。
30	横尾	高崎町	5	Bタイプ。羨道部閉塞は軽石が用いられる。直刀・鉄剣が副葬。
31	下川東牧ノ原	都城市	26	Bタイプのみ。蛇行剣を始めとする鉄器とともに珍しい副葬品として骨鏃が見られる。
32	徳山	串間市	8	Bタイプのみであるが竪坑に比して玄室が小さく、羨道部が広い特徴を持つ。
33	崩先	串間市	11	石蓋土坑墓と共存。Bタイプで板石と木の閉塞が見られる。竪坑に比して玄室が小さく羨道部も広い特徴を持つ。

第51表 地下式横穴墓（宮崎県内高塚古墳と共存する）（1）

	遺跡名	所在地	基数	備 考
34	花園	新富町	1	新田原古墳群内にある。須恵器・土師器を副葬。須恵器坏の中にベンガラが入れられている。6世紀後半。
35	西都原	西都市	10	国指定古墳群である。地下式横穴墓も規模が大きく短甲等の副葬も認められる。
36	桃木畑	西都市	1	六野原古墳群内にある。Bタイプであるが玄室の天井部が家型を呈する部分とドーム状を呈する部分がある。6世紀初頭。
37	柿木原	宮崎市	3	円墳4基と共存。6世紀末。

第52表 地下式横穴墓（宮崎県内高塚古墳と共存する）（2）

	遺跡名	所在地	基数	備 考
38	下北方	宮崎市	9	前方後円墳3基、円墳8基が共存する。Aタイプのみで高塚墳と密接な位置に造られる。特に5号地下式横穴墓の玄室は規模が大きく7号古墳の中心に向かっている。また、副葬品も装身具・鏡・武器。武具・馬具・農耕具等と豊富で高塚墳の主体部ではないかと考えられている。
39	生目	宮崎市	50	前方後円墳8基、円墳25基が共存する。4世紀代の前方後円墳が存在する点や高塚墳と地下式横穴墓が密接な状態で造られている点等特筆される。4世紀代の土師器を有する地下式横穴墓もあり、宮崎平野で最古のものと思われるものもある。
40	木脇塚原	国富町	2	前方後円墳1基・円墳6基が共存。A号墓とされているものは完全に破壊されているが、多くの鉄器と甲冑（三角板皮綴短甲・長方形皮綴衝角付冑）が葬され5世紀前半と地下式横穴墓では最も古い段階と考えられている。
41	本庄	国富町	31	前方後円墳17基・円墳37基・横穴墓2基と共存する。
42	飯盛	国富町	3	本庄古墳群に含まれる。追葬が認められる。
43	六野原	国富町	32	昭和17年飛行場建設の際に前方後円墳1基/円墳9基地下式横穴墓27基が調査されている。A・B両タイプがある。10号墓は玄室の規模も大きく副葬品も甲冑・鏡・玉類・土師器や多くの鉄器が視られる。また、玄室の天井部には棟等の家を表現する。
44	高田原	国富町	2	円墳と共存。礫閉塞や礫床を有する。1号墓には須恵器Ⅰ式の腿が副葬されている。
45	四反田	綾町	1	円墳3基と共存。Aタイプで須恵器ⅢB式坏等を副葬。
46	内屋敷	綾町	4	円墳と共存。鉄器が副葬、鉄鍬は長頸鍬で5世紀後半頃である。
47	九塚	野尻町	3	円墳1基と共存。Bタイプで片袖型である。
48	大萩	野尻町	38	円墳が共存する。大きく3地域に分けられる。形態も様々で、複数埋葬や副葬品も豊富である。また、高塚墳の下位にある3号墓は高塚墳の主体部の可能性も考えられている。鈴3個。
49	東二原	小林市	16	円墳1基と共存。Bタイプのみで石や土塊による閉塞。複数埋3葬もある。竪坑上部に土器を供献する例もある。
50	小木原	えびの市	50以上	小円墳と共存。甲冑や須恵器等豊富な副葬品を有する。墳丘を有する地下式横穴墓の存在を示唆する。
51	高城牧ノ原	高城町	1	前方後円墳3基・土坑墓1基・箱式石棺4基と共存。Bタイプで鉄剣・鉄鍬が副葬されている。
52	菓子野	高城町	16	円墳3基と共存。Bタイプのみ。剣・刀・鍬等のほかに鉄鐸・ゴホウラ・イモ貝製の貝輪等特殊な副葬品もある。複数埋葬が見られ5号墓では小児人骨が認められている。
53	高崎塚原	高崎町	2	前方後円墳1基・円墳18基と共存。Bタイプで羨道部閉塞は礫。1基の地下式横穴墓では赤色顔料を塗布した男性1体と女性・幼児の2体が埋葬されている。
54	原村上地	高崎町	14	円墳8基と共存。Bタイプで片袖が多い。軽石閉塞が見られる。6号墓ではイモ貝製貝輪8個を装着した男性と女性が埋葬されている。
55	築池	都城市	26	前方後円墳1基・円墳10基・土坑墓4基と共存。A・B両タイプあり。鏡・蛇行剣・陶質土器（器台・高坏）・須恵器（把手付碗・壺）等豊富な副葬品が見られる。馬の埋葬土坑墓2基。玄室同士の切り合いあり。
56	福島	串間市	1	前方後円墳3基・円墳15基と共存。
57	下耳切	高鍋町	8	円墳・土坑墓・馬の埋葬土坑と共存する。TK209段階の須恵器を伴い6世紀末～7世紀と最終段階と思われる。これまでの北限である。

※宮崎県内の資料については宮崎県史考古2（平成5年）を参考にすると共に菓子野については栗畑氏、島内については中野氏の教示による。

参考文献

- 鹿屋市教育委員会2007「薬師堂の古墳・祓川地下式横穴墓群」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(83)
- 大崎町教育委員会2005「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- えびの市教育委員会1990「永田原遺跡・小木原遺跡蔵地区・口ノ坪遺跡」えびの市埋蔵文化財調査報告書(第6集)
- 宮崎市教育委員会2010「生目古墳群1」宮崎市文化財調査報告書第(80集)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2009「南摺ヶ浜遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(144)
- 橋本達也2007・2008・2009「神領10号墳発掘調査1～3」大隅のフィールド調査鹿児島大学総合研究博物館
- 吾平町教育委員会1998「中尾地下式横穴群」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 串良町教育委員会1986「岡崎4号墳・1号地下式横穴」串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 吾平町教育委員会1987「宮ノ上地下式横穴群」吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 鹿屋市教育委員会2008「名主原遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(84)
- 高城町教育委員会2005「高取原地下式横穴墓」高城町埋蔵文化財調査報告書(19)
- 藤井大介2003「南九州古墳時代鉄鍬集成」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第6回前方後円墳研究会九州前方後円墳研究会
- 橋本達也2003「副葬鉄器からみる南九州の古墳時代」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第6回前方後円墳研究会九州前方後円墳研究会
- 橋本達也・藤井大介2007「古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究」鹿児島大学総合研究博物館
- 橋本達也(編)2014「九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究」鹿児島大学総合研究博物館
- 乙益重隆他1974「成川遺跡」文化庁埋蔵文化財発掘調査報告7文化庁
- 秦憲二2003「南九州における古墳時代鉄鍬の様式構造」先史学・考古学論考4龍立考古学会
- 新屋敷久美子2015「地下式横穴墓出土鉄器についての一考察」研究紀要・年報縄文の森から8鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鍬について」榎原考古学研究所論集8吉川弘文館
- 鈴木一有2002「九集における古墳時代の鉄鍬」考古学ジャーナル496
- 鈴木一有2003「中期古墳における副葬鉄の特質」帝京大学山梨文化財研究所研究報告11
- 和田理啓2001「日向の地下式横穴墓」第4回九州前方後円墳研究会第1分冊九州前方後円墳研究会
- 和田理啓2002「宮崎の鉄鍬—その分布と流通について—」考古学ジャーナル496
- 和田理啓2007「九州における古墳時代中期の鉄鍬」第10回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集九州前方後円墳研究会
- 東串良町教育委員会1992「唐仁古墳群」東串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 肝付町教育委員会2009「塚崎古墳群」肝付町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

4 古代の調査

(1) 調査の概要

古代については、焼土跡2基と古道2条が検出されているが、遺物のほとんどは調査区1からの出土である。焼土跡は2基とも調査区1(G-16区)に置いて検出され関連性があるものと考えられる。古道は調査区4から調査区1までほぼ連続しているが、2号古道は調査区3(G-27区)に於いて北側の調査区外へと延びている。遺物は土師器と須恵器で1点だけ墨書土師器がみられる。

(2) 遺構

ア 焼土跡

1号焼土跡(第320図・第325図)

G-16区に於いて検出されたもので、幅65cm、長さ73cmの不整形な楕円形を呈する。深さは10cmで埋土は黒褐色土であるが、赤色の粒子が多く混在し焼土跡と認定した。埋土中には軽石と土器片が入っているが軽石には加工された痕跡はみられない。土器は少なく図化できたのは1293だけである。1293は口縁径25cmの甕である。胴部はほぼ直線的で口縁部はなだらかに外反する。器面調整は外面がハケ目で、内面は幅の広いヘラ削りである。口縁部外面には煤の付着が認められる。

2号焼土跡(第320図)

G-16区、1号焼土跡の東側に於いて検出されたもので、幅55cm、長さ109cmの略長方形を呈する。深さは20cmで埋土は黒褐色と黒茶褐色に分けられる。1号焼土跡と同様に赤色粒子が混在する。埋土中からは遺物は出土しなかった。

イ 古道

1号古道(第322図～第324図)

調査区4の南東隅N-38区からG-26区・G-23区へ延び、調査区2ではいったん途切れ、G-9区で傾斜

しながら調査区1へと延びて調査区1ではG-16区で終わる。それより西側ではⅡ層の残りが良好なのに検出されないことはそこで終わっていると考えてよいと思われる。延長は約220mで溝の幅は0.5～1mで深さは約30cm。溝の底面に40cm、厚さ3cmの硬化面が認められる。K-32区からH-28区にかけては2号古道と重なっており、1号古道が新しいことも確認されている。G-25・26区においては、開聞岳起源の火山灰(コラ)が堆積しているが、分析の結果、紫コラ(西暦874年)と判断されている。ただし、溝上部で採取した炭化物では西暦1000年代という年代測定値がでている。

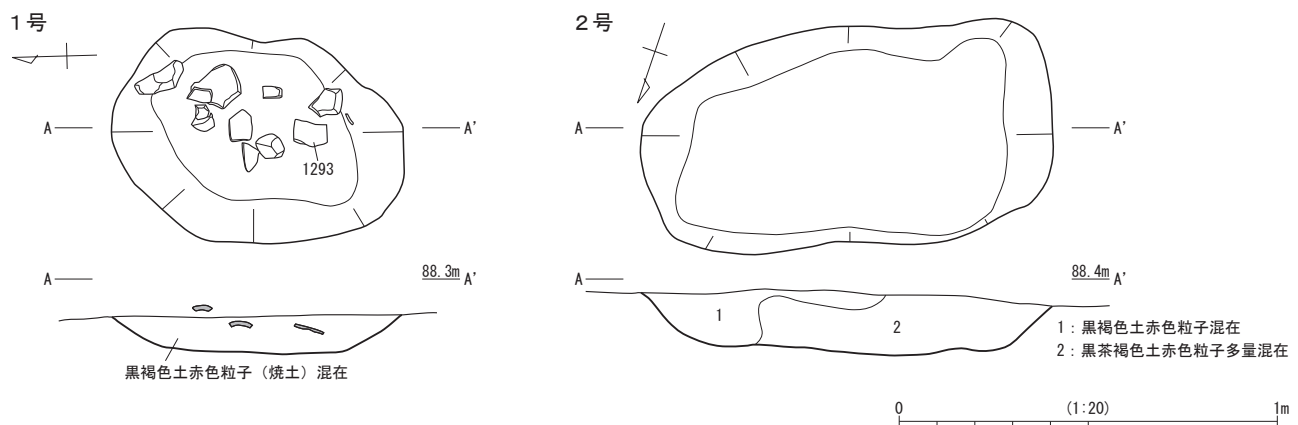
2号古道(第323図・第324図)

1号古道と同じように調査区4の南東隅N-38区より北西方向に延び、G-27区で北側の調査区外へと延びてゆく。延長は約125mで溝の幅は4～5mで深さは10cm。溝の底面に幅30cm、厚さ2cmの硬化面が認められる。

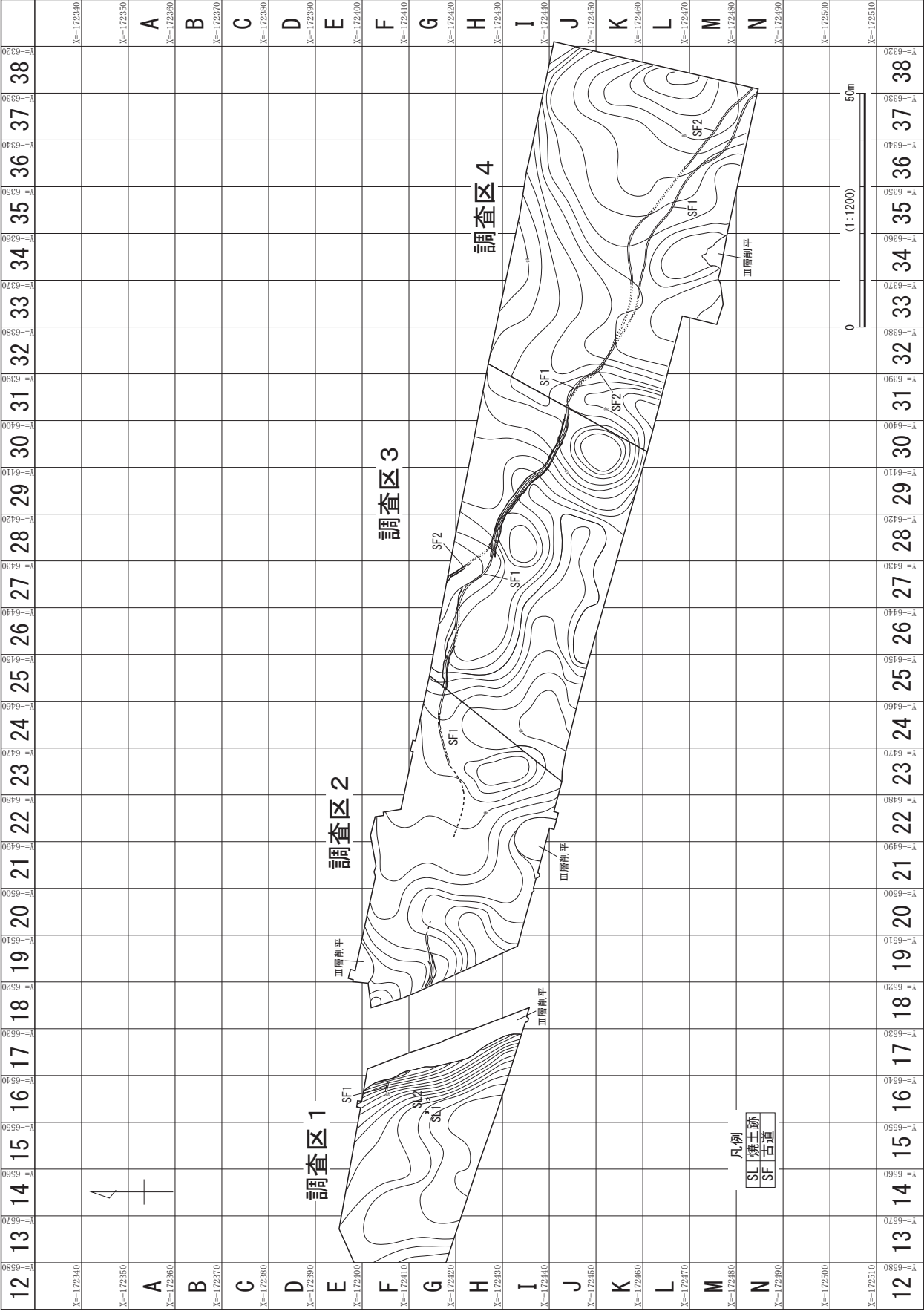
(3) 遺物

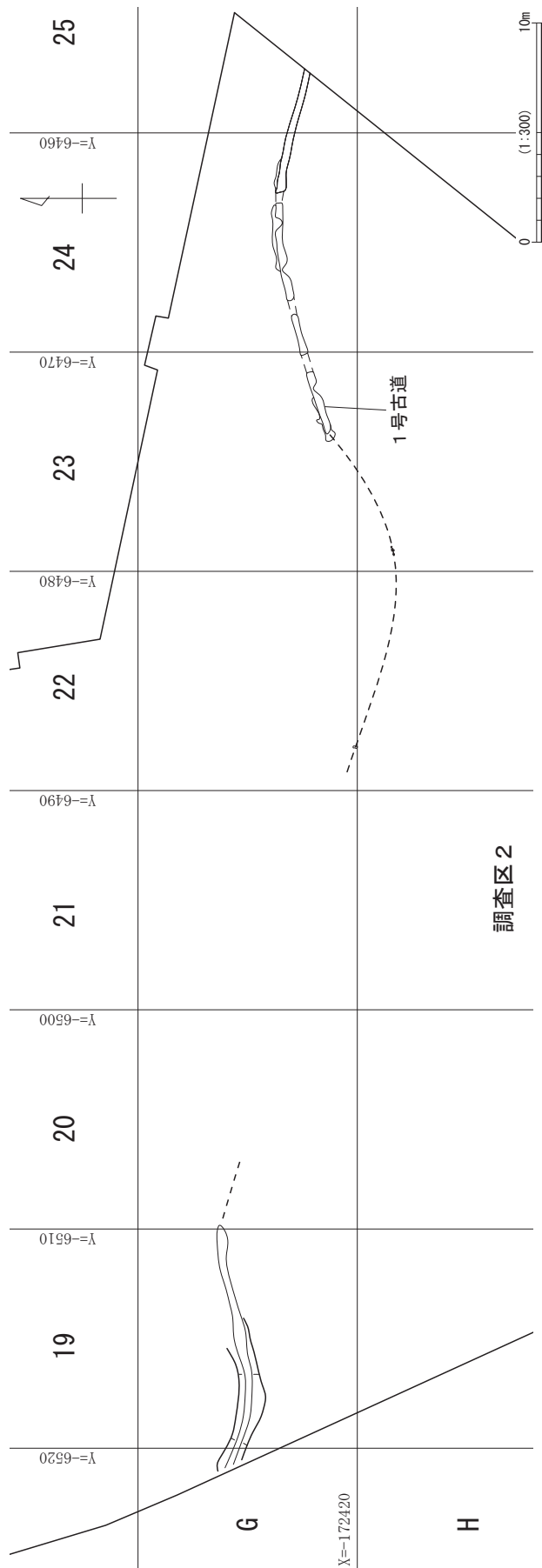
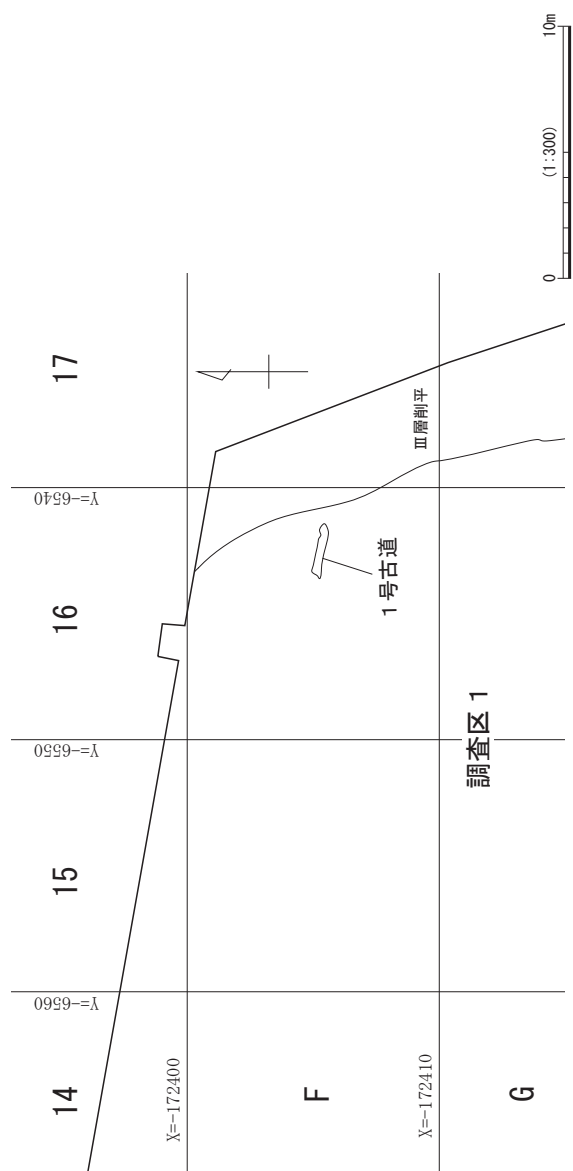
ア 土器(第325図)

1293～1308は土師器である。1294は甕の口縁部であるが、やや小型である。緩やかに外反する口縁部は端部で短く外反する。内外面共にヘラミガキ調整である。1295～1305は坏である。1295は口縁部径10.6cm、底部径3.6cm、器高4.6cmを測るやや小型の坏である。1296は口縁部径14.8cm、底部径8cm、器高5cmを測る。胴部は直線的に外反し、端部でわずかに外反する。1297は口縁部15.2cmを測る。1298～1305は底部である。1298は墨書が認められるが、小破片のため判読できない。1306・1307は高台を有する椀の底部である。1308は小破片のため全体形状は不明なものである。ただ、胴部内面に布目が明瞭に残されていることから焼き塩壺の可能性もある。1309～1315は須恵器である。1309は口縁部径18cm、底部径7.5cm、器高7.3cmを測る坏である。体部

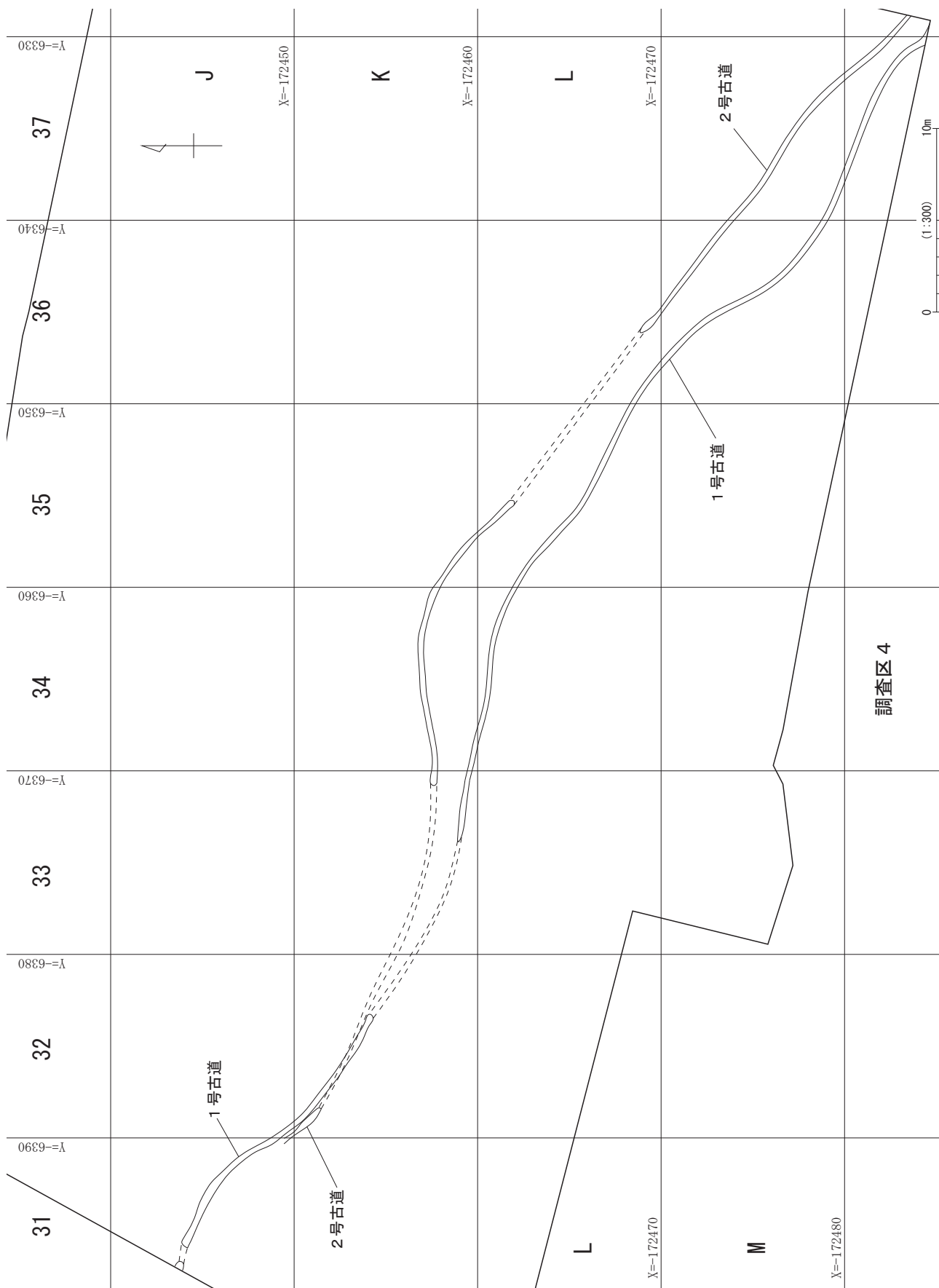


第320図 1号・2号焼土跡





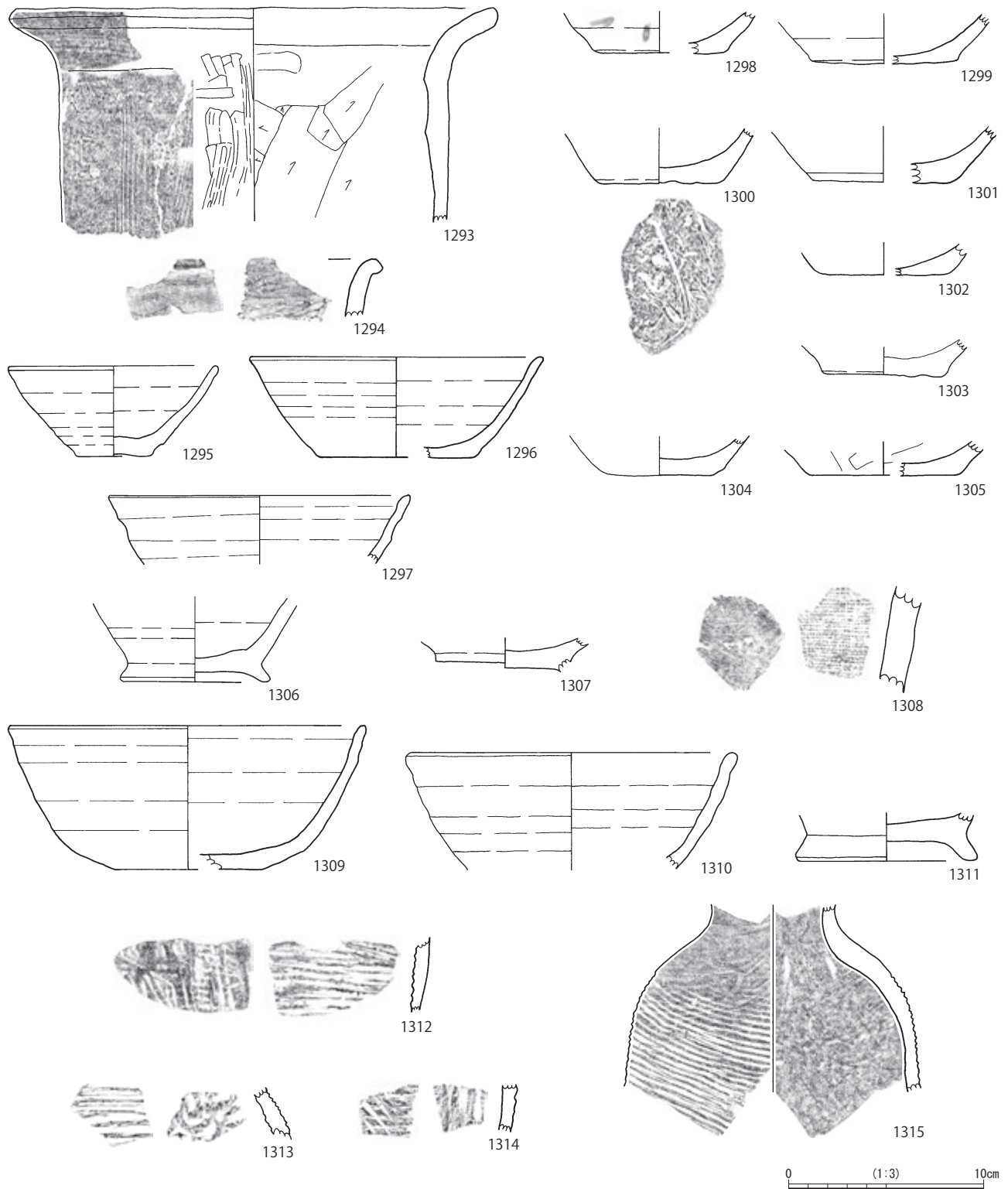
第322図 1号古道



第324図 1・2号古道(2)

はやや丸みを帯びている。1310は口縁部径16.7cmを測る
 碗の口縁部である。1309・1310共に茶褐色を呈している。
 1311は底部径9.3cmを測る碗の底部である。1312～1314
 は甕の胴部である。1312は外面が格子目タタキ、内面が
 平行タタキ。1313は外面が平行タタキ、内面が同心円タ
 タキ。1314は外面が格子目タタキ、内面が平行タタキで

ある。1315は壺で頸部径6.4cmを測る。肩部はなだらかで
 口縁部は直行気味にのびる。外面は平行タタキで、肩部
 内面には径約1.5cmの凹みがあり、布の痕跡が観察される。
 おそらく布で小石を包んだものを当て具として使用した
 と思われる。



第325図 古代の土器

(4) 遺物観察表

第53表 古代土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	出土 地点	遺構 層位	取上 番号	分類	器種	部位	器面調整		色 調		胎 土					備 考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃	金雲母	他	
325	1293	G-16	II b	4937・ 6227	土師器	甕	口縁部	ナデ後 ハケ目	ナデ後 ケズリ	褐色	褐色	○	○	-	-	-	
	1294	H-16	II b	11031	土師器	甕	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	○	○	-	-	-	
	1295	G・H- 16	II b	4369・ 5632	土師器	坏	口縁部 ～底部	回転ナデ	回転ナデ	明褐色	橙色	○	○	-	-	-	
	1296	G-16	II b	5161・ 5162・ 5163	土師器	坏	口縁部 ～底部	回転ナデ	回転ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	○	○	-	-	-	
	1297	H-16	II b	3658	土師器	坏	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	褐色	褐色	○	○	○	-	-	
	1298	G-16	II b	4975	土師器	坏	底部	ナデ, 回転ナデ, 回転ヘラ 切り痕	ナデ, 回転ナデ	褐色	褐色	○	○	○	-	-	
	1299	H-16	II b	3205	土師器	坏	底部	ナデ, 回転ナデ, 回転ヘラ 切り痕	ナデ, 回転ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○	-	-	-	
	1300	G-16	II a	5646	土師器	坏	底部	ナデ, 回転ナデ	ナデ, 回転ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○	-	-	-	
	1301	G-16	II b	4987	土師器	坏	底部	ナデ, 回転ナデ	ナデ, 回転ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	-	
	1302	G-16	II b	4977	土師器	坏	底部	ナデ, 回転ナデ, 回転ヘラ 切り痕	ナデ, 回転ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○	-	-	-	
	1303	H-16	II b	3143	土師器	坏	底部	ナデ, 回転ナデ, 回転ヘラ 切り痕	ナデ, 回転ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○	○	-	-	
	1304	G-16	II b	3224・ 6565	土師器	坏	底部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	○	-	-	
	1305	H-27	II b	9712・ 9713	土師器	坏	底部	ナデ	ナデ	褐色	浅褐色	○	○	-	-	-	
	1306	G-16	II a	5607・ 5648他	土師器	椀	底部	回転ナデ	回転ナデ	褐色	褐色	○	○	-	-	-	
	1307	G-16	II b	3213	土師器	椀	底部	回転ナデ	回転ナデ	黄褐色	赤褐色	○	○	-	-	-	
	1308	J-35	II b	1553	土師器	焼塩壺	胴部	ミガキ	布目圧痕	灰褐色	褐色	○	○	-	-	-	
	1309	G-16	II b	3922	須恵器	坏	口縁部 ～底部	回転ナデ	回転ナデ	褐色	にぶい 赤褐色	○	○	-	-	-	
	1310	H-16	II b	3630	須恵器	椀	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○	-	-	-	
	1311	H-16	II b	3198	須恵器	椀	底部	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色	褐灰色	○	○	-	-	-	
	1312	G-19	II c	15685	須恵器	甕	胴部	ナデ, タタキ	タタキ	にぶい 赤褐色	にぶい 赤褐色	○	○	-	-	-	
	1313	G-26	II b	12822	須恵器	甕	胴部	平行 タタキ	同心円 タタキ	灰色	オリーブ 灰色	○	○	-	-	-	
	1314	F-21	II b	-	須恵器	甕	胴部	タタキ	タタキ	褐灰色	褐灰色	○	○	-	-	-	
	1315	F-22	II b	6803	須恵器	壺	頸部～ 胴部	ナデ, タタキ	小石を布で 包んだ当具 痕	褐色	明赤褐色	○	○	-	-	-	

(5) 小結

古代においては、遺構が焼土跡2基、古道2条が検出されている。

焼土跡については、遺構内からの遺物出土が少なく性格等については不明であるが、ここで火が焚かれた事は間違いない。1号焼土跡からは1点だけであるが甕が出土しており、古代とする根拠となった。また、古道との関係も何らかありそうであるが、古道の項で詳述することとする。

古道は2条検出されている。1号古道と2号古道では1号古道が新しく、1号古道の上の堆積物の中に西暦874年に開聞岳が爆発した時の火山灰(紫コラ)が認められている。また、古道の上部で採取した炭化物の年代分析では1000年代という測定値が出ている。

1号古道と2号古道は、ほぼ平行しているが2号古道はG-27区で北側の調査区外へと延びてゆくためそこから先は不明である。2条とも調査区4の東南隅N-38区で調査区外へと延びる。この先には約600m隔てて、古代の建物跡等が検出されている川久保遺跡(同じ東九州自動車道建設関連で調査が継続している)が在り無関係ではないと思われる。また、2号古道のG-27区以北はアタゴ山と呼ばれる小丘陵があり、その先に中世の北原城跡がある。

1号古道は、調査区2(地下式横穴墓が密集している)の東側までははっきりしているが、地下式横穴墓の周辺では途切れた様にはっきりしない。そして、地下式横穴墓がなくなる調査区1に近づくG-19区で現れ傾斜しながら調査区1へと続き、F-16区で途切れる。そこから西側ではⅡ層の残存状況は良好なため、古道が続けば確認されるはずであるが、確認出来ないのここで終わっていると考えられる。G-16区には焼土跡2基が在り、焼土の付近で終わっている事に注目したい。

道の始まり及び終わりの地で火を焚いてなんらかの祭りが行われたのではないかと想像される。

また、1号古道は地下式横穴墓の存在する調査区2では途切れたか、一部残存しているが、調査区3での残存と比べると比較にならない。このことが何を意味するのか考えてみたい。地下式横穴墓が造られた時期は主に5世紀代で、古道の主な時期である10世紀代とは500年以上も時間差があり関連付けて考える事には無理があるかもしれないが、古墳時代の小結でも述べた様に、墓が造られた時点では小規模な盛り土なりの標識があったと思われるが、古代までに近現代のような大規模な土地改変が行われたとは考えられない。そのために、500年後の古代人達も、そこに大昔の墓がある事を認識していたのではないだろうか。そのために、そこを通るのを避けたか、盛り土を避けて通ったかしたために、古道としての硬化面が残らなかったのではないかと想像させられる。ちなみに近接する立小野堀遺跡においても土器破碎祭祀により割られて放置されたと思われる土器片に開聞岳が7世紀後半に爆発した時の火山灰(青コラ)が付着している事が知られている。土器片は新しく考えても6世紀代であり、150年以上も土器片が地上に晒されており、なおかつ後世の人々に荒らされなかったことを物語っている。

古代の出土遺物は、土師器と須恵器である。いずれも古代の範疇に入るものである。須恵器についてみると、色調が茶褐色で、これまで見られなかったものである。鹿児島県においては古代の須恵器窯は薩摩川内市の鶴峰古窯跡と伊佐市菱刈町の岡野古窯跡、南さつま市金峰町中岳古窯跡群の3箇所しか知られて居らず、そのいずれの窯跡群でも本遺跡の須恵器と同様の色は見られず、これまで大隅半島で知られていなかった古窯跡の存在を示唆するものではないだろうか。



1. 町田堀遺跡, 2. 川久保遺跡, 3. 小牧遺跡, 4. 牧山遺跡

第326図 町田堀遺跡の位置

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（7）
東九州自動車道建設（志布志 I C ～鹿屋串良 J C T）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

町田堀遺跡

第 2 分冊

発行年月 2016年3月

編集・発行 鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号
TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576

印刷 株式会社 松井ピ・テ・オ・印刷
〒 321-0904 栃木県宇都宮市陽東 5 - 9 - 21
TEL 028-662-2511 FAX 028-662-4278

